

# Studies in Pragmatics

# 語用論研究

2022



Vol.24

## 〈特別寄稿論文〉 PSJ24 基調講演より

三木那由他 推意・意味・意図：グライスにおける推意…………… 1

## 〈招待論文〉

[研究論文] 大島デイヴィッド義和 「謙譲語 II」と「丁寧語」の区分について  
—語彙的意味と有標性の観点から— …………… 19

[研究論文] Katsunobu Izutsu and Takeshi Koguma Minimal Utterance Units and Unbreakable  
“Morphosyntactic” Structures for Asking, Answering, Denying, and Specifying…………… 37

## 〈一般投稿論文〉

[研究論文] 稗田奈津江 勧誘の断り応答部におけるストラテジーの使用とその解釈  
—日本語母語話者とマレー語母語話者の比較— …………… 59

[研究論文] 楊虹・倉田芳弥 LINE チャットの会話における感動詞の分析  
—日本語母語場面と日韓接触場面の比較を通して— …………… 79

[研究論文] 畑和樹 英語学習者が母語（日本語）を使ってしまうと教師はどう対処するのか：  
教師の“in English”から開始される修復組織の研究…………… 99

[研究論文] 水田洋子 談話標識としての「なんなら」  
—意味機能の語彙的要素と文脈依存性について— …………… 121

## 〈書評論文・書評〉

[書評] 西田光一 Miyuki Nagatsuji, *The Pragmatics of Clausal Conjunction (Hituzi Linguistics in English No. 33)*, 2021, Tokyo: Hituzi Syobo, xii+160p., ISBN 978-4-8234-1069-7 …………… 146

[書評] 森山卓郎 近藤泰弘・澤田淳（編）『敬語の文法と語用論』東京：開拓社，2022，  
ix+434p., ISBN 978-4-7589-2360-6 …………… 157

[書評] Osamu Sawada Nicolas Ruytenbeek, *Indirect Speech Acts (Key Topics in Semantics and Pragmatics)*, Cambridge: Cambridge University Press, 2021, xii+226p., ISBN 978-1-1084-8317-9 …………… 169

[書評] 堤良一 平田未季（著）『共同注意場面による日本語指示詞の研究（ひつじ研究叢書（言語編）第168巻）』，東京：ひつじ書房，2020，viii+234p., ISBN 978-4-8234-1014-7 …………… 179

〈特別寄稿論文〉

## 推意・意味・意図：グライスにおける推意

三 木 那由他

大阪大学

The concept of conversational implicature was originally proposed by Grice. This study discusses how Grice understood the concept of conversational implicature precisely, and how the theory of conversational implicature is placed in the overall picture of Grice's philosophy. First, the concept of conversational implicature is linked to the concept of speaker meaning. Second, speaker meaning is analyzed by Grice in terms of the notion of speaker intention. Third, speaker intention is analyzed based on the basic psychological concepts of will and belief. Finally, these foundational psychological concepts are understood within the unique view of axiomatic psychology. Thus, the theory of conversational implicature is understood as a part of the axiomatic-psychological view in Grice's philosophy.

キーワード： 会話的推意、話し手の意味、意図、コミットメント

### 1. 序論

会話的推意 (conversational implicature) という概念は哲学者ポール・グライスが提唱したものである。会話的推意の理論はもともとセンスデータ説に基づく知覚の理論をそれへの批判から擁護するために打ち出され (Grice 1961)、1967年のウィリアム・ジェイムズ記念連続講演においては、私たちの日常的な言語使用に着目して哲学的思考を展開するいわゆる日常言語学派の哲学における重要な方法論として語られるようになるとともに (Grice 1967)、より体系化されたかたちに整えられることとなった (Grice 1975a)。

本稿では、会話的推意の理論がグライスにとっていかなる意義を持つものであったのか、会話的推意という概念をグライスはどのように捉えていたのか、さらにそのようにして明らかになったグライスにとっての会話的推意の理論がいかなる問題を抱えていて、それにはいかなる解決策があるのかを論じる。

結論を先取りするならば、会話的推意の理論はグライスにとって何よりも発話もたらす伝達内容からいわば「夾雑物」を排除して言葉の意味を正確に捉えるための理論であっ

た。それゆえグライスは、個々の事例における会話的推意の導出そのものに強い関心を持っていただけではなく、この点においてグライス以後の語用論において会話的推意に着目してきた多くの論者とは異なる態度を取っていたと考えられる。このことは会話的推意という概念そのものの理解についても影響を及ぼす。というのも、会話的推意そのものは言語的事象であるにしても、しかしグライスは会話的推意をもたらす諸条件を言語的な活動に特有のものに見なしてはいないのである。グライスにとって、会話的推意の理論は、ある意味では言語理論ではなかったとさえ言える。グライスの哲学において、会話的推意の理論はむしろ行為論や心の哲学において適切に位置づけられるものされているのだ。

以下ではまず第二節でグライスがそもそもどのような目的から会話的推意の理論を作り上げたのかを論じる。続いて第三節ではグライスが会話的推意という概念を話し手の意図という概念のもとで理解していたことを確認する。さらに第四節では意図という概念を経由することで、会話的推意の理論がいかにグライスの心理論の枠内で捉えられることになるのかを論じる。最後に第五節では、そうしたグライスの理論が持つ問題点と私自身の代案、そしてそれぞれがグライスの哲学の全体像に照らして持つ意義について述べる。

## 2. 哲学の方法としての会話的推意の理論

グライスの会話的推意の理論が語られている文献としては、1967年のウィリアム・ジェイムズ記念連続講演の一部をなす「論理と会話」(“Logic and Conversation”)がよく知られている。<sup>1</sup> だが実際にグライスが会話的推意の理論を初めて提唱したのは、それに先立つ1961年の論文「知覚の因果説」(“The Causal Theory of Perception”)であった。

グライスは広く「知覚の因果説」と呼びうる哲学説を大きく四つのタイプに分類している(Grice 1961: 224-225)が、実質的に議論の対象となるのはそのうちのひとつのみであり、それはセンスデータ(sense-datum)という概念に依拠したものである。その立場によると、物質的对象(机や木など、一般的に私たちが知覚していると考えられている対象)を知覚するとはどういうことかを解明するためには、その知覚に含まれるセンスデータに対して知覚対象が持つ因果的な役割に目を向けないとならないとされる。

センスデータに関してはいわゆる「錯覚論法」を通じて理解するのがわかりやすいだろう。真っすぐな棒を水に差し込むと、水と空気との光の屈折率の違いによって、その棒は曲がって見える。だがこのとき、当然のことながら棒そのものは真っすぐなままである。棒そのものが真っすぐでかつ曲がっていると考えると矛盾が生じるため、私たちが曲がった棒を見ているとき、「棒以外の何か」が曲がっていると言わざるを得ない。ここで導入されるのが「センスデータ」で、私たちは実際には棒そのものではなく棒のセンスデータ

---

<sup>1</sup> のちに Grice (1975a) として出版された。

を見ているのであり、そのセンスデータが曲がっているのだと考えられることになる。さらに、錯覚が生じている場合の知覚とそうでない場合の知覚を区別する明確な方法はないということから、通常の知覚においても実際には私たちは対象そのものを知覚しているわけではなく、直接的にはセンスデータを知覚しているにすぎない、と幾人かの哲学者が当時主張していた (e.g., Price, 1932; Ayer 1940)。

グライスは、センスデータがモノとして存在するという考え方はうまくいかないと考え、「これこれは私には青く見える」のような言明に対応して青のセンスデータが措定され、「私には椅子があるように感じる」のような言明に対応して椅子のセンスデータが措定されるといったかたちで、一種のテクニカルタームとして「センスデータ」という言葉は定義されると捉えていた。しかしこれには日常言語に根差した反論がありうるともグライスは想定する。例えば明らかに青いもの（青空など）が目の前にあるときに、私たちは普通「空が青く見える」とは言わない。端的に「空が青い」と言うだろう。日常言語に立脚した哲学のもとでは、このとき「空が青く見える」は適切に用いられ得ないので、そうした言明と対応させて青のセンスデータなるものを導入することも不適切とされることになるだろう。そうすると、青のセンスデータは結局のところ、明らかに青いものと対面しているときには導入できず、青いかどうかに疑いの余地があるものと対面しているときのみ導入されるものとなる。しかしこれでは、センスデータという概念に期待される働きはできなくなる。

会話的推意の理論はこの文脈で登場した。確かに真っ青な空を前にして「空が青く見える」とは適切に言えない。しかしグライスは、ここでの「適切に言えない」はあくまで、「そうした発話をすれば不適切な会話的推意が生じる」ということであり、「そうした発話をすれば『青い』という言葉の意味に反することになる」ということではないと考えるのである。<sup>2</sup>

Grice (1967) では、こうした議論がより一般的な哲学的方法論として語り直される。グライスの考えでは、日常言語に着目する哲学者たちは、日常的な言語使用にこだわるあまり、発話によってもたらされる会話的推意に関する事実と発話に含まれる語そのものの意味に関する事実を混同し、前者に依拠して後者に関する帰結を引き出している。会話的推意の理論はそうした「行き過ぎ」を戒め、会話的推意に惑わされることなく言葉の意味そのものに目を向けるための枠組みとして構想されている。<sup>3</sup>

---

<sup>2</sup> Grice (1989) に収録されているバージョンではこの議論は省略されているが、同様の議論は Grice (1967) に見ることができる。

<sup>3</sup> グライスは「実のところ、意味と使用を混同しないよう気を付けるべきだという教えは、ひょっとすると、意味と使用を同一視するよう気を付けるべきだという教えがかつてそうであったのと同じくらいに、手軽な哲学の手引きになりつつあるのかもしれない」と述べたうえで、「私の主な目的は [...] 意味と使用とのそうした区別はいかに引かれるべきで、その哲学的有用性の限界がどこに

このことからわかるように、グライスにとって会話的推意はそれ自体が説明すべき言語現象とされていたというよりは、むしろ日常言語に立脚した哲学をするうえで考察対象から切り離すべきものとして捉えられている。会話的推意に惑わされることなく、言葉の意味そのものに目を向ける、というのがグライスの目指した哲学の姿だった。

こうした背景ゆえに、グライスの関心は個々の会話的推意の事例の検討やその説明ではなく、会話的推意という現象を一般に生じさせているのは（それが言語でないとしたら）何なのかという問題へと向けられることになる。そうして、会話的推意の理論は意味概念の分析を介して、広く理性や心理をめぐるグライスの議論のなかに位置づけられることになる。

### 3. 会話的推意と話し手の意図

会話的推意の理論とはいかなる理論なのか？ よく知られているように、グライスは会話を合理的な営みであり、協調原理 (the Cooperative Principle) と呼ばれる原理によって律されているものと考えた。協調原理は「自分の従事している会話のやり取りにおいて受け入れられている目的や方向に照らして、それがなされる段階において要求されているような仕方では会話への貢献を果たせ」(Grice 1975a: 26, 邦訳 37 頁) と定式化される。そして協調原理に従うとは、すなわち量・質・関係・様態の四種に大きく分類される諸々の会話の格率に従うことであるとされる。

協調原理と会話の格率に関して重要なのは、こうしたことが言語特有とは見なされていないということだ。事実、グライスは「話すということを合目的振る舞い、もっと言えば合理的振る舞いの一例ないし一種と見なす」ことを自身の目標として掲げており、その観点から、会話の格率のいくつかが非言語的領域に対応物を持つと論じている (ibid.: 28, 邦訳 40 頁)。例えば、自動車修理をする際にネジが四本必要だとわかっているときには、一緒に修理をしている相手がちょうど四本のネジを渡すことを期待するのであって、それより少ない数や多い数は期待しないということが、会話における量の格率と対応するものとして紹介されている。協調的な活動は合理的であり、それゆえにそれに参加する者たちはその合理性に従った行為を行うことを互いに期待される。協調原理は、こうしたより一般的な事象の言語的活動における表れだと捉えられているのである。

さて、会話的推意と協調原理や会話の格率との関係は、しばしば次のような例を通じて説明される。

---

あるのかを決定することだ」と述べている (Grice 1967, p. 4, 邦訳 2 頁)。

- (1) A: これから映画でも見に行かない？  
 B: あしたテストがあるんだよね。

会話を交わしている以上、Bは協調原理を守っており、それゆえ会話の格率にも従おうとしているはずである。だが、Bが言っていることを額面通りに受け取ると、直前のAの発言とは関係のない発話をしていることになり、Bは関係の格率に違反する振る舞いをしていることになる。しかし、ここでBが〈テスト勉強で忙しいから映画には行けない〉と考えていると想定したなら、その思考のレベルではきちんと関係の格率に従っていることになり、そうした想定に到達した聞き手には〈テスト勉強で忙しいから映画には行けない〉という内容が伝わることになる。この場合にBは〈テスト勉強で忙しいから映画には行けない〉ということを会話的に推意しているとされる。ここで「推意している」という表現を用いているのは、グライスにとって「推意 (implicature)」という言葉が、第一義的には話し手の行為の一種を表しているためである。<sup>4</sup>

さて、Davis (1998)でも指摘されていることだが、先の説明だけを見ると会話的推意の理論は「どうとでも言える」理論に見えてくる。実際、先ほどの例のBは〈テスト前の気晴らしは大事だからもちろん映画に行く〉や〈テスト勉強もしないとならないから映画は急ぎ気味で見に行きたい〉といったことを考えていたと想定した場合でも関係の格率には従っていることになるため、そのうちのどれが正しい推意なのか、これだけでは十分に決定できないのだ。

ここで、会話的推意が第一義的には話し手の行為であるという点が関わってくる。一般に行為は行為者の心理と密接に関わっている。それゆえ会話的推意を行為の一種と捉える観点においては、話し手の心理に基づいて話し手が会話的に推意した内容を決定する道があるのだ。グライスはpと言う（ふりをすることで）qと会話的に推意するための条件を次のように定義している (Grice 1975a: 30-31, 邦訳44頁)。

- (1) 話し手は会話の格率を、あるいはせめて協調原理を守っているものと推定される
- (2) 話し手のpという発言をこの推定と両立させるためには、話し手がqと考えていると仮定する必要がある
- (3) そうした仮定が必要だと理解する能力が聞き手にあると話し手が考えており、かつ話し手がそう考えていると聞き手が考えることを話し手が予期している

(1)と(2)の条件は、すでに見たような会話的推意の説明にも用いられていた。重要なのは(3)である。この条件において、話し手に対応する心理を持っている場合にのみ

<sup>4</sup> 現在では「推意 (implicature)」で協調原理や会話の格率を介した伝達内容を指す用法が一般的に思えるが、グライスは内容を指す際には「推意内容 (implicatum)」という用語を用い、話し手の行為としての推意とは区別している。

会話的推意は成り立つと指定されている。これに対応して、聞き手が会話的推意を割り出す際のステップも次のようにまとめられている。

会話的推意を割り出すときの一般的なパターンは次のように与えることもできそうだ。「話し手は p とやった。話し手が格率を遵守したり、あるいはせめて協調原理くらいは遵守したりといったことをしていないと想定する理由はない。だが話し手が q と考えているのでない限り、話し手はそれらを遵守しようがない。しかも話し手が q と考えているという想定が必要になると私が見通せるということ、話し手はわかっている（し、話し手がそうわかっていると私にわかっていることもわかっている）。話し手は私に q と考えさせまいというようなことを何もしてはいない。話し手は、私が q と考えるよう意図しているが、そこまでではなくとも、私に q と考える余地を与えようというくらいのことにはしている。それゆえ、話し手は q と推意したのだ」

(Grice 1975a: 31, 邦訳 45 頁, 傍点筆者)

聞き手は、傍点を付していない個所で、すでに q という内容を割り出している。しかしそこからさらに進んで、傍点を付した個所で述べられているような推論をし、話し手の心理を推測して初めて、話し手が会話的に推意した内容を確定できることになっている。

こうした記述から、グライスにとって会話的推意という現象は、話し手が言ったことに当たる命題的な内容から協調原理や会話の格率の関わる推論を経て新たな命題的内容に到達するというだけでは済まないものであったということがわかる。何ごとかを会話的に推意するために話し手は条件 (3) で述べられているような複雑な心理を持たなければならないし、聞き手は話し手の意図に関わる複雑な計算をしなければならないのだ。会話的推意は、命題と命題との推論的關係というよりも、行為と心理との関係のもとで捉えられている、と言える。

この発想は、1957 年の論文「意味」(“Meaning”)における議論にその根を持っている。会話的推意の理論が生まれるより前に公刊されたこの論文で、グライスは意味にまつわる概念を心理的な概念によって分析するプロジェクトを提案する。

基本的な発想はこうだ。「意味」という言葉が用いられる場面のなかには、「話し手 S が x を発話することで p と意味する」と呼べるようなものがある。<sup>5</sup> 例えば「私は『雨が降りそう』ということ、〈私は手が離せないからあなたが洗濯物を取り込むべきだ〉と意味した」は、その一例に当たる。こうした用法における「意味する」が表すものを、「話し手の意味」(speaker meaning)と呼ぶ。<sup>6</sup> Grice (1957) の核をなすのは、はたして話し手の意

<sup>5</sup> 「推意」と同様、「意味」もまた、グライスは「意味する」という行為として捉えている。

<sup>6</sup> グライス自身は「発話者の意味 (utterer's meaning)」という表現をよく用いるが、現在ではあまり使われていない。

味が成立する条件とは何なのかという問題である。

仮説の提示と反例の検討を繰り返しながら、グライスはそれが、次の三つの意図を持って話し手 (S) が発話をおこなうことだと主張する (Grice 1957: 220, 邦訳 235 頁)。<sup>7</sup>

- (1) S はある聞き手 A に p と信じさせようと意図している
- (2) S は自分が (1) の意図を持っていると A に認識させようと意図している
- (3) S は、自分が (1) の意図を持っていると A が認識することが A にとって p と信じる理由になるようにしようと意図している

先ほどの例を取り上げると、私が「雨が降りそうだ」と言うときに、聞き手がそれを聞いて〈三木は手が離せないからこちらが洗濯物を取り込むべきだ〉と思うように意図していて、しかも「三木はこちらに〈三木は手が離せないからこちらが洗濯物を取り込むべきだ〉と思わせようとしているのだな」と思わせようとも意図していて、そのうえで「三木が〈三木は手が離せないからこちらが洗濯物を取り込むべきだ〉と思わせようとしているのだから、きっと本当に三木は手が離せないからこちらが洗濯物を取り込むべきなのだろう」と思わせようとも意図していたなら、私は「雨が降りそうだ」と言うことで〈三木は手が離せないからこちらが洗濯物を取り込むべきだ〉と意味していた、と言える。

グライスはさらに言語や記号などが持つ規約的意味についてもその使用者の意図に照らして分析することができると論じているが (ibid.)、本稿ではその点には踏み込まない。本稿の目的にとって重要なのは、こうした枠組みが会話的推意の理論の基礎をなしているという点である。実際、Grice (1968) や Grice (1969) においては、会話的推意の理論で用いられている「言う」のような概念を、この分析を踏まえて解明するという目標が掲げられている。会話的推意そのものと話し手の意味の分析の関係についてグライスは明示的に述べてはいないが、聞き手による会話的推意の割り出しパターンにおける意図への言及や、会話的推意の定義における「話し手がそう考えていると聞き手が考えることを話し手が予期している」のような独特の言い回しから、会話的推意もまた話し手の意味の一種と理解されていると解釈するのは自然なことだろう。

このことは、グライスの挙げている例からも見て取れる。Grice (1969) では、「そのころに草の生育を助けることになっていたら、私には読書の時間はないだろうね (If I shall then be helping the grass to grow, I shall have no time for reading)」と発話することで、〈私がそのとき死んでいたら、私には世界で起きていることなど知りようがないだろう (If I am then dead, I shall not know what is going on in the world)〉と意味する話し手の例が挙げられている (pp. 88-89, 邦訳 133-135 頁)。グライスもこの箇所では指摘

<sup>7</sup> 本稿では情報伝達的な事例のみを考える。行為指示的な事例に関しては、分析がいくらか異なっている。

しているように、この例において発話された文そのものは話し手が意味している事柄に対応する内容を持たない。これは、特定の文脈で当該の文を発話することにより話し手が会話的推意をおこなっている例と見なせるだろう。「論理と会話」における会話的推意の説明には「考える (think)」や「予期する (expect)」といった言葉が多く用いられ、話し手の意図への明確な言及は少ないが、実際にはグライスは論文「意味」で展開された分析を介して、会話的推意を話し手の意図によって捉えられるものと見なしていたと考えられる。会話的推意は単に話し手の行為と心理との関係のもとで理解されているというだけでなく、より具体的には、話し手の行為と意図との関係のもとで理解されるべきものだと言える。こうして、会話的推意の理論のグライス哲学における位置づけをめぐる問題は、はたしてグライスにとって意図とはいかなるものだったのかという問題へと繋がっていく。

#### 4. 公理的な心理帰属

グライスの心理論は 1975 年のアメリカ哲学会会長講演「哲学的心理学の方法（ありふれたものから奇妙なものまで）」（“Method in Philosophical Psychology (From the Banal to the Bizarre)”）で展開されている。しかし、ここでの議論の中心となるのは意志 (will-ing) や判断 (judging) といった心理状態ないし心的な行為であり、意図については触れられていない。

これは、グライスがこの講演に先立つ 1971 年のイギリス学士院での講演「意図と不確実性」(“Intention and Uncertainty”) で、すでに意図という概念の分析をおこなっていたためであると考えられる。Grice (1975) では信念のような中心的な心理概念に関しては明示的にその必要十分条件を与えることはできないと論じられているが (pp. 123-124)、グライスにとって意図はそうした中心的な心理概念には含まれていないようで、Grice (1971) ではあるひとが意図を持っていると言えるための必要十分条件が、意志と信念という基礎的な心理概念のもとに与えられている。それによると、「X はすぐにでも頭を掻こうと意図している」の必要十分条件は次のように与えられることになる (Grice (1971) p. 18 をもとに再構成)。

「X はすぐにでも頭を掻こうと意図している」が真となるのは、次のふたつの条件が成り立つとき、そのときに限る。

- (1) 自分の手がすぐにでも自分の頭を引っ掻くことを X はいま意志している
- (2) 自分の手がすぐにでも自分の頭を引っ掻くことへの X の現在の意志が、X の手が X の頭を引っ掻くということを問題の時点において生じさせる、と X は信じている

意図と意志は、前者が関連する振る舞いの成立／不成立が主体のコントロール下にある

ことを含意するのに対し、後者についてはそうではないという点で区別される (ibid.: 16)。すなわち、両手が後ろ手に縛られている状態で自分の頭を掻こうと意図することはできないが、頭が掻かれるのを意志することはできる、というかたちで、意志という概念は理解されている。

こうして、意図の問題は意志と信念の問題となる。これまでの道筋を確認するならば、会話的推意は話し手の意味の問題であり、話し手の意味は話し手の意図の問題であり、そして話し手の意図は話し手の意志と信念の問題であり、そのようにして会話的推意という概念はグライスの心理論のうちに位置づけられることになる。

だが、すでに述べたように、信念については、グライスはその必要十分条件を与えることはできないと考えていた。意志については明示的に述べられてはいないものの、意志と類似すると思われる欲求 (wanting) については、信念と同様にそれ以上分析不可能な概念とされている (Grice 1975b: 123)。それゆえ仮に信念や意志が分析不可能であるとして、ではそれらについてはグライスはどのように取り扱うべきだと考えていたのか？

グライスはここで、「初めの一步として、中心的な心理概念の明示的な定義を探すという考えを放棄し、その代わりに伏在的な定義を、ある種の公理的な扱いによって与えられるそれを探すというのがよいだろう」(ibid., 強調は原著者) と述べる。鍵は「公理的」である。グライスは信念のような心理概念が、公理に基づいた推論のなかで定義されるものと考えているのだ。グライスのこの考えを「公理論的心理論」と呼ぶことができるだろう。

グライスの公理論的心理論を理解するには、論理学において公理系がどのように用いられているかを見るのがわかりやすい。例えばダフィット・ヒルベルトのよく知られる公理系では、 $A \rightarrow B$  と  $A$  から  $B$  を導く推論規則 (モーダス・ポネンス) と、次の三つの公理が措定されている。

$$\begin{aligned} & A \rightarrow (B \rightarrow A) \\ & (A \rightarrow (B \rightarrow C)) \rightarrow ((A \rightarrow B) \rightarrow (A \rightarrow C)) \\ & (\neg B \rightarrow \neg A) \rightarrow (A \rightarrow B) \end{aligned}$$

これらは論理式の型であり、ここでの  $A$  や  $B$  に具体的な論理式を代入した結果得られる式、およびそうした式から推論規則を用いて導かれる式が、この論理体系における定理となる。

重要なのは、この説明において「 $\rightarrow$ 」や「 $\neg$ 」が何を表しているかに関する記述が介在していないという点である。これらの記号は、ただ公理や推論規則におけるその振る舞いにおいてのみ理解されており、それがいったいいかなる事態に対応しているのかといったことは問題となっていない。

グライスは意志や信念がこうしたものだと考えている。つまり、心理に関して一群の公理や推論規則 (推論規則に関しては、グライスは単にモーダス・ポネンスを想定してい

るようだ)があり、「意志」や「信念」といった言葉は、少なくとも第一義的にはただそうした公理や推論規則におけるその振る舞いにおいて理解されることになる。これがグライスの言う「伏在的な定義」である。

心理が公理論的に捉えられるというのはすなわち、心理が推論という観点から捉えられるということである。そして一般に推論は、前提となる命題の集合(空集合である場合もある)と結論となる命題とのペアとして特徴づけられる。では、心理に関する推論とは、そしてその前提と結論とは何なのだろうか？

グライスはリスに似た架空の動物「リシュ(squarrel)」を取り上げて説明している(ibid.: 134-135)。グライスが描くのは、リシュのトビーがナッツを前にして、そしてそれにかぶりつく、という場面である。私たちはトビーや他のリシュたちを観察した結果として、例えばリシュはナッツを食べるといったことや、リシュはしばらく何にもかぶりついていない期間があったとしたら、その後にはある種の対象にかぶりつく傾向がある、といったことを理解する。そうした観察を通じて「私たちはリシュの振る舞いの一部が、トビーによる目の前のナッツへのかぶりつきも含めて、心理学的説明の適切な対象になると決定する」(ibid.: 135)。言い換えると、「私たちは、トビーがナッツを前にしていることとトビーがそれにかぶりつくこととのあいだの説明の架け橋を打ち立てるのに使える、ある理論的道具を導入するのに取り掛かる」(ibid.)のである。

この「説明の架け橋」が、心理学的公理を用いた推論の構築によって与えられるものである。すなわち、私たちの手元には〈トビーの前にナッツがある〉、〈ナッツはリシュにとって食べるのに適した対象である〉といった観察結果がある。これらはすでに得られている前提だ。そして結論となるのは「トビーはナッツにかぶりつく」である。このとき、与えられた前提から問題の結論へは推論上のギャップが存在している。そのギャップを埋めるように推論を構築するのが、グライスの考える心理学的公理の働きとなる。

例えばグライスは、〈事物の種Nを生物のタイプTに属す個体が十分に長い時間にわたって摂取しないでしたらその個体はTのメンバーとして必要な能力を失う場合、NはTにとって必需品である〉、〈NがTの必需品であるならば、Tに属す個体xがそれなりの期間を通じてNを摂取していないときには、それによってxにはNの摂取への意志が引き起こされる〉といった公理があると想定する(ibid.)<sup>8</sup>。「Tのメンバーとして必要な能力を失う」というのはわかりにくい表現だが、それは要するにリシュの個体がもはやリシュではいられなくなったり、人間の個体がもはや人間ではいられなくなったりといったことを表しており、とどのつまりは命を失うことを指している。

さて、リシュに関する観察によって、リシュの個体がナッツを長期にわたって摂取して

<sup>8</sup> 実際にはグライスはもう少し複雑な定式化をおこなっているが、詳細は本稿の議論に関わらないため、簡略化している。

いなければその個体は命を失うということが、すでにわかっていたとしよう。すると、先ほどの公理のひとつ目より、ナッツはリシュにとって必需品であるということが帰結する。これにトビーがしばらくナッツを摂取していないという観察を付けたし、ふたつ目の公理を用いると、トビーはナッツの摂取への意志を持っているということが帰結する。心理に関する公理系はこのように用いられるとグライスは考える。

こうした推論を繰り返し、関連する心理を導出することで、最終的には「ある動物タイプに属す個体がしかじかの心理を備えているならば、その個体はAという振る舞いをする」のような形式の公理を用いてその個体の振る舞いに関する命題を導出することができる。先ほどの例でいえば、一連の推論を経て最終的に〈トビーは目の前のナッツにかぶりつく〉が導出されることになる。そのような推論が構築されたならば、私たちは求めていた説明の架け橋が得られたことになり、トビーや他のリシュに関する観察結果を前提に、トビーの振る舞いを説明できたことになる。意志などの心理概念は、単にこのような推論構築を可能にするある種の演算子のように機能しているのみであり、それ自体で脳状態やその他の何かを表しているなどと考える必要はない。これがグライスの公理的理論だ。<sup>9</sup>

グライスが自身の心理論を展開する議論のなかで、意図や話し手の意味、会話的推意に関する明示的な言及はないが、これまでに見てきたことを繋ぎ合わせるならば、こうした概念もまた公理的理論の観点から捉えられることになるだろう。

意図は意志と信念によって構成されるのであった。そして意志と信念は、心理学的公理のなかに登場し、行為者に関する観察結果を前提としてその行為者の振る舞いを結論とするような推論を構築可能にするという働きを持つ。言い換えると、行為者に関する観察と行為者の振る舞いとあいだの説明の架け橋を与えるような推論を構築する際に登場する限りにおいて、その行為者に意志や信念は帰属されることになる。そうして、関連するタイプの意志や信念が行為者に帰属されたならば、行為者にはすなわち意図が帰属されることになる。同様のことを繰り返して関連する複数の意図が行為者に帰属されたならば、その行為者には話し手の意味という行為が帰属されることになり、その一部として会話的推意という行為が帰属されることになる。グライスの公理的理論からは、こうした図式が見て取れる。

だが、話し手が発話する場面では、何と何のあいだの説明の架け橋が求められるのであろうか？ この点に関してもグライスは明示的に述べてはいないが、リシュをめぐる議論と平行に考えるならば、前提となるのは話し手に関して観察された事実（その話し手はどのような状況に置かれていたのか、その話し手と同じグループの者たちはどういった振る舞いをしてきたのか、など）であり、結論となるのはその話し手がある特定の発話をし

---

<sup>9</sup> さらなる詳細は三木 (2022) の第六章を参照してほしい。

たという事実であろう。私たちは話し手が発話を行ったとき、その話し手や関連する他の人々に関する観察結果をもとに、話し手のその発話を説明するような推論を構築しようとする。その説明のために、私たちはさまざまな公理を用いていくつもの意志や信念を話し手に帰属するだろう。グライスの哲学においては、会話的推意もこのようにして、話し手に関する観察結果から話し手による発話への推論の構築のなかで見出されるものとならなければならない。だとすれば、会話的推意の理論もまた、こうした公理的理論の一部として、すなわち心理に関わるような公理を記述するものとして理解されるべきだろう。<sup>10</sup>

以上で、グライスの哲学における会話的推意の理論の位置づけを見てきた。最後に、これまでの議論を踏まえたくえでグライスの哲学にすでに指摘されている問題点の意義を論じたうえで、グライスに対するオルタナティブを紹介する。

## 5. グライス哲学へのオルタナティブ

グライスの哲学において、会話的推意の理論と公理的理論を繋ぐ位置に置かれているのは、話し手の意味を話し手の意図によって分析するという枠組みである。だがこの枠組みには意図の無限後退問題というよく知られた問題がある。この問題はまず Strawson (1964) で抽象的なかたちで示唆されたのちに、Schiffer (1972/1988) にて具体的な事例とともに、より整理された形で指摘された。

Grice (1957) では、話し手 S が発話をおこなって p と意味するための必要十分条件が、発話時において S が以下の条件を満たすこととして特定されていた。

- (1) S はある聞き手 A に p と信じさせようと意図している
- (2) S は自分が (1) の意図を持っていると A に認識させようと意図している
- (3) S は、自分が (1) の意図を持っていると A が認識することが A にとって p と信じ理由になるようにしようと意図している

Strawson (1964) では、これらの三つの意図を持ちながらも、意図 (2) を聞き手に気づかせようとは意図していない話し手の事例を考えたならば、それは話し手の意味の事例とはならず、それゆえにグライスのこの分析には反例が存在すると論じられている。だが

<sup>10</sup> 推論の構築に関しては、ひとによって得意・不得意があったり、同じ事柄に関してもひとによって構築する推論が異なったりということが考えられるため、会話的推意の理論を公理的理論のうちに位置づけることは会話的推意という概念を個人ごとに相対的なものにしてしまう恐れがあると思われるかもしれない。だが Grice (2001) では人間の理性の働きとしての推論が取り上げられたうえで、それに関してひとごとに得意・不得意があるのは事実だとしても、それでもどういった推論が望ましい推論 = 理性使用であるかという価値を私たちは判断することができ、それがある種の規範性をもたらすという議論が展開されており、相対主義的な立場からは距離が取られている。

問題はこの特定の反例の存在ではない。より重要なのは、仮にそうしたタイプの反例を排除するために、第四の条件として「(4) Sは自分が(2)の意図を持っているとAに認識させようと意図している」といったものを加えたとして、この意図(4)に関しても同様の仕方で反例を作りうるように考えられることである。同じことは、原理的には同様の意図をいくつ付け加えても言える。結果的に、要求される分析項のリストは無限に続いていくことになり、私たちは話し手の意味の十分条件に決して到達できないことになる。Schiffer (1972/1988) では、意図(3)についても同様の問題が生じると論じられている。

この問題についてはいくつもの対策が提案されているが、三木(2019)では、その対策のいずれについても結局は同様の問題が生じるか、もしくは同じ問題がかたちを変えて実質的に繰り返されるかという結果に陥ると論じている。この点の詳細については本稿では割愛する。本稿にとって重要なのは、グライスの公理論的心理論を踏まえるならば、ここでの無限後退を無害なものに見なして問題を回避する道が断たれる、ということである。

話し手の意味の成立のために無限に多くの意図が必要となるならば、公理論的心理論に照らすならば、公理を通じて話し手に無限に多くの関連する意図が帰属されなければ、話し手の意味という行為の帰属はおこなえないということである。しかし、公理論的心理論において無限に多くの意図を帰属するためには、無限に長い推論を構築する必要がある。そのためには、話し手の発話への説明の架け橋は与えられてはならない、ということになる。というのも、説明の架け橋が与えられてしまったならば、それは話し手に関する観察を前提にして話し手の発話を結論とする推論が具体的に与えられたということであり、そこには有限個の公理と定理が介在するのみになってしまう。したがって、話し手への説明の架け橋は与えられてはならない。しかし公理論的心理論に照らすならば、そうした説明の架け橋が与えられ得ないならば、そもそも話し手に心理の帰属はなされず、従って話し手の意味という行為の帰属もなされない。話し手の意味が帰属されるためには話し手の意味が帰属されてはならないという矛盾が、ここに生じることになる。

会話的推意の理論は、話し手の意味を話し手の意図に基づいて分析する枠組みを基礎としていた。だが話し手の意味を話し手の意図に基づいて分析する枠組みは、それがすでに指摘されている無限後退を生じさせる限りにおいて、肝心の意図という概念に関するグライスの公理論的理解と齟齬をきたす。それゆえ会話的推意の理論を利用可能な枠組みとして維持するためには、会話的推意を話し手の意味という概念と切り離すか、話し手の意味を話し手の意図と切り離すか、もしくは意図を公理論的理解から切り離すか、いずれかの道を選ぶ必要があるだろう。本稿では話し手の意味の概念を話し手の意図の概念から切り離す方法のひとつとして、意図に変えてコミットメントという概念を利用する枠組みについて紹介したい。<sup>11</sup>

<sup>11</sup> 意図の概念を公理論的理解から切り離す立場としては、例えば野矢(1999)での意図の理解が

コミットメントとは、何らかの行為を果たすことへの責任を指す。意味論や語用論の理論においてはコミットメントという概念を用いる立場がすでに複数提唱されている。例えば Brandom (1983; 1998; 2001) の規範的語用論においては、Lewis (1979) のスコア記録 (scorekeeping) のアイデアを採用したうえで、会話参加者の持つコミットメントがスコアの一部をなしていると想定されている。また、Krifka (2015) ではコミットメント空間というアイデアのもとで、言語行為が文脈に対して果たす貢献が形式的に分析されている。さらに Geurts (2019) では、異なるコミットメント概念のあいだの違いに着目することで、さまざまな言語行為の特徴を各種のコミットメントの組み合わせによって捉える立場が提案されている。

意図概念に代えてコミットメント概念を採用する意義は、それが話し手による発話の時点までに成り立っている事実ではなく、話し手による発話の時点以降に期待されることへの参照を可能にする点にある。意図概念は、意図に関してどの立場を取るにせよ、何らかの意味で行為に先立つものと考えられる。実際、意図が因果的に行為を引き起こすものとする立場によれば前者は後者の原因であり、グライスの公理論的立場においては、意図は最終的に行為を導出する際の前提の一部になる。これに対しコミットメントは、それを形成したひとがそれから先どう振る舞うべきかに関わる概念である。私がしかじかのプロジェクトの拡大にコミットするとき、重要なのはその時点で、あるいはその時点以前に私がどういう状態にあり、それが私の行為にどう結び付いたかではない。むしろ、そのコミットメント形成以降は、私はプロジェクト拡大に寄与する行為を選択するはずであるという、将来の行為に関する期待こそがコミットメントについて述べる際の眼目となる。これはコミットメントが規範的概念であることからの帰結でもある。

グライスは、話し手による発話を説明するものとして話し手の意図を考えていた。そこでは、いかなる意図が当該の発話をもたらしたのかが焦点となっている。コミットメント概念を導入したなら、発話に関してそれとは逆方向の理解の可能性が開かれる。すなわち、当該の発話はいかなるコミットメントを、それゆえいかなる将来の行為に関する（規範的な）期待をもたらすか、である。

三木 (2019) では、話し手の側における「何かを意味する」という行為と、聞き手の側

---

ある。野矢は、意図というものは一般に、自分自身が意識的に何らかの行為を選択したり、あるいは自身の行為について他者から「何をしているんだ」、「なぜそんなことをするのか」などと問われたりしたときにはじめて形成されるものであり、それゆえにほとんどの場面では意図など形成されることなく意図的行為がなされていると考える (136 頁)。ただし、会話的推意の理論との関連においては、私たちは意図に関してどのような理論でも自由に選択できるわけではないことに注意すべきだろう。グライスと異なる意図理解を採用したうえで、少なくとも (1) それが意図の無限後退問題を免れているか、無害化しており、かつ (2) その意図理解が会話的推意に関する体系的な理論を可能にする、ということが確認される必要がある。意図に関する野矢の理解は、(1) は満たすかもしれないが、(2) については困難であるように思われる。

における「(話し手の意味したことを)理解する」という行為とが相伴うことで、話し手と聞き手の双方に関わるコミットメントがもたらされるという観点から、グライスとは異なる仕方では話し手の意味を理解する枠組みが提示されている。この枠組みは、Gilbert (2014) に見られる共同のコミットメント (joint commitment) という概念に依拠したものととなっている。

ギルバートの言う共同のコミットメントとは、複数のひとのあいだで成り立つ相互的な規範性だ。例えば私とあなたが一緒に駅まで歩いているとする。私たちが本当に一緒に歩いているなら、その途中で私が無断で「やっぱり駅に行く前にカフェでんびりしよう」などと考えてカフェに入っていこうとしたなら、あなたには「いや、ちょっと待って」と止め、非難する権利があるだろう。逆に言えば、私にはあなたと一緒に歩いている以上は従うべき義務があるのである。これは立場を逆にしても変わらず、あなたもまた同様の義務を負っているし、それに反すれば私には非難の権利が生じる。これは私とあなたがたまたま同じとき、同じスピードで同じ場所に向かって近い距離を保って歩いているという場合とは大きく異なっている。この後者の場合に私がカフェに入っていったとして、あなたにそれを非難する権利はないはずだ。

二人で一緒に歩いているときに私とあなたが持っているコミットメントは、ギルバートの理論においては「私とあなたは一体となって歩くことに共同的にコミットしている」と記述されることになる。ギルバートによれば、「あらゆる共同のコミットメントは、何かを一体となっておこなうことへの共同のコミットメントである」のだ (Gilbert 2002: 32)。そして何かを一体となっておこなうというのは、その共同のコミットメントの参加者たちが、その何かを目的とする単一の身体を可能な限り模倣するような仕方では振る舞うことだと説明される (ibid.: 33)。私とあなたが一緒に歩くとき、私たちは互いにばらばらに歩くのではなく、まるでそれぞれが歩くひとつの動物の異なるパーツであるかのように振る舞うべく、互いに義務を負っているのであり、だからこそそうしたパーツに相応しくない振る舞いには非難が向けられうるのであって、またそれゆえに基本的には互いがそれぞれの演じるパーツに相応しい振る舞いをするものと期待するのだ。

三木 (2019) では、話し手が何かを意味することと、聞き手がそれを理解することの条件を次のように与えている (210 頁をもとに、表現を修正)。

話し手 S は x を発話することで p と意味する

⇨ S による x という発話は、〈S が p と信じている〉と一体となって信じることへの共同のコミットメントに参加する用意が S にあることの表立った表明である

聞き手 A は S による x の発話が p と意味すると理解する

⇨ A は S が x を発話することで p と意味していると認識し、かつこの認識が理由の一部となって、〈S が p と信じている〉と一体となって信じることへの共同の

ミットメントに参加する用意がAにあると表立って表明する

ギルバートは、共同のコミットメントはその参加者のそれぞれがそれに参加する準備を表明することで形成されると考えている (ibid.: 33)。それゆえ上の分析が述べているのは、〈Sはpと信じている〉と一体となって信じるという共同のコミットメントへの話し手側の参加準備の表明が話し手の意味であり、それを受けてなされる聞き手側の参加準備の表明が聞き手の理解であるということだ。

この立場は、それ自体としては会話的推意のオルタナティブな理論は与えず、ただ意図という概念を用いない話し手の意味の分析を与えるのみである。だが、話し手の意味に関してこの立場を採用したなら、話し手の意味の一部である会話的推意についても、それがどのような経路で、どのような共同のコミットメントをもたらすかという観点から捉え直すことができるだろう。これは、グライスの会話的推意の理論を、グライスの哲学が抱えている内在的問題から切り離すひとつの方法となりうる。

## 6. 結論

本稿では、グライスの会話的推意の理論が、グライスの哲学の全体像のなかでいかなる位置づけを持つのかを論じた。会話的推意の理論を言葉の意味から言葉の使用の特徴に過ぎないものを切り離すためのツールと捉えていたグライスにとって、会話的推意の概念は具体的な言語現象の説明よりもむしろ、それがより一般的な理性や心理の領域に根差すという点が重要であった。そして実際、グライスは会話的推意の理論を話し手の意味の分析に基礎づけることで、結果的にそれを話し手の意図に関する問題としている。本稿ではさらにグライスの心理論を参照し、グライスが心理を公理論的に、それゆえ推論との関係のもとで捉えていたということを論じた。それゆえ、会話的推意もまた、話し手に関する観察から話し手がおこなった発話に至る推論を構築するというプロセスのなかで話し手に帰属されるものと理解されることになる。

しかしグライスによる話し手の意味の分析には内在的な問題があり、それはとりわけその公理論的心理観と不整合に陥っている。こうした内在的な問題から会話的推意の理論を切り離すひとつのやり方として、本稿ではコミットメントという概念を用いるというアプローチを紹介した。

## 参考文献

(再録が記載されている文献の引用は再録時の頁番号に従い、また引用に際しては私自身の訳文を用いている)

- Ayer, A. J. 1940. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London: Macmillan. (神野慧一郎・中谷隆雄・中才敏郎 (訳) (1991) 『経験的知識の基礎』東京：勁草書房)
- Brandom, R. B. 1983. "Asserting." *Noûs* 17(4), 637-650.
- Brandom, R. B. 1998. *Making It Explicit: Reasoning, Representing, and Discursive Commitment*. Cambridge: Harvard University Press.
- Brandom, R. B. 2001. *Articulating Reasons: An Introduction to Inferentialism*. Cambridge: Harvard University Press. (斎藤浩文 (訳) (2016) 『推論主義序説』東京：春秋社, 2016年)
- Davis, W. A. 1998. *Implicature: Intention, Convention, and Principle in the Failure of Gricean Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geurts, B. 2019. "Communication as Commitment Sharing: Speech Acts, Implicatures, Common Ground", *Theoretical Linguistics*, 45(1-2), 1-30.
- Gilbert, M. 2002. "Acting together." In Meggle, G. (ed.) *Social Facts and Collective Intentionality*, 53-73. Frankfurt: Hansel-Hohenhausen. Reprinted in Gilbert (2014): 23-36.
- Gilbert, M. 2014. *Joint Commitment: How We Make the Social World*. Oxford: Oxford University Press.
- Grice, P. 1957. "Meaning." *The Philosophical Review*, 66(3), 377-388. Reprinted in Grice (1989): 213-223.
- Grice, P. 1961. "The Causal Theory of Perception." *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volume 35: 121-152. Reprinted (abridged) in Grice (1989): 224-247.
- Grice, P. 1967. "Prolegomena", in Grice (1989): 3-21.
- Grice, P. 1968. "Utterer's Meaning, Sentence Meaning, and Word-Meaning." *Foundations of Language*, 4, 225-242. Reprinted in Grice (1989): 117-137.
- Grice, P. 1969. "Utterer's Meaning and Intentions." *The Philosophical Review*, 78: 147-177. Reprinted in Grice (1989): 86-116.
- Grice, P. 1971. "Intention and Uncertainty." *Proceedings of the British Academy*, 57, 263-279.
- Grice, P. 1975a. "Logic and Conversation." In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press. Reprinted in Grice (1989): 22-40.
- Grice, P. 1975b. "Method in Philosophical Psychology (from the Banal to the Bizarre)." *Proceedings and Address of the American Philosophical Association*, 48: 23-53. Reprinted in Grice (1991): 121-161.
- Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA.: Harvard University Press. (清塚邦彦 (訳) 『論理と会話』(抄訳) 東京：勁草書房, 1998年)
- Grice, P. 1991. *The Conception of Value*. Oxford: Clarendon Press.
- Grice, P. 2001. *Aspects of Reason*, Oxford: Clarendon Press. (岡部勉 (訳) 『理性と価値：後期グライス形而上学論集』(東京：勁草書房, 2013年所収, 3-188)
- Krifka, M. 2015. "Bias in Commitment Space Semantics: Declarative Questions, Negated Questions, and Question Tags." *Proceeding of Salt* 25, 328-345.

- Lewis, D. 1979. "Scorekeeping in a Language Game." *Journal of Philosophical Logic*, 8: 339–359.
- 三木那由他. 2019. 『話し手の意味の心理性と公共性』東京：勁草書房.
- 三木那由他. 2022. 『グライス 理性の哲学：コミュニケーションから形而上学まで』東京：勁草書房.
- 野矢茂樹. 1999. 『哲学・航海日誌』東京：春秋社.
- Price, H.H. 1932. *Perception*. London: Methuen.
- Schiffer, S.R. 1972/1988. *Meaning* (Paperback Ed.). Oxford: Clarendon Press.
- Strawson, P. F. 1964. "Intention and Convention in Speech Acts." *The Philosophical Review*, 73(4), 439–460. Reprinted in Strawson (1971/2004): 149–169.
- Strawson, P.F. 1971/2004. *Logico-Linguistic Papers* (2nd Ed.). Hants: Ashgate.

〈招待論文〉 [研究論文]

## 「謙譲語 II」と「丁重語」の区分について —語彙的意味と有標性の観点から—\*

大島 デイヴィッド 義和  
名古屋大学

The treatment of the honorific verbs *itasu* 'do', *mairu* 'go, come', *moosu* 'say', *zonjiru* 'know, think', and *oru* 'exist' has been a matter of contention in the research on Japanese honorifics. Building on data collected through a questionnaire survey, this work makes the following claims. First, for *itasu*, *mairu*, *moosu*, and *oru*, it is appropriate to posit two distinct uses: (i) the *kenjōgo* II, or subject-oriented dishonorific, use and (ii) the *teichōgo*, or courtesy honorific, use. Second, *itasu*, *mairu*, and *moosu* in their *kenjōgo* II use conveys that the described eventuality has direct relevance to the addressee. Third, whereas *zonjiru* only has a use as a *kenjōgo* II, *mairu* and *oru* used as auxiliary verbs only have a use as a *teichōgo*.

キーワード： 敬語、謙譲語、丁重語、後景の意味

### 1. 序論

日本語の敬語の研究において、「謙譲語 II」「丁重語」等の名称で呼ばれる語群のあつかいはひとつの争点となってきた。謙譲語 II とは、具体的には『いたす』<sup>1</sup>『参る』『申す』『存じる』『おる』の5動詞（以下、「『いたす』類」と呼ぶ）および、『私ども』『弊社』『拙著』といった名詞表現を指す。これらの表現は「卑下・へりくだり（話し手またはその領域に属する人物を低く待遇する）」の意味を持ち、この点で『伺う』『申し上げる』『存じ上げる』といった「謙譲語 I」と区別される。

一方、『いたす』類のうち、『存じる』を除いた『いたす』『参る』『申す』『おる』は、卑下的な意味が希薄化した用法—「丁重語」用法—を持つとされてきた。(1a) は卑下的な謙譲語 II、(1b) は丁重語の例である。

\* 本研究は JSPS 科研費 21K18359 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> 語彙素 (lexeme) を指す際には二重鉤括弧、個別の語・表現を指す際には普通の鉤括弧を用いる。

- (1) a. 今日は私が佐藤の代理で参りました。  
 b. 向こうから子供たちが大勢参りました。 (文化審議会 2017: 18)

謙譲語Ⅱと丁重語の関係について、菊地 (1997: 274-275, 2022: 42-43) では後者を前者の特殊な用法と位置づけている。一方で、この区分の必要性を認めない研究も見られる (宮地 1968, Ikawa and Yamada 2022 など)。

本稿では、調査票調査から得られたデータをふまえ、以下の3点を論じる。(i) 『いたす』類は主語にあたる人物が話し手またはその領域に属する人物—菊地 (1997: 119) ではこの意味での「拡張された1人称者」を「I人称者」と表記するが、本稿でもそれにならう—の場合とそれ以外で用いられやすさが異なり、「丁重語」を独立した有標的用法とみなすことは合理的である。(ii) 菊地による「謙譲語Ⅱ」の意味記述は十分なものではない。『いたす』を含むいくつかの語は、単にI人称者を低めるだけではなく、あわせて「描写される事象・行為が聞き手に直接的に関与するものである」ことをも伝達するという性質を持つ。(iii) 『存じる』が謙譲語Ⅱ用法しか持たないのに対し、助動詞として用いられる『まいる』『おる』は丁重語用法しか持たない。

## 2. 「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ」「丁重語」

伝統的に「謙譲語」と呼ばれてきた表現群に性質が異なる複数種のものが混在していることは、宮地 (1968)、大石 (1975, 1983)、菊地 (1997, 2022) といった研究者によって指摘され、文部科学省文化審議会 (国語分科会) によって作成・公開されたガイドライン『敬語の指針』 (文化審議会 2007) にも反映されている。それぞれの種についてこれまで用いられてきた呼称は多岐に渡る (菊地 2022: 21-23) が、ここでは『敬語の指針』や菊地 (2022) で用いられる「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ」「丁重語」を採用する。以下、本節ではこれら3種の敬語表現の性質を概観する。

### 2.1. 謙譲語Ⅰ

謙譲語Ⅰ動詞には、「{お/ご} ~する」「{お/ご} ~申し上げる」のかたちをとるものと、『伺う』『申し上げる』『存じ上げる』『さしあげる』といった特殊形がある。謙譲語Ⅰ動詞は「主語について卓立性の高い補語」(ヲ格目的語やニ格目的語、あるいは「~ノタメニ」に該当する受益者補語など; 菊地 1997: 283-285, 2022: 34) にあたる人物を高めるはたらきを持つ。個別の謙譲語Ⅰにおいて敬意が向けられる補語を、ここでは「敬意対象補語」と呼ぶ (たとえば『お手伝いする』『ご招待申し上げる』の場合はヲ格目的語、『申し上げる』『ご報告する』の場合はニ格目的語が敬意対象補語である)。

Oshima (2019, 2021) では、種々の敬語表現の「敬意に関わる意味」を定式化するため

に、(2a-d) のような想定を採用している。

- (2) a. 敬語によって伝達されうる敬意の幅は実数の区間  $[-1, 1]$  によって表される。この区間内の元を「敬度 (honorific value)」と呼ぶ。最大級の敬意に値する人物の敬度は 1 であり、まったく敬意に値しない人物の敬度は 0 または負の値となる。
- b. 話し手が、「誰にどの程度の敬意を払っているか」は指標的 (文脈依存的) 関数 **HON** によって表象される。**HON** は個体から敬度への関数であり、たとえば “**HON(mari) = 0.3**” は、話し手が当該文脈において人物マリに対して付与する敬度が 0.3 であることを意味する。
- c. 正の敬度 (0 を上回る敬度) を、I 人称者に付与することはできない (「自尊」は許容されない)。また、負の敬度 (0 を下回る敬度) は、I 人称者にのみ付与することができる (「自卑」は許容されるが、「他卑」は許容されない)。
- d. 個々の敬語表現は、言及される指示対象、聞き手、または話し手の敬度についての情報を、「後景的意味 (non-proffered content、not-at-issue content)」<sup>2</sup> として伝達する。

たとえば、(3) において丁寧語『あります』・『ございます』が伝達する「敬意に関わる意味」、(4) において尊敬語『おっしゃる』が伝達する「敬意に関わる意味」は、それぞれ (5)・(6) のように記述される。

- (3) レストランは 9 階に {a. あります/b. ございます}。
- (4) 鈴木さんは「とにかくやってみよう」とおっしゃった。
- (5) a. **HON(Addressee)  $\geq$  0.3** (聞き手の敬度は 0.3 以上である)  
 b. **HON(Addressee)  $\geq$  0.7** (聞き手の敬度は 0.7 以上である)
- (6) **HON(suzuki)  $\geq$  0.6** (鈴木の敬度は 0.6 以上である)

『ございます』『おっしゃる』は『ある』に比して高いレベルの敬意を伝達するが、これは意味表象の一部をなす基準値の大小関係に反映されている。ただし、個別の数値は暫定的なものである。

なお、ここでは、丁寧語に代表される「対者敬語 (addressee honorific)」が伝達する「敬意」と尊敬語を含む「素材敬語 (referent honorific)」が伝達する「敬意」が同次元に

<sup>2</sup> 後景的意味とは、前景的意味 (proffered content、at-issue-content) と対置され、「前提 (presupposition)」を包摂する概念である (Oshima 2016: 43-44, 大島 2020: 49-50)。敬語表現が伝達する「敬意に関わる意味」が「前提」に相当するか否かは研究者によって立場がわかれる問題であり、ここでは立ち回らない。

属するものと捉えられている。(より敬度の高い) 素材敬語だけを用いて (より敬度の低い) 対者敬語を省略した (7c) のような言い方が一般に許容されないことが、その根拠となる (Oshima 2019: 337, 2021: 116)。<sup>3</sup>

- (7) 例の書類、(あなたは) もう {a. 提出した/b. 提出しました/c. # 提出された/d. 提出されました} よね。

動詞表現「あります」「ございます」「おっしゃった」の前景的意味 (proffered content, at-issue-content) と後景的意味をあわせた包括的な意味は、トランスジャンクション演算子 (transjunction operator) を用いて (8) のように表象される (時制・時間に関わる意味についてはここでは捨象されている)。トランスジャンクション演算子を含む論理表現 “ $\langle \alpha; \beta \rangle$ ” において、 $\alpha$  は前景的意味、 $\beta$  は後景的意味に相当する (Oshima 2021: 119–120)。「あります」「ございます」の場合、敬意に関わる意味に加え、主語にあたる個体の無情性 (non-sentience) もまた後景的意味の一部をなす。<sup>4</sup>

- (8) a. あります  $\mapsto \lambda x \lambda e_1 [\langle \text{exist}(e_1, x); \text{non-sentient}(x) \& \text{HON}(\text{Addressee}) \geq 0.3 \rangle]$   
 b. ございます  $\mapsto$   
 $\lambda x \lambda e_1 [\langle \text{exist}(e_1, x); \text{non-sentient}(x) \& \text{HON}(\text{Addressee}) \geq 0.7 \rangle]$   
 c. おっしゃった  $\mapsto \lambda u_1 \lambda x \lambda e_1 [\langle \text{say}(e_1, x, u_1); \text{HON}(x) \geq 0.6 \rangle]$

(8a) を平易に読み替えると、表現『あります』における前景的意味は「個体  $x$  が存在すること」であり、後景的意味は「同  $x$  は無情物であり、なおかつ聞き手の敬度は 0.3 以上であること」である、となる。

謙讓語 I は敬意対象補語にあたる人物の敬度がある程度高いことに加え、主語にあたる人物の敬度が、敬意対象補語にあたる人物の敬度とくらべて相対的に低いという情報を伝達する (菊地 1997: 257–259)。(5)・(6) と同様の記法で、(9a) において謙讓語 I 『申し上げる』が伝達する敬意に関わる意味を記述すると、(9b) のようになる (Oshima 2021: 118)。

- (9) a. 田中先輩が川井教授にそのように申し上げた。

<sup>3</sup> 「頼み事をしてきた相手に対して) 悪いがそれはお断りする」「あなたもいらっしゃる？」のような発話は、「同一次元説」にとつての例外となる。しかし、前者は聞き手への反感を伝達する「慇懃無礼」な言い方と捉えられること、後者はごく限られたスタイルでしか用いられない言い方であることから、これらの例では素材敬語『お断りする』『いらっしゃる』が非標準的な用い方をされているとみなしてよい。したがって、これらの例は同一次元説を棄却する根拠としては不十分であると判断できる。

<sup>4</sup>  $e_n$  は事象 (eventuality) に対応する変数であり、 $u_n$  は (直接引用された) 発話 (utterance) に対応する変数である。

b.  $\text{HON}(\text{kawai}) \geq 0.6$  &  $\text{HON}(\text{kawai}) > \text{HON}(\text{tanaka})$ 

## 2.2. 謙譲語 II

冒頭で述べたように、謙譲語 II 動詞は『いたす』『参る』『申す』『存じる』『おる』の5つの形式からなる。『いたす』は、本動詞として用いられる他、動名詞に後接して句動詞（「サ変動詞」）の構成要素となる場合もある。また、『参る』『おる』はテ形に接続する助動詞としても用いられる（「雨が降ってまいりました」「雨が降っておりました」）。以下、必要に応じて『参る<sub>M</sub>』『おる<sub>A</sub>』のように、符号 M・A によって本動詞 (main verb)・助動詞 (auxiliary verb) の区別を示す。

菊地 (1997: 270-272) では、謙譲語 II 動詞を「話手が主語を低める（ニュートラルよりも《下》に待遇する）表現」とし、そのはたらきを「自分側を低めて述べることによって、話手が聞き手に対してへりくだった／かしこまった趣、つまり丁寧さをあらわす」ことであると形容している。Oshima (2019: 336) では、この捉え方を踏襲し、謙譲語 II 動詞を主語にあたる人物の敬度が負の基準値以下であることを伝達する表現とみなし、あわせて概略 (10) のような談話原理を設定した。なお、Oshima (2019) では「尊敬語」「謙譲語 I」「謙譲語 II」はそれぞれ“ARG1 honorific”、“ARG2 honorific”、“ARG1 dishonorific”と呼称される。

- (10) 逆転原理 (Inversion Principle): I 人称者に対して負の敬度を標示することは、対応する（絶対値を等しくする）正の敬度を聞き手に対して標示することと同様の表現効果を持つ。

(11a) において『いたす』が伝達する敬意に関する意味は (11b) のようになり、これは談話原理 (10) によって実質的に (11c) と同義になる。

- (11) a. 会場の手配は私がいたします。  
 b.  $\text{HON}(\text{Speaker}) \leq -0.5$   
 c.  $\text{HON}(\text{Addressee}) \geq 0.5$

謙譲語 I・謙譲語 II の重要な相違の 1 つは、後者の場合（正の）敬意が向けられる対象は聞き手に限られるのに対し、前者ではそうではないという点である。謙譲語 II が必ず丁寧語とともに用いられるという特徴（「その案件は私が担当いたします # (ことになりました)」はこの性質に起因する（菊地 1997: 271; Oshima 2019: 338）。

## 2.3. 丁寧語

『いたす』類から『存じる』を除いた『いたす』『参る』『申す』『おる』について、菊地 (1997) は、「《I 人称者を低める》という典型的な使い方を外れて、ただ《聞き手への丁寧さ

をあらわす》というだけの」用法を持つことを指摘し、これを「丁重語」用法と呼ぶ。(12a-d) は菊地 (1997) が挙げる丁重語 (用法) の例である。

- (12) a. この大会には全国から 300 人の選手が参加いたします。(スポーツの放送)  
 b. 向こうから中学生が参りますので、道をきいてみましょう。  
 c. プラトンが申しますには…… (学者の講義)  
 d. そこに幸い中学生が数名おりましたので、荷物運びを手伝ってもらいました。

(菊地 1997: 264, 317, 319; 一部表記を変更した)

「謙譲語 II」「丁重語」という用語について、菊地 (1997, 2022) は前者を『いたす』類を含む語群の名称として用いるのに対し、後者を「謙譲語 II 動詞」の非典型的用法を指すものとして用いている。<sup>5</sup> 対して、本稿では、「謙譲語 II」を、(11a) に示したような卑下的な意味を持つ敬語表現を指すのに限定して用いることとする。すなわち、本稿でいう「謙譲語 II」は、菊地における「主語にあたる人物を低く遇するはたらきを持つ、典型的な用法の謙譲語 II」に相当する。『いたす』等の卑下的な用法と「丁重語」用法が、別語にあたるのか、あるいは同一語の異なる意義 (sense) にあたるのかという問題については、本稿では踏みこまない。

丁重語は、(規範的には)「主語にあたる人物が高めるべき人物であってはならない」という制約を謙譲語 II と共有しており、その点で、素材敬語としての側面を有している。この制約により、(13a-c) は不適格 (誤用) となる。

- (13) a. #あなた (山田先生) も出席いたしますか。  
 b. #あなた (山田先生) も {参ります/参られます} か。  
 c. #あなた (山田先生) が {申しました/申されました} ように……

(菊地 1997: 274, 308, 317; 一部表記を変更した)

Oshima (2019) では、菊地による意味記述をふまえ、丁重語 (courtesy honorific) は「聞き手の敬度がある程度高い」「主語にあたる人物の敬度が 0 以下である」という 2 つの意味内容を伝達するという立場を採った。本稿でもそれを踏襲する。

(12a) にあらわれる丁重語としての『いたす』が伝達する敬意に関する意味の表象は、概略 (14) のようになる。

- (14) **HON(the-athletes) ≤ 0 & HON (Addressee) ≥ 0.5**

<sup>5</sup> 『敬語の指針』では「謙譲語 II (丁重語)」のように表記し 2 つの用語を同義であるかのようにあつかっているが、これは「話をことさら難しくしない」ための便宜上の選択であった旨が、菊地 (2022: 43, 注 63) において (同文書の作成に関わった立場から) 述べられている。

### 3. 謙譲語Ⅱと丁重語の区別は必要か

菊地 (1997, 2022) の記述、ならびにそれをふまえた Oshima (2019) による定式化したがいば、丁重語が使用可能な談話条件が満たされている場合には必然的に謙譲語Ⅱも使用可能となる。I 人称者の敬度は、常に中立以下 (0 以下) であるためである ((2c) を参照)。したがって、語彙の意味の記述の簡潔性という観点からは、『いたす』等の意味としては丁重語のそれだけを設定すればこと足り、「I 人称者を低く遇する」はたらきを持つ (11b) のような意味を設定する必要はないという見方もできる。実際、宮地 (1968) や Ikawa and Yamada (2022) ではそのような立場が取られている。

菊地は『いたす』等の卑下的用法を丁重語用法と分けて認定する根拠を明確なかたちでは論じていないが、後者の使用が前者と比べて使用頻度や使用域の観点から非典型的・有標的であるという認識が、この区分の主要な動機となっているものと考えられる。しかしながら、丁重語用法の有標性について、十分なデータをもとに示した研究は管見の限り見当たらない。

次節以降では、『いたす』『申す』『参る<sub>M</sub>』に関しては、謙譲語Ⅱ用法と丁重語用法の区分を設けることは妥当であるものの、謙譲語Ⅱ用法に関する菊地の意味記述は (5 節で説明される「関与性条件」を考慮にいれていないという点において) 不完全であること、また、『まいる<sub>A</sub>』『おる<sub>A</sub>』については、丁重語用法しか持たないことを主張する。『おる<sub>M</sub>』『存じる』に関しては、菊地の記述が妥当なものであると結論づける。菊地と本稿の立場の異同を整理すると表 1 のようになる。

| 菊地 (1997, 2022)   | 本稿  |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・『いたす』『申す』『参る』『おる』には謙譲語Ⅱ用法と丁重語用法がある。</li> <li>・『存じる』には謙譲語Ⅱ用法しかない。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・『いたす』『申す』『参る<sub>M</sub>』『おる<sub>M</sub>』には謙譲語Ⅱ用法と丁重語用法がある。</li> <li>・『存じる』には謙譲語Ⅱ用法しかない。</li> <li>・『まいる<sub>A</sub>』『おる<sub>A</sub>』には丁重語用法しかない。</li> </ul> |
| 謙譲語Ⅱは I 人称者を低めるはたらき (のみ) を持つ。   | 謙譲語Ⅱは I 人称者を低めるはたらきを持つ。加えて、謙譲語Ⅱ用法の『いたす』『申す』『参る <sub>M</sub> 』は、描写される事象・行為が聞き手に関わりを持つものであるという含意を持つ。  |
| 丁重語は、聞き手を高めるはたらきを持ち、また、主語にあたる人物が高める必要のない人物であることを含意する。   |   |

表 1: 菊地 (1997, 2022) と本稿の異同

#### 4. 調査標調査について

『いたす』類の使用実態・使用意識に関するデータを収集するため、マクロミル社によって運営されるアンケート作成・収集プラットフォーム『Questant』 (<https://questant.jp>; 2022/10/1 確認) を利用し、2022 年 6 月にオンラインでの調査票調査を実施した。回答者は、同プラットフォームの有償サービスを利用して GMO リサーチ社が組織する回答者パネルから募集した。同サービスの仕様上、回答者は日本国内居住者に限定される。回答者の年代は 30 代・40 代に限定し、合計 216 名からの回答を得た。

調査の流れは以下の通りである。まず「あなたは自分が敬語を正しく使えていると思いますか」という設問(自己評価問題)に「それなりに正しく使えていると思う」「どちらともいえない」「あまり正しく使えていないと思う」の 3 択で回答する。次に、以下の形式の、29 問の判定問題に回答する。

|   |
|---|
| <p><b>説明文：</b>以下の 2 つの文に関して、選択肢から、あなたがあてはまると判断するものをすべて選んでください。選択肢の中にあられる「敬意を払うべき相手」とは、話し手にとっての上司、先輩、顧客、教師、面接官などを指すものと考えてください。また、「用いる可能性」の有無は、「話題・内容」ではなく「言葉づかい」の観点から判断してください。</p> |
| <p><b>判断の対象となる項目の例 (文脈情報を簡潔に括弧書きする場合あり)：</b></p> <p>1 「集計作業は、私がいたします」</p> <p>2 「集計作業は、私がします」</p>  |
| <p><b>選択肢 (A と B はともに選択することが可能)：</b></p> <p>A あなたが、敬意を払うべき相手と会話をするとき用いる可能性がある</p> <p>B あなたの身の回りの人間が、敬意を払うべき相手と会話をするとき用いる可能性がある</p> <p>C どちらもあてはまらない</p>                           |

判定問題ならびに各判定問題における項目は、ランダム化された順番で回答者に提示された。各判定問題(後述の 1 問を除く)では、上に挙げた例のように、『いたす』類を含んだ文とそれを非敬語動詞(『する』等)に置き換えた文からなる最小対立対が提示された(「存じておりました」を含む 2 つの項目については「知っていました」ではなく「知っておりました」が対置された)。

判定問題のうち 1 問は不誠実・不適格な回答者を除外する目的で設定されたものであった。この問題は「私は毎朝コーヒーをお飲みします」「私は毎朝コーヒーを召し上がります」という規範上明確に誤りとなる項目を含んでおり、これらのいずれかに対して選択肢 A を選んだ回答者の回答は有効回答とみなさなかった。回答に費やした時間が極端に短く、3 分を下回った回答者の回答も除外した。最終的な有効回答の件数は 150 であった(30 代男性：31、30 代女性：32、40 代男性：44、40 代女性：43)。

『いたす』類を含む項目に関して選択肢 A・B のうち少なくとも 1 つを選択した回答者の比率（以下、便宜のため「許容率」という）は、その項目の、言葉づかいのうえでの「非典型性」「有標性」の指標として一定の有効性を持つものと想定できる。

## 5. 調査結果をふまえた考察

菊地（1997, 2022）の記述にしたがえば、謙譲語Ⅱの使用が適切となる必要条件は、「主語にあたる人物がⅠ人称者であること（Ⅰ人称条件）」「聞き手の敬度がある程度高いこと（敬度条件）」の 2 点である。例（15a-c）はⅠ人称条件を満たしており、ここに生起する『いたす』『参る』『申す』は謙譲語Ⅱで（も丁寧語でも）ありうる、ということになる。

- (15) a. 私は、8 時の特急に乗車いたします。  
 b. 私は覚悟を決めて、その悪徳政治家の事務所に参りました。  
 c. 私はそのやくざに、早く足を洗うように申しました。

（菊地 1997: 300, 306, 315; 一部表記を変更した）

しかしながら、実際には、たとえば「その案件は私が担当いたします」のような文に比べ、(15a-c) のような文は相当に有標性が高いと考えられる。以下、『いたす』類を語彙項目ごとに個別にとりあげ、調査票調査の結果を参照しながら、より精緻な意味の検討を行う。

### 5.1. 『いたす』

(16a, b) に示された項目対では、敬語表現『いたす』を含んだもの（honorific の頭字をとって H 項目と呼ぶ）の許容率が高く、対応する非敬語『する』を含んだもの（non-honorific の頭字をとって N 項目と呼ぶ）の許容率を上回った。H 項目の許容率から N 項目の許容率を減じたもの（パーセントポイント）を「相対的許容度」と呼ぶ。差分が 5 ポイント未満の場合に“≈”、5 以上 15 未満の場合に“>”（“<”）、15 以上の場合に“>>”（“<<”）の記号を用いる。

- (16) a. 集計作業は、私が {いたします/します}。  
 H: 81.3% >> N: 60.0% (H-N = +21.3 pts)  
 b. 機材は私が昨日 {点検いたしました/点検しました}。  
 H: 81.3% >> N: 63.3% (H-N = +18.0 pts)

一方、(17a, b) では、H 項目の許容率ならびに相対的許容度が、(16a, b) の場合と比較して大幅に低く、「Ⅰ人称条件」を満たさない (18a, b) と類似した結果となった。

- (17) a. 私は今週末、友人の引っ越しの手伝いを {いたします/します}。  
H: 54.0% < N: 74.7% (H-N = -20.7 pts)
- b. 私は、8時の特急に {乗車いたしました/乗車しました}。  
H: 59.3% < N: 73.3% (H-N = -14.0 pts)
- (18) a. どんなに注意深い人でも、ときにはミスを {いたします/します}。  
H: 47.3% < N: 82.0% (H-N = -34.7 pts)
- b. 1964年の東京オリンピックには、94の国・地域の選手が {参加いたしました/参加しました}。  
H: 48.0% < N: 74.7% (H-N = -26.7 pts)

(16) と (17) における許容率の違いには、描写された行為が聞き手に直接的な関わりを持つかどうかという要因—「関与性条件」と名付ける—が関係していると考えられる。(16)において、「集計作業をする」「機材を点検する」という行為は、聞き手が依頼者や受益者として関与しているという解釈がごく自然にできる。一方、(17)で描写される「友人の引っ越しの手伝いをする」「特急に乗車する」は、聞き手とは特に直接的な関わりを持たない行為と解釈するのがより自然であろう。

「先日は、大変に失礼なことを [あなたに対して] いたしまして……」のような言い方が自然であることから、描写された行為と聞き手との関わりは、必ずしも恩恵的なものには限定されないと判断できる。「関与性条件」を充足するために必要な関係を仮に「(何らかの)  $R$ 」とおけば、謙譲語 II としての『いたす』の語義は概略 (19a) のように記述することができる。対して、丁重語としての『いたす』の語義は (19b) のようになる。

(19) 『いたす』の2つの語義

$$a. \lambda e_1[\lambda x[\lambda e_2[\langle \mathbf{do}(e_2, x, e_1); \mathbf{HON}(x) \leq -0.5 \ \& \ \exists R[R(e_2, \mathbf{Addressee})] \rangle]]]$$

(謙譲語 II)

$$b. \lambda e_1[\lambda x[\lambda e_2[\langle \mathbf{do}(e_2, x, e_1); \mathbf{HON}(x) \leq 0 \ \& \ \mathbf{HON}(\mathbf{Addressee}) > 0.5 \rangle]]]$$

(丁重語)

調査票調査の結果から、(17)・(18)のような文における『いたす』の使用は、「不適格とはいえないまでも、多くの話者に有標的である(あまり一般的でない)と認識されている」と結論づけることができる。無標的な謙譲語 II 用法と有標的な丁重語用法の区分は、この観察を説明するのに有用である。ただし、謙譲語 II 用法と丁重語用法のあいだの線引きについては、菊地が想定する「I人称条件」「敬度条件」に加え「関与性条件」も考慮にいれなければならない。

ここで特筆すべきは、謙譲語 I においてもまた、敬意の対象となる人物は描写される事態に(たとえば行為の受け手として)関与するという点である。「敬意の対象の事態への関

与」は、謙讓語 I と謙讓語 II (のうちのいくつか) に共通する意味要素であるといえる。この点については 6 節であらためて論じる。

## 5.2. 『参る (まいる)』

(20a, b) に示された項目対では、『参る<sub>M</sub>』を含んだ項目の許容率が高く、対応する非敬語表現を含んだ項目の許容率を上回った。

(20) a. (電話で) 今から私もそちらに {参ります/行きます}。

H: 87.3% > N: 50.7% (H-N = +36.7 pts)

b. (体調がすぐれない様子の上司に対して) 今日の銀行との打ち合わせには、私が代理で {参ります/行きます}。

H: 76.0% > N: 62.0% (H-N = +14.0 pts)

一方、(21) ならびに I 人称条件を満たさない (22) では、H 項目の許容率・相対的許容度が、(20a, b) の場合と比較して大幅に低かった。

(21) 私は、休みの日はよく駅前の大型書店に {参ります/行きます}。

H: 41.3% < N: 83.3% (H-N = -42.0 pts)

(22) その喫茶店はそれなりに人気があり、客が毎日 100 人くらい {参りました/来ました}。

H: 29.3% < N: 80.0% (H-N = -50.7 pts)

(20a) では、聞き手は『参る<sub>M</sub>』が表す行為 (移動) の着点に位置している。(20b) では、聞き手は着点に位置してはいないが、『参る<sub>M</sub>』が表す行為によって恩恵を受ける立場にある。『参る<sub>M</sub>』に関しても、『いたす』と同様に、「関与性条件」がその謙讓語 II としての使用に関わっていると考えられる。

(23) 『参る<sub>M</sub>』の 2 つの語義

a.  $\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{move-to}(e_1, x, y); \text{HON}(x) \leq -0.5 \ \& \ \exists R[R(e_1, \text{Addressee}) \rangle]]]]$

(謙讓語 II)

b.  $\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{move-to}(e_1, x, y); \text{HON}(x) \leq 0 \ \& \ \text{HON}(\text{Addressee}) > 0.5 \rangle]]]]$

(丁重語)

(24) に示した項目対では、(20a, b) の場合と (21)・(22) の場合の中間的な結果が得られた。

(24) これから母のところに {参ります/行きます}。

H: 58.0% < N: 71.3% (H-N = -13.3 pts)

この理由ははっきりしないが、「自分の母のところに行く」という行為が、聞き手と無関係であるとも受け取れる一方、たとえば「聞き手が話し手の母親と親しく、話し手が彼女を訪問することを望ましいことだと捉えている」「話し手が聞き手の依頼を受けて母親に届け物をする」などのかたちで「聞き手の関与」が比較的想像しやすいことが要因かもしれない。

助動詞『まいる<sub>A</sub>』を含む項目対 (25) では、「I 人称条件」を満たしていないにも関わらず、H 項目の許容率・相対的許容度が高かった。

(25) 最近は大いぶ {寒くなってまいりました/寒くなってきました}。

H: 69.3% ≈ N: 66.7% (H-N = +2.7 pts)

『まいる<sub>A</sub>』の使用には「I 人称条件」・「関与性条件」は関わらない—つまり、『まいる<sub>A</sub>』には謙譲語 II 用法はない—と考えてよさそうである。一方で、『まいる<sub>A</sub>』を含む述語の主語にあたる人物が聞き手である (26b) のような文が正用とは言いがたいことから、『まいる<sub>A</sub>』は完全な対者敬語というわけではなく、(少なくとも規範的には) 丁重語とみなすべきであろう。

(26) (話し手は、年上の小林という人物に、1 年ほど前から将棋の指導をしている)

a. 小林さんは最近だいぶ上達してきましたね。

b.??小林さんは最近だいぶ上達してまいりましたね。

『いたす』『参る<sub>M</sub>』の場合、謙譲語 II 用法が典型的な用法であり、丁重語用法は有標的である。対して、『まいる<sub>A</sub>』の場合にはその唯一の用法である丁重語用法が無標的であり、結果として「I 人称条件」(ならびに「関与性条件」) が満たされていなくても許容されやすいと考えられる。

### 5.3. 『申す』

(27a, b) に示す項目対では、『申す』を含む H 項目の許容率・相対的許容度が際立って高かった。

(27) 先週 {申しました/言いました} ように、来月から市庁舎の改築工事が始まります。

H: 87.3% ≫ N: 42.0% (H-N = +45.3 pts)

一方、(28a, b) では、H 項目の許容率ならびに相対的許容度は (27) の場合と比較して低く、「I 人称条件」を満たさない (29) に近い結果となった。

(28) a. 私は父にそう {申しました/言いました}。

H: 52.7% ≪ N: 74.7% (H-N = -22.0 pts)

- b. 私はその図書館員に「その本は先週返却したはずですが、確認してもらえませんか」と {申しました/言いました}。

H: 61.3% < N: 71.3% (H-N = -10.0 pts)

- (29) パスカルは『人間は考える葦である』と {申しました/言いました}。

H: 32.7% ≪ N: 84.7% (H-N = -52.0 pts)

(27) では、『申す』が描写する行為(発言)が聞き手に向けられており、関与性条件が充足されているのに対し、(28a, b) ではそうではない。これらの例文のあいだの対立は、謙讓語Ⅱ用法の『申す』の語義にも、関与性条件が含まれていることを示唆している。

一方で、(30) では、(27) と同様に関与性条件が満たされているにも関わらず、H項目の許容率・相対的許容度はあまり高くなかった。

- (30) すみません、余計なことを {申しました/言いました}。

H: 66.0% ≈ N: 65.3% (H-N = +0.7 pts)

謙讓語Ⅱ用法の『申す』は、名乗る際の「(私は) ～と申します」という言い回しを除けば、文末で言い切りのかたちで用いられることが比較的少ないようである。「主語にあたる人物がI人称者、二格目的語にあたる人物が聞き手」の場合、『申す』『申し上げる』はともに使用可能であり、後者は前者よりも若干高い敬意を伝達する(菊地 1997: 307)。原理的に、「すみません、余計なことを申しました」という言い方が適切になるのは、「言いました」では敬意が不十分であるが、「申し上げました」では敬意が過剰になる(大仰すぎる)場合ということになる(Oshima 2019: 332-334)が、そのような場面が比較的限られることから、「余計なことを申しました」という言い方に違和感を覚える回答者が多かったのではないだろうか。<sup>6</sup> 反面、従属節末尾では、『申し上げる』を選択する(「先週申し上げましたように……」「先程は……と申し上げましたが……」)と「敬語が過剰に使用され、くどい」という印象が生じがちであり、文体上の理由から『申す』が選択される傾向が主文末と比べて高いと推察される。<sup>7</sup>

このように、(30) におけるH項目の許容率の低さは『申し上げる』との競合にその原因を求めることができる。対して、(28a, b) においては『申す』は『申し上げる』に置き換えることはできず、同様の説明は適用できない。結論として、本稿では、『申す』の謙

<sup>6</sup> 「(私は) ～と申します」の場合には、二格目的語が選択されないため「申し上げます」との競合は起こらない。

<sup>7</sup> 従属節内では主節と比べてより敬意の低い表現の選択が許容されやすい、という現象は、日本語において広く観察されるものである(菊池 1997: 361-367, Oshima 2019: 333-334)。たとえば「ノデ節」の中では丁寧体を用いることは可能(「雨が降りましたので……」)だが、「雨が降ったので、中止になりました」のように「主節では丁寧体、従属節内では普通体」というパターンが許容される。

謙語 II 用法・丁重語用法には、『いたす』『参る』と平行的な意味的対立があるという立場を採る。『申す』（『言う』）は直接引用句のかわりに補文（間接引用句）や名詞句をとる場合もあるが、ここでは直接引用句をとる場合の語義を代表として示す。

(31) 『申す』の 2 つの語義

- a.  $\lambda u_1[\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{say}(e_1, x, y, u_1); \text{HON}(x) \leq -0.5 \ \& \ \exists R[R(e_1, \text{Addressee}) \rangle]]]]]$  (謙讓語 II)
- b.  $\lambda u_1[\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{say}(e_1, x, y, u_1); \text{HON}(x) \leq 0 \ \& \ \text{HON}(\text{Addressee}) > 0.5 \rangle]]]]]$  (丁重語)

#### 5.4. 『存じる』

『存じる』を含み、「I 人称条件」を満たさない項目対 (32) においては、H 項目の許容率・相対的許容度は際立って低かった。

(32) 世の中のたいいていの方は、ライターはもちろん、マッチの作り方も {存じません / 知りません}。

H: 29.3% < N: 85.3% (H-N = -56.0 pts)

これは、『存じる』は丁重語用法を持たないとする菊地の記述に適合した結果といえる。一方、(32) を「自身が用いる可能性がある」と回答した回答者が 20.7% (敬語を「それなりに正しく使えていると思う」と回答した回答者 59 名のなかでも 20.3%) いたことから、使用実態においてはある程度の個人差・ゆれがあるとも考えられる。

「I 人称条件」を満たす項目対 (33a, b)・(34a, b) のうち、(33a, b) においては補文の内容が聞き手に関わるものであるのに対し、(34a, b) では無関係である。これらを比較すると、相対的許容度にはかなりの差が見られたものの、H 項目の許容率は総じて高水準であった。

(33) a. (佐藤という人物に対して) 佐藤さんがクラシック音楽をお好きなことは、私も {存じておりました / 知っておりました}。

H: 78.7% > N: 60.0% (H-N = +18.7 pts)

b. (鈴木という人物に対して) 鈴木さんが入院されていたことは、私はまったく {存じませんでした / 知りませんでした}。

H: 76.0% > N: 64.7% (H-N = +11.3 pts)

(34) a. 近年、北極の氷が減少していることは、私も {存じておりました / 知っておりました}。

H: 66.7% ≈ N: 69.3% (H-N = -2.7 pts)

b. 駅の近くに新しくショッピングモールができたことは、私はまったく {存

じませんでした/知りませんでした}。

H: 66.0% < N: 74.7% (H-N = - 8.7 pts)

井上・鎌水 (2017: 46) では、『存じる』が自然に用いられる条件について、以下のよう  
にコメントしている。

[「その野良犬でしたら、私が存じています」という例文は] ある敬語の本に正用と  
して載っているが、筆者にとってはおかしい。[...] 「存じています」は、聞き手に  
配慮した表現で、知っている対象 (目的語) が『先生』『店』『近道』『件』『計算法』  
なら抵抗がない。しかし、『野良犬』や『ごまかし方』『だまし方』だと変な感じが  
する。

関与性条件の充足は、『存じる』の使用の選好につながる一要因ではあっても、その適  
格性の必須条件とまでは言えないようである。

結論としては、『存じる』の (唯一の用法である) 謙讓語 II 用法に関しては、関与性条  
件を含まない、(35) のような語義を設定することが妥当であると考えられる。『存じる』  
は「知る」「思う」どちらの意味にもなり、前者の場合、目的補語として命題 (ことがら)  
を表す表現をとるばあいと個体 (人や物) を表す表現をとる場合があるが、ここでは「思  
う」の場合の語義を示す。

(35) 『存じる』 (謙讓語 II) の語義

$$\lambda p[\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{believe}(e_1, x, p); \text{HON}(x) \leq -0.5 \rangle]]]$$

ただし、筆者個人の直観では、(34a, b) で『存じる』を用いるのはかなり不自然に思え  
るし、個体を指す名詞句を目的語としてとる場合には「息子さん」「お名前」「ご著書」と  
いった聞き手領域のものを指すものでないと (たとえば「計算法」では) すわりが悪いよ  
うに感じる。『存じる』もまた「関与性条件」を語義に含む、と捉える話者もいるとい  
うことかもしれない。

## 5.5. 『おる』

『おる<sub>M/A</sub>』の用法には方言差も含めてかなりの広がりやゆれがある (菊地 1997: 318-  
322) が、標準語およびそれに近い変種においては、丁寧体かつ言い切りのかたち (「おり  
ます」「おりました」等) であらわれる『おる』は謙讓語 II または丁寧語とみなしてよい  
(ただし、「おられます」のように尊敬語接辞を含むものは除く)。菊地は『おる』が謙讓語  
II または丁寧語として用いられる場合には『いたす』『参る』『申す』『存ずる』よりも軽度  
の敬意を伝達するとしており、本稿でもこの見方に従う。

『おる<sub>M</sub>』を含む項目対 (36)・(37)・(38a, b) に対する回答を見ると、「I 人称条件」を

満たす (36)・(37)の方が、満たさない (38a, b) と比べて H 項目の許容率・相対的許容度が高かった。

(36) 私は、昨日は特に外出はしないで自宅に {おりました/いました}。

H: 77.3% > N: 64.7% (H-N = +12.7 pts)

(37) 何かトラブルが起こる可能性もありますので、6時までは私がここに {おります/います}。

H: 72.7% > N: 63.3% (H-N = +9.3 pts)

(38) a. 京都には大学生がたくさん {おります/います}。

H: 57.3% < N: 79.3% (H-N = -22.0 pts)

b. 昔は、このあたりにも熊や鹿がたくさん {おりました/いました}。

H: 52.7% < N: 75.3% (H-N = -22.7 pts)

(36)・(37)を比較すると、後者においてにのみ「描写される自体への聞き手の関与」がはっきりと示唆されるが、これは H 項目の許容率・相対的許容度には特に反映されなかった。『おる<sub>M</sub>』に関しては、無標的な謙譲語 II 用法と有標的な丁重語用法を区分することは妥当であるが、その謙譲語 II 用法の語義には「関与性条件」は含まれないと考えてよさそうである。

(39) 『おる』の2つの語義

a.  $\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{exist}(e_1, x); \text{sentient}(x) \& \text{HON}(x) \leq -0.4 \rangle]]$  (謙譲語 II)

b.  $\lambda x[\lambda e_1[\langle \text{exist}(e_1, x); \text{sentient}(x) \& \text{HON}(x) \leq 0 \& \text{HON}(\text{Addressee}) \geq 0.4 \rangle]]$  (丁重語)

助動詞の『おる<sub>A</sub>』の場合、I 人称条件を満たす (40) でも、満たさない (41) でも、H 項目の許容率は同程度に高かった。

(40) 私は、最近では10時前に就寝するように心がけて {おります/います}。

H: 79.3% > N: 57.3% (H-N = +15.3 pts)

(41) ここ数年、盗難事件の件数はかなり減少して {おります/います}。

H: 74.7% > N: 64.7% (H-N = +10.0 pts)

『おる<sub>A</sub>』は、『まいる<sub>A</sub>』と同様に謙譲語 II としての用法を持たず、その唯一の用法である丁重語用法が無標的であると考えられる。『まいる<sub>A</sub>』の場合と同様、(規範的には)『おる<sub>A</sub>』を含む述語の主語は高める必要がある人物であってはならず、したがって『おる<sub>A</sub>』を純粋な対者敬語とみなすことはできない。

(42) a. 関口さんは、学生時代何かスポーツをされていましたか？

b.??関口さんは、学生時代何かスポーツをされておりましたか？

## 6. おわりに

本論文では敬語動詞『いたす』『参る』『申す』『存じる』『おる』の語義・用法について検討した。『いたす』『参る』『申す』『おる』に関して、先行研究で議論されてきた「(卑下的な)謙譲語Ⅱ用法」と「丁重語用法」の区分を設けることには十分な妥当性があることを、調査票調査から得られたデータをもとに示した。さらに、(i) 謙譲語Ⅱとして用いられる『いたす』『参る』『申す』は描写される行為・事象が聞き手に関与するものであるという情報を伝達すること、(ii) 『存じる』が謙譲語Ⅱ用法しか持たないのに対し、助動詞として用いられる『まいる』『おる』は丁重語用法しか持たないことを論じた。

菊地 (1997, 2022) などの既存研究において、「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ」は、歴史的な繋がりを持つものの、現代語においては本質的に異なる意味特徴を持つ—したがって両者を「謙譲語」とひとまとめにするのは多分に慣習的・便宜的な用語法にすぎない—と捉えられてきた。

[謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱと] の厳密な意味での共通点というのは、実は見出せないの  
である。[...] 実は、両者を同じ〈謙譲語〉という大きな一類としてまとめること自  
体、学問的にはすでに適切ではないことになる。 (菊地 1997: 280)

筆者の見方も、そこから大きく逸脱するものではない。しかしながら、本稿で『いたす』『参る』『申す』に関して指摘された「関与性条件」は、「謙譲語Ⅰ・Ⅱ」の—これまで看過されてきた—一種の意味的共通項とみなすことができる。謙譲語Ⅱにおいては、敬意の対象は、主語について卓立性の高い補語（たとえば『申し上げる』では二格目的語）の指示対象と一致する。これは、謙譲語Ⅱの使用には、敬意の対象が事態に直接的に参与することが要求されるという意味での「強い関与性条件」が課されるという捉え方ができる。一方で『いたす』『参る』『申す』に適用される関与性条件は、敬意の対象が直接的に出来事に参与することが求められないことから、比較でいえば「弱い関与性条件」ということになる。

歴史的に見て、「謙譲語Ⅱ」というカテゴリーは、大筋としては、「謙譲語Ⅰ」に属すいくつかの語において「関与性条件の弱化（希薄化）」が起り、またそれと連動して聞き手志向が強まる（対者敬語化が進む）ことによって成立したとみなすことができる。現代語の『いたす』『参る』『申す』における関与性条件は、これらの表現が本来的に持っていた素材敬語としての性質の残余と捉えることができるだろう。

## 参考文献

- 文化審議会. 2007. 『敬語の指針』(文化審議会国語分科会答申).  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo\\_tosin.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf)
- Ikawa, S. and A. Yamada. 2022. “Territory Feature and a Distributed Morphology Approach to Clause Periphery.” In Horie, K., K. Akita, Y. Kubota, D. Y. Oshima, and A. Utsugi (eds.) *Japanese/Korean Linguistics, Volume 29*. 319–328. Stanford: CSLI Publications.
- 井上史雄・鏑水兼貴. 2017. 「『敬語の指針』に見る現代共通語の性格変化」、井上史雄(編)『敬語は変わる：大規模調査からわかる百年の動き』、35–55、東京：大修館書店。
- 菊地康人. 1997. 『敬語』東京：講談社。
- 菊地康人. 2022. 「『敬語の指針』についての覚書と、もう一つの敬語分類案」、近藤泰弘・澤田淳(編)『敬語の文法と語用論』、17–58、東京：開拓社。
- 宮地裕. 1968. 「現代敬語の一考察」『国語学』72、92–98。
- 大石初太郎. 1975. 『敬語』東京：筑摩書房。
- 大石初太郎. 1983. 『現代敬語研究』東京：筑摩書房。
- Oshima, D. Y. 2016. “The Meanings of Perspectival Verbs and their Implications on the Taxonomy of Projective Content/Conventional Implicature.” In *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT), Volume 26*. 43–60. Washington: Linguistic Society of America.
- Oshima, D. Y. 2019. “The Logical Principles of Honorification and Dishonorification in Japanese.” In Kojima, K., M. Sakamoto, K. Mineshima, and K. Satoh (eds.) *New Frontiers in Artificial Intelligence: Jsai-isAi 2018 Workshops, JURISIN, AI-Biz, SKL, LENLS, IDAA, Yokohama, Japan, November 12-14, 2018, Revised Selected Papers*. 325–340. Heidelberg: Springer.
- 大島デイヴィッド義和. 2020. 「情報語用論」加藤重広・澤田淳(編)『はじめての語用論—基礎から応用まで—』41–56、東京：開拓社。
- Oshima, D. Y. 2021. “Against the Multidimensional Approach to Honorific Meaning: A Solution to the Binding Problem of Conventional Implicature”, In Okazaki, N., K. Yada, K. Satoh, and K. Mineshima (eds.) *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-isAI 2020 Workshops, JURISIN, LENLS 2020 Workshops, Virtual Event, November 15-17, 2020, Revised Selected Papers*. 113–128. Heidelberg: Springer.

〈Invited Papers〉 [Research Paper]

## Minimal Utterance Units and Unbreakable “Morphosyntactic” Structures for Asking, Answering, Denying, and Specifying\*

Katsunobu Izutsu and Takeshi Koguma  
Hokkaido University of Education and Kanazawa University

This paper presents a crosslinguistic analysis of utterances employed for asking and answering about an addressee’s activity or an object in sight, drawing on parallel texts in Basque, Chinese, English, French, German, Japanese, Korean, and Welsh. The analysis casts new light on notable and seldom noticed discrepancies and commonalities among these languages, often overlooked in traditional macro-typological approaches. Micro-typological approaches to language enable us to see many more potential ways of classifications (groupings) of languages. Chinese and French/German are no less alike than Welsh and English are, while Basque and English are no more alike than Chinese and Welsh are.

**Keyword:** minimal utterance unit, unbreakable element, functional counterpart, macro/micro-typology, typical constituent order

### 1. Introduction

Mainstream linguistic typology, substantially established by Greenberg (1963) and now represented by the *WALS* and *Ethnologue* data base collections, has successfully classified the world’s languages on formal characteristics such as the linear order and formal structures of morphosyntactic elements. Basic constituent order such as SVO, SOV, or VSO is one of such characteristics of languages, which, as Sornicola (2011: 361) says, can give us a “macroscopic” rather than “microscopic” view of how languages are alike or contrast with each other.

However, macroscopic views may suddenly get unreliable when we look into similarities and differences in more specific units of utterance employed for various discourse-pragmatic purposes. For instance, English can start “a recent experience report” in a conversation with an utterance like *You’ll never guess where I went last week! Mexico!* or *Guess where I went last week? Mexico!*, while Spanish, another SVO language, can employ for the same purpose an expression literally meaning ‘I just finish

---

\* This study is partially supported by JSPS KAKENHI (Grant-in-Aid for Scientific Research (C) 18K00563).

being in Mexico and it was great,’ as in (1a).<sup>1</sup>

- (1) a. *Justo acabo de estar en Mexico y ha sido genial.*<sup>2</sup>  
 just finish of be in Mexico and has been brilliant  
 b. *sensyuu mekisiko-ni it-te-ki-ta-yo.*  
 last:week Mexico-to go-and-come-PST-FP  
 c. *jinanju megsiko-e ga bo-asseo.*  
 last:week Mexico-to go:and see-PST

(Adapted from Izutsu and Koguma 2019: 56–57)

Being both SOV languages, Japanese and Korean can achieve the same pragmatic purpose using so-called converb constructions, as illustrated in (1b–c).<sup>3</sup> Note, however, that (1b) and (1c) literally mean ‘I went to Mexico and **came**’ and ‘I went to Mexico and **saw**,’ respectively. The mainstream typology can say something about the use of converb constructions in both SOV languages, not in the SVO languages, but say almost nothing about the difference between ‘went and came’ and ‘went and saw’ in the particular discourse-pragmatic function of recent experience report. Likewise, the mainstream typology gives no account for the difference between the two SVO languages in this recent-experience-report function.

In the last decade, a growing number of studies have explored linguistic typology from perspectives of “typological pragmatics” (Ariel 2012), “cognitive typology” (Horie and Pardeshi 2009), and “pragmatic typology” (Floyd et al. 2020). They claim to analyze not only formal but also semantic and conceptual characteristics of linguistic expressions used for different pragmatic functions. Unfortunately, however, they are all more oriented towards a macroscopic view of linguistic typology in that they chiefly deal with abstract grammatical concepts of tense/aspect/modality and functions of complement/relative/adverbial clauses, rather than more specific discourse-pragmatic functions or purposes like recent experience reports.

A microscopic view of typology can elucidate and help explain many similarities and contrasts across different languages which a macroscopic view cannot see. As we observed in Izutsu and Koguma (2019: 61–62), there are at least three types of recent experience report expressions. They are not necessarily morphosyntactic counterparts

<sup>1</sup> Halliday and Matthiessen (2004: 614) argue that a mental clause like *I think* or *I don't believe* serves “as the projecting part of a clause nexus of projection.” Izutsu and Koguma (2019: 57) see *You never guess where* or *Guess where* as forming a similar clause nexus with the clause following them in the relevant utterances.

<sup>2</sup> We use the following abbreviations: ACC(usative), ADN(ominal), ADV(erb), AFF(irmative), AUX(iliary), CL(assifier), COP(ula), ERG(ative), EV(i)D(ential), F(ormal)N(oun), FOC(us), F(inal)P(article), GEN(itive), NEG(ative), N(o)M(ina)L(i)Z(er), NOM(inative), OBJ(ect), PART(itive), POL(ite), PREP(osition), PROG(ressive), PRON(oun), P(a)ST, QUOT(ative), SUBJ(ect), TOP(ic).

<sup>3</sup> Izutsu and Koguma (2019: 57) also call the converb construction “sequential verb construction” and subsume it into a larger category “verb-group type” with Spanish *acabar de V*.

but do count as significant counterparts in terms of discourse-pragmatic function. Each language can adopt one type or another, or a combination thereof, showing some favor for one of these. Japanese, Korean, and Spanish prefer a “verbal-group type,” while English favors a “clause-nexus type”; and, at the same time, all the four languages exhibit diverse degrees of inclination to the “*and-it-was-great* type” (*ibid.*: 62). We can see that different languages are classifiable based on which type of expression and conceptualization they prefer for recent experience report.<sup>4</sup> What matters for crosslinguistic analysis of speech is comparison of functional rather than morphosyntactic counterparts.

Our view on basic constituent order differs from a widely accepted macroscopic typology. We highly value the fact that the so-called basic constituent order differs from one utterance type to another (declarative/interrogative/directive or affirmative/negative), and that typical utterance types differ depending on the person of the subject: declarative with first/third person and interrogative/imperative with second person. Based on these differences, MICRO-TYPOLOGY provides a more fine-grained classification and a broader taxonomy than MACRO-TYPOLOGY.

This paper analyzes specific utterances with first/second/third-person subjects, employed for questions and replies about an addressee’s activity or an object in sight in Saint-Exupéry’s famous French novel *Le Petit Prince* (1946) and its Basque, Chinese, English, German, Japanese, Korean, and Welsh translations. Often composed of comparable morphosyntactic elements across the languages, those utterances form MINIMAL UTTERANCE UNITS. However, the elements exhibit different sequential order and diverse degrees of unity; the languages have conventionalized different sequences as phonologically UNBREAKABLE ELEMENTS. Our analysis showcases how the languages, chosen for the variety of four SVO, three SOV, and one VSO, are alike and differ. Minimal utterance units and their unbreakable elements indicate some commonalities across SVO, SOV, and VSO types and some dissimilarities within each type. The commonalities can suggest a new typology grounded upon the linguistic structure and conceptualization of **utterance-unit** levels.

## 2. Focus of *wh*-questions and answers

First, we consider utterances typically used when a speaker asks what activity the addressee is engaged in. (2F) is an excerpt from Saint-Exupéry (1946), in which the

---

<sup>4</sup> The speech event conception of recent experience report is identifiable as “recency, gist-giving, and intriguing facets” (Izutsu and Koguma 2019: 62). In Japanese and Spanish, all the facets are lexicogrammatically profiled, whereby the two languages compose a class of languages. In contrast, the gist-giving and intriguing facets are, but the recency facet is not activated in English, while only the recency facet is verbalized in Korean. These two languages can form different classes, respectively.

little prince questions a railway switchman, while (2B-E) and (2G-W) are its translations into Basque, Chinese, English, German, Japanese, Korean, and Welsh, respectively. Since the adverb ‘here’ (‘there’ in German) is optional in all the languages, the rest of the reported clause in each example comprises a **minimal utterance unit** in this case.<sup>5</sup> Without regard to the difference in basic constituent order, the *wh*-word ‘what’ directly precedes the verb ‘do’ in Basque, French, German, Japanese, and Korean, while ‘do’ precedes ‘what’ in Chinese. In English and Welsh, ‘what’ directly precedes the auxiliary *do* or *wyt* (2nd-person present of *bod* ‘be’). These sequences of ‘what’ and a verb or auxiliary cannot be reversed; they are unbreakable elements in each utterance unit.

- (2) B. —*Zer egiten ari zara hemen?*—*esan zuen printze txikiak.* (74)<sup>6</sup>  
 what doing:in engage you:be here say he.had prince  
 little:ERG
- C. “*nǐ zài zhèlǐ zuò shénme?*” *xiǎo wángzǐ wèn.* (100)  
 you at here do what little prince ask
- E. ‘*What do you do here?*’ *asked the little prince.* (73)
- F. —*Que fais-tu ici? dit le petit prince.* (78)  
 what do-you here said the little prince
- G. »*Was machst du da?*« *sagte der kleine Prinz.* (58)  
 what make you there said the little prince
- J. “*koko-de nani si-teru-no*”-*to, oozisama-wa tazuneta.* (119)  
 here-at what do-PROG-FN-QUOT prince:POL-TOP asked
- K. “*yeogi-seo mweo-l ha-goisseo?*” *eorin wangja-ga mureosda.* (75)  
 here-at what-ACC do-PROG little prince-NOM asked
- W. “*Beth wyt ti’n ei wneud yma?*” *holodd y tywysog bach.* (74)  
 what be you.in its doing here asked the prince little

In Basque, “*VERB+ari izan*” (*zara* is 2nd-person absolutive present of *izan* ‘be’) serves as a construction that means ‘be engaged in doing.’<sup>7</sup> In English, “auxiliary(AUX)

<sup>5</sup> In Chinese, if *zài zhèlǐ* ‘at this place’ is removed, the clause ends up in: *nǐ zài zuò shénme?*, where *zài+verb* serves as a continuative construction like English progressive.

<sup>6</sup> The parenthesized numbers following each example represent the page on which it is found in the original and translated texts: Saint-Exupéry (1946), Zubizarreta (2011), Zhāng (2010), Cuffe (1995), Leitgeb and Leitgeb (1950), Tanigawa (2006), Jeong (1994), and Dafis (2007). Some Chinese, English, Japanese, and Korean examples refer to other versions of translation: Woods (1943), Naito (1953), Bag (1989), and Zōng (1992). Those examples are indicated with the translator’s initial letter before the page number: e.g., W90 for Woods (1971: 90).

<sup>7</sup> In (2), the prince is more likely interpretable as not asking the railway switchman what he is currently doing but what he is engaged in as a job. In other scenes, where the prince asks other characters (e.g., a drinker) what they are currently doing, he uses *Zerten ari zara?* (‘what:in engaged you:be?’) in Basque, and *What are you doing there?* in English. These languages employ different expressions for an action co-occurring with the speech event and a habitual activity not necessarily co-

+subject pronoun( $\text{PRON}_{\text{SUBJ}}$ )” forms a functional unit, usually concatenated with the preceding ‘what’ in *wh*-questions.<sup>8</sup> In French and German, “ $\text{VERB}+\text{PRON}_{\text{SUBJ}}$ ” forms a functional unit with the preceding ‘what.’<sup>9</sup> In Japanese and Korean, “ $\text{VERB}+\text{AUX}$ ” (*te(i)ru* and *goisseo* are aspectual instances of  $\text{AUX}$ ) does.<sup>10</sup> Welsh shows a unit similar to English, in which ‘what’ is directly followed by the sequence  $\text{AUX}+\text{PRON}_{\text{SUBJ}}$ +preposition ( $\text{PREP}$ ). These morphosyntactic sequences are substantially unbreakable in that they are normally pronounced in a row.

Table 1 summarizes the minimal utterance unit in each language, where unbreakable elements are hyphenated, along with the constituent order of the relevant *wh*-question and so-called canonical order.<sup>11</sup> Basque and Korean more likely subsume ‘what’ (*zer* and *mweo*) within the unbreakable elements because substantially no elements intervene between ‘what’ and  $\text{VERB}$ .<sup>12</sup> In contrast, Japanese allows such an

Table 1: Minimal utterance unit and constituent order in ‘what do you do?’

|          | MINIMAL UTTERANCE UNIT   | CONSTITUENT ORDER   |            |
|----------|--|---------------------|------------|
|          |  | <i>WH</i> -QUESTION | CANONICAL  |
| Basque   | ‘WHAT’- $\text{VERB}(-\text{VERB})-\text{AUX}$   | OV                  | SOV        |
| Chinese  | $\text{PRON}_{\text{SUBJ}}-\text{PREP}(-\text{NOMINAL})-\text{VERB}-\text{‘WHAT’}$                           | SVO                 | SVO        |
| English  | ‘WHAT’- $\text{AUX}-\text{PRON}_{\text{SUBJ}}-\text{VERB}$   | <b>OvSV</b>         | <b>SVO</b> |
| French   | ‘WHAT’- $\text{VERB}-\text{PRON}_{\text{SUBJ}}$ ; ‘WHAT’- $\text{AUX}-\text{PRON}_{\text{SUBJ}}-\text{VERB}$ | <b>OVS; OvSV</b>    | <b>SVO</b> |
| German   | ‘WHAT’- $\text{VERB}-\text{PRON}_{\text{SUBJ}}$  | <b>OVS</b>          | <b>SVO</b> |
| Japanese | ‘WHAT’ $\text{VERB}-\text{AUX}-\text{FP}$  | OVv                 | SOV        |
| Korean   | ‘WHAT’- $\text{VERB}-\text{AUX}(-\text{FP})$   | OVv                 | SOV        |
| Welsh    | ‘WHAT’- $\text{AUX}-\text{PRON}_{\text{SUBJ}}-\text{PREP}-\text{VERB}$                                       | <b>OvSV</b>         | <b>VSO</b> |

occurring with the event.

<sup>8</sup> Halliday and Matthiessen (2004: 113) argue: “Subject and Finite are closely linked together, and combine to form one constituent which we call the Mood.” Our  $\text{AUX}$  is an instance of their “Finite.”

<sup>9</sup> French also has a colloquially more frequent option of complex-auxiliary construction: *wh*-word *est-ce que*. In this case, the *wh*-word forms a similar functional unit with *est-ce que* instead of  $\text{VERB}$ .

<sup>10</sup> In Korean, *mweo-l ha-seyo?* (what-ACC do-POL:FP) or *mweo-l ha-si-neungeo-ji-yo?* (what-ACC do-POL-EVD-FP-FP) is also possible, where the  $\text{PROG}$  marker is not used.

<sup>11</sup> In Table 1 and thereafter,  $V$  and  $v$  represent a verb and auxiliary, respectively. What count as unbreakable elements here are roughly *zer-egiten-ari-zara* ‘what-doing:in-engaged-you:be’ (Basque), *nǐ-zài zuò-shénme* ‘you-at doing-what’ (Chinese), *what-do-you (do)/que-fais-tu/was-machst-du* ‘what-do-you’ (English/French/German), *nani si-teru-no* ‘what doing-are-you’ (Japanese), *mweo-l-ha-goisseo* ‘what-doing-are (Korean),’ and *beth-wyt-ti’n* ‘what-are-you’in (Welsh). In Japanese, the final particle *-no* is glossed as “you” because it can mark the 2nd-person uncoded subject in *wh*-questions (Izutsu and Kim 2018: 48).

<sup>12</sup> In Korean, for example, other elements like *neo* ‘you’ can hardly intervene between ‘what’ and the verb *hada* ‘do’: *neo mweo ha-neun geo-ya?* (you what do-ADN FN-FP) ‘What are you doing?’; *??mweo neo ha-neun geo-ya?*; *?mweo-l neo-n ha-neun geo-ya?* (what-ACC you-TOP do-AND FN-FP) (Izutsu et al. 2021: 4).

intervention (e.g., *nani koko-de si-teru-no*).<sup>13</sup>

Table 1 shows that the question about the addressee's engagement necessarily verbalizes the 'what-VERB' sequence in Basque, French, German, and Korean, the 'what-AUX' sequence in English, French, and Welsh, the 'VERB-what' sequence in Chinese, and the 'VERB-AUX' in Japanese and Korean. Each group forms a discourse-pragmatic type of language: the 'what'-VERB, 'what'-AUX, and VERB-'what' types along with the VERB-AUX type. Notice that the VERB-'what' type necessitates the VO order in *wh*-questions, while the other types can be viewed as requiring the OV order in *wh*-questions. The latter can be viewed as languages that put the focus of *wh*-question ('what') before the VERB.

Next, we turn to expressions used as answers to the prince's question in (2). (3B-W) are the sentences that follow (2B-W) in Saint-Exupéry (1946) and its published translations. The boldface highlights the VERB and a nominal that collectively compose the relevant answers.

- (3) B. —***Bidaiariak milakako multzotan sailkatzen ditut***—  
 travelers by:the:thousands in.a.bunch classifying:in I.have.them  
*esan zuen orratzzainak* —. (74)  
 say he.had pointsman:ERG
- C. “*wǒ zài fēnpèi lǚkè, měi cì yīqiān rén,*” *bāndào*  
 I PROG divide passenger every time a:thousand person switch  
*gōng shuō*. (100)  
 worker say
- E. “*I sort the passengers into bundles of one thousand,*” *said the pointsman.*  
 (73)
- F. —***Je trie les voyageurs, par paquets de mille, dit***  
 I sort the passengers by packets of thousand said  
*l'aiguilleur*. (78)  
 the'pointsman
- G. »***Ich sortiere die Reisenden nach Tausenderpaketen***«, *sagte der*  
 I sort the passengers after thousands:packets said the  
*Weichensteller*. (58)  
 pointsman
- J. “***senro-o, kirikae-teiru-nda-yo. zyookyaku sennin-bun matome-te,***  
 rail-ACC switch-PROG-EVD-FP passenger thousand-amount sum.up-and  
*kisya-ga iku-hookoo-ni-ne.*”-to, *pointogakari-ga kotaeta*. (119)<sup>14</sup>  
 train-NOM go-direction-to-FP-QUOT pointsman-NOM answered

<sup>13</sup> Similarly, *What here are you doing?* can also be tolerated. In contrast, *Qu'ici fais-tu?* and *Was da machst du?* seem more or less difficult.

<sup>14</sup> Naito (2000: 117) translates the reported clause in (3F) into Japanese as follows. Here again, the VERB and the object nominal follow the canonical order of the language (OV), as indicated in boldface.

- K. “*han ggureomi-e cheonyeo myeongssig dwe-neun gicha*  
 one pack-to thousand.or.so person.each become-ADN train  
*sonnimdeul-eul ggureomibyeollo garyeonaе-goisseo*. [...]”  
 passengers-ACC pack.by.pack sort-PROG  
*jeoncheolsu-ga malhaessda*. (75)  
 pointsman-NOM said
- W. “*Rwy’n dosbarthu’r teithwyr yn fwndeli o fil,*” *meddai*  
 be:I’in distribute’the passengers in bundles of thousand said  
*dyn y rheilffordd*.  
 man the railway (74)

Table 2 summarizes the minimal utterance unit with unbreakable elements in each example alongside the answer’s and the canonical constituent order.<sup>15</sup> In every language, the relevant constituents follow the canonical order: SVO (Chinese/English/French/German), VSO (Welsh), and OV (Basque/Japanese/Korean).<sup>16</sup> This stands in clear contrast with the case seen in (2).

Table 2: Minimal utterance unit and constituent order in ‘I sort passengers’

|          | MINIMAL UTTERANCE UNIT                                     | CONSTITUENT ORDER |           |
|----------|--|-------------------|-----------|
|          |  | ANSWER            | CANONICAL |
| Basque   | NOMINAL <sub>OBJ</sub> VERB-AUX                            | OV <sub>v</sub>   | SOV       |
| Chinese  | PRON <sub>SUBJ</sub> -PREP-VERB NOMINAL <sub>OBJ</sub>     | SVO               | SVO       |
| English  | PRON <sub>SUBJ</sub> -VERB NOMINAL <sub>OBJ</sub>          | SVO               | SVO       |
| French   | PRON <sub>SUBJ</sub> -VERB NOMINAL <sub>OBJ</sub>          | SVO               | SVO       |
| German   | PRON <sub>SUBJ</sub> -VERB NOMINAL <sub>OBJ</sub>          | SVO               | SVO       |
| Japanese | NOMINAL <sub>OBJ</sub> VERB-AUX-FP                         | OV <sub>v</sub>   | SOV       |
| Korean   | NOMINAL <sub>OBJ</sub> VERB-AUX(-FP)                       | OV <sub>v</sub>   | SOV       |
| Welsh    | AUX-PRON <sub>SUBJ</sub> -PREP-VERB NOMINAL <sub>OBJ</sub> | vSVO              | VSO       |

It should be noted here that English, French, German, and Welsh do not place the focus of answer before VERB, unlike in *wh*-question. In contrast, Basque, Japanese, and Korean consistently put the focus before VERB in both *wh*-question and answer

- (i) “*ryokaku-o, sennin-zutu nimotu-ni-si-te, eriwake-teru-nda-yo*. [...]”  
 passenger-ACC thousand:person-each package-to-do-and sort-PROG-EVD-FP

<sup>15</sup> The unbreakable elements largely correspond to *sailkatzen-ditut* ‘sort-I.have.them’ in Basque; *wō-zài-fēnpèi (lǔkè)* ‘I-am-sorting (passenger)’ in Chinese; *I-sort (the-passengers)/Je-trie (les-voyageurs)/Ich-sortiere (die-Reisenden)* ‘I-sort (the-passengers)’ in English/French/German; *kirikae-teiru-ndayo* ‘switching-am-I.say’ and *garyeonaе-goisseo* ‘sorting-am’ in Japanese and Korean; *rwy’n-dosbarthu’r (teithwyr)* ‘am-I-in-sorting’the (passengers) in Welsh.’

<sup>16</sup> Here Welsh assumes, as it were, a hybrid order, vSVO, which could be viewed as either VSO (if the auxiliary is viewed as a VERB) or SVO (if it is viewed as differing from VERB). We will tentatively take the first view for the present analysis.

utterances, and Chinese invariably positions the focus after VERB.

This can be confirmed in another scene, where a merchant talks about the pills he sells, ‘If you swallow one each week, you no longer feel you need to drink, and you can save fifty-three minutes every week.’ The prince asks, ‘What do I[you] do with those fifty-three minutes?’, and the sentences in (4) show the merchant’s answer in each language. The sequence of the verb ‘do’ and the focus of answer (‘(one’s) want’ in Basque; ‘what’ in Chinese; *whatever you like* in English; ‘what one wants’ in French/German; ‘what (you) want to do’ in Japanese and Korean; ‘anything as you like to’ in Welsh) follows the canonical order of each language. The positioning of the answer focus is consistent with that of the *wh*-question focus in Basque, Chinese, Japanese, and Korean but are not in the four other languages.

- (4) B. —*nahi dena egin daiteke...* (76)  
 want all do he.can
- C. “*suibiàn zuò shénme dōu xíng.*” (102)/“*ài zuò shénme jiù zuò*  
 no.matter do what all be.OK love do what then do  
*shénme...*” (Z108)  
 what
- E. ‘*You do whatever you like...*’ (75)/ “*Anything you like...*” (W90)
- F. —*On en fait ce que l’on veut...* » (80)  
 one of.which makes that which the’one wants
- G. »*Man macht damit, was man will...*« (75)  
 one makes that:with what one wants
- J. “*si-tai-koto-o suru-no-sa...*” (N121)/“*nandemo*  
 do-want.to-thing-ACC do-FP-FP whatever  
*osukina-koto-o...*” (122)  
 POL:like-thing-ACC
- K. “*ha-gosip-eun geo-l ha-ji...* (77)  
 do-want.to-ADN thing-ACC do-FP
- W. “*Gall wneud beth a fynno...*” (76)  
 can do what whether ever

### 3. Focus of negation and affirmation

We first examine utterances usually used when one speaker asks another about the **identity** of something in their sight and this second speaker answers the question. (5F) is another excerpt from Saint-Exupéry (1946), in which the little prince asks the first-person narrator. (5B-E) and (5G-W) are Basque, Chinese, English, German, Japanese, Korean, and Welsh translations of (5F), respectively. The focus of *wh*-question ‘what’ immediately precedes the copula verb/auxiliary (COP) in Basque (*zer da*), English (*what is*), French (*qu’est-ce que*), German (*was ist*), Korean (*mweo-ya*), and Welsh (*beth yw*)

and follows it in Chinese (*shì shénme dōngxī*). These phrases form unbreakable elements in the minimal utterance unit found in the first line of each example. In Japanese, the relevant translation is a verbless predicate (*naani*).

- (5) B. —*Zer da gauza hori?* (15)  
 what is thing this  
 —*Ez da gauza bat. Hegan egiten du. Hegazkin bat da. Ene*  
 not is thing a flying do it.have.he airplane a is my  
*hegazkina da.*  
 airplane is
- C. “*nà shì shénme dōngxī?*” (31)  
 that be what thing  
 “*nà bùshì dōngxī. tā huì fēi, shì yī jià fēijī, wǒ de fēijī.*”  
 that not:be thing it can fly be one CL airplane I of airplane
- E. ‘*What is that thing over there?*’ (12)  
 ‘*That is not a thing. It flies. It’s an aeroplane. It’s my aeroplane.*’
- F. «*Qu’est-ce que c’est que cette chose-là?* (19)  
 What’is-that that that’is that that thing-there  
 —*Ce n’est pas une chose. Ça vole. C’est un avion. C’est mon*  
 that not’is not a thing that fly that’s a airplane that’s my  
*avion.* »  
 airplane
- G. »*Was ist das für ein Ding da?*« (13)  
 what is that for a thing there  
 »*Das ist kein Ding. Das fliegt. Das ist ein Flugzeug. Es ist mein*  
 that is no thing that flies that is a airplane it is my  
*Flugzeug.*«  
 airplane
- J. “*sore, naani? sono sinamono?*” (N17)<sup>17</sup>  
 that what that thing  
 “*sinamono-zyanai-yo. kore, tobu-nda. hikooki-na-nda. boku-no*  
 thing-be:TOP:NOT-FP this fly-EVD airplane-be-EVD I- GEN  
*hikooki-na-nda.*”  
 airplane-be-EVD

<sup>17</sup> Another version of Japanese translation (Tanigawa 2006: 20) renders the same part as follows:

(i) “*kono henna-no naani?*”  
 this strange-NMLZ what  
 “*henna-no-zyanai-yo. kore-wa tobu-mono-de hikooki-tte iu-nda. boku-no*  
 strange-thing-be:TOP:NOT-FP this-GEN fly-thing-be airplane-QUOTE say-EVD I-GEN  
*hikooki-da.*”  
 airplane-be

- K “*i mulgeon-i mweo-ya?*” (B18)  
 this thing-NOM what-be  
 “*geugeo-n mulgeon-i aniya. geugeo-n naladani-neun geo-ya. nae*  
 that-TOP thing-NOM not:be that-TOP fly.go-ADN thing-be my  
*bihaenggi-ya.*”<sup>18</sup>  
 airplane-be
- W. “*Beth yw’r peth yma?*” (15)  
 what is’the thing here  
 “*Nid peth yw hi. Mae honna’n hedfan. Awyren yw hi. Fy*  
 not thing is she is this’in fly airplane is she my  
*awyren i.*”  
 airplane I

In Japanese, Korean, and Welsh, the focus of answer (affirmation or negation) as well as of *wh*-question immediately precedes the copula (*hikooki-na-nda*; *nae bihaenggi-ya*; *awyren yw hi*). In Chinese, English, French, and German, unlike the focus of *wh*-question, the focus of answer immediately follows the copula (*shì yī jià fēijī*; *’s an aeroplane*; *est un avion*; *ist ein Flugzeug*). In Basque, the focus immediately precedes the copula in the affirmative answer along with the *wh*-question focus but follows the copula in the negative answer (*hegazkin bat da* but *ez da gauza bat*).

Table 3 outlines the minimal utterance units with unbreakable elements in the affirmative and negative answers to the identity *wh*-question.<sup>19</sup> Here the relevant constituents are the copula (v) and a focal element. Note that the focal elements (‘what’/FOC<sub>AFF</sub>/FOC<sub>NEG</sub>) are objects (O) in (2) through (4) but complements (C) in (5). The order of the copula and the focal element is consistent across *wh*-questions and answers in Chinese, Japanese, Korean, and Welsh, while a marked order is found in Basque negative answers (vC) and in French, English, and German *wh*-questions (C(v) V). Of a further notice is the order of negation marker (NEG) and V/v. The marker precedes the copula in Basque, Chinese, Korean, and Welsh (NEG-COP) and follows it in the other languages (COP-NEG). In French, NEG can occur both before and after COP.

<sup>18</sup> Another version of Korean translation (Jeon 1994: 14) renders the same part as follows:

(i) “*geugeo-n mulgeon-i aniya geugeo-n naradani-neun geo-ya. bihaenggi-ji, nae*  
 that-TOP thing-NOM not:be that-TOP fly:go-ADN thing-be airplane-FP my  
*bihaenggi-ya.*”  
 airplane-be

<sup>19</sup> The unbreakable elements of the negative answers to the identity question are *ez-da (gauza-bat)* ‘not-is (thing-a)’ in Basque, *bùshì (dōngxī)* ‘not:is (thing)’ in Chinese, *that[it]-is-not (a-thing)* in English, *ce-n’est-pas (une-chose)* ‘that-not’is-at.all (a-thing)’ in French, *das-ist (kein-Ding)* ‘that-is (no-thing)’ in German, *(sinamono-)zyanai-yo* ‘(goods-)is:TOP:not-I.say’ in Japanese, *(mulgeon-i)-aniya* ‘(thing-NOM-)not:is’ in Korean, and *nid-peth-yw-hi* ‘not-thing-is-she’ in Welsh.

Table 3: Minimal utterance unit and constituent order in ‘what’s that/it’s (not) a thing[airplane].’

|          | MINIMAL UTTERANCE UNIT  | CONSTITUENT ORDER |             |          |
|----------|---|-------------------|-------------|----------|
|          |   | WH-QUESTION       | AFFIRMATIVE | NEGATIVE |
| Basque   | NEG-COP <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> ; <b>FOC</b> <sub>AFF</sub> COP   | Cv                | Cv          | vC       |
| Chinese  | NEG-COP <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> ; COP <b>FOC</b> <sub>AFF</sub>   | VC                | VC          | VC       |
| English  | PRON <sub>SUBJ</sub> -COP-NEG <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> ; PRON <sub>SUBJ</sub> -COP <b>FOC</b> <sub>AFF</sub>       | CvV               | vC          | vC       |
| French   | PRON <sub>SUBJ</sub> (-NEG)-COP-NEG <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> ; PRON <sub>SUBJ</sub> -COP <b>FOC</b> <sub>AFF</sub> | Cv                | vC          | vC       |
| German   | PRON <sub>SUBJ</sub> -COP-NEG- <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> ; PRON <sub>SUBJ</sub> -COP <b>FOC</b> <sub>AFF</sub>      | Cv                | vC          | vC       |
| Japanese | <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> -COP-TOP-NEG-FP; <b>FOC</b> <sub>AFF</sub> -COP-FP  | C(v)              | Cv          | Cv       |
| Korean   | <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> -NOM-NEG-COP(-FP); <b>FOC</b> <sub>AFF</sub> -COP(-FP)                                    | Cv                | Cv          | Cv       |
| Welsh    | NEG- <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> COP-PRON <sub>SUBJ</sub> ; <b>FOC</b> <sub>AFF</sub> COP-PRON <sub>SUBJ</sub>        | Cv                | Cv          | Cv       |

In answers, the order of the copula and a focal element is consistent across affirmative and negative answers in Chinese/English/French/German (COP-FOC) and Japanese/Korean/Basque (FOC-COP).<sup>20</sup> In Basque, the order is reversed between the two types of answers.

Finally, we consider utterances used for denying or refusing something one speaker is given by another. (6) is a further excerpt from Saint-Exupéry (1946) and its translation into the seven languages. In this scene, the little prince is refusing a drawing of an elephant inside of a boa that the 1st-person narrator has just made for him.<sup>21</sup> The significant difference from the negative answers in (5) is that the focus of negation falls upon an object instead of a complement.

- (6) B. “—*Ez! Ez! Nik ez dut elefanterik nahi boa baten*  
no no I.ERG not it.have.I elephant:PART want boa one:GEN  
*barnean. [...]*” (14)  
within
- C. “*bùduì! bùduì! wǒ bùyào dà mǎngshé dùzi lí de dà*  
not:be.so not:be.so I not:want big python belly inside of big  
*xiàng. [...]*” (31)  
elephant
- E. ‘*No! no! no! I don’t want an elephant inside a boa constrictor. [...]*’ (10)

<sup>20</sup> The unbreakable elements are *hegazkin-bat-da* ‘airplane-a-is’ in Basque; *shì-yī-jìà-fēijī* ‘is-one-item.of-airplane’ in Chinese; *It’s an-aeroplane/C’est un-avion* ‘that’is an-airplane’/Das-ist ein-Flugzeug ‘that-is an-airplane’ in English/French/German; *hikooki-na-nda* ‘airplane-is-I.say’ in Japanese; *bihaenggi-ya* ‘airplane-is’ in Korean; *awyren-yw-hi* ‘airplane-is-she’ in Welsh.

<sup>21</sup> The Korean example in (6K) adopts a lexical negation (‘hate’ < ‘not like’) rather than a grammatical negation, but the Korean negation marker *an(i)* normally precedes verbs and copulas. Although the negation marker *anhda* follows verbs, it derives from *ani* + *hada* ‘do.’

- F. «*Non! Non! Je ne veux pas d'un éléphant dans un boa. [...]*» (18)  
 no no I not want at.all of'a elephant in a boa
- G. »*Nein! Nein! Ich will keinen Elefanten in einer Riesenschlange. [...]*« (11–12)  
 no no I want no elephant in a large.snake
- J. “*tigau, tigau-yo! boa-ni nomikomareta-zoo-nante*  
 differ differ-FP boa-by was.swallowed-elephant-TOP  
*ira-nai-yo. [...]*” (17)<sup>22</sup>  
 need-not-FP
- K. “*anya, anya, boa gureongi sog-eui koggiri-neun silheo. [...]*” (12)  
 not:be not:be boa snake inside-GEN elephant-TOP hate
- W. “*Na, na! Dwyf i ddim eisiau eliffant mewn neidr boa. [...]*” (14)  
 no no am I not want elephant in snake boa

As with the negative answers in (5), the negation marker precedes the verbal (VERB/AUX/COP) in Basque (NEG-AUX(...)-VERB) and Chinese/Korean (NEG-VERB), follows it in English (AUX-NEG) and German/Japanese (VERB-NEG; AUX-NEG), and occurs both before and after VERB in French (NEG-VERB-NEG<sub>ADV</sub>).<sup>23</sup> In Welsh, the negation marker follows the auxiliary and precedes the full verb (NEG-VERB), as in (6W), but precedes the copula (COP), as in (5W).

Table 4 sketches the minimal utterance units with unbreakable elements of the negative utterances in (6).<sup>24</sup> Here the relevant constituents are the verb ‘want/need’ and the focus of negation (the object ‘elephant’). A comparison of (5) and (6) reveals that the order of the verbal (VERB/AUX/COP) and the focus of negation (FOC<sub>NEG</sub>) are consistent across the utterances with O and with C in Basque/Chinese/English/French/German/Japanese/Korean. In Welsh, the order of the verbal and the focus of negation in the utterances with O (vSVO) differs from their order in the utterances with C (Cv). In Basque, the order of the verbal and the focus of negation with either O or C (vOV and

<sup>22</sup> Naito (2000: 14) renders the same part as follows:

(i) “*tigau, tigau! boku uwabami-ni nomareteru-zoo-nanka iyada-yo. [...]*” (N14)  
 differ differ I python-by have.been.swallowed-elephant-TOP hate-FP

<sup>23</sup> NEG<sub>ADV</sub> stands for the negative adverb in French, which typically exemplifies itself in *pas* ‘at all,’ *rien* ‘anything/nothing,’ *jamais* ‘ever/never,’ and so forth.

<sup>24</sup> The minimal utterance units with unbreakable elements hyphenated are: *ez-dut elefanterik-nahi* ‘not-have elephant:any-want,’ *wō-bùyào (dà-mǎngshé-dūzi-lǐ-de) dà-xiàng* ‘I-not:want (big-python-belly-inside-of) big-elephant,’ *I-don’t-want an-elephant*, *Je-ne-veux-pas d’un-éléphant* ‘I-not-want-at.all any’one-elephant,’ *ich-will keinen-Elefanten* ‘I-want no-elephant,’ *zoo-nante ira-nai-yo* ‘elephant-like want-not-I.say,’ *koggiri-neun silheo* ‘elephant-any hate,’ and *dwyf-i-ddim-eisiau eliffant* ‘am-I-not-want elephant.’ In Basque and Welsh, the auxiliary (AUX) used with content verbs like *nahi* and *eisiau* in (6) largely coincides with the copula.

vC) differs from the canonical order (OV).<sup>25</sup>

Table 4: Minimal utterance unit and constituent order in ‘I don’t want an elephant.’

|          | MINIMAL UTTERANCE UNIT  | CONSTITUENT ORDER |           |                 |
|----------|---|-------------------|-----------|-----------------|
|          |   | NEGATIVE WITH O   | CANONICAL | NEGATIVE WITH C |
| Basque   | NEG-AUX <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> -VERB                                     | vOV               | SOV       | vC              |
| Chinese  | PRON <sub>SUBJ</sub> -NEG-VERB <b>FOC</b> <sub>NEG</sub>                    | SVO               | SVO       | VC              |
| English  | PRON <sub>SUBJ</sub> -AUX-NEG-VERB <b>FOC</b> <sub>NEG</sub>                | SvVO              | SVO       | vC              |
| French   | PRON <sub>SUBJ</sub> -NEG-VERB-NEG <sub>ADV</sub> <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> | SvVO              | SVO       | vC              |
| German   | PRON <sub>SUBJ</sub> -VERB(-NEG) <b>FOC</b> <sub>NEG</sub>                  | SVO               | SVO       | vC              |
| Japanese | <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> -TOP VERB(-NEG)-FP                                | O[C]V             | SOV       | Cv              |
| Korean   | <b>FOC</b> <sub>NEG</sub> -TOP (NEG-)VERB(-FP)                              | O[C]V             | SOV       | Cv              |
| Welsh    | AUX-PRON <sub>SUBJ</sub> -NEG-VERB <b>FOC</b> <sub>NEG</sub>                | vSVO              | VSO       | Cv              |

#### 4. Macro- and micro-typology

The description above reveals that the eight languages have minimal utterance units shown in Table 5 available for asking about the addressee’s engagement (‘What do[are] you do(ing)?’) or the identity of something in the speaker and the addressee’s sight (‘What is this?’), answering those questions (‘I sort the passengers.’; ‘You[I] do whatever you[I] like.’; ‘It is not a thing.’; ‘It is an airplane.’), and refusing something the speaker is given by the addressee (‘I don’t want an elephant.’).<sup>26</sup> The morphosyntactic sequences of the units are schematically represented using English glosses with their unbreakable elements being hyphenated as ‘what-doing-are.’

<sup>25</sup> However, if vOV is seen in terms of V rather than v, it follows the canonical order.

<sup>26</sup> The capitals B, C, E, F, G, J, K, and W in the tables below represent the initial letter of each language.

Table 5: Morphosyntactic sequences of minimal utterance units for certain pragmatic functions

| PRAGMATIC FUNCTION   | MINIMAL UTTERANCE UNIT       | B | C | E | F | G | J | K | W |
|--|------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Asking about the addressee's engagement: 'What do[are] you do(ing)?' (2)             | 'what(-)doing-are'           | ○ |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
|  | 'what-are[do]-you do(ing)'   |   |   | ○ |   |   |   |   | ○ |
|  | 'you-are doing-what'         |   | ○ |   |   |   |   |   |   |
|  | 'what-do-you'                |   |   |   | ○ | ○ |   |   |   |
| Answering a question: 'I sort the passengers.' (3)                                   | 'passenger sorting-am'       | ○ |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
|  | 'I-am-sorting passenger'     |   | ○ | ○ |   |   |   |   |   |
|  | 'am-I-sorting passenger'     |   |   |   |   |   |   |   | ○ |
|  | 'I-sort passenger'           |   |   |   | ○ | ○ |   |   |   |
| Answering a question: 'You[I] do whatever you[I] like.' (4)                          | 'whatever do'                | ○ |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
|  | 'do whatever'                |   | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   | ○ |
| Asking about the identity of something in sight: 'What is this?' (5a)                | 'what-is-this?'              | ○ |   | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
|  | 'this-what-is?'              |   |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
|  | 'this-is-what?'              |   | ○ |   |   |   |   |   |   |
| Answering a question: 'It is not a thing.' (5b)                                      | 'not-is thing'               | ○ |   |   |   |   |   |   |   |
|  | 'it-is(-)not(-)thing'        |   | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   |
|  | 'thing-is-not'               |   |   |   |   |   | ○ |   |   |
|  | 'thing-not-is'               |   |   |   |   |   |   | ○ |   |
|  | 'not-thing is-it'            |   |   |   |   |   |   |   | ○ |
| Answering a question: 'It is an airplane.' (5c)                                      | 'airplane(-)is'              | ○ |   |   |   |   | ○ | ○ | ○ |
|  | 'it-is(-)airplane'           |   | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   |
| Refusing what the speaker is given by the addressee: 'I don't want an elephant.' (6) | 'not-am elephant-want'       | ○ |   |   |   |   |   |   |   |
|  | 'I-not-want elephant'        |   | ○ |   | ○ |   |   |   |   |
|  | 'I-do[am]-not-want elephant' |   |   | ○ |   |   |   |   |   |
|  | 'I-want-not elephant'        |   |   |   | ○ | ○ |   |   |   |
|  | 'elephant want-not'          |   |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
|  | 'am-I-not-want elephant'     |   |   |   |   |   |   |   | ○ |

Table 6 shows the number of morphosyntactic sequences shared by each pair of the eight languages. It tells us that, as far as the relevant utterance units are concerned, Basque is the closest to Japanese/Korean, while Chinese is the closest primarily to English and secondarily to French/German. Furthermore, Basque does not share any utterance units with Chinese, which in turn, shares no utterance units with Japanese and Korean. These findings match the traditional view of linguistic typology based upon the distinction between SOV and SVO languages.

Table 6 also reveals that Welsh is the closest to English and more or less similar to the other six languages. Notice that it shares at least one utterance unit, two on average, with each other language. This fact is usually not taken into account in the

Table 6: Interlingually shared morphosyntactic sequences

|   | B | C | E | F | G | J | K | W |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| B |   | 0 | 1 | 1 | 1 | 5 | 5 | 2 |
| C | 0 |   | 4 | 3 | 3 | 0 | 0 | 1 |
| E | 1 | 4 |   | 4 | 4 | 1 | 1 | 3 |
| F | 1 | 3 | 4 |   | 7 | 1 | 1 | 2 |
| G | 1 | 3 | 4 | 7 |   | 1 | 1 | 2 |
| J | 5 | 0 | 1 | 1 | 1 |   | 7 | 2 |
| K | 5 | 0 | 1 | 1 | 1 | 7 |   | 2 |
| W | 2 | 1 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 |   |

macro-typological categorization of languages. Rather it suggests many more possibilities of grouping languages into more fine-grained types, which constitutes a micro-typological point of view on languages.

First of all, the morphosyntactic variations found in utterances (4), (5a), and (5c) are comparatively small. (4) and (5c) have only two variations: ‘whatever do’ or ‘do whatever’; ‘airplane-is’ or ‘is-airplane.’ (5a) finds three variations, but the essential distinction is two-fold: ‘what-is?’ ‘is-what?’. Biases for such bi- or tri-partite differences are very likely to develop classification into only a few types, which has presumably been responsible for traditional versions of linguistic typology (or macro-typology) represented by categorizations between SVO/SOV(/VSO) languages. Remember that OSV or VOS languages are almost always out of mainstream discussions on basic constituent order.

In contrast, utterances (2), (3), (5b), and (6) exhibit fairly larger numbers of variation in morphosyntactic sequences. The first two utterances give four variations: ‘what-doing-are,’ ‘what-are[do]-you-do(ing),’ ‘you-are doing-what,’ and ‘what-do-you’ in (2); ‘passenger sorting-am,’ ‘I-am-sorting passenger,’ ‘am-I-sorting passenger,’ and ‘I-sort passenger’ in (3). In (5b), five variations are found (‘not-is-thing,’ ‘it-is-not-thing,’ ‘thing-is-not,’ ‘thing-not-is,’ and ‘not-thing-is-it’), while in (6), six variations are attested (‘not-am elephant-want,’ ‘I-not-want elephant,’ ‘I-[do]am-not-want elephant,’ ‘want-not elephant,’ ‘elephant want-not,’ and ‘am-I-not-want elephant’). Such multiple variations alert us to the potential oversimplification of categorizing languages into a few types and thus encourage us to appreciate the importance of grouping languages into more fine-grained, multiple types, as illustrated in Table 7.

A cursory look at Table 7 shows that the grouping of BJK and CEFG as well as JK and FG are robust, and, at the same time, that B, E, C, J, K, and W can occasionally stand alone, namely be grouped with no other languages. The CE and CF groupings can be as interesting as the EW, FG, and JK groupings since areal affinity often noticed for the latter does not apply to the former.

discussion of SOV/SVO languages, because VSO languages are treated as a distinct category. If one VSO language (e.g., Welsh) shares a larger number of utterance units with certain SOV (e.g., Japanese/Korean) as well as SVO languages (e.g., French/German) than with certain SVO languages (e.g., Chinese), it cannot be reduced to a matter of distinction between the two fixed categories of SVO and SOV languages. The number of shared utterance units does not necessarily contribute to such a

A closer look at the ordering of ‘not’ and ‘is’ further suggests the BK grouping, as in Table 8. This microscopic view implies that Korean can share more morphosyntactic sequences of utterance units with Basque than Japanese does. Welsh differs from both the BK and CEFJG groups, but it can be seen as closer to the BK group in that ‘not’ precedes rather than follows ‘is.’ If we abstract away from the intervention of ‘thing,’ there emerges the BKW grouping.

Table 7: Viable grouping of the eight languages

| UTTERANCE TYPE | VIABLE GROUPING     |
|----------------|---------------------|
| (2)            | BJK; EW; C; FG      |
| (3)            | BJK; CE; W; FG      |
| (4)            | BJK; CEFGW          |
| (5a)           | BJKEFGW; (JK); C    |
| (5b)           | B; CEFJG; J; K; W   |
| (5c)           | BJKW; CEFJG         |
| (6)            | B; CF; E; FG; JK; W |

As illustrated so far, micro-typology, based on grouping languages in reference to shared utterance structures, can elucidate diverse similarities as well as differences found among languages, which have seldom received sufficient attention in macro-typology, grounded on canonical constituent order. Language studies have benefitted a lot from higher-level abstraction of morphosyntactic structure, phonological structure, and conceptual structure. However, such abstraction might have de-emphasized important procedures of collecting and assorting far more interesting commonalities and diversities found among the world’s languages. Micro-typological approaches to languages can encourage such rudimentary but eventually fruitful procedures in language studies.

Table 8: Local structure of utterance (5b)

|                           |                | B | C | E | F | G | J | K | W |
|---------------------------|----------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ‘It is not a thing.’ (5b) | ‘not-is’       | ○ |   |   |   |   |   | ○ |   |
|                           | ‘is(-)not’     |   | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |
|                           | ‘not-thing-is’ |   |   |   |   |   |   |   | ○ |

As illustrated so far, micro-typology, based on grouping languages in reference to shared utterance structures, can elucidate diverse similarities as well as differences found among languages, which have seldom received sufficient attention in macro-typology, grounded on canonical constituent order. Language studies have benefitted a lot from higher-level abstraction of morphosyntactic structure, phonological structure, and conceptual structure. However, such abstraction might have de-emphasized important procedures of collecting and assorting far more interesting commonalities and diversities found among the world’s languages. Micro-typological approaches to languages can encourage such rudimentary but eventually fruitful procedures in language studies.

## 5. Unbreakable elements as functional counterparts

A micro-typological approach to languages, focusing on minimal utterance units and their unbreakable elements, can have further implications on crosslinguistic studies. Such units or elements largely correspond to “prepatterned, prefabricated aspects of speech” (Hopper 1998: 167).<sup>27</sup> More importantly, unbreakable elements often coincide with functional counterparts between different languages.

<sup>27</sup> Insofar as trying to speak rather than write target languages, learners do not have to build basic utterance units from scratch. They may concentrate on mastering some frequently used parts (unbreakable elements) of the units and putting them together to shape utterances for their intents.

The minimal utterance units for asking the addressee’s engagement like (2), for instance, consist of the predicate for the **event questioned** and the **focus** of the question. As Table 9 shows, the focus precedes the predicate, as in (2B, E-W) and note 12 (n12K), or else the predicate precedes the focus, as in (2C). This contrast indicates a possible grouping of focus-first and predicate-first types of languages. The predicate can be in either a simple form, as in (2E-G) and (n12K), or a continuative form, as in (2B-E, J-K, W). This cross-cutting difference implies a possible grouping into simple-verb and continuative-verb types of languages.

Table 9: Utterance unit structure of *wh*-question about addressee’s engagement

|        | FOCUS       | EVENT QUESTIONED             | FOCUS         |   | VERB FORM           |
|--------|-------------|------------------------------|---------------|---|---------------------|
| (2B)   | <i>Zer</i>  | <i>egiten ari zara</i>       |               | ? | continuative        |
| (2C)   |             | <i>nǐ zài zuò</i>            | <i>shénme</i> | ? | continuative        |
| (2E)   | <i>What</i> | <i>do[are] you do(doing)</i> |               | ? | simple/continuative |
| (2F)   | <i>Que</i>  | <i>fais-tu</i>               |               | ? | simple              |
| (2G)   | <i>Was</i>  | <i>machst du</i>             |               | ? | simple              |
| (2J)   | <i>nani</i> | <i>si-teru-no</i>            |               | ? | continuative        |
| (2K)   | <i>mweo</i> | <i>ha-goisseo</i>            |               | ? | continuative        |
| (n12K) | <i>mweo</i> | <i>ha-neun geo-ya</i>        |               | ? | simple              |
| (2W)   | <i>Beth</i> | <i>wyt ti’n ei wneud</i>     |               | ? | continuative        |

This internal structure of utterance unit encourages us to view focus and predicate, respectively, as functional counterparts. However, they are not necessarily morphosyntactic counterparts; e.g., *si-teru-no* or *ha-goisseo* is ‘doing-are(-you),’ not ‘(you)-are-doing’; *egiten ari zara* is ‘doing-in-you.are’; *wyt ti’n ei wneud* is ‘are-you-in-its-doing.’

Table 10: Utterance unit structure of *wh*-question about addressee’s engagement (alternative)

|        | FOCUS                      | EVENT QUESTIONED  |   |
|--------|----------------------------|-------------------|---|
| (2B)   | <i>Zer egiten ari zara</i> |                   | ? |
| (2E)   | <i>What do[are] you</i>    | <i>do(doing)</i>  | ? |
| (0F)   | <i>Qu’est-ce que</i>       | <i>tu fais</i>    | ? |
| (2F)   | <i>Que fais-tu</i>         |                   | ? |
| (2G)   | <i>Was machst du</i>       |                   | ? |
| (2J)   | <i>nani</i>                | <i>si-teru-no</i> | ? |
| (2K)   | <i>mweo ha-goisseo</i>     |                   | ? |
| (n12K) | <i>mweo ha-neun geo-ya</i> |                   | ? |
| (2W)   | <i>Beth wyt ti’n</i>       | <i>ei wneud</i>   | ? |

<sup>28</sup> (0F) and (0J) in Tables 10 and 11 are a French and Japanese example not given in the discussion so far.

As pointed out in Table 1, certain strings form unbreakable elements and thus exhibit slightly different phonological groupings of focus or event questioned, as in Table 10.<sup>28</sup> In view of this, too, each language’s functional counterpart is far from a morphosyntactic counterpart.

Table 11: Utterance unit structure of identity question

|      | FOCUS                | THING QUESTIONED   | FOCUS                |   |
|------|----------------------|--------------------|----------------------|---|
| (5B) | <i>Zer da</i>        | <i>gauza hori</i>  |                      | ? |
| (5C) |                      | <i>nà shì</i>      | <i>shénme dōngxī</i> | ? |
| (5E) | <i>What is</i>       | <i>that thing</i>  |                      | ? |
| (5F) | <i>Qu'est-ce que</i> | <i>c'est</i>       |                      | ? |
| (5G) | <i>Was ist</i>       | <i>das</i>         |                      | ? |
| (0J) | <i>na(a)ni</i>       | <i>sore</i>        |                      | ? |
| (5J) |                      | <i>sore</i>        | <i>na(a)ni</i>       | ? |
| (5K) |                      | <i>i mulgeon-i</i> | <i>mweo-ya</i>       | ? |
| (5W) | <i>Beth yw</i>       | <i>'r peth</i>     |                      | ? |

On the other hand, the utterances for asking about the identity of something in the speaker/addressee's sight like (5) are composed of the **focus** of *wh*-question and the phrase for the **thing questioned**, as in Table 11. The focus either precedes the phrase, as in (5B, E-G, W) and (0J), or follows it, as in (5C) and (5J-K). The contrast implies another grouping into focus-first and predicate-first types, where Japanese and Korean are grouped with Chinese. Here as well, neither the focus nor the phrase of thing questioned are morphosyntactic counterparts. For example, the Basque, French, German, and Chinese morphosyntactic counterparts of Japanese *na(a)ni* are *zer*, *que*, *was*, and *shénme* rather than *zer da*, *qu'est-ce que*, *was ist*, and *shénme dōngxī*. However, they are certainly functional counterparts.

Likewise, the positive answers to the identity question are made out of two parts: the predicate of **specification** and its **focus**, as shown in Table 12. The focus precedes the predicate in (5B, J-W) and follows it in the other languages. The difference suggests a further grouping into focus-first and predicate-first types, in which English, French, and German are grouped with Chinese. The focus and the predicate are inclined to comprise a phonologically unbreakable element, as indicated in Table 3 above. Such inclination is the strongest in Japanese and Korean, whereby the two parts have merged, as seen in Table 12.

Table 12: Utterance unit structure of positive answer to identity question

|      | FOCUS                   | SPECIFICATION  | FOCUS               |   |
|------|-------------------------|----------------|---------------------|---|
| (5B) | <i>Hegazkin bat</i>     | <i>da</i>      |                     | . |
| (5C) |                         | <i>shì</i>     | <i>yī jià fēijī</i> | . |
| (5E) |                         | <i>It's</i>    | <i>an aeroplane</i> | . |
| (5F) |                         | <i>C'est</i>   | <i>un avion</i>     | . |
| (5G) |                         | <i>Das ist</i> | <i>ein Flugzeug</i> | . |
| (5J) | <i>hikooki-na-nda</i>   |                |                     | . |
| (5K) | <i>nae bihaenggi-ya</i> |                |                     | . |
| (5W) | <i>Awyren</i>           | <i>yw hi</i>   |                     | . |

The negative answers seem slightly more liable to consist of three rather than two parts, as shown in Table 13: the **given** element, the predicate of **denial**, and its **focus**.<sup>29</sup> The given elements ordinarily come first in most of the languages but last in Welsh alone. The focus either follows the predicate, as in (5B-G, W), or precedes it, as in (5J-K). Here again, the focus and the predicate of denial tend to form an unbreakable element.<sup>30</sup> Such tendency is especially remarkable in English, German, Japanese, Korean, and Welsh; therefore, the two parts have merged in Table 13. Interestingly, none of the eight languages puts the focus before the predicate as a separate element. This implicates that the focus of denial is more apt to merge into the predicate than the focus of specification.

Table 13: Utterance unit structure of negative answer to identity question

|      | GIVEN          | FOCUS                     | DENIAL              | FOCUS            | GIVEN        |   |
|------|----------------|---------------------------|---------------------|------------------|--------------|---|
| (5B) |                |                           | <i>Ez da</i>        | <i>gauza bat</i> |              | . |
| (5C) | <i>nà</i>      |                           | <i>bùshì</i>        | <i>dōngxī</i>    |              | . |
| (5E) | <i>That is</i> |                           | <i>not a thing</i>  |                  |              | . |
| (5F) |                |                           | <i>Ce n'est pas</i> | <i>une chose</i> |              | . |
| (5G) | <i>Das ist</i> |                           | <i>kein Ding</i>    |                  |              | . |
| (5J) |                | <i>sinamono-zyanai-yo</i> |                     |                  |              | . |
| (5K) |                | <i>mulgeon-i aniya</i>    |                     |                  |              | . |
| (5W) |                |                           | <i>Nid peth</i>     |                  | <i>yw hi</i> | . |

It should be noted, here as well, that what serve as functional counterparts are mostly not morphosyntactic counterparts. In morphosyntactic terms, the English counterpart of German *kein Ding* and Welsh *Nid peth* is *no thing*. Likewise, Basque *es da* and

<sup>29</sup> For “pragmatic roles” like “given,” “topic,” and “focus,” see Comrie (1989: 62–65).

<sup>30</sup> In the English utterance, the GIVEN can be *That* with the denial *isn't a (thing)*, as in *That isn't a thing*.

Chinese *bùshì* correspond to Japanese *zyanai-yo* and Korean *aniya* instead of *sinamono-zyanai-yo* and *mulgeon-i aniya*.

In conceptual terms, *wh*-questions prompt the addressee to fill in a gap (a participant, location, or setting in the event conception he or she has in mind).<sup>31</sup> Chinese is the type of language that requires speakers to specify the event conception before the gap, while the other seven languages are the type that requires speakers to designate the gap before the event. The positive answer helps the addressee to “bring in” an appropriate entity to the gap, while the negative answer allows the addressee to “remove” an inappropriate entity from the gap (Izutsu 2014: 68).<sup>32</sup>

A micro-typology reveals further groupings of languages. Basque, French, German, and Korean are a type of language that conflates the focus of *wh*-question and the event questioned (Table 10). Japanese and Korean are a language type that puts the focus before the predicate of specification and denial with no break between them (Tables 12 and 13), whereas Basque, Chinese, English, French, and German are another type that puts the focus after the predicate with a permissible break between them (Table 12).<sup>33</sup> Welsh is a language that lies between these two types (Tables 12 and 13). Chinese, English, and German form a language type that encourages speakers to mention the given elements before the predicate and focus of denial, while the others do not necessarily (Table 13).

## 6. Conclusion

This paper demonstrated that crosslinguistic instances of minimal utterance units are far from being morphosyntactic counterparts. In many cases, they can be best seen as counterparts in pragmatic function and consist of unbreakable elements that usually coincide with phonological or prosodic units. In crosslinguistic and typological investigations, therefore, we need to pursue functional rather than morphosyntactic counterparts.

Our micro-typology differs from a widely accepted macro-typology in the view of basic constituent order. The notion of canonical order in macro-typology neglects the differences in the person of subject entity and the mood or speech-act of utterances. Assuming that the typical constituent order in utterances varies with a first/second/third-person subject, we picked up an interrogative utterance with a second-person subject, declarative utterances with a first/second-person subject, and similar utterances with a

<sup>31</sup> For “conceptual archetypes” like “participant,” “location,” and “setting,” see Langacker (2008: 355).

<sup>32</sup> For such a discourse-based conception of an entity “brought in” or “introduced” to the event conception evoked, see Izutsu and Kim (2020: 118, 131–132).

<sup>33</sup> German hardly permits a break between the predicate and focus of denial. Basque puts the focus before predicate of denial. Some languages thus treat denial and specification differently in predicate-focus alignments.

third-person subject from parallel texts of eight languages with different basic constituent order.

Minimal utterance units and unbreakable elements employed in specific occasions are more or less likely stored, on their own, in speakers’ mind as “prefabricated,” “prepatterned,” “formulaic,” “constructional,” or “idiomatic” items. Although such units and elements are often analyzable in terms of abstract morphosyntactic organization, the order of grammatical elements like S, V, and O *per se* does not provide us so realistic an overall picture of language as human practice. Micro-typology referencing to functional counterparts both on the level of utterance and on the level of pragmatic roles (e.g., given/predicate/focus) can help develop a more feasible theory and viable practice of typological language studies. There is a lot more work to be done in continuing this kind of micro-typological research, which reveals more similarities in languages that have been disguised by macro-typological classifications of languages into oversimplistic categories like SVO/SOV/VSO.

## References

- Ariel, M. 2012. “Research Paradigms in Pragmatics.” In Allan, K. and K. M. Jaszczolt (eds.) *The Cambridge Handbook of Pragmatics*, 23–45. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bag, J. 1989. *Eorin Wangja*. Seoul: Jageun Pyeonghwa.
- Comrie, B. 1981 [1989]. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology* (2nd ed.). Chicago: The University of Chicago Press.
- Cuffe, T. V. F. 1995. *The Little Prince*. London: Penguin.
- Dafis, L. 1975 [2007]. *Y Tywysog Back*. Neekarsteinach: Edition Tintenfass.
- Floyd, S., G. Rossi, and N. J. Enfield (eds.). 2020. *Getting Others to Do Things: A Pragmatic Typology of Recruitments*. Berlin: Language Science Press.
- Greenberg, J. H. (ed.). 1963 [1966]. *Universals of Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Halliday, M. A. K. and C. M. I. M. Matthiessen. 2004. *An Introduction to Functional Grammar* (3rd ed.). London: Hodder Arnold.
- Hopper, P. J. 1998. “Emergent Grammar.” In Tomasello, M. (ed.) *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 155–175. Mahwah and London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Horie, K. and P. Pardeshi. 2009. *Gengo no Taiporoji: Ninchi Ruikeiron no Apurochi* [Linguistic typology: a cognitive-typological approach]. Tokyo: Kenkyusha.
- Izutsu, K. 2014. “The Japanese Auxiliary *-Noda* and Its Comparable Linguistic Forms in Korean and Ainu: A Force-Dynamic Account.” In Nam, S., H. Ko, and J. Jun (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 21, 59–73. Stanford: CSLI.
- Izutsu, K., M. N. Izutsu, and Y. Kim. 2021. “Grammatical Relation Sensitivity: Some Different Conceptions of Pre/Post-Predicative Structures.” In Jeon, H-S., P. Sells, Z. You, S. Kita, and J. Yeon (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 28. Stanford: CSLI. (Full paper available at <https://web.stanford.edu/group/cslipublications/cslipublications/ja-ko-contents/JK28/jako28-posters.shtml>.)
- Izutsu, K. and Y. Kim. 2018. “Who I am Asking about: What the Sentence Endings Imply about

- the Unexpressed Subjects in *Wh*-Questions.” *Investigationes Linguisticae* 41, 43–56.
- Izutsu, K. and Y. Kim. 2020. “Linguistic Manifestations of Fictive Change Participants: Apparent Alternations between the Accusative and the Dative/Comitative Cases in Korean and Japanese.” *Asian Languages and Linguistics* 1, 107–146.
- Izutsu, K. and T. Koguma. 2019. “Experience Report Starters and Their Evoked Speech Event Conceptions: Conceptual Overlap of Interpersonal and Ideational Metafunctions.” *Ningen Bunka* 46: 56–63. The University of Shiga Prefecture.
- Jeong, S. 1973 [1994]. *Eorin Wangja*. Seoul: Munye Chulpan.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Leitgeb, G. and J. Leitgeb. 1950 [1998]. *Der Kleine Prinz*. Düsseldorf: Karl Rauch Verlag.
- Naito, A. 1953 [2000]. *Hoshi no Ojisama*. Tokyo: Iwanami Shoten.
- Sornicola, R. 2011. “Interaction of Syntactic and Pragmatic Factors on Basic Word Order in the Languages of Europe.” In Bernini, G. and M. L. Schwarts (eds.) *Pragmatic Organization of Discourse in the Languages of Europe*, 357–544. Berlin: De Gruyter.
- Saint-Exupéry, A. 1946 [1999]. *Le Petit Prince*. Paris: Gallimard.
- Tanigawa, K. 2006. *Hoshi no Ojisama*. Tokyo: Popurasha.
- Woods, K. 1943 [1971]. *The Little Prince*. Orlando: Harcourt Brace Jovanovich.
- Zhāng, J. 2010. *Xiǎo Wángzǐ*. Táiběi: Mùǎ Wénhuà.
- Zōng, B. 1992. *Xiǎo Wángzǐ*. Táiběi: Zhìwén Chūbǎnshè.
- Zubizarreta, P. 2001 [2011]. *Printze Txikia*. Donostia: Elkar Argitaletxea.

〈一般投稿論文〉[研究論文]

## 勧誘の断り応答部におけるストラテジーの使用とその解釈 —日本語母語話者とマレー語母語話者の比較—

稗田 奈津江

クアラルンプール大学

Second language speakers are not necessarily required to have the same language behaviors as native speakers, although they should avoid unfavorable evaluations caused by choosing different norms. This empirical study investigates politeness strategies and their interpretations in the invitation refusal response section between native speakers of Japanese and Malay. This paper indicates that language behaviors that differ from the norms according to the target language are not always interpreted negatively, but that language behaviors without the “discernment” of recognizing the fear of threatening the listener’s face can cause negative evaluations.

キーワード： 勧誘談話、断り応答部、ストラテジー、規範からの逸脱、わきまえ

### 1. はじめに

近年、異文化間語用論や中間言語語用論の研究が国内外で盛んに行われている (Beebe et al. 1990; 生駒・志村 1993 等)。これらにより、母語話者と非母語話者の言語行動の違いが明らかにされているほか、異文化間コミュニケーションにおいて誤解の原因の1つともなりうる語用論的転移<sup>1</sup>の有無についても議論されてきた。

しかしながら、これまでの研究は、小早川 (2008) が指摘しているように、対照語用論の域にとどまったものが多く、円滑な異文化間コミュニケーションの観点からは十分な考察がなされてきたとは言いがたい。例えば、黄 (2016) は、異言語におけるコミュニケーション・スタイルの違いを学習者に気づかせることで、「その場面で適切な表現を用いるように促すことができ、(中略) 円滑なコミュニケーションを目指すことができる」としているが、ここで言う「適切な表現」とはどのようなものを指しているのかが依然として不明瞭である。Kasper and Schmidt (1996: 156) は、母語話者の規範とは異なる発話が母

---

<sup>1</sup> 学習者の L2 (第二言語) の語用論的情報の理解、産出、学習に対して、L2 以外の言語や文化の語用論的知識が与える影響のこと (Kasper 1992: 5)。和訳は清水 (2009: 175) による。

話者に否定的にとらえられる場合もあれば、完全に適切な代替として聞こえる場合もあることを指摘している。また、第二言語習得語用論<sup>2</sup>の目的は、目標言語の母語話者と同化することではなく、誤解のない、快適なコミュニケーションを行うことであり、学習者の母語におけるアイデンティティーをも尊重していく必要があると関山(2004)述べているように、単純に目標言語の母語話者と同じ言語行動をとることが「適切」であるとみなされるべきではないと思われる。一方で、目標言語の規範から逸脱する言語行動をとることによって、非母語話者が意図しない不利益な評価を受けるのも避けなければならない。

よって、今後は、メッセージ送信者側の言語行動の違いに着目するのみならず、メッセージ受信者側の解釈や評価も考慮に入れた実証的研究を増やしていき、異文化間コミュニケーションという文脈において、語用論的に適切な言語行動とはどのようなものかに関する知見を蓄積していく必要があると考える。

聞き手の意識にも着目した研究の1つに、生駒・志村(1993)が挙げられる。そこでは、語用論的転移には、有害なもの無害なものがあることが指摘されている。例えば、招待を断る際に非母語話者が母語話者よりも「感謝」を多用したとしても、それは別に失礼にはならず、無害であるが、「できません」という「直接的な断り」の多用は、日本語においては失礼だと思われる可能性があり、このような誤解を招く転移は有害であるとしている。しかしながら、この種の指摘は研究者の直感に基づいたものであるため、実際の会話参加者がそれらの発話をどのように用いるのか、そして、それらの発話がどのように解釈されるのかについては検証の余地があろう。

会話参加者自身の意識を考慮した研究には、稗田(2021a, 2021b)が挙げられる。それらは、勧誘談話の断りストラテジーに焦点を当て、メッセージ受信者自身の解釈に基づき、非母語話者による発話が母語話者からどう解釈、評価されたのかを分析している。稗田(2021b)では、メッセージ受信者である母語話者が、非母語話者からなされた「代案」の使用に対して、日本語の規範とは異なる解釈をしたために、例外的に否定的評価が生じていた。このことは、否定的評価が引き起こされるのは、異言語の文化自体にあるのではなく、調整能力も含めた個人差であることを示唆している。また、目標言語の規範とは異なる言語行動であっても、否定的評価とはならなかった例が複数見られた理由の1つとして、メッセージ受信者が接触場面(母語話者と非母語話者のやりとり)における許容範囲を母語場面(母語話者同士のやりとり)よりも広く設定していたことが挙げられると考察している。稗田(2021a)では、非母語話者の一部に、非典型的な結論先行型の順序(結論+理由)の使用が見られたが、メッセージ送信者が複数の意味公式<sup>3</sup>を組み合わせ

<sup>2</sup> 「中間言語語用論」の別称であるが、本稿では、参照文献上の表現に従った。

<sup>3</sup> 意味公式とは、「発話の分析に使用されている意味的なまとまりの単位」(黄2016: 69)のことで、本稿では、{ }の中に表示する。

り、緩和表現を用いたりしたことで、発話が許容範囲内に収まっていたと述べられている。

上述の稗田 (2021a, 2021b) では、目標言語の規範から逸脱した言語行動が、必ずしも否定的に評価されるわけではないことが示されているが、どんなときにメッセージ受信者の許容範囲を超えてしまうのかについては、個人差について触れるにとどまっており、十分な考察がなされているとは言いがたい。そのため、言語行動をメッセージ受信者の許容範囲内に収めるにはどうすればよいのかについて、より詳しく検証していくことが求められよう。

以上の問題意識から、本稿では、勧誘の断り応答部で用いられるストラテジーに焦点を当て、日本語母語話者 (以下、JNS) とマレー語母語話者 (以下、MNS) の相違点を、母語場面と接触場面のそれぞれにおいて明らかにする。その上で、メッセージ受信者側の意識にも着目し、接触場面における MNS の言語行動が、JNS によってどのように解釈、評価されるのかについても調べる。本稿では、量的分析と質的分析を組み合わせるが、談話の質的分析は、規範から逸脱する意味公式を中心に行う。

本稿では、中垣 (2014: 173) の定義に従い、「断り部」を「被勧誘者が断りの先行発話や断りを開始し始め、勧誘者が被勧誘者の断りを完全に受諾するまで」とする。そして、「断り部」における勧誘者側の働きかけを「断り応答部」と定める。王 (2016) によると、断り応答部は、日本語の教科書や授業で扱われることが少なく、非母語話者が困難を感じる箇所の 1 つである。王は、JNS の応答表現は、「そうですね。また一緒に行こうね。」など表現のバリエーションが単一で、再度誘う試みをどのようにして相手に伝えたらいいのか、非常に難しく感じられると述べている。また、クイ (2019) は、接触場面で JNS はすぐに断りを受諾して会話を終えるため、物足りなさを感じたり、「本気で誘ったのか?」「ただの建前か?」と疑ったりすることがあると報告している。

なお、本研究が MNS を調査の対象としたのは、マレーシアの日本語学習者に対する理解を深める必要があると考えたからである。マレーシア政府は東方政策<sup>4</sup>のもと、今日までに 16,000 人以上のマレーシア人留学生・研修生を日本に送り出してきており、マレーシアにおける日本語教育が今後さらに発展していくことが期待される。

## 2. 先行研究と本研究の立場

本セクションでは、勧誘の断り応答部に関する先行研究を概観し、それらの知見と課題

---

<sup>4</sup> 日本及び韓国の成功と発展の秘訣が、国民の労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等にあるとして、両国からそうした要素を学び、マレーシアの経済社会の発展と産業基盤の確立に寄与させようとする政策のこと。当政策は、2022 年に 40 周年を迎えた (在マレーシア日本国大使館 2022)。

をポライトネス理論の観点からまとめる。Brown and Levinson (1987) は、すべての人が持っている基本的欲求を、「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」に分類している。滝浦 (2008: 17) によると、前者は「他者に受け入れられたい・よく思われたい」という欲求であり、後者は「他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない」という欲求のことを指す。なお、「躊躇」や「ためらい」後の応答は、厳密には「断り」への応答とは異なるものであるが、否定的な態度に対してどのように働きかけるかという点においては共通しているため、本稿でも参照の対象とする。

まず、母語場面における相違点に着目した異文化間語用論的研究について見ていく。

ザトラウスキー (1993) は、英語では、被勧誘者が断る可能性が大きいとしても、勧誘者は自分にとって承諾が必要なことを被勧誘者に理解させるように会話を進める傾向があると述べている。一方の日本語においては、被勧誘者の勧誘に対する否定的な態度が予測される限り、勧誘者はどんなに承諾を期待していたとしても、被勧誘者に断りの余地を残し、しかも、被勧誘者の都合を優先する方が好ましいと思わせるようにして、勧誘を進める傾向があると考察している。また、被勧誘者が断る可能性を示した後に、英語では勧誘に関する魅力的な情報を提供し、積極的に誘うための{誘導発話}の使用が見られたが、日本語の談話においては見られなかったという。

中垣 (2014) は昼ごはんの勧誘への断りを、中垣 (2015) は二日後の夕食への断りを、日本語とスワヒリ語で比較している。いずれも、JNS は簡単な{理由}を述べ、断りをすぐに受諾することが多いが、スワヒリ語では、詳細な{理由}が求められるほか、再勧誘部が現れ、断り部が長くなることを見出している。また、スワヒリ語話者は、「私は寂しい」「どうしていいかわからない」などの{同情要求}を多用し、被勧誘者の気持ちを受諾に変えようとする傾向があることを報告している。

黄 (2016) は、再勧誘の言語行動の特徴について分析している。そして、再勧誘のやりとりの回数は、中国語母語話者のほうがJNSよりも有意に多かったこと、再勧誘の「切り出し」に用いられる意味公式としては、JNSは{受け止め}(例：忙しいか)を、中国語母語話者は{意志要求}(例：家庭教師は後に延ばしてもいいでしょう)を有意に多く用いたことを明らかにしている。そして、これらの調査結果をふまえ、JNSは無理強いをしない対人配慮型であるが、中国語母語話者は積極的で、自分を強く押し出す目的達成型であると考察している。

クイ (2019) は、日本語とクメール語における勧誘の断り談話構造を分析している。その結果、JNSはほとんど再勧誘を行わないが、クメール語では再勧誘を2回以上行う会話がなかったことを明らかにしている。そして、クメール語話者は、本当に誘いたいという気持ちを伝えるために再勧誘を行っているが、日本語では、押しつけがましさを避けるために再勧誘をあまり行わないと論じている。また、クメール語のほうが、断りたいときに気軽に断ることができるため、再勧誘もしやすいが、JNSはどうしても行けないとき

しか断らないので、再勧誘をすると相手を困らせる可能性があるため、再勧誘をしないほうが望ましいと考察している。

これらの研究は、JNS は相手のネガティブ・フェイスを重視し、心理的に相手に必要以上に近づきすぎないように配慮する傾向があることを示しているといえよう。同時に、これらのストラテジーの選択を通して、自分自身が無礼な人だと思われるのを回避し、自らのフェイス保持も行っていると考えられる。

しかしながら、JNS がいつもネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを選択するというわけではなく、それは時と場合によるようである。例えば、日本人学生による2次会への勧誘行為を分析した倉本・大浜（2008）によると、勧誘者は断りの{理由}(例：朝早くに授業がある)をことごとく否定し、「行こうよ」「来なさい！」など、一見非常に強引な勧誘を行っていたという。つまり、誘いの当然性が高く、不参加によって断り手が受けるダメージが大きいと予測される場合には、JNS もポジティブ・フェイスへの働きかけを強めることを、この調査結果は示唆していると考えられる。

次に、母語場面において、聞き手の意識や解釈を考察に含めた研究を見ていく。

劉・肖（2008）は、誘いに対する断り理由の伝達効果について考察している。それによると、日本語の「都合が悪い」は誘いを断る伝達意図を持っているが、中国語においては、それは断りの固定表現ではなく、「調整」の伝達意図を生じさせる効果があるという。そのため、中国語では曖昧な断り理由に対して再勧誘が頻繁に起こり、もし、勧誘者が時間の調整を行わずにあっさりと誘いをあきらめたとしたら、被勧誘者は、誘う相手は必ずしも自分でなくてもよかったのだと解釈し、がっかりしたり、相手の誠意が足りないと感じたりすることを報告している。

鄭（2013b）は、再勧誘行動に対する日韓の意識差をアンケートにより調査している。その調査では、「勧誘に躊躇したら、それ以上誘ってこない場合、どのように感じるか」という設問において、JNS は全体的に「ホッとする／助かる」と回答していたが、韓国語母語話者は「寂しい／残念に思う」を最も多く回答していた。「勧誘に躊躇したら2回も3回もしつこく誘ってくる場合、どのように感じるか」という設問においては、JNS は「押し付けがましい／しつこい」の回答を多く選択していたが、韓国語母語話者は「嬉しい／有難い」を多く選択していた。これらにより、JNS は勧誘をあきらめることが多い一方、韓国語母語話者は積極的に誘い続けるという傾向は、前述の意識差が反映された結果であると考察している。

これらの研究は、聞き手の意識も分析の対象とすることで、話し手のストラテジー選択は、聞き手の受け止め方と関係があることを示している点で評価できよう。しかし、これらの研究は、同じ規範を共有する母語場面における考察であるため、会話参加者の規範が異なる接触場面ではどのような現象が見られるのかについては、更なるデータの収集と分析が必要であろう。

続いて、接触場面における、勧誘者のやりとりに着目した研究を見ていく。

鄭 (2010) は、再勧誘の「切り出し」の分析をしている。そして、「うーん、今日はちょっと …」というように躊躇するような答え方をされた場合、JNS はそれを「断り」として受け止めることが多いため、再勧誘の「切り出し」にも相手に合わせようとする発話 (例: そうですね) を多く用いたが、韓国語母語話者の場合は、躊躇を「承諾と断りの半々」として受け止める傾向が強いために、相手に積極的に働きかける発話を多く用いたと論じている。そして、韓国人日本語学習者による {都合・理由の尋ね} の多用に母語の影響が見られたが、{相手の負担軽減}(例: ご都合がよろしければ) や「あいづち」の使用は JNS に近かったことを報告している。

王 (2016) は、誘いに対する断りへの応答表現に着目し、日本語教科書での扱い方を調べている。その結果、7冊中5冊が、断りへの応答表現を扱っていたが、ほとんどが相手の断りを受け入れ、誘いをあきらめる表現を用いていたという。また、談話完成テスト<sup>5</sup>の結果を見ると、中国人日本語学習者は JNS 以上に誘いをあきらめる傾向が強かったと言い、その理由として、もう一度誘いを試みるのは非礼だと思っている可能性と、もう一度誘いを試みたい気持ちをどのように言語化したらよいかわからなかった可能性の2つの要因が考えられると考察している。

これらが示すように、非母語話者が用いるストラテジーについて言及したものは非常に限られており、非母語話者が用いたストラテジーに対する JNS の解釈や評価について言及したものも見当たらない。

よって、本研究は、勧誘の断り応答部におけるストラテジーの使用とその解釈を、JNS と MNS の2群間の比較を通して明らかにすることを目的とする。断り応答部におけるストラテジーは「各意味公式の使用数」と「意味公式の一人平均使用数」の2つの観点から量的な分析を行う。そして、2群間で有意差が見られた項目、及び否定的評価が生じた項目を中心に、談話を質的に分析する。

### 3. データの収集と分析方法

#### 3.1. データの収集方法

本稿で用いるデータの収集作業は、2019年の3月から5月にかけて、マレーシアで行われた。本研究では、SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) のテキストチャット機能を利用したロールプレイを用いて、談話データを収集した。その際に、日本

---

<sup>5</sup> 研究対象となる発話行為が誘出できるように設定された短い場面描写と一方の発話部分が空欄になった対話が含まれた筆記によるアンケートを使う方法のこと (清水 2009: 40)。

語とマレー語の2言語を併記した、図1のようなロールカードを使用した。<sup>6</sup>

|  |
|--|
| <p>A : Bさんはあなたの<u>友達</u>です。<br/>あなたは、<u>今度の日曜日のホームパーティーにBさんを誘おう</u>と思います。<br/>Bさんにスマホでメッセージを送ってください。</p>                     |
| <p>B : Aさんはあなたの<u>友達</u>です。<br/>あなたは、<u>Aさんにパーティーに誘われます</u>。<br/>しかし、その日は、<u>ほかの予定が入っています</u>。<br/>Aさんからのメッセージに返信してください。</p> |

図1 ロールカード

本研究でSNSを用いたのは、SNSは今日の若年層にとって主流のコミュニケーションツールとなっているからである。また、SNSにおいては、{笑い}や「表情」といった非言語メッセージが文字情報や視覚情報として記録されるため、それらも分析の対象とすることができるからである。そして、本稿で「パーティーに誘う」という場面を設定したのは、「代案」の提示が難しい「パーティー」においては、会話参加者が「不成立」を受け入れざるを得ない可能性が高く、最終的に「受諾」に至る談話は現れにくい（稗田2022）、「断り応答部」に焦点を当て、複数言語の言語行動を比較するのに適していると考えたからである。

本研究の調査協力者は、JNS及びMNSそれぞれ20名で、年齢や性別による影響を考慮し、20代後半から30代の女性に限定した。一定の日本滞在経験<sup>7</sup>のあるMNSの言語行動について調べるため、MNS調査協力者はすべて、マレーシアの予備教育課程を経て、日本の大学／高等専門学校を卒業した、元国費留学生<sup>8</sup>とした。また、JNSを含め、マレーシア在住者<sup>9</sup>のみを調査の対象とし、勧誘内容に現実味をもたせやすくした。本稿では便宜上、JNS調査協力者にはJ01～J20、MNS調査協力者にはM01～M20の番号をつけて識別する。同じ数字（例：J01とM01）は、接触場面におけるペアを指している。

調査協力者は、ランダムに組み合わせられた相手とまずは母語場面でペアになり、勧誘者と被勧誘者の役をそれぞれ1回ずつ行った。その後で、今度は接触場面でペアとなり、

<sup>6</sup> 友人関係の親密度や、パーティー参加に対する期待度など、場面をより詳細に設定することによって、比較の精度が上がると考えられる。この点は、今後の課題としたい。

<sup>7</sup> MNSの日本滞在歴は、3年以上5年未満が25%、5年以上が75%であった。接触場面を多く経験している第二言語話者は、海外における日本語学習者とは異なる言語行動をとると考えられる。

<sup>8</sup> MNSの日本語能力試験の結果は、N1（旧1級）合格が50%、N2（旧2級）合格が45%、未受験が5%であった。

<sup>9</sup> JNSの海外滞在歴は、1年未満が30%、1年以上3年未満が35%、5年以上が35%であった。また、JNSの自己判定によるマレー語能力は、ゼロ初級が85%、初級が10%、中級が5%であった。

同じように勧誘者と被勧誘者の役をそれぞれ 1 回ずつ行った。<sup>10</sup> ウォームアップ時にニックネームを教え合うなどの工夫をし、できるだけ普段通りの自然なやりとりをするように調査協力者にお願いした。

JNS の母語場面、及び接触場面のロールプレイは、LINE (ライン) のアプリを用いて、日本語で実施されたが、MNS の母語場面は、マレーシアで主流のアプリである WhatsApp (ワッツアップ) を用いて、マレー語で行われた。これらのアプリはいずれも、吹き出し内に表示されたメッセージを無料で送信できる機能を有している。

接触場面のロールプレイ終了後に、オンライン上で事後インタビューを行った。事後インタビューは半構造化インタビューの形態をとり、「気になったところ」「違和感や不快感があったところ」「気をつけたところ」を中心に聞き取りを行った。

### 3.2. データの分析方法

本稿では、中垣 (2015) の枠組みに従い、収集した談話データを「開始部」「勧誘部」「断り部」「終結部」の各構造部に分けた。その後、「断り部」で勧誘者が用いた発話に意味公式を当てはめ、各意味公式の使用数をカウントした。なお、勧誘者による「断りの受諾」の意味公式 (表 1 参照) が被勧誘者の発話を挟まずに連続している場合は、それらをすべて「断り部」に含めた。

表 1 は、本研究で用いた意味公式の一覧である。意味公式の分類にあたっては、黄 (2016)、中垣 (2014)、吉田 (2016) を参考にし、本研究のデータに合わせて、筆者が加筆、修正した。具体的には、「そっか」「そうなんだ」のような発話は、後に再勧誘が続くこともあるために、{承知}ではなく、{理解}としたほか、{未練}{比較}{保留同意}{関係維持補足}{譲歩案}{感嘆}{理由反応}{用件提示}{笑い}を追加した。表 1 内の例は、得られたデータの表現を多少簡略化したもので、マレー語の発話は筆者が和訳し、本稿ではイタリック体で表示した。

---

<sup>10</sup> この方法では各調査協力者がロールプレイを複数回行うことになり、前のロールプレイによる学習効果が生ずるという欠点がある。しかし、同一話者の母語と第二言語を同じ調査で比較することで、転移と判断できる信頼性が高まること (清水 2009)、及び、限られた調査協力者から得られるデータを最大限に生かせることを考慮し、この方法を採用した。

表1 勧誘の断り応答部における意味公式

|       | 意味公式   | 意味機能             | 例              |
|-------|--------|------------------|----------------|
| 断りの受諾 | 承知     | 断りを判断し、受け入れる     | わかった／了解／OK     |
|       | 残念     | 残念な気持ちを表明する      | 残念／残念だな        |
|       | 詫び     | 自分の非や申し訳ない気持ちを表す | 突然誘ってごめんね      |
|       | 未練     | 断り受諾に伴う未練を表明する   | 会いたかったのに       |
|       | 気遣い    | 相手への気遣いを表明する     | 大丈夫だよ／しかたないね   |
|       | 比較     | 断り手の予定と勧誘内容を比較する | そっちのほうが大事だよ    |
|       | 保留同意   | 回答の保留に同意する       | うん、連絡待ってる！     |
|       | 享受祈願   | 予定が順調にいくことを祈願する  | 旅行楽しんで／試合がんばって |
|       | 関係維持   | 関係を維持する意思を表明する   | また今度だね／また誘うね   |
|       | 関係維持補足 | 関係維持に関する情報を補足する  | 紹介したい友達もいるし♪   |
| 再勧誘   | 共同行為要求 | 同じ勧誘内容を再度働きかける   | 来たら来てね♪        |
|       | 理由否定   | 断り理由を否定する        | 田舎帰るの今週にしたら？   |
|       | 誘導発話   | 相手の興味をひく情報を提示する  | うちの子が会いたがっている  |
|       | 譲歩案    | 勧誘内容の一部を譲歩する     | 途中参加でも全然いいよ    |
|       | 同情要求   | 自分の悲しい状況を述べる     | 〇〇来ないの、つらいな    |
| 談話継続  | 理解     | 相手の発言に対する理解を表明する | そっかあ／そうなんだ     |
|       | 感嘆     | 感嘆の言葉を述べる        | えー／がーん         |
|       | 理由詳細要求 | 断り理由の詳細を聞く       | 用事って何？         |
|       | 理由反応   | 断り理由に対する反応を表す    | それは楽しみだね／大変だね  |
|       | 用件提示   | 連絡の主目的を表明する      | パーティーしようと思って   |
|       | 情報提示   | 勧誘内容に関する情報を提示する  | 予定は1時から6時まで    |
|       | 冗談     | 冗談を表す            | 私も連れてって        |
|       | 笑い     | 笑いを表明する          | ハハハ／フフフ／笑      |
| その他   | 上記以外   | ありがとう／まじか／仕事！    |                |

例えば、次のJ18の発話例の場合、{感嘆}{残念}{未練}{関係維持}{享受祈願}の5つの意味公式を含んでいるとみなした。以下、調査協力者による送信メッセージの表記や綴りは、原文のままである。

J18: あら～{感嘆} 残念だね。{残念}㊦㊧ 会いたかったのに。{未練}  
 じゃあ、また今度時間あれば、一緒に出かけようね!{関係維持}  
 日曜日の仕事ががんばって～{享受祈願}

意味公式のコーディング作業に関しては、まず、筆者が独自に全データに対して行い、その後、各言語の母語話者それぞれ1名にセカンドコーダーチェックをお願いした。Cohen's Kappa を用いた評定者間信頼性係数は、日本語で  $\kappa = .903$ 、マレー語で  $\kappa = .882$  と、

どちらも  $k > .70$  で、コーディングの信頼性が確認された。両者の分析が不一致だった箇所は、話し合いにより、より適切と思われるものに決定した。

本研究では、「談話継続」における使用数が全体の 1 割以下の意味公式は、{その他}にまとめた。また、文字情報を含むスタンプの使用が 2 件見られたが、それら（「があ～ん」と「了解」）も談話展開上重要な役割を果たしていることから、意味公式に含めた。絵文字や文字情報を含まないスタンプの使用は非言語メッセージに相当するため、意味公式には含めていないが、談話の質的分析をする際には、それらも分析の対象とする。

本稿では「何を言うか／言わないか」の視点を重視し、意味公式の延べ数ではなく異なり数をカウントした。その後、有意水準 5% でフィッシャーの直接確率法の両側検定<sup>11</sup>を行い、各意味公式の使用数に関して、JNS と MNS の 2 群間における差が統計的に有意かどうかを確かめた。意味公式の一人平均使用数に関しては、Welch の  $t$  検定の両側検定を行った。

## 4. 勧誘の断り応答部に関する分析結果

### 4.1. ストラテジー使用の分析結果

まず、「各意味公式の使用数」の観点から分析を行う。表 2 は、勧誘の断り応答部で勧誘者が用いた意味公式の使用数を、JNS と MNS の 2 群間で比較した結果を示している。以下、詳細を見ていく。

表 2 各意味公式の使用数における 2 群間の比較

|       | 意味公式   | 母語場面              |                   |       | 接触場面              |                   |        |
|-------|--------|-------------------|-------------------|-------|-------------------|-------------------|--------|
|       |        | JNS<br>( $n=20$ ) | MNS<br>( $n=20$ ) | $p$ 値 | JNS<br>( $n=20$ ) | MNS<br>( $n=20$ ) | $p$ 値  |
| 断りの受諾 | 承知     | 4                 | 1                 | 0.342 | 4                 | 3                 | 1.000  |
|       | 残念     | 6                 | 4                 | 0.716 | 6                 | 8                 | 0.741  |
|       | 詫び     | 3                 | 1                 | 0.605 | 5                 | 1                 | 0.182  |
|       | 未練     | 0                 | 0                 | 1.000 | 0                 | 3                 | 0.231  |
|       | 気遣い    | 5                 | 8                 | 0.501 | 5                 | 8                 | 0.501  |
|       | 比較     | 1                 | 1                 | 1.000 | 1                 | 1                 | 1.000  |
|       | 保留同意   | 1                 | 4                 | 0.342 | 1                 | 2                 | 1.000  |
|       | 享受祈願   | 0                 | 4                 | 0.106 | 4                 | 4                 | 1.000  |
|       | 関係維持   | 14                | 8                 | 0.111 | 16                | 9                 | 0.048* |
|       | 関係維持補足 | 5                 | 3                 | 0.695 | 6                 | 1                 | 0.092  |

<sup>11</sup> 本稿では、オンライン上の統計分析プログラム「js-STAR version 9.8.7j」を用いた。

|      |        |    |    |        |    |    |       |
|------|--------|----|----|--------|----|----|-------|
| 再勧誘  | 共同行為要求 | 1  | 4  | 0.342  | 0  | 2  | 0.487 |
|      | 理由否定   | 0  | 1  | 1.000  | 0  | 0  | 1.000 |
|      | 誘導発話   | 1  | 2  | 1.000  | 1  | 2  | 1.000 |
|      | 譲歩案    | 1  | 7  | 0.044* | 0  | 1  | 1.000 |
|      | 同情要求   | 1  | 3  | 0.605  | 1  | 0  | 1.000 |
| 談話継続 | 理解     | 11 | 10 | 1.000  | 15 | 14 | 1.000 |
|      | 感嘆     | 3  | 6  | 0.235  | 2  | 6  | 0.235 |
|      | 理由詳細要求 | 0  | 6  | 0.020* | 0  | 0  | 1.000 |
|      | 理由反応   | 5  | 6  | 1.000  | 3  | 3  | 1.000 |
|      | 用件提示   | 1  | 3  | 0.605  | 1  | 2  | 1.000 |
|      | 情報提示   | 4  | 11 | 0.048* | 0  | 3  | 0.231 |
|      | 冗談     | 1  | 5  | 0.182  | 0  | 0  | 1.000 |
|      | 笑い     | 2  | 8  | 0.065  | 2  | 1  | 1.000 |
|      | その他    | 4  | 3  | 1.000  | 6  | 4  | 0.716 |

\*  $p < .05$

まず、母語場面について見ると、{譲歩案}{理由詳細要求}{情報提示}の3つの意味公式において2群間に有意差があることが分かった。上述の3つの意味公式はいずれも、MNSがJNSより有意に多く用いていた。

以下の談話は、上述の3つの意味公式を含んでいるMNS同士のやりとりである。

|  |   |
|--|---|
| M01: Alahai.. nak join!!<br>Tp saya ada hal haritu 🙄🙄              | あら.. 行きたい!!<br>けど、その日は用事ある                  |
| M02: Oh.. yeke 🙄   | あ、そうなの {理解}                                 |
| M01: Party apa awak?   | 何のパーティー?                                    |
| M02: Saya nak buat home party<br>sempena birthday housemate sy.    | ハウスメートの誕生日祝いを兼ねて<br>ホームパーティーするの。 {情報提示}     |
| M01: Ooo ye ke   | ああ、そうなんだ                                    |
| M02: Plan nak ajak kwn2 terdekat sy juga.<br>Party kecil2 je awak. | 近くに住んでいる友達も誘う予定。<br>小さいパーティーだよ。 {情報提示}      |
| M01: Saya xde kt kl weekend depan 😊                                | 次の週末はKLにいないんだ                               |
| M02: Awak ada apa ahad depan?<br>Kalau x boleh datang kejap        | 次の日曜は何があるの? {理由詳細要求}<br>だめなら、ちょっとだけでも {譲歩案} |
| M01: Balik kg...<br>ada kenduri rumah makcik                       | 田舎に帰るの...<br>叔母のうちに結婚式があるの                  |
| M02: oh yeke.<br>hati2 balik kmpg awak.                            | ああ、そうなんだ。 {理解}<br>気をつけて行ってきてね。 {享受祈願}       |

上述の3つの意味公式のうち、{譲歩案}は、再勧誘の一種であると考えられるが、MNSは、上記の「ちょっとだけでも」のほか、「遅く来ても大丈夫だよ」のように、ほんの少しの時間でもいいから顔を出せるようであれば来てほしいというメッセージを伝えることで、無理強いしない形で勧誘受諾に対する期待感を表明していた。

また、MNSは、上記の「何があるの?」のほか、「どこ行くの?」などの{理由詳細要求}を頻繁に用いていた。これは、相手の都合の詳細を確かめながら、再勧誘の余地をうかがいつつも、稗田(2019)が指摘しているように、詳細な情報共有を行うことで相手への関心の高さ、親愛の情を示しているものと思われる。

同様に、MNSによる{情報提示}の多用も、勧誘内容への興味を喚起しつつ、詳細な情報共有を通して、互いの結束力を高めるのに用いられていると考えられる。上記の例では、「何のパーティー?」という相手からの質問に答えるのみならず、パーティーの参加者や規模についての情報を自発的に提示していた。

次に、これら3つの意味公式が、JNSの母語場面ではどのように使用されていたのかを見ていく。

まず、{譲歩案}を用いたJNSは1名のみで、使用法は以下のとおりである。

J20: ホームパーティー行きたい!でも他の予定が入ってるんだ。。

何時くらいにやるの?時間間に合いそうなら行きたいなあ🎵

J19: 16時くらいに集まって多分19時過ぎまでだったらやる感じかなー?

{情報提示}

途中参加でも全然いいし{譲歩案}、来れたら来てね♪{共同行為要求}

JNSの例においては、J20が「時間間に合いそうなら行きたいなあ」と{参加努力}を見せたため、それに応える形で、{譲歩案}が用いられていた。つまり、JNSが断りに対して一方的に結論の変更を求めたのではないことが分かった。

次に、{情報提示}に着目する。上記のJ19によるパーティーの開催時間に関する{情報提示}もまた、「何時くらいにやるの?」というJ20からの質問に答える形でなされていた。しかも、「だったらやる感じかなー」という説明を加え、パーティーがそれほどかまったものではないことを示し、時間に遅れても参加しやすいように配慮していた。表2においてJNSが用いた{情報提示}4件のうち、3件が相手からの質問に答えるもので、自発的な{情報提示}は以下の1件のみであった。

J04: ホームパーティってめっちゃ行きたいけど、先約あるの🙄

誘ってくれたのにごめんね🙄

J03: ホームパーティってかデリバリー&宅飲み🍷🍷🍷{情報提示}

来月もするよー!🤗🤗🤗{関係維持}

J03 による {情報提示} は {関係維持} の意味公式といっしょに用いられている。そのため、{情報提示} による勧誘内容の説明は、次回の勧誘内容の予告ともなっており、メッセージ受信者の将来に直接関係があるものとなっている。また、J03 は「デリバリー&宅飲み」の直後に「泣き笑い」の絵文字を添えることで、飲食店へ行く余裕がないことを自虐的に示しており、パーティーはそんなに高級なものではないことを暗に伝え、次回の参加へのハードルを下げている。

次に、{理由詳細要求} についてであるが、この意味公式を用いた JNS は皆無であった。これは、「聞き手の私的領域」(鈴木 1997) の侵害に当たるためであろう。

以上より、{譲歩案}{情報提示}{理由詳細要求} の意味公式は、日本語においては規範の逸脱に相当するため、使用が非常に限定的であることが分かる。

接触場面においては、{関係維持} の意味公式のみに、JNS と MNS の 2 群間における有意差が見られ、上述の 3 つの意味公式における有意差はなくなっていた。3 つの意味公式における MNS の使用数がいずれも母語場面と比べて減少しているのは、MNS が目標言語の規範に合わせて、それらの使用を控えた結果であろう。

JNS は、相手の断り後に、{関係維持} を用いて、断りの受諾を示す傾向が強く、表 2 内では使用数が最も多かった。具体的な日時や場所が特定されず、共同行動の実現に向かわない「形式誘い」が日本語でよく用いられることが指摘されているが(川口他 2002)、本研究においても、「では次の機会に!」「また声かけるね!」のような「形式誘い」が数多く見受けられた。

次に、「意味公式の一人平均使用数」の観点から分析を行う。表 3 は、勧誘の断り応答部で勧誘者が用いた意味公式の一人平均使用数を、JNS と MNS の 2 群間で比較した結果である。

表 3 意味公式の一人平均使用数における 2 群間の比較

|                            | 母語場面           |                |            | 接触場面           |                |            |
|----------------------------|----------------|----------------|------------|----------------|----------------|------------|
|                            | JNS            | MNS            | <i>t</i> 値 | JNS            | MNS            | <i>t</i> 値 |
| 意味公式の<br>一人平均使用数<br>(標準偏差) | 3.70<br>(1.90) | 5.45<br>(2.40) | 2.49*      | 3.95<br>(1.32) | 3.90<br>(1.81) | 0.10       |

\* $p < .05$

分析の結果、母語場面においては 2 群間に有意差が確認されたが ( $t(38) = 2.49$ ,  $p = .017$ ,  $d = 0.81$  (効果量大)), 接触場面においては有意差がなくなっていた ( $t(38) = 0.10$ ,  $p = .923$ ,  $d = 0.03$  (効果量ほとんどなし))。

このことから、MNS は母語場面において、相手の断り表明後も、会話をすぐに収束に向かわせるのではなく、勧誘受諾への期待感をおわせたり、互いの予定に関する情報交

換をしたりしながら、断り受諾を遅らせ、比較的長めのやりとりをする傾向があることが明らかとなった。

接触場面においては、MNSによる意味公式の使用数は減少しており、目標言語の規範に合わせて、早めに断り受諾を表明していることが分かった。

#### 4.2. ストラテジー解釈の分析結果

本節では、接触場面でMNSが用いたストラテジーが、JNSからどう解釈、評価されたのかを見ていく。

接触場面を全体的に見ると、否定的評価は{比較}の意味公式1件に対して生じたのみであった。以下、各ペアのやりとりを参照しながら、詳細を見ていく。

まず、「そっちのほうが大事。」というM06による{比較}の使用に否定的評価が生じていた。この発話に対し、J06は「反応に困る。どっちが大事かは人それぞれで。親のマレーシア訪問が〇〇さんの予定より大事と断言すると〇〇さんが不愉快になるかもしれないので。同意はできない」と回答していた。

JNSの母語場面において、{比較}を使用したJNSは1名のみであった。その使用法は、以下のとおりである。

J08: 〇〇ちゃんいなかったら誰が盛り上げるのさーw{誘導発話}

J09: とりあえず、その日は...予定がある。。べつけん。。まじで!

J08: ホムパより大事!? {比較} 笑 {笑い} 冗談。{冗談}

J09: 親が、遊びに来る。ってゆう一大事。おデートなら、ホムパ行った

上記の談話では、J08は「ホムパより大事!？」という{比較}を用いて、相手を責めているように見せかけておきながら、直後に、「笑」「冗談。」というメッセージを追加し、それが「冗談」であることを明示的に示していた。これに対してJ09は、彼氏よりも友人であるJ08のほうが大事であることを「おデート」という過剰な美化語を用いて、冗談めいた形で返答し、互いに笑いを誘っていた。

次に、母語場面でMNSが有意に多く用いていた3つの意味公式に焦点を当てる。接触場面でのこれらの使用に対する否定的なコメントはなかった。表2の接触場面における{譲歩案}の1件は、M01によるもので、使用法は以下のとおりである。

J01: 誕生日会は何時から何時まで??

M01: 予定は1時から6時まで {情報提示}

でも〇〇なら、何時でもいいよ {譲歩案} 笑 {笑い}

M01は、相手からの質問に答える形でパーティーの時間に関する{情報提示}を行い、その後、「〇〇なら、何時でもいいよ」という{譲歩案}を{笑い}といっしょに冗談っぽ

く伝えていた。

接触場面で{理由詳細要求}を用いたMNSは皆無であったことから、日本語の規範から逸脱した{理由詳細要求}の使用をMNSが控えたことがうかがえる。

また、接触場面で{情報提示}は3件見られたが、そのうちの2件は、上述のM01のように、相手からの質問に答える形で用いられていた。残りの1件は、M08による「日曜日の夜」という発話で、パーティーが夜に行われることを自発的に示し、相手に参加を促していた。

次に、JNSにとっては非典型的な再勧誘行動が見られた2ペアに着目して、やりとりの詳細を見ていく。

まずは、J01とM01によるやりとりである。

- J01: あー本当に行きたかった!! ごめんね 🙇🙇🙇  
パーティーにはいけないけど、別の機会にお祝いさせて 😊🎉
- M01: いつも〇〇に会いたいと言ってる 😊😊😊 {誘導発話}  
〇〇のことが好きみたい ❤️❤️❤️ {誘導発話}
- J01: あら～なんて可愛い子なの ❤️❤️❤️
- M01: もしも用事が早く終わったら、是非来てね 🤍 {共同行為要求}

「ほめ」や「おだて」は相手のことを良いと認め、相手を心地よくさせることを前提に肯定的な評価を相手に伝える言語行動であるが(鄭 2013a)、M01は「(うちの子は) いつも〇〇に会いたいと言ってる」「〇〇のことが好きみたい」と{誘導発話}を連発しながら巧みに相手の自尊心をくすぐっていた。事後インタビューでJ01は、「きっと私が喜んでくれると思って言っているんだろうな、と思った」と述べ、「だから用事が終わればできるだけ時間内に行こうと思った」と再勧誘を肯定的に受け止めている様子をうかがわせた。

次は、J08とM08間のやりとりである。

- M08: 〇〇ちゃん! 今週末暇?
- J08: 今週末は、おじいちゃんの家に行く予定だよ
- M08: ええ {感嘆} そっか! {理解} 残念! {残念}
- J08: 何かあった??
- M08: うちでパーティーやるんだだけ {用件提示}  
時間あったら、来てね! {共同行為要求}

上記の談話では、M08は断りの{理由}を知った後に、「残念!」と発言しているため、そこで断りを受諾したかのように見えたが、その後で、「時間あったら、来てね!」と{共同行為要求}を行っている。事後インタビューでM08は、「本当に来てほしかった」と述べていたことから、{残念}を使用した時点では、まだ完全には断りを受諾していなかつ

たようである。これは、「残念」という言葉を定型的に使用していたか、あるいは、マレー語における使い方が転移したためと考えられる。<sup>12</sup> いずれにせよ、この再勧誘行動に対して、J08は、「嬉しかった！予定は入って来れないけど、少しでも時間あったらきてねと気遣ってもらえたことが」と肯定的評価をし、「早く戻れたら本当に行くつもりだった」と回答していた。この事例においては、J08が発話の意図を総合的に判断し、柔軟に解釈していたといえよう。

以上、M01とM08は、日本語においては非典型的な再勧誘行動をとっていたが、いずれも語用論的誤りとなるどころか、相手に心地よい印象を与えており、しかも、相手の結論を「断り」から「保留」に変化させることにも成功していた。

## 5. 考察

母語場面においてMNSが多用した{譲歩案}{理由詳細要求}{情報提示}はいずれも、心理的に相手に近づこうとするポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであることから、MNSはポジティブ・フェイスを重視しているが、JNSはネガティブ・フェイスを重視し、心理的に相手に必要以上に近づきすぎないように配慮していることが明らかとなった。この傾向は、被勧誘者による断りストラテジーを分析した稗田(2021b)と同様であった。つまり、マレー語ではポジティブ・フェイスを重視し、日本語ではネガティブ・フェイスを重視する傾向は、勧誘者と被勧誘者の双方に共通していることが分かった。

接触場面においては全体的に、MNSは目標言語の規範に合わせて、意味公式の使用数を減らし、私的な領域にはあまり立ち入らないようになっていた。

メッセージ受信者の解釈に関して見ると、{比較}の使用が唯一、否定的評価を受けていた。ザトラウスキー(1993: 181)は、日本語では、被勧誘者の都合を優先する方が好ましいと思わせるようにして、勧誘を進める傾向があると指摘しているが、あまりにあからさまなものは、かえって逆効果になる可能性があることを、本研究の結果は示している。勧誘の断り行動は、言い換えれば、相手と自分の都合を比較した上で、自分の都合を優先することを選択する行為でもあり、比較結果を明示的に表すことで、優先度が劣る立場の人のフェイスが侵害される恐れがあることが分かる。{比較}を用いた調査協力者はごく少数であり、個人的な指向性も強いと思われるが、この事例は、異文化間コミュニケーションで{比較}を使用する際には、特に注意が必要であることを示している。

メッセージ受信者の解釈に関してさらに興味深いのは、本研究の接触場面で見られた再

---

<sup>12</sup> 勧誘者側による「残念/Sayangnya」という発話は、日本語では「勧誘者が、相手と一っしょに行動したいという願いがかなわなかったから、残念なのだ」と解釈されるが、マレー語では、「被勧誘者が、せっかくのいいチャンスを逃したので、もったいない/損をした/かわいそうだ」という同情の意になる(稗田2019)。

勧誘行動が、いずれも肯定的評価を得ていた点である。鄭 (2013b) の先行研究においては、JNS が再勧誘を「しつこい」「面倒だ」と否定的にとらえていたのとは対照的である。この事例は、語用論的能力を検証する際に配慮すべき重要な2つの視点を、以下のよう  
に示していると考えられる。

1点目は、メッセージ受信者側の意識について調査する際には、アンケート調査を行うだけでは不十分で、実際のやりとりを通して実証的に意識を見る必要があるということである。鄭 (2013b) のアンケート調査で用いられた「2回も3回もしつこく」という文言は否定的なニュアンスを含んでおり、それが調査協力者を暗に否定的な回答に誘導した可能性も否定できないが、それを抜きにしても、ただ回数を示されただけでは、働きかけの全体像がイメージしづらいと思われる。実際に、本研究でM01は、「ほめ」や「おだて」を活用し、度重なる再勧誘行動を効果的に行っていた。

そして、2点目は、目標言語の規範から逸脱した意味公式の使用そのものがマイナス評価を引き起こすのではなく、不適切な用いられ方がマイナス評価を引き起こすということである。本稿の分析の結果、マイナス評価を回避できる方法には少なくとも、①「相手からの要求に応える形であること」、②「規範の逸脱により相手のフェイスを侵害する恐れを認識しているという『わかまえ』を示すこと」の2つがあると考えられる。以下、具体例を振り返りながら、詳細に検討する。

まず、①「相手からの要求に応える形であること」についてである。本稿の分析で有意差を示していた{譲歩案}や{情報提示}のような意味公式の使用は、一般的には日本語の規範を逸脱したものであるかもしれないが、それをメッセージ受信者自身が求めた場合は、十分に受け入れ可能であるということである。メッセージ受信者は、このような規範の逸脱に対し、自分のフェイスを脅かすためではなく、自分の要求を満たすためだとプラスに解釈する準備を整えていると思われる。

次に、②「規範の逸脱により相手のフェイスを侵害する恐れを認識しているという『わかまえ』を示すこと」に関して見る。本稿における具体例を見ると、J08による「ホムバより大事!？」という{比較}は、直後に{笑い}が添えられることで、この発話が非難めいて聞こえることをメッセージ送信者自身が認識しているという「わかまえ」が示されていた。これにより、メッセージ受信者は、「攻撃的で、無礼な人だ」というマイナスの解釈をせずに、逆に、「ユーモアのある楽しい人だ」とようなプラスの解釈をしたと考えられる。M01による「いつも〇〇に会いたいと言ってる」という{誘導発話}にもまた、直後に「汗」をかいた表情の絵文字(😓)が添えられており、ためらいや躊躇が間接的に示されていた。そのため、メッセージ受信者は、自分を困らせるリスクを認識した上で、それでも自分に来てほしいと思って働きかけをしてくれているのだと肯定的に解釈したと考えられる。同様に、M01による「〇〇なら、何時でもいいよ」という{譲歩案}の直後にも{笑い}が付加されていたが、これも、しつこいと思われる恐れを認識していることを

暗に示しており、冗談っぽい発話にすることで、相手のフェイス侵害度を和らげつつ、相手を大切に思う気持ちを効果的に伝達していたと考えられる。同時に、「わきまえ」を示すこれらの戦略は、相手から嫌な人だとみなされるのを回避し、メッセージ送信者自身のフェイス保持も効果的に行うことで、今後も続くであろう交友関係を良好な状態に保っていると考えられる。

ツォイ (2014) では、「本来でしたら、一服点つまでは静粛にしなきゃいけませんけど、あのー、お時間もね、皆様、大勢様お待ちですので、先生のお話をよろしゅうお願いいたします」という発話が紹介されている。この発話では、茶席の規範からの逸脱を発話者自身が認識しているという「わきまえ」が、「本来でしたら、～けど」と「メタ認知的」に説明されている。そのため、時間延長により茶席参加者が迷惑をこうむるのを避けることを優先したという配慮が効果的に伝えられている。このような「メタ認知的」な発話は、本研究における友人同士のくだけたやりとりには見られなかった。つまり、改まり度の低い場面では、{笑い}や「表情」などの非言語情報が、「わきまえ」を間接的に伝達するのに重要な役割を果たしていると考えられる。

本研究は、今後の語用論的研究において、非言語情報の分析を体系的に取り入れていくことの重要性を示しているといえよう。本研究は、SNSを媒体とした文字言語を分析の対象としたことにより、{笑い}や「表情」などの非言語メッセージを可視化することができた。他方、音声言語を分析の対象とする場合は、データの収集方法やコーディングの仕方によっては、このような非言語情報が抜け落ちる可能性があるため、注意を要するであろう。

また、本研究は、第二言語の語用論的規範を学ぶことの重要性を、新たな観点から示していると考えられる。目標言語の母語話者と同じ言語行動を選択するかしないかは個々人の判断に委ねられるが、その選択が持っているリスクを十分に認識した上で効果的に用いるよう、学習者に留意を促していくことが大切であろう。

以上、本研究を通して、目標言語の規範から逸脱した意味公式の使用そのものが否定的評価を生み出すのではなく、規範からの逸脱により相手のフェイスを侵害する恐れがあることを認識しているという「わきまえ」を伴わない言語行動が、否定的評価を誘発する可能性が示唆された。

## 6. まとめと今後の課題

本稿は、勧誘の断り応答部における戦略の使用とその解釈を、JNSとMNSの比較を通して明らかにしてきた。その結果、母語場面において、JNSはネガティブ・ポライトネスを指向し、断りの受諾を早めに表明しているが、MNSはポジティブ・ポライトネスを指向し、勧誘受諾への期待感をにおわせたり、互いの予定に関する情報交換を

行ったりして、長めのやりとりを行うことが分かった。接触場面においては、MNS は目標言語の規範に合わせて、私的領域への立ち入りを控え、早めに断りを受諾する傾向が確認された。

メッセージ受信者側の解釈の観点からみると、勧誘者と被勧誘者の予定の優先度をあからさまに述べる {比較} が、日本語の規範から逸脱しており、マイナス評価を受ける恐れがあることが分かった。また、JNS には少ない再勧誘行動が、むしろ好意的に受け止められていたことから、目標言語の規範から逸脱する言語行動ではあっても、それが「わきまえ」といっしょに伝達されることで、メッセージ受信者に対する配慮が伝わり、プラスに解釈される可能性が高まることが示唆された。

今後の課題として、本稿の事例は数が限られていることから、一般化はできないため、データ数を増やしていく必要がある。また、断り応答部以外のストラテジーの使用とその解釈も分析し、非母語話者が言語行動を選択する際の参考資料を増やしていくことが求められよう。そして、学習段階別のストラテジーの使用やその解釈を比較することを通して、語用論的能力がどのように発達していくのかについても考察を深めていくことが大切だと思われる。

## 参考文献

- Beebe, L., T. Takahashi and R. Uliss-Weltz. 1990. "Pragmatic Transfer in ESL Refusals." In Scarcella, R.C., E.S. Andersen and S.D. Krashen (eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language*, 55-73. New York: Newbury House.
- Brown, P. and S.C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 稗田奈津江. 2019. 「日本語教科書の勧誘場面におけるマレー語母語話者の言語行動—日本語母語話者がマイナス評価を下す項目を中心に—」、『海外日本語教育研究』8、1-15.
- 稗田奈津江. 2021a. 「非対面勧誘場面における断りストラテジーとポライトネス効果—意味公式の順序と絵文字使用の観点から—」、『日本語教育研究』67、4-25.
- 稗田奈津江. 2021b. 「SNS を用いた勧誘場面における断りストラテジーとポライトネス効果—日本語母語話者とマレー語母語話者の比較—」、『小出記念日本語教育研究会論文集』29、119-134.
- 稗田奈津江. 2022. 「「勧誘内容」の違いが断りの意味公式に与える影響—日本語母語話者とマレー語母語話者の比較—」、『日本語プロフィシエンシー研究』10、20-32.
- 生駒知子・志村明彦. 1993. 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー—「断り」という発話行為について—」、『日本語教育』79、41-52.
- 鄭在恩. 2010. 「日韓母語話者と韓国人日本語学習者における再勧誘の「切り出し」の分析—躊躇の受け止め方と関連付けて—」、『言語文化学会論集』35、3-22.
- 鄭在恩. 2013a. 「再勧誘場面における誘う側の働きかけについて—日本人学生と韓国人学生の比較を通して—」、『言語文化学会論集』41、249-262.

- 鄭在恩. 2013b. 「再勧誘行動における誘われ方に対する日韓の意識差」、『比較文化研究』109、97-111.
- Kasper, G. 1992. "Pragmatic Transfer." *University of Hawai'i Working Papers in ESL* 11(1), 1-34.
- Kasper, G. and Schmidt, R. 1996. "Developmental Issues in Interlanguage Pragmatics." *Studies in Second Language Acquisition* 18, 149-169.
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵. 2002. 「待遇表現としての「誘い」、『早稲田日本語教育研究』1、21-30.
- 小早川麻衣子. 2008. 「日本語学習者を対象とした中間言語語用論研究の問題点と今後の展望—データ収集方法および分析の観点から—」、『第二言語としての日本語の習得研究』11、160-180.
- 黄明淑. 2016. 「『誘い』談話における再勧誘の言語行動の特徴—中国語母語話者と日本語母語話者の比較—」、『日本語教育』164、64-78.
- クイ, シェンキアン. 2019. 「日本語とクメール語における勧誘会話の対照研究—断り会話の構造を中心に—」、『日本語・日本文化研究』29、268-279.
- 倉本美喜子・大浜るい子. 2008. 「もう一つの勧誘行動—日本人学生による2次会への勧誘行動について—」、『広島大学日本語教育研究』18、57-63.
- 中垣友江. 2014. 「日本語とスワヒリ語における「勧誘」会話の対照研究—昼ごはんの「勧誘の断り」の会話から—」、『日本語・日本文化研究』24、170-185.
- 中垣友江. 2015. 「日本語とスワヒリ語における「勧誘」会話の対照研究—二日後の夕食への勧誘の断り—」、『スワヒリ&アフリカ研究』26、20-39.
- 王卓君. 2016. 「誘いに対する断りへの応答表現—日本語母語話者と中国人日本語学習者との比較から—」、『国際言語文化学会日本学研究』1、29-48.
- 劉珏・肖志. 2008. 「断りの発話行為の伝達効果について—誘いに対する断りの理由を中心に—」、『福井工業大学研究紀要』38、127-132.
- 関山健治. 2004. 「第二言語習得語用論の潮流とこれからの英語教育」、『語用論研究』6、47-55.
- 清水崇文. 2009. 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育—』東京：スリーエーネットワーク.
- 鈴木睦. 1997. 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」、田窪行則（編）『視点と言語行動』、45-76、東京：くろしお出版.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』東京：研究社.
- ツォイ, エカテリーナ. 2014. 「現代の茶席の会話におけるポライトネス研究—ディスコース・ポライトネス理論による形式的・非形式的な言語行動の分析—」、『日本語・日本学研究』4、17-37.
- 吉田好美. 2016. 「再勧誘後における断り発話の出現について—日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較—」、『比較文化研究』124、263-272.
- 在マレーシア日本国大使館. 2022. 「The Malaysian Look East Policy」(<https://www.my.emb-japan.go.jp/English/JIS/education/LEP.htm> 2022年1月閲覧)
- ザトラウスキー, ポリー. 1993. 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京：くろしお出版.

〈一般投稿論文〉[研究論文]

## LINE チャットの会話における感動詞の分析 —日本語母語場面と日韓接触場面の比較を通して—\*

楊 虹・倉田 芳弥  
鹿児島県立短期大学・拓殖大学

This paper analyzed the interjections used in LINE chat conversations comparing the Japanese native situation and the Japanese-Korean contact situation in Japanese language. The results showed that various forms of new interjections were observed in both situations and the participants creatively used the interjections to express their feelings in minute detail. The results of this study highlight the influence of the text chat medium on the use of interjections, and the interaction between participants in the Japanese-Korean contact situation.

キーワード：感情表出、感動詞のバリエーション、肯定的・否定的、遊戯的な使用

### 1. はじめに

デジタル機器の普及により、コミュニケーションのツールの一つとして、日本ではLINEによる文字チャット（以下LINEチャット）が広く利用されている。LINEチャットは、人間関係のつながりが強いメディアとして、日本人同士だけでなく、日本語母語話者と非母語話者による接触場面での使用も増え、異文化間の人間関係の構築や維持に大きな役割を果たしている。そのため、日本語母語場面のみならず、接触場面のLINEチャットの特徴の解明も必要だと考えられる。

LINEチャットの会話では、お互いの表情が分からず、声のトーンなども伝達されないため、気持ちや感情の伝達にスタンプや絵文字等ビジュアル的な要素が多く用いられ、また、相づち、擬態語・擬声語、感情を表す感動詞等、話し言葉の要素もよく見られる（岡本2016）。感動詞は、感情を伝える便利な方法の一つであるが、発話のイントネーションや声の調子によって相手に伝わる意味や感情が異なるため、文字チャットにおいて感動詞

---

\* 本研究は、JSPS 科研費課題番号 16K02803 及び JSPS 科研費課題番号 21K00619 の助成を受けたものです。また、主査及び査読の先生方には貴重なご指摘とご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

を用いて表された気持ちは必ずしも意図したとおりに相手に伝わるとは限らない。場合によっては、誤解を引き起こしてしまう可能性もある。これまでLINEチャットで用いられる感動詞については、声を生み出し、雑談している雰囲気を作る方法の一つである(岡本2016)との言及にとどまっておらず、感動詞そのものを取り上げた研究はほとんど行われていない。本研究は、日本語母語場面と接触場面という二つの場面の1対1のLINEチャットを取り上げ、両場面の会話に見られる感動詞を分析し、両場面の感動詞の使用の異同について明らかにしたい。

LINEチャットの会話はメディアを介した相互行為である。本研究は、相互行為において何が起きているかを記述し分析することにより社会や人間の在り方を捉える相互行為の社会言語学を理論的枠組みとして援用する。相互行為の社会言語学の創設者、Gumperz(1982)によれば、相互行為の参加者は「関与(involved)」を維持するために、進行中の活動をどのように認識しているか、前後の文脈とどのように関連しているか、自分の発言がどのように受け取られるかについて、互いに文脈化の合図(contextualization cue)を送り、解釈するという。文脈化の合図には、テンポ、音量等韻律的なものから、語彙の選択や文体レベル等言語表現、ターンテイクングや相づち等談話管理の装置、言葉遊び等のような冗談のリフレーミング装置まで様々なレベルが含まれる(Tannen 1989; Norrick 1994 他)。LINEチャットでは、テンポや音量等韻律的なものが伝わりにくいですが、感情表出の感動詞は参加者が自分の態度を示すという重要な役割を果たすため、積極的な関与を示す「文脈化の合図」の一つと捉えられる。本研究では、相互行為の社会言語学の視点から、日本語母語場面及び接触場面における感動詞の分析を通して、両場面の参加者の会話への関与のしかたを議論し、メディアを介した異文化間コミュニケーションへの示唆を得たい。

## 2. 先行研究

### 2.1. 感動詞の研究

感動詞は、文の構成要素から独立して用いられるものであり、感嘆詞やフィラー等、研究によって異なる用語が用いられる。日本語の感動詞については、個別の感動詞を分析し、考察する研究が多く(友定2015; 田窪・金水1997; 富樫2001, 2012; 森山2015 他)、感動詞全体を俯瞰した研究は少ない(森山1996)。

感動詞の感情表出の用法に着目して感動詞を分類し考察した研究に、森山(1996)、楊(2018)がある。森山(1996)は「情動的感動詞」という用語を用い、楊(2018)は、「感情表出の感動詞」を用いている。森山(1996)は、情動的感動詞を中心に感動詞の包括的な考察を行った研究で、感動詞を独り言でも発することがあるかどうかという聞き手の存在の必要性の有無に着目して、「対他的」と「対他的でない」に二分している。情動的感動

詞は、「対他的でない」感動詞の下位分類の一つである。一方、楊 (2018) は、日本語と中国語の感動詞の対照という目的から感動詞の機能に着目し、感動詞を感情表出、聞き手への働きかけ、話し手の認識の変化という三つに分類した。森山 (1996) と楊 (2018) の分類の枠組みは異なるが、「情動的感動詞」と「感情表出の感動詞」は、いずれも内側からまたは外的のなんらかの刺激を受け感情を表出する感動詞である。本研究の感情表出の感動詞の定義は、楊 (2018) の分類に基づくものである。

感動詞の研究方法について見ると、森山 (1996) をはじめ従来多く見られるものは研究者の内省による考察である。内省による考察は、研究者の鋭い洞察力で、典型的な感動詞を深く掘り下げて分析することに長けている。一方近年では、大規模な話し言葉コーパスの構築により、日常会話で見られる感動詞の網羅的な分析も見られるようになった (柏野 2019)。柏野 (2019) は、『日本語日常会話コーパス』(CEJE) モニター公開版に見られる応答表現を分析し、「肯定・否定の反応を示す感動詞」と「感情の反応を示す感動詞」の二つに分類して生じた感動詞の集計を行った。日常会話コーパスを用いた研究では、内省ではあまり注意が向けられないような感動詞<sup>1</sup>を文脈とともに提示し分析することにより、感動詞の使用実態の全体像を俯瞰できる。

これまでの母語場面の感動詞の研究は音声による発話を対象とした研究がほとんどであり、LINE チャットにおける感動詞に言及した研究は、管見のかぎり落合 (2018) のみである。落合 (2018) は LINE やブログ、実況動画などの電子媒体に見られる「文字で書かれた『フィラー』」の調査が目的であり、分析対象のフィラーは、感情表出の感動詞のほか、相づち詞、応答詞なども含む。落合 (2018) では、LINE では特に対人関係に関わる機能を意図してフィラーが用いられやすいという指摘にとどまり、LINE における感動詞の特徴についての指摘はない。

次に接触場面について見ると、近年中国人学習者の「意外」「驚き」を表す感動詞の混同について指摘した研究が見られる (姚 2020; 楊 2022) が、接触場面における感情表出の感動詞の使用傾向や、日本語母語場面との比較を試みた研究はない。

## 2.2. LINE チャットの特徴について

日本語母語場面の LINE チャットは、文字を介したコミュニケーションであるため、非言語情報が伝達されないということや、同期性が高いやりとりが可能であるなど、スマートフォンという使用するメディアの特性の影響を受け、対面とは異なるコミュニケーションの特徴を有することが指摘されている (西川・中村 2015; 岡本 2016; 岡本・服部 2017 他)。本節では、LINE チャットというコミュニケーションの特徴について焦点を当

---

<sup>1</sup> 柏野 (2019) では、「あわ」「うげ」等多くの人にとって馴染みの薄い感動詞が実際には使用されていることが明らかになっている。

てた先行研究を概観する。

LINEのスタンプについて分析した岡本・服部(2017)は、LINEの会話においては、「『スタンプと述語(言葉)と記号』という共通の構造を踏襲することを通して、参加の組織化」が行われていると指摘する(p. 143)。岡本(2016)は、感動詞、擬態語・擬声語、感嘆符・疑問符等の表現要素やスタンプ等を駆使した「相互行為を通して『楽しさ』や『のり』の『遊び』のコミュニケーション空間が創出される過程を報告した」(p. 234)。また、西川・中村(2015)はLINEでは、高速のやりとりと間の空いたやりとりの両方に対処できること、早い返信を可能にする「分割送信」や話題の輻輳、スタンプ等ビジュアル的な要素や感情表現の多用などを挙げている。

一方、接触場面のLINEチャットの研究については、特定の発話行為に焦点を当てた研究(中井ら2018他)や、会話参加者間の相互行為に注目し、相づちについて調べた研究(倉田2018; 2021; 2022)、スタンプの役割を指摘した研究(岡本2020)が見られる。本研究の目的から、1対1のLINEチャットの会話における相互行為に注目した倉田(2018, 2021, 2022)について概観する。

日中接触場面における相づちの機能と送信方法を分析した倉田(2018)では、常に分かりやすさを優先して送信方法を変えない非母語話者に対し、母語話者は分かりやすさと素早い反応のどちらかをより優先するため、場面に応じて送信方法を変えることが指摘されている。また、日韓接触場面とそれぞれの母語場面に焦点を当てた倉田(2021, 2022)は、接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者の使用する相づちの形式や送信方法を分析している。倉田(2021)では、日韓接触場面の非母語話者は、会話を遮らない「えー」、「うん」などの感声的表現を母語話者より多く用い、母語話者は、「うそ」、「本当?」などの概念的表現を非母語話者より多く用いているという。会話に積極的な関わりを示す共話的な特徴を持つ日本語母語話者と話し手の発話を遮らない対話的特徴を持つ韓国人日本語非母語話者、という両者の異なる会話のスタイルが示唆された。また倉田(2022)では、接触場面の日本語母語話者の相づちの送信方法は日本語母語場面と異なり、韓国語母語話者により近いという結果が見られ、接触場面では、日本語母語話者は韓国語母語話者のスタイルに合わせていると指摘している。

以上概観したように、日本語を媒介語としたLINEチャットの研究によって、スタンプなどのビジュアル的な要素や感動詞、記号類など様々な感情表現を駆使した相互行為の実態が徐々に明らかになってきた。また、相づちの研究から日本語母語場面と日韓接触場面のLINE会話の様相が異なることは垣間見ることができる。しかし接触場面のLINEチャットの研究の蓄積はまだ少ない。そこで、本研究では、感情表現の一つである感動詞を取り上げ、日本語母語場面と日韓接触場面の分析を通して、LINEというメディアを介した異文化間コミュニケーションの特徴の解明を目指す。

### 3. 目的と方法

#### 3.1. 目的

本研究では、日本語母語場面と日韓接触場面の LINE チャットにおける感情表出の感動詞について、各場面で生起する感動詞を整理し、①感動詞のバリエーションはどのようなものか、②両場面において多用する感動詞にどのような特徴が見られるか、③片方の場面にしか見られない感動詞の特徴的な使用はあるか、という3点の分析を通して、両場面における感動詞使用の異同について明らかにすることを目的とする。

#### 3.2. 研究方法

本研究では、日本語母語場面（以下日母とする。）と日本語使用の日韓接触場面（以下日韓とする。日韓の日本語母語話者を JS、韓国語母語話者を KS とする。）の1対1の女性の友人同士の LINE チャットの会話履歴をデータとした。データの収集時期は、2016～2018年である。データの協力者に、親しい友人との会話について直近からさかのぼり300送信分以上のチャット履歴の提供を依頼し、データを収集した。<sup>2</sup> 自然会話であるため、会話の状況や、話題のコントロール等は一切行っていない。収集時に参加者は、日母1名、日韓のJS3名が社会人であり、他は全員大学生または大学院生、専門学校生である。平均年齢は日母21歳、JS22歳、KS23歳である。日韓に26歳(JS)と36歳(KS)のペアが1組いたため、平均年齢が高くなっている。このペアは二人とも大学院生であり、やりとりの様相や感動詞の使用等について、他と大きく異なることはなかったため、データとした。KSの日本語のレベルは上級以上である。全員交換留学等日本滞在経験を持ち、調査時にKSを担当する日本語教師が上級以上と判断した。日本語能力を示す資格等については、日本語能力試験(JLPT) N1取得者は2名、N2取得者は2名、JPTスコア所持者<sup>3</sup>は1名である。

分析対象は、日母10組(300送信分/組)、計3000送信分、日韓10組(300送信分/組)、計3000送信分である。分析は、まず、楊(2018)に基づき、感情表出の感動詞の認定を行う。認定は、本稿の筆者2名がそれぞれに感情表出の感動詞を認定し、その後、付き合わせて確認した。解釈に揺れが生じた場合は、協議して決定した。次に、認定した感動詞の形式の分類を行い、日母と日韓の生起数を分析する。その際、感動詞の表記の違いについては、母音の引き伸ばし方が異なるもの、または声門閉鎖音を伴うものは、同じ

<sup>2</sup> 本研究のデータは、収集方法等について研究倫理審査を受けており、個人情報に関しても細心の注意を払っている。また、協力者全員にデータ提出時に書面にて承諾書を提出してもらった。

<sup>3</sup> JPTスコア所持者のスコアは990点満点中815点である。JPTの660点以上はJLPTのN1に相当する(JPT日本語能力試験ホームページ <<https://www.jpctest.jp/about/jlpt.php>> (2022年11月10日最終閲覧))。

感動詞の異形態とする。

分析方法は、談話分析の手法を用いて、生起した感動詞を整理し、日母と日韓それぞれの使用傾向の全体像を示したうえで、両場面の使用の特徴を感動詞の生起するやりとりの質的な分析を通して明らかにしていく。

## 4. 結果と考察

### 4.1. 感動詞の生起数及びバリエーションについて

生起した感動詞の形式について分析した結果、計35種類の感動詞が見られた。それらのうち、両場面で共通して生起したものは11種類にとどまり、残りの24種類の感動詞については、どちらか一方の場面のみに見られ、日母のみに見られたものは14種類、日韓のみに見られたものは10種類である。母音の引き延ばしの有無や長音のバリエーションの違うもの、促音が挿入・付加されるものなどを異形態とみなして、同じ種類とし、異形態がある場合は、最も短い形式で示すことにした。また、平仮名と片仮名表記の両方の表記が見られた場合は、同じ種類とするが、表で示す際には両方を示す。なお、感動詞に付加される「？」や「!」、「…」などの記号類は、イントネーションや音声の強さなどを伝える機能を持つと考えられるが、表1と表2、表3では生起した感動詞の種類を示すため、これらの記号類は省くことにした。

計35種類の感動詞を、両場面ともに見られた感動詞(表1)、日母のみに見られた感動詞(表2)、日韓のみに見られた感動詞(表3)に整理して、それぞれの生起数とともに以下のとおり示す。

生起した感動詞のバリエーションについては、日常会話でよく用いられる感動詞から、普段の会話ではほとんど使用されない馴染みの薄い感動詞まで、多種多様な感動詞が見られ、LINEチャットにおける感動詞の表記の自由度の高さが窺われる。バリエーションについて、日母と日韓のJSとKSに共通した特徴として、以下の2点が指摘できよう。1. チャットの送り手は、感動詞の表記方法を工夫して、音韻的特徴を詳細に表現し、感情を微細に伝えている。2. チャットの送り手は、音声会話での感動詞の使用の模写にとどまらず、漫画等の影響を受けながら、表出する気持ちや文脈に合わせて感動詞を創造的に用いる。

表1 両場面ともに見られた  
感動詞

|     | 日母 |    | 日韓 |    |
|-----|----|----|----|----|
|     | 計  | 内訳 |    | 計  |
|     |    | JS | KS |    |
| ああ  | 4  | 4  | 4  |    |
| あれ  | 1  | 3  | 2  | 1  |
| いえい | 1  | 1  | 1  |    |
| イエイ | 1  | 1  | 1  |    |
| いや  | 8  | 2  | 1  | 1  |
| イヤ  | 1  |    |    |    |
| うわ  | 3  | 5  | 1  | 4  |
| え   | 24 | 22 | 10 | 12 |
| お   | 25 | 16 | 11 | 5  |
| きゃ  | 2  |    |    |    |
| キヤー |    | 1  | 1  |    |
| は   | 5  | 3  | 2  | 1  |
| わ   | 4  | 6  | 5  | 1  |
| わーい | 5  | 1  | 1  |    |
| 計   | 84 | 65 | 33 | 32 |

表2 日母のみに見られた  
感動詞

|           | 日母 |
|-----------|----|
| あいちゃ      | 1  |
| あら        | 1  |
| いえあー      | 1  |
| う         | 4  |
| うううあう     | 1  |
| うえいうえい    | 1  |
| ウキヤキヤキヤキヤ | 1  |
| うひょ       | 1  |
| ヒイイイ      | 1  |
| びえ～       | 1  |
| ふあ        | 1  |
| ふお        | 1  |
| わお        | 2  |
| ん         | 3  |
| 計         | 20 |

表3 日韓のみに見られた  
感動詞

|       | JS | KS |
|-------|----|----|
| あわわわわ |    | 1  |
| おああお  | 1  |    |
| おほ    |    | 1  |
| ちえ    |    | 2  |
| ふん    | 2  |    |
| へ     |    | 5  |
| ほ     |    | 2  |
| ほええええ |    | 1  |
| ほひ    |    | 1  |
| もう    | 1  |    |
| 計     | 4  | 13 |

まず1. 表記方法の工夫について考察する。音声会話でよく見られる「え」と「お」を例に挙げると、「え」は、「えっ」、「えええ～～～」、「ええええええええ～」、「お」は、「おお」、「おー」、「おおお」、「おっおっおう」、「おおおおお」等のように多くの異形態が見られる。音声会話の場合、音量やプロミネンスを調整したり、母音を引き延ばしたりすることにより感情の微細な変化が表現できるが、書記言語であるLINEチャットでは、そういった音韻的な特徴は、母音の繰り返しや長音を示す「ー」と「～」の使用、「!」「?」などの表記で伝えることができる。岡本(2016)は、長音を示す「～」と「ー」の使い分けで声の強さや柔らかさが表現されると指摘している。本研究のデータではそのほかにも、片仮名表記や、拗音以外の小文字表記、<sup>4</sup> 語中、語末に声門閉鎖音を示す「っ」を挿入するなど、様々な工夫を施した形式が見られた。犬飼(2002)は、日本語の書記言語における片仮名表記については視覚的に浮き立たせる効果を持つと述べている。また田中・林(2016)は、促音や長音のような特殊拍の累加・挿入が「打ちことば」において程

<sup>4</sup> 小文字の使用について、尾山(2016)では、視覚的効果、可読性向上にかかわるという仮説が提起されている。また、「くだけている親しい間柄という雰囲気」など女子大学生への聞き取り調査から得られた回答が紹介されている。

度の高まりを表出する技法として共有されており、促音はほぼ程度の高い場面にもみ使用されると指摘している。既存の定着した感動詞を用いる場合でも、規範的に定着した表記形式（田窪 2005）をとらずに、送り手が会話の文脈に合わせ、その場その場で感動詞の表記を工夫していると言えよう。会話例1と会話例2は、「お」の二つの形態「お」と「おおおおー」が用いられた例である。なお、会話例に示した名前は全て仮名である。

会話例1では、1点足らずに再試験を受けることになった美穂から、「明後日行くー！」というメッセージを受けて、香奈は「お、すぐだね」と返信した。ここでは、美穂の「明後日行く」ことに対して「お」で軽い驚きを示しながら受け止めていることがわかる。

#### 会話例1【日母】

- 1 4:48 美穂 もともと自信なかったけどあと1点だとなんとも  
言えない気持ちになりますね ...
- 2 15:05 香奈 まじか
- 3 15:05 香奈 あと一点は辛い
- 4 15:06 香奈 また受けに行くの？
- 5 16:05 美穂 明後日行くー！
- 6 21:04 香奈 お、すぐだね
- 7 21:04 香奈 ふぁいとだ ㊦

会話例2では、朝子は深夜（0:59）によりやく完成した原稿をハユンに送る（1-3行目）。五つの「！」と「涙」は朝子の高ぶった気持ちを表している。それを受けたハユンは、長音化の二つの技法を併用した異形態「おおおおー！」（4行目）を送り、朝子の気持ちに合わせて、自らの驚嘆の気持ちの強さを示した。

#### 会話例2【日韓】

- 1 0:59 朝子 終わりました！！！！
- 2 0:59 朝子 涙
- 3 1:00 朝子 今送ります！！
- 4 1:00 ハユン おおおおー！
- 5 1:00 ハユン おめでとうございます！

会話例1と2から、メッセージの送り手は、表出する感情の性質と強弱に合わせて、必要に応じて様々な異形態に変化させて感動詞を用いていることがわかる。

次に2. 実際の音声の模写にとどまらない表記形式について考察する。チャットの送り手は音声的意味を理解しているとは言え、必ずしも音声を厳密に再現しているとは限らない。場合により、日常の音声会話では見られないような誇張した形式を用いることもある。例えば、「ウキャキャキャキャ」、「うっうっうっうっ」（「う」の異形態）、「おっおっ

おう」（「お」の異形態）等が見られる。感情の起伏の大きさを示す長音の累加、際立ちを示す片仮名表記や、「っ」の挿入と母音の引き延ばし（「ううううううっ」）、同じパターン「おっ」の繰り返しと語尾の小文字「う」の付加（「おっおっおう」）といった工夫により、送信者の驚き、感嘆など生起した感情の強さが一目で捉えられ、伝達される。しかし、『日本語日常会話コーパス』モニター公開版ではこれらの使用例は確認されず（柏野 2019）、日常会話でこれらを発するということが想像しがたい。本研究のデータに見られた音声に出しにくい様々な感動詞は、前述した日本語母語話者に共有されている技法（田中・林 2016）を踏まえて産出されたものである一方で、単に話したように声を文字に置き換えただけではない、すなわち音声会話の単なる模写にとどまらないものであるということが示唆される。

馴染みの薄い感動詞の使用には、同じく書記言語である漫画などによる影響の可能性が考えられる。日母では「ふあ」、「ふお」、日韓では、KS による「おほ」、「ほええええ」、「ほひ」等が見られる。漫画やアニメではこれらの感動詞に類似したものの使用が見受けられる。例えば、漫画『名探偵コナン』には「ふああ」、「ふえ」<sup>5</sup>が見られ、また、少女漫画のキャラクターであるカードキャプターさくらの口癖が「ほえ」で、インターネットでは「ほえ顔」という表現もある。漫画やアニメで見られる日常会話では馴染みの薄い感動詞が、LINE でも用いられるようになったと考えられる。

## 4.2. 両場面において多用される感動詞について

感動詞の生起数について見ると、生起数が一桁以下のものがほとんどであるなか、日母と日韓両場面ともに「え」と「お」の生起数が多く、他の感動詞を大きく引き離している（表 1 参照）。ただし、日母では「お」が「え」よりわずかに多かったのに対して、日韓では、「え」の方が多かった。日韓における JS と KS 別の使用を見ると、異なる傾向が見られ、JS の場合、「お」と「え」の使用数に差がほとんどないのに対し、KS の場合「え」（12）の使用が「お」（5）の倍以上であることがわかった。以上の結果を踏まえ、以下 4.2.1 では、「え」と「お」の意味機能及び音声会話における使用傾向を概観したうえで、本研究で見られた日母と日韓の異なる傾向について考察し、4.2.2 では、「え」と「お」の反応の対象となる事柄をより詳細に比較しながら、両場面の使用の特徴を考察する。

### 4.2.1. 「え」と「お」の使用傾向について

「え」の基本的な意味は、相手の発話に対し「理解できなかった」、「信じがたい」という

---

<sup>5</sup> この知見は、2021 年 11 月 20 日に行われた感動詞研究会における姚瑤氏の口頭発表「マンガにおける感動詞の表記について」によるものである。また、表現については、筆者らが『名探偵コナン Volume1』で実際に確認した。

気持ちを表出するものであり(田窪 2005: 19)、音声の長さ、高さ、上昇や下降の幅等異なる音韻的特徴によって、軽い意外な気持ちの表出から強い驚きの表出や、不満、苛立ちの表示など否定的な感情表出まで、様々な場面で使用される(富樫 2020)。一方の「お」は、同じく驚きを示すが、相手の発話から得られた「情報が予測を超えるものであったことを表明する標識」で、「多くの場合は肯定的な評価が下される」(田窪・金水 1997: 268)。

音声言語における感動詞を取り上げた複数の研究からは、「え」と「お」の使用頻度に差があり、「え」の使用頻度がより高いことが報告されている(山根 2002、柏野 2019)。対話におけるフィラーの分析結果では、「え／えー」の76件に対し、「お／おー」は9件であり(山根 2002: 153)、日常会話コーパスの分析結果では、感情表現の「えー系」の2577件に対し、「おー系」は500件であったという(柏野 2019: 373, 376)。<sup>6</sup> 以上の音声言語を対象とした研究からは、対象とするデータの性質が異なり、一概には断言できないものの、音声会話において「え」の使用頻度が高いことが示唆された。

以上の音声会話における「え」と「お」の意味機能及び使用頻度の違いを踏まえて、日母と日韓のLINEチャットにおける「え」と「お」の使用傾向を検討したい。日母と日韓のJSにおいては、「お」の使用数が「え」よりわずかに多く見られ、音声会話での使用傾向と異なる結果が見られた。一方のKSの使用傾向は、音声会話に見られた「え」と「お」の使用頻度の差に比較的に近いと思われる。感情表現の使用は、場面や話題、情意的反応の対象となる事柄の影響を受ける。相手が言及した事柄が喜ばしいことなどポジティブなものが多ければ、「え」より「お」が産出されやすいと考えられる。そこで次では、日韓のKSと日母、日韓のJSの間に見られた「え」と「お」の使用傾向の違いについて、情意的反応の対象となる事柄の点から検討する。

## 4.2.2. 「え」と「お」の反応の対象となる事柄の比較

### 4.2.2.1. 反応の対象となる事柄の三つのカテゴリー

本節では、「え」と「お」の反応の対象となる事柄を「肯定的な事柄」「否定的な事柄」「両方の可能性有」という三つのカテゴリーに分類し、日韓のKSと日母、日韓のJSの間に見られた「え」と「お」の使用傾向の違いが情意的反応の対象となる事柄の肯定的・否定的というタイプの違いによるものか否かという観点から考察する。「肯定的な事柄」は、相手が授業に間に合ったことや、相手が自分のあげた誕生日プレゼントを気に入ってくれたことなど、「相手、または送信者にとって好ましい事柄」を指す。一方、「否定的な事柄」は、クレジットカードが上限に達したことや、送信者の誘いに相手が否定的な反応を見せた場合など、「相手または送信者にとって好ましくない事柄」を指す。また、タレントの

<sup>6</sup> 柏野(2019)では、「えー系」は「ええ」と「えっ」を含み、「おー系」は「おお」と「おっ」を含む。ただし、「ええ」の場合、肯定否定の反応と感情の反応の両方を含む。

ゴシップや授業に対する評価といった事柄について、好ましいか否か、両方の受け止め方が可能な場合は、「両方の可能性有」とした。以上三つのカテゴリーに分類した結果を表4に示す。

表4 「え」と「お」の反応の対象となる事柄の比較

|        | 肯定的な事柄 |    | 否定的な事柄 |   | 両方の可能性有 |    |
|--------|--------|----|--------|---|---------|----|
|        | え      | お  | え      | お | え       | お  |
| 日母     | 2      | 13 | 16     | 0 | 6       | 12 |
| 日韓の JS | 4      | 5  | 3      | 0 | 3       | 6  |
| 日韓の KS | 3      | 2  | 5      | 0 | 4       | 3  |

表4を見ると、まず否定的な事柄に「お」が用いられないことがわかる。次に肯定的な事柄について見ると、日本語母語場面では、「え」より「お」が圧倒的に多く用いられるのに対して、日韓の JS と KS にはそのような傾向は見られない。前述のように、「え」は、さまざまな場面で使用されうるため、肯定的に評価できる事柄でも、ポジティブな評価のスタンスを明示しない「え」を用いることもできる。肯定的な事柄に対して用いる「え」と「お」の使用傾向から、日母と日韓に違いが見られ、日韓より日母のほうがより明示的に肯定的な評価のスタンスを示す傾向が見られたと言えよう。そして日韓の JS と KS の間には顕著な違いは見られなかった。

最後に「両方の可能性有」について見ると、日母と日韓の JS には共通して、肯定的ニュアンスを伴う「お」を用いる傾向が見られたのに対して、KS には「お」を多用する傾向は見られなかった。音韻的特徴が伝わらないチャットでは、「両方の可能性有」の場合における「え」は、肯定的な評価のスタンスを明示せず、事柄に対する送信者の価値評価の解釈を相手に委ね、場合によっては否定的な評価を下していると相手に受け取られる可能性も考えられる。そこで次では、「両方の可能性有」における「え」と「お」について、会話例を挙げつつ見ていきたい。

#### 4.2.2.2. 「両方の可能性有」における「え」と「お」の使用傾向

以下では、「両方の可能性有」において見られた、日母及び日韓の JS と KS の「お」と「え」の使用傾向の違いを、会話例を挙げて詳しく考察する。会話例3では、日母の「お」が用いられた例を示し、会話例4では、日母の「え」が用いられた例を示す。また、会話例5では、日韓の KS による「え」が用いられた例を示す。

日母、JS ともに、「両方の可能性有」において、肯定的に評価する「お」を用いる場合が多い。日母の会話例3では、友達桜子のバレエの発表会後に、楽屋に誘われて行こうとしている直美が、桜子の親も楽屋に来ていることを知り、「おー！ そうなのね！ そしたら、悪いわ笑」(7行目)と桜子の親が来ていることに対して驚きの反応を示した後、行く

ことを躊躇する気持ちを伝えた。「そしたら」は、その前後の事態が因果関係にあることを示し（日本語記述文法研究会 2008）、ここでは、「(行くのは) 悪いわ」という直美の気持ちは(桜子の)「親が楽屋にいる」ことによって引き起こされることを示している。直美は、いったんは楽屋に行く意志表明をした(5行目)が、「親がいる」という思いがけない新情報によって、楽屋に行くことを取りやめようとしているという気持ちの変化を示している。ここで、直美は「おー！」を用いることによって、行動変更の原因となる「親がいる」ことについて、意外だったが肯定的に捉えているという気持ちを伝えた。

会話例3【日母】「両方の可能性有」における「お」の使用

- 1 11:30 直美 会えたら良かったのだけど
- 2 11:30 桜子 今いるで、楽屋!
- 3 11:30 桜子 ○○先生帰ったよ!
- 4 11:30 直美 うん、怖かった笑
- 5 11:31 直美 まじ?それならいこうな笑
- 6 11:31 桜子 親はいるが笑
- 7 11:32 直美 おー! そうなのね! そしたら、悪いわ笑
- 8 11:33 桜子 いや、知り合いじゃないか笑

チャットでは音韻的特徴や表情が伝わりにくいため、否定的な感情表出と解釈される可能性が生じかねない時には、「え」よりも、対象となる事柄を肯定的に捉えるニュアンスを伝える「お」を用いることで、相手への共感を示すことができ、共感構築的な会話展開となる。4~8行目の発話に「笑」が付加されていることから参加者が発話時の表情を示す等共感構築的な会話を志向していることが読み取れる。

次に「両方の可能性有」の事柄に対して「え」を使用した日母の例を見る。会話例4では、話題は夏美から利奈へのタレントの画像の送信により開始される。夏美のメッセージに対して、利奈は、異なる形態の「え」を送り続けること(3, 7, 8行目)によって、強い驚きの反応を示している。ここで見られた「え!!!!?」や「えええ〜」は送り手の驚きを示してはいるものの、話題に対して肯定的に評価しているか否かについては明確ではない。また、驚きの対象となるタレントの私生活という話題について、仮に三つの「え」が不満など否定的評価を伴うと解釈されても、第三者のことを話題にしているため、利奈に不快な思いをさせることはないと考えられる。

会話例4【日母】「両方の可能性有」における「え」の使用

- 1 17:02 夏美 [画像]
- 2 17:03 夏美 ♡ってこと?笑
- 3 18:21 利奈 え!!!!?

- 4 18:21 夏美 果たしてこれはどういうことだろう  
 5 18:22 夏美 友達に聞いてみたところ  
     いつかパリに行って会いに行くよ  
 6 18:22 夏美 という意味らしい  
 →7 18:22 利奈 えええええええ～～  
 →8 18:23 利奈 えええ～～、、、  
 9 18:23 夏美 わたしもびっくらしてるなう

次に、日韓のKSが、「両方の可能性有」の事柄に、「え」で反応している例を見る。会話例の直前では、北京に滞在している詩織は、韓国から遊びに行くソユンに中国ではLINEを使うためにVPNをダウンロードする必要があると伝えた。それに対して、ソユンは「探して見る」と返信し、また「中国は大変だね」とコメントを送る。それに対し、詩織は慣れると便利とポジティブなコメントを返し、続いて「私来年も中国に住むかも」（3行目）と話題転換を行った。それに対して、ソユンは「えっ！？中国で就職したの?!」（5行目）と驚きを示し、「住む」理由を推測し質問した。「中国に住む」ことは、肯定的にも否定的にも捉えられるため、ここで「えっ！？」の使用によって、ソユンの「意外・驚き」の感情が伝わるが、事柄に対する価値評価は受け手の解釈に委ねられる。ここでもし「おっ、中国で就職したの?!」と「お」を用いた場合、予想していなかったことではあったが中国に住むという詩織の選択を肯定的に評価していることが相手に伝わるが、ソユンは「え」を使用しているため、「中国に住む」ことに対し、「信じがたい」という気持ちを伝え（田窪 2005）、詩織の発話を驚きで受け止めているだけで、共感を示してはいない。

#### 会話例5【日韓】「両方の可能性有」における「え」の使用（KS）

- 1 22:04 ソユン そうだね！探して見る！ありがとう💕 中国は大変だね😓  
 2 22:11 詩織 慣れるとすごく便利なんだけどね😓  
 3 22:11 詩織 私来年も中国に住むかも🐼🇨🇳  
 →4 22:13 ソユン えっ！？中国で就職したの?!  
 5 22:17 詩織 もう一年だけ仕事しようと思ってる😓  
 6 22:17 詩織 就活なう！

会話例4と会話例5は、いずれも「両方の可能性有」の事柄に「え」を用いて反応する例であるが、相手に直接関わらない事柄である会話例4と異なり、会話例5では中国に住むという相手に直接関わる事柄に対する反応である。この点について、「両方の可能性有」で「え」を使用している日母の6例、日韓JSの3例、KSの4例（表4参照）を対象に、相手に直接関わる事柄か否かを調べた。その結果、日母では、「え」が用いられた例

は全て相手に関わらない事柄であったのに対して、日韓では、JSの3例全て、KSの4例中3例が相手に関わる事柄であった。つまり、「両方の可能性有」で「え」を用いて反応する場合、日母では、相手に関わらない事柄に限るという傾向が見られたのに対し、日韓では、そのような傾向は見られず、JS、KSともに相手に直接関わる事柄に「え」を用いている。

以上、日母と日韓両場面において多く生じた「え」と「お」の使用傾向を、反応の対象となる事柄の詳細な分析を通して考察した。日母では、肯定的な事柄だけでなく、肯定的・否定的と両方の反応が可能な文脈でも「お」を選好して用いること、また「え」は相手に直接関わらない事柄に限定して用いられることが明らかになった。チャットでは音韻的特徴が伝わりにくいため、日母における「お」の多用は、参加者がメディアの特性に合わせて調整した結果であり、またポジティブな反応を示すことにより共感構築的な会話展開を志向する日本語母語話者の会話のスタイルの現れだと考えられよう。一方KSは、「肯定的」と「両方の可能性有」のいずれにおいても、「お」をより多く用いる傾向は見られなかった。すなわち、日母で見られた調整は、KSには見られなかった。さらに、日韓のJSにおいては、肯定的な事柄において、「お」を多く用いる傾向が見られずKSの使用傾向に近いが、「両方の可能性有」の場合、「え」より「お」を多く用いるという日母の使用傾向に近いことがわかった(表4参照)。ただし、「え」の反応の対象となる事柄が「両方の可能性有」で相手に関わるか否かについては、「え」ではなく「お」を選好するという日母で見られた使用傾向は見られなかった。すなわち、JSは部分的にメディアの特性に合わせて調整をしているが、日母ほど顕著ではなかった。

#### 4.3. 片方の場面にのみ生じた感動詞について

片方の場面にのみ生じた感動詞を見ると、日母にのみ見られたのは、4.1で述べたような新規的な感動詞で、その場で創造的に使用されたものが多い。一方、日韓でのみ見られたもののうち、「へ」、「ちえ」、「ふん」の使用に両場面では異なる傾向が見られた。これらは、日常会話で定着している感動詞で表記の形式も含め新規的とは言えないものであり、日韓では複数見られたが日母では見られなかった。

まず、「へ」について検討する。「へ(一)」は日常会話で多用される感動詞であるにもかかわらず、本研究では日母では使用が見られなかった。それに対し、日韓では5回見られ、いずれもKSによるものであった。音声会話において、「へー」は、驚きや感心する気持ちを表す場合もあれば(森山2015; 楊2022)、話題を終わらせるリソースとして用いられる場合もある(関2020; 楊2022)。楊(2022)は、会話において、意外性のない事柄への「儀礼的な評価的スタンスの表出」(p. 212)から納得した驚き、強い驚きまで様々な場面で用いられることが、会話における「へー」の生起頻度の高さにつながると指摘している。このような「へー」の異なる機能の認識はその音韻的特徴によって可能である

(Mori 2006; 森山 2015)。しかし、チャットでは送り手の表情や音韻の情報等が伝わらないため、様々な解釈が可能な「へー」は、場合によって相手の話に関心がなく話題を終わらせようとしていることを意図的に示しているものだと受け取られてしまう恐れもある。そのため、日母及び日韓の JS による「へー」の使用が見られなかったのではないかと推察される。

次に不満など否定的な感情を示す「ちえ」、「ふん」の使用について検討したい。「ちえ」は KS によって、「ふん」は JS によって使用された。「ちえ」は「やや下品な表現で、男性がくだけた日常会話で用いる」(浅田 2017: 144) 感動詞で、感情を吐き出すニュアンスがあり、「ふん」は、「対象を軽視・侮蔑している暗示がある」(浅田 2017: 217) という。<sup>7</sup> 本研究のデータである女性友人同士の会話におけるこれらの感動詞による否定的な感情表出は注目に値する。以下では、「ふん」が生起した会話を取り上げ、会話の流れを追って詳細に考察する。

会話例 6 の直前では、杏子は英語ができないという悩みをヨナに伝え、ヨナから留学という提案が出された。それを受けて杏子は、「留学しかないのか」「はたして道はないのかな」(1-3 行目) と提案の受け入れを保留した後、ヨナに英語の先生になるよう頼む (5, 7 行目)。5 行目では「なってほしい」と願望の表出という形式で依頼していたが、7 行目では普通体から丁寧体へとスピーチレベルシフトをして、「なってください」とより明確な依頼表現で再度メッセージを送信した。それに対し、ヨナは「お断りします」と杏子の丁寧体の依頼 (7 行目) に合わせ、普通体から謙譲表現へスピーチレベルシフトをして断った。それまでの杏子とヨナのやりとりは、一貫して普通体で行われており、このペアのトーク履歴全体を見ても丁寧体が見られたのはこの箇所のみである。ここでは、依頼に対する断りという対立の構図が見られた。ただし、この対立は、丁寧体という借り物スタイルへのシフトという合図 (大津 2004) によって開始されたところから、「遊び」としての対立であると理解できる。

続いて、上述の 9 行目のヨナの「お断りします」という明確な断りに対して、杏子は引き下がらずに「なんで」(10 行目) と断りの理由を尋ねる。ヨナから「むりむり」(11 行目) と再度の断りを受けても「なんで」(12 行目) と食い下がり、さらに「やって」と頼み続ける。それに対して、ヨナは「むり」と断り続けている。

チャットであるため明示的な韻律操作を用いることはできないが、対立を際立たせる直接的な断り表現「むりむり」、言葉の繰り返し(「むり」(11, 16 行目) と「なんで」(10, 12 行目)) という語彙の響鳴 (高梨 2016) が見られ、ここでも「冗談」または「遊び」として対立の合図が立て続けに繰り返されていた。

<sup>7</sup> 「ふん」と相手の話にさほど興味を示さない「生返事」を示す「ふーん」には明確な違いがある (浅田 2017)。日韓で見られた二例は、いずれも「ふん」だった。

ここで一つ確認しておきたいのは、スピーチレベルシフトした依頼の発話（7行目）は、「冗談」と「遊び」の会話を開始するきっかけとなっているが、このような会話が必ずしも「遊びとしての対立」へと展開していくとは限らないということである。ヨナの「お断りします」という模倣と共演（大津 2007）により、7行目の依頼が「遊び」の文脈の誘い水としてヨナに認識されていることが杏子に伝わり、その後の二人の共演により、「冗談」と「遊び」のフレームは共同で構築されていく。そしてこの文脈における「ふん」の使用は、あからさまな不満を表明するものである。ここでは既に遊びとしての対立のフレームが構築されており、「ふん」はこの状況に対する冗談として用いられる否定的評価（張 2017）<sup>8</sup>を表しており、文脈化された遊びのフレームの確認と維持の合図としての機能を果たしていると言える。

#### 会話例6【日韓】

- 1 12:53 杏子 留学しかないのか
- 2 12:56 杏子 はたして
- 3 12:56 杏子 道はないのかな
- 4 12:56 ヨナ ないかなあ
- 5 12:56 杏子 英語の先生になってほしい
- 6 12:56 杏子 
- 7 12:56 杏子 私の先生になってください
- 8 12:57 ヨナ あ
- 9 12:57 ヨナ お断りします
- 10 12:57 杏子 なんて
- 11 12:57 ヨナ むりむり
- 12 12:57 杏子 なんて
- 13 12:57 杏子 
- 14 12:57 ヨナ あ
- 15 12:57 杏子 やって
- 16 12:57 ヨナ むり
- 17 12:57 杏子 ふん
- 18 12:57 ヨナ 日本語
- 19 12:57 杏子 
- 20 12:57 ヨナ 母語じゃないし

※ 6, 13, 19 行のメッセージはいずれもスタンプである。

<sup>8</sup> 日本語と韓国語の母語場面の友人間の会話を分析した張（2017）では、不同意と否定的評価の発話は冗談として用いられることが多く、文脈化の合図として用いられていると指摘されている。

## 5. 総合的考察

本章では、上記の分析結果に基づき、日母と日韓における感動詞使用の共通点と相違点を会話への「関与」のしかたの観点から考察する。

本研究では、日母と日韓の両場面ともに、日常生活でよく用いられるものから、漫画・アニメからの借用と思われる新奇的なものまで、様々な感動詞が用いられていることが明らかになった。音声会話で用いられる韻律の変化やオーバーラップ、リズムカルな発話の調整等、会話への高い関与を示す要素が、書記言語である LINE チャットでは伝達されにくいいため、LINE チャットの参加者は、感情表出の感動詞を用いて、相手の発話への情意的反応を示したり、自らの気持ちの動きを微細に伝えたりしている。これらの感動詞は、会話への高い関与を示す役割を持つと言える。つまり日母及び日韓の両場面ともに、感動詞は、チャットの会話への高い関与を示す文脈化の合図の一つとして機能していると考えられる。

次に両場面で見られた相違点について検討する。日母では、より肯定的なニュアンスが伝わる感動詞を使用する傾向が見られたが、日韓ではそのような傾向が見られず、明らかに否定的な感情を伝える感動詞の遊戯的な使用が見られた。

日母では、驚きを示す感動詞の選好に日常会話と異なる使用傾向が見られ、肯定的な評価を伴う「お」が多く使用されている。このような「お」の多用は、音韻的な要素の伝達が欠如する LINE チャットというメディアに合わせた調整であり、LINE の会話への高い「関与」を示す「文脈化の合図」の一つと見ることができよう。特に相手に直接関わる事柄について、肯定的な感動詞を選好する傾向が強く見られた。肯定的な感動詞の使用は、会話への積極的な関与を示すと同時に、共感構築的な会話展開への志向というメタメッセージ (Tannen 1989) も伝えることになる。<sup>9</sup> 日母において、参加者は互いにこうした肯定的な感動詞を含む文脈化の合図を出し続けることにより、共感構築的な会話スタイルが形成され、維持されていると考えられる。

一方日韓では、解釈の幅が広く、無関心とも受け取られかねない感動詞「へ」の使用や、肯定的な感動詞「お」の使用頻度の低さから、KS は、日母とは異なり、LINE チャットというメディアの特性に応じた調整をあまり行っていないことがわかる。さらに、否定的な感情を表す感動詞の遊戯的な使用も見られた。KS は、様々な感動詞の使用によって、情意的な反応を示し、会話への高い関与を示しているが、肯定的な感動詞を多用して共感構築的に会話を展開するという合図を出し続ける日母とは異なる。むしろ肯定的・否

---

<sup>9</sup> 本研究では日母に否定的な感情表出の感動詞による遊戯的な使用が見られなかったが、遊戯的な言語使用の場面そのものが全く見られなかったわけではない。否定的な感動詞が遊戯的な対立に用いられない理由は今後の課題となろう。

定的とどのような反応でも気兼ねなくできる会話であるという合図を行っている。それに対し JS は、肯定的なニュアンスが伝わる感動詞を多用する傾向が見られ、日母と同様に共感構築的会話展開への志向を示す文脈化の合図を行っているという特徴が見られる一方、相手に関わる事柄か否かによる感動詞の使い分けは見られず、また、否定的な感情を表す感動詞の遊戯的な使用も見られた。つまり JS の会話への関与を示す文脈化の合図は、日母と KS の両方の特徴を持ち合わせていると考えられる。日韓接触場面において、JS は共感構築的会話展開への志向を示しつつ、自らの振舞いを調整し、気兼ねなくやりとりする会話への志向も示している。否定的な感動詞「ふん」はそういった文脈化の合図の一つとして捉えられる。

以上のように本研究では、接触場面の JS は、母語場面のスタイルを一部維持しつつ相手に合わせて調整していることが窺われた。しかし、LINE チャットというメディアを介したコミュニケーションであるがゆえに、表情等の非言語・パラ言語情報の欠如から、相手の文脈化の合図を適切に解釈できず、誤解をする可能性も考えられる。KS の「へ」や「え」等の感動詞の使用により、やりとりが JS の期待した会話展開とならず、コミュニケーションへの満足度が下がる可能性や、遊びの文脈が構築されていない場合に見られる否定的な感情表出に JS が不快感を覚えてしまう可能性も考えられよう。日本語教育や異文化間教育における教育的示唆としては、異なる感情表出を嗜好する韓国語母語話者または日本語母語話者がいることに気づき、互いの違いを理解し、必要に応じて調整する力を身につけることがよりよい異文化間コミュニケーションにつながるということを、日本語母語話者と韓国語母語話者の両方に対して意識させることの重要性が挙げられよう。また、メディアを介した異文化間コミュニケーションが増えていく中、日本語教育における「文字による会話の教育」が今後、益々必要となる。本研究はその基礎研究として位置付けることができると考える。

## 6. 今後の課題

「ことばが特定のメディアで使われるとき、そのメディア特性が何らかの形で影響を及ぼす」(三宅 2011: 22) という指摘があるが、本研究では、感情表出の感動詞の分析を通して、文字チャットというメディアの影響を具体的に示すことができた。一方で、日韓接触場面においては、メディアの影響を受けつつも、日本語母語場面とは異なる特徴も見られ、そこには接触場面の特性による影響が推察される。今後は、韓国語母語場面も分析対象とし、韓国語母語場面との比較を通して日韓接触場面の感動詞の使用傾向を追究していきたい。また本研究は、感情表出の感動詞に焦点を当てたが、今後、スタンプや絵文字等ビジュアル的な感情表現の分析も取り入れ、日本語母語場面及び異文化間の LINE コミュニケーションについてさらなる解明を図りたい。

## 参照文献

- 浅田秀子. 2017. 『現代感動詞用法辞典』東京：東京堂出版.
- 関玲. 2020. 「一連の連鎖全体を収束させる『へー』」、『社会言語科学』22(2)、30-45.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 犬飼隆. 2002. 『文字・表記探求法』東京：朝倉書店.
- 張允娥. 2017. 「日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為—ジェンダーとポライトネスの観点からみる対立と冗談—」、『阪大日本語研究』29、101-128.
- 柏野和佳子. 2019. 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる応答表現」、『言語資源活用ワークショップ2019発表論文集』4、368-380.
- 倉田芳弥. 2018. 「接触場面のLINEの会話における相づちの機能—日本語母語話者と非母語話者の比較から—」、『人文科学研究』14、83-97.
- 倉田芳弥. 2021. 「日韓接触場面のLINEチャットの会話における相づちの表現形式—日本語母語話者と非母語話者の比較から—」、『聖学院大学論叢』33(1・2合併)、37-52.
- 倉田芳弥. 2022. 「日韓接触場面のLINEチャットの会話における相づちの送信方法の分析—相づちの出現箇所に着目して—」、『拓殖大学日本語教育研究』7、1-26.
- 三宅和子. 2011. 「メディア言語研究の意義と日本語教育への応用可能性」、『日本語教育』150、19-33.
- Mori, J. 2006. “The Workings of the Japanese Token Hee in Informing Sequences: An Analysis of Sequential Context, Turn Shape, and Prosody.” *Journal of Pragmatics* 38, 1175-1205.
- 森山卓郎. 1996. 「情動的感動詞考」、『語文』65、51-62.
- 森山卓郎. 2015. 「感動詞と応答—新情報との遭遇を中心に」、友定賢治（編）『感動詞の言語学』、53-81、東京：ひつじ書房.
- 中井好男・船橋瑞貴・副田恵理子・向井裕樹. 2018. 「LINEでの日本語母語話者からの誘いを非母語話者はどう断っているか—『再誘い』を誘発する要因とその背景にある意識—」、『国立国語研究所論集』14、169-192.
- 日本語記述文法研究会（編）. 2008. 「現代日本語文法6第11部複文」東京：くろしお出版.
- 西川勇佑・中村雅子. 2015. 「LINEコミュニケーションの特性の分析」、『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』16、47-57.
- Norricks, N. R. 1994. “Involvement and Joking in Conversation.” *Journal of Pragmatics* 22, 409-430.
- 落合哉人. 2018. 「電子媒体における『フィラー』」、『筑波日本語研究』22、75-104.
- 岡本能里子. 2016. 「雑談のビジュアルコミュニケーション—LINEチャットの分析を通して—」、村田和代・井出里咲子（編）『雑談の美学：言語研究からの再考』、213-236、東京：ひつじ書房.
- 岡本能里子. 2020. 「LINEスタンプが拓く多言語社会—新たなビジュアルコミュニケーションの可能性—」、柿原武史・上村圭介・長谷川由起子（編）『今そこにある多言語なニッポン』、39-51、東京：くろしお出版.
- 岡本能里子・服部圭子. 2017. 「LINEのビジュアルコミュニケーション—スタンプ機能に注目

- した相互行為分析を中心に—」、柳町智治・岡田みさを（編）『インタラクションと学習』129-148、東京：ひつじ書房。
- 大津友美. 2004. 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス：『遊び』としての対立行動に注目して」、『社会言語科学』6(2)、44-53.
- 大津友美. 2007. 「会話における冗談のコミュニケーション特徴：スタイルシフトによる冗談の場合」、『社会言語科学』10(1)、45-55.
- 尾山慎. 2016. 「『小文字表記』という文字コミュニケーションとその『位相』」、『日本語学』35(6)、56-67.
- 高梨博子. 2016. 「遊びのフレームにおける間主観的個性の形成に関する考察—スタンスターキングの視点から—」、『社会言語科学』19(1)、103-117.
- 田窪行則. 2005. 「感動詞の言語学的位置づけ（特集感動詞—未開拓の研究領域へ）」、『言語』34(11)、14-21.
- 田窪行則・金水敏. 1997. 「応答詞・感動詞の談話的機能」、『文法と音声』、257-278、東京：くろしお出版.
- 田中ゆかり・林直樹. 2016. 「『うちことば』におけるキブン表現：スマホ Web 調査に基づく程度差のある感覚形容詞の表現」、『語文』156、92-82.
- Tannen, D. 1989. *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 富樫純一. 2001. 「情報の獲得を示す談話標識について」、『筑波日本語研究』6、19-41.
- 富樫純一. 2012. 「感動詞とコンテキスト」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座6 意味とコンテキスト』、199-214、東京：ひつじ書房.
- 富樫純一. 2020. 「感動詞『ええ』の派生的用法について—苛立ち・不満を示す場合」、『日本文学研究』59、155-143.
- 友定賢治（編）. 2015. 『感動詞の言語学』、東京：ひつじ書房.
- 山根知恵. 2002. 『日本語の談話におけるフィラー』、東京：くろしお出版.
- 楊虹. 2018. 「映画における感情表出の感動詞の日中比較」、『人文：人文学会論集』42、25-34.
- 楊虹. 2022. 「初対面会話における感動詞『へー』『えー』の分析：中国語との対照から」友定賢治（編）『感動詞研究の展開』、189-217、東京：ひつじ書房.
- 姚瑶. 2020. 「中国人学習者における感動詞の習得状況に関する考察」、『早稲田日本語研究』29、13-24.

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

# 英語学習者が母語（日本語）を使ってしまうと 教師はどう対処するのか： 教師の“in English”から開始される修復組織の研究\*

畑 和 樹

東京都市大学

This paper examines the organisation of repair to deviant language alternation of students, from English to Japanese, in foreign language classrooms. Although students' language switch is an instant resolution to their interactional difficulties, such language alternation itself does not index the difficulties. The paper focuses on teachers' particular method with other-initiated repair (e.g. *In English*) for eliciting student's retry of the previous utterance in the medium language: English. The composition of students' self-repair then gradually opens a clue for student's understanding at a particular point of the sequence, which is decisive for trajectories of the repair sequence with or without shifting into more content-oriented correction.

キーワード： 会話分析、言語の切り替え、修復、訂正、教室会話、媒体言語

## 1. はじめに

授業会話は、教師と学習者、もしくは学習者同士によって、教育上の焦点に基づいて執り行われる相互行為に他ならない。教師はトピックの提供者であり、学習者の参加を促進し、学習者を評価する、そして時に活動の達成を阻害する学習者の行為を制止する等、授業活動に責任を持つ存在である (Markee and Kasper 2004)。一方の学習者も、授業活動の焦点や展開に同調し、各々の場面に適した振る舞いをしながら授業活動に従事する必要がある (Seedhouse 2004)。例えば、教師の問いかけが、使用する言語の形式的な正確さを志向したものであれば、学習者の誤りは内容の正否にかかわらず訂正 (Macbeth 2004) される。逆に、教師の焦点が学習者に目標言語を使って会話させることにあり、発話に形式的な正しさが求められていない場面においては、教師の理解が確保される限り、学習者の誤りはしばしば訂正の対象とはならない (Seedhouse 2004: 149)。いずれの

---

\* 本稿の執筆に際し、数多くの有益かつ建設的なご指摘・ご助言を下さった匿名の査読委員の先生方に、心より感謝申し上げます。なお、本研究は [JSPS 科研費 JP19K13273](#) の助成を受けたものである。

場合も、教師の働きかけに即した学習者の行為が授業活動を促進するといえる。

第二言語を教授する授業会話において、参加者の言語選択、つまりどの言語で行為を産出するかは、学習活動の達成に関わる課題の一つである (Auer 1998; Duff and Polio 1990)。言語を実際に使うことを通じて学習を行うアプローチ (Hancock 1997) をとる授業においては、目標言語を行為産出の媒体 (媒体言語) とすることが授業活動における規範となる (Gafaranga 2012)。学習者が母語を使うことでこの規範から逸脱し、その言語選択が学習活動を阻害しようと教師 (あるいは他の学習者) から判断されれば、切り替えを行った学習者に媒体言語の規範に従うことを求めていく (Amir and Musk 2013; Jakonen 2016)。

しかしながら、教師・学習者は常に目標言語を介して授業活動を乗り切るわけではなく、むしろ活動を促進するために言語を「切り替える」ことがある。<sup>1</sup> 特に目標言語の基底能力がまだ十分に備わっていない学習者がいる授業会話においては、一時的に母語、あるいは参加者間で共有した別言語を利用することで、活動遂行上の問題の解決を図る場面がしばしば観察される。学習者が行う言語の切り替えは、授業活動の規範に従う中で、何らかの理由から目標言語を介した発話が困難であることを示唆する (Cheng 2013; Mori 2004)。あるいは、学習者がそもそも媒体言語の規範に従うつもりがない可能性も考えられる (Jakonen 2016)。つまり、学習者による言語の切り替えは様々な理由から為されるわけだが、それらは切り替えが生じた時点で認識可能となるわけでは必ずしもない。そのため、教師は学習者が抱える「活動を遂行する上での困難さ」を明らかにしながら、適切に補助を行うことで活動の達成を導くことが重要となろう。

本稿は、日本人英語学習者による母語への切り替えに対する教師の「規範遵守を促す働きかけ」と、それにより開始される学習者理解を精査する修復組織に注目する。いかなる発言にも英語を使用することが課された一斉授業会話において、学習者による日本語への切り替えは活動上の規範からの逸脱として対処される。その際、教師は“in English”に類する構成の発話を採用することで、語彙や文法を含む発話内容への言及を避けながら、あくまで媒体言語の規範に従うことを促すことで、先行発話を英語でやり直すことを学習者に求める。本稿は、このような教師の修復開始について、まずは選択された言語の適切性の問題を優先的に扱うことで行われる、いわば学習者の理解を精査する取り組みの

<sup>1</sup> 言語の切り替えは、広義に codeswitching として知られている。しかし code は形式としての言語 (language) としての意味合いが強く (Auer 1984; Myers-Scotton 2006)、言語選択を相互行為資源の一つとして考える上では相容れない用語であるといえる。本稿は、目標言語—母語間の切り替えについて、ただ言語形式を切り替えているのではなく、話者による行為の一環として実践される言語選択 (Gafaranga and Torras 2002) であるという視点を採用する。なお、本稿が扱う言語の切り替えは語彙単位と節単位の両方を含むが、分析上、明確な差が見えないことから、それらを区別することはしない。

一部であることを論じる。学習者が先行発話を英語でやり直すことで、より具体的な修復・訂正の要否を判断する資源が教師に提供される。このような学習者発話のやり直しから始まる修復連鎖の中で、教師は学習者が持つ「困難さ」を認識することを試み、学習者がその時点で実現可能なこと、教師による修復・訂正を要すること、あるいは教師が明示的に説明すべきことが段階的に明らかになる。

## 2. 研究の背景

### 2.1. 日常会話と授業会話における修復と訂正

相互行為が展開されていく中で、もし、発話、聞き取り、理解の問題など、会話の進行を阻むような（理解上の）問題が発生した場合は、会話の進行を一時的に中断し、相互理解を確保するための修復（Schegloff, Jefferson and Sacks 1977）が実践される。その修復の軌道は、修復を開始・実行した主体の違いによって、①自己開始—自己実行、②自己開始—他者実行、③他者開始—自己実行、④他者開始—他者実行の4つに分けられる。これらの修復軌道には規範的な偏り（優先性）が存在しており、修復を開始・実行できる最初の機会と同じ発話順番内もしくは順番移行前であることから、①自己開始—自己実行の軌道がまず優先される。修復を自己開始する機会が利用されずに次の順番に移った場合、それでも他者は自己に修復の実行を担わせることから、③他者開始—自己実行が①に次いで優先的である（Schegloff et al. 1977）。

授業会話の進行を阻害する要素への対処は、大きく分けて以下の二点から制度的な様相を見せる。第一に、日常会話において修復はあくまでも理解上の問題が会話の進行を阻害しうるときに為されることであり、授業会話でしばしば発生する「理解はできるが誤りがある」ことへの対処とは一線を画する。日常会話で理解を阻害しない誤りが見過されるのは「発話の形式的な正確さ」よりも「理解に基づく進行性」を志向する日常会話の特性によるところが大きい。授業会話においても、学習者の発話に形式的な正しさが求められていない限りは、同様のことを確認することができる。その一方で、制度的に「目標言語としての形式の正しさ」を焦点におく授業活動においては、発話が理解可能であるかに関わらず、学習者の誤りは教師から問題源として指摘されうる。ここで為される教師の対処は、厳密に言えば理解上の問題を扱う修復としてではなく、学習者の発話内容・知識・主張の正確さを志向する訂正として理解されるべきであろう（Macbeth 2004）。<sup>2</sup> 第二に、訂正を開始するのは学習者自身ではなく主に教師であり、しかしあくまで学習者自身に訂

<sup>2</sup> 一部、修復と訂正に明確な区別を付けない記述も散見されるが（Kasper 1985; Markee 2005; Seedhouse 2004）、訂正は修復の一環として実践されることはあれ、それぞれが扱う問題の違いから区別できる。

正させる機会を与えるべく (Bolden 2011; Hellermann 2009)、上記③の他者開始—自己実行 (教師開始—学習者実行) が訂正の軌道としては優先的といえる (McHoul 1990; Macbeth 2004)。

## 2.2. 第二言語授業における規範：媒体言語と言語の切り替え

第二言語授業会話における言語の切り替えは、会話場面に即した話者の志向を示すものとして、あるいは受け手に対するデザインの一環として、授業活動を遂行する上で様々な理由から実践されることが知られている (Auer 1998)。一方で、目標言語を活動の媒体とする規範が織り込まれた授業会話では、その時々々の活動目的に即した適切な言語選択が求められる (Gafaranga and Torras 2002)。ゆえに、目標言語を介した発話が求められる場面において、もし学習者が母語への切り替えを行ったのであれば、教師はそれが活動遂行を阻害する行為であると判断し、母語によって産出された要素に限定した修復を行うことで (Sert 2015: 127)、もしくは言語選択の適切性の問題をより明示的に指摘する (Amir and Musk 2013; Jakonen 2016) ことで、学習者による母語への切り替えが適切でなかったことを告知する。

ここで問題となるのが、学習過程にいる学習者にとって、たとえ目標言語を介して学習活動に従事することが制度上求められていたとしても、その言語ではどうしても理解できない・言えないことがあるという矛盾である (Macaro 1997: 76)。学習者が目標言語を使うことが難しい場面に直面した際に、母語などの別言語に切り替えるという方法は活動遂行上の課題を解決するひとつの方法である。例えば Auer (1995) は、言語を切り替えるという行為を、話者にとってより理解が深い別言語をやり取りの媒体にすることを求める行為として捉え、受け手がそれを承認／拒否することで、どちらの言語がより規範的であるかを相互行為上で認識可能にするとした。この Auer の視点に立てば、学習者による母語への切り替えは、自身の理解が浅い目標言語を使用することを回避し、代わりにより身近な言語である母語を優先した帰結であると考えられる。しかしながら、母語への切り替えは必ずしも学習者の理解が欠如していることに起因するわけでもなければ (Köppe and Meisel 1995: 297-298)、単純に学習の失敗を示すわけでもない (Firth and Wanger 1997: 761-762; Mori 2004: 547)。

これまでの会話分析研究では、第二言語学習環境における参加者の言語選択を微視的に記述する試みがとられ、授業活動の遂行に貢献する言語の切り替えについて多くの記述が与えられている。たとえ媒体言語の規範が織り込まれた学習活動であれ、言語の切り替えは授業活動を遂行する上での規範の<sup>1</sup>時的な停止 (Gafaranga and Torras 2002: 16) といえる。例えば、先行する失敗した質問 (failed question) を修復する (不在となった学習者の応答を引き出す) ため、あるいは学習者理解の正しさを確かめるために教師によって母語が利用される (Üstünel and Seedhouse 2005)。学習者にとっても、先行発話を詳細

化する修復のため (Greer 2008, Ziegler, Sert and Durus 2012)、もしくは活動の進行性を確保しながら語彙の問題に対処するため (Cheng 2013; Mori 2004)、母語が活動遂行に関わる重要な資源として用いられることが報告されている。教師・学習者共に、その時々における言語選択によって、各々がいま何を志向しているのかを表す中で、媒体言語を使用するという規範に最大限従いながらも母語を活用しながら活動を遂行していくことが、参加者の特性や会話場面の違いを超えて確認できる。

### 2.3. 本稿が明らかにする課題

上述の先行研究を踏まえれば、以下のことが言える。まず、①教師・学習者ともに、学習活動の目的や焦点に即して言語を選択する。そして、②適切な言語選択は活動を促進させるが、③活動の焦点に即さない言語選択は修復の対象となる。これまでの先行研究では、教師・学習者による言語選択—特に母語への切り替え—を活動達成に貢献しうる資源として注目してきた傾向が強い。しかしながら、学習者は常に教師に同調した行為を取るとは限らず、しばしば相互行為の展開からして適さない行為を行う。そのうえ、教師による規範遵守の働きかけが学習者の媒体言語への志向を回復するとも限らない (Amir and Musk 2013; Jakonen 2016)。学習者による母語への切り替えが問題として扱われた事例において、修復がいかんして開始され、どのような軌道を描くことで遂行されるのかについて、その修復組織の記述は限定的であるといえる。

Gafaranga (2012) が指摘した通り、言語選択の適切性に関わる修復の分析は、それが生じた位置、修復の開始者および実行者、そして修復の帰結を含めて分析することが重要となる。学習者による母語への切り替えには様々な理由が考えられる中で、教師はどのような技法をもってその理由を特定するのか。さらにいえば、たとえ教師が様々な方法で学習者による修復を促しても、それがいつまでも達成されない場合は、いずれは教師による修復の（他者）実行が為されよう。その際、教師はどの時点で修復の実行へと踏み込むのか。そして、その判断はいかなる相互行為上の理由から導かれるのであろうか。これらの問いを踏まえ、本稿は一斉授業会話における媒体言語の規範を志向した修復組織をより鮮明にすることを試みる。

## 3. データ

本稿で扱うデータは、東京に所在する M 大学における 1 年生を対象とした必修英語科目の授業をビデオカメラで録画したものである。授業は同大学における中級レベルとして開講され、1 クラスにつき日本人教師 1 名、日本人学習者 30 名程度、すべて日本語母語話者の授業会話である。データの収録は 3 クラスを対象に行い、1 回 100 分、計 8 回の授業を録画した。録画機材の設置は各授業が始まる前に研究者によって行われたが、録画の

開始・終了は教師に一任した。そのため、授業の開始前や途中で録画が開始された、また授業終了前に録画が止められた授業回があり、総計で約 10 時間分の録画データとなる。

収録された授業会話は会話分析で採用される記号 (Jefferson 2004) を用いて転写し、計 34 件の「修復の対象となった学習者による日本語への切り替え」を確認した。それら事例をひとつひとつ、教師と学習者の行為の相互行為上の位置と構成に注目し、学習者が修復を実行したことで修復連鎖が終了した事例 (11 件)、その修復実行部の構成に基づき教師が訂正を実行した事例 (10 件)、そして学習者による「やり直し」の修復が達成されず教師が修復を実行した事例 (13 件) のコレクションを作成した。これらの事例において、分析にマルチモダルな視点が求められる箇所については、録画で確認できる参加者の振る舞いを Mondada (2018) の転写法を一部用いて転写した。なお、一部の事例では、複数の学習者の振る舞いを STs のコードを用いて一行で示している。

#### 4. 分析

分析に先立ち、ここで本稿が明らかにすることの全体像を示しておきたい。本稿が注目する現象は、教師による「媒体言語の規範遵守を促す働きかけ」から開始される、以下の流れで為される修復連鎖である。

- 学習者： **日本語への切り替え**
- R1 教師： **修復開始 (媒体言語を介した「やり直し」の要求)**
- 学習者： **修復実行：先行発話のやり直し**  
 (やり直し発話が形式の上で正確であれば修復連鎖は終了)
- .....
- |   |  |
|---|--|
| <p>「やり直し」に訂正対象が含まれる場合</p> <p>c 教師： <b>訂正の他者実行</b></p> <p>学習者： <b>教師訂正への理解提示</b></p> | <p>「やり直し」に日本語要素が残る場合</p> <p>R1' 教師： <b>日本語要素に限定した修復開始</b></p> <p>学習者： <b>修復実行</b></p> <p>「やり直し」が達成されない場合</p> <p>&gt;&gt; 教師： <b>候補の提供 (他者実行)</b></p> <p>学習者： <b>候補への理解提示</b></p> |
|---|--|
- .....
- R2 教師： **学習者による (最終的な) 修復・訂正実行の促し**
- 学習者： **修復実行**

学習者が日本語への切り替えを行った直後、教師はまず “in English” に類する構成の発話で、学習者が選択した言語の適切性を志向した修復を開始する (上記、R1)。その修

復実行部 (→) の発話構成から、学習者が英語を用いて（その時点で）できる／できないことが公然となり、活動遂行上で学習者が抱える困難さを判断する資源となる。ここでの発話構成が英語の形式上（教師にとって）正確であると判断されれば修復は完了する。一方、学習者の修復実行に形式的な不正確さが残る場合、その点に限定した具体的な訂正に進む (c)。

しかし、学習者は先行発話をやり直す際に日本語を再利用することがある。その場合は R1 で開始された修復が達成されず、教師は再利用された日本語要素を解消するための修復を開始する (R1')。ここで学習者が英語で修復を実行できなければ、教師は語彙の候補を提供するかたちで修復を実行する (>>)。教師が提供した修復候補に学習者が理解を示せば、教師は学習者の修復・訂正実行を促すことができる (R2)。反対に、学習者の理解が確認できなければ、学習活動の達成に必要となり得る知識の欠如が明らかとなり、教師はその要素を明示的に説明することを経てから R2 に進む。

本稿はこれらの事例を通じて、媒体言語の規範遵守を促す修復は、規範からの逸脱を告知するためだけに独立した体形で為されるものではなく、あくまで学習者理解の精査の一環としての取り組みであることを論じる。学習者による日本語への切り替えが生じた時点ではその理由が限定されておらず、その行為自体が学習者の抱える困難を明らかにするものではない。教師にしてみれば、日本語への切り変えを単に規範からの逸脱として対処することで済むのか、あるいは学習者が持つ何らかの困難さを示すものとして扱うべきかを判断することが求められよう。このような状況下で為される教師の “in English” は、言語選択の適切性の問題と学習者の理解あるいは知識の問題、そのどちらの可能性も残されている状況に対処する技法といえる。

#### 4.1. 教師による規範遵守の促しと学習者の「やり直し」

学習者による日本語への切り替えに対処すべく、教師は学習者発話の内容の精査に踏み込む前に、まずは学習者に先行発話を英語でやり直すことを要求するかたちの修復を開始する。事例 1 は、学生がグループに分かれて空港会話のロールプレイを行った後で、OSH（旅行者の役）と FUK（空港職員役）が授業全体に公開するかたちでロールプレイを行っている場面である。職員役の学生には日付と各日の空席状況が示された資料が配られており、適宜資料を参照しながら活動に従事する。1 行目の OSH による空室確認への応答として、FUK は資料を確認したのち、5 行目でその日は空席がないことを日本語に切り替えて伝える。この FUK による言語の切り替えは、躊躇 (Stivers and Robinson 2006: 385-386) や休止 (Schegloff 1979)、あるいは言葉探し (Lerner 1996) 等、活動を続けるうえでのトラブルを示唆させる進行性の滞りが順番構成に含まれておらず、媒体言語からの逸脱が突発的に発生している。この時点における FUK の感情や思考に踏み込んだ分析は不可能であるが、このやり取りを見る限り、少なくとも英語の発話に関して

FUK が抱える特定の困難さを確認することはできない。

### 事例 1

- 1 OSH: how ab [out  
 2 FUK: [okay  
 3 OSH: ah: Ju&ne 28th.  
 fuk: &右手に持っている資料を確認する ---->  
 4 (4.9)&(0.3)  
 fuk: -----&OSH に視線を戻す  
 5 FUK: **あいてない [っす**  
 6 STs: [laughter  
 7 %(0.3) &(0.5)  
 t1: %教卓から移動し FUK に近づく  
 fuk: &再度、資料を見る ----->  
 8 R1 T1 no (.) &ENGLISH  
 fuk: -----&教師に視線を向ける  
 9 (0.2) &(0.4)  
 fuk: &OSH に視線を戻す  
 10 → FUK: we have no vacancy on the day  
 11 (.)%(0.8)  
 t1: %頷く  
 12 OSH: eh:::

質問－応答連鎖の第一成分の位置（行1・3）にある OSH の英語を用いた問いかけに対し、第二成分の位置（行5）で FUK が日本語を介して応答したことで、活動遂行上で両者の志向に不一致が生じている。そこで教師（T1）は連鎖内における第三位置（行8、R1）の機会を利することで、これ以上の連鎖が構築されるまえに修復を開始する（Benjamin 2012: 104; Schegloff 1992）。ここで教師は“no”（Hellermann 2009）を用いて FUK の日本語発話が状況からして適切でないことを告知し、同時に次の順番において英語を用いて先行発話をやり直すことを要求する。この教師の修復開始は、文法や語彙に関する学習者理解の精査に入る前に、その準備（McHoul 1990）として、先行発話をすべて英語（媒体言語）の形式にする試みである。日本語への切り替えがいかなる理由から行われていようとも、学習者のやり直しによって発話が英語で提供されることで、学習者が修復を実行する上で抱える課題を教師が認識する助けとなろう。FUK が修復実行部（行10、→）において発話をやり直し、その構成に本格的な訂正を要すことがないことを教師が確認できたことで、本来のロールプレイの流れが回復している。

事例1は学習者の日本語への切り替えが、いわば突発的に発生した場面である。一方で学習者の順番構成に（日本語への切り替えが起きる前に）何らかのトラブルを示唆させる事例においても、教師は言語選択の適切性の問題を優先的に扱うことが確認できる。例えば事例2は、授業の途中で偶発的に発生した教師と学習者 KAI のやり取りである。いつもは発言の多い KAI がこの日に積極的な参加を見せていなかったことから、一つの活動が終わった後、1行目で教師（T1）が KAI に近づきその理由を問いかける。KAI は教師の質問に応答する中で（行3-4）、自身の参加度が低い理由を日本語に切り替えて明かす。

## 事例2

- 1 T1: wh:y you& don' talk much today.  
kai: &頭を上げ、隣に立つ教師に視線を向ける  
(0.6)
- 2  
3 KAI: &because I &°er:::°  
kai: &顔を水平に戻す &うつむく --->  
4 &ねぶそく？  
kai: --&顔を上げ、教師の顔を見る  
(0.4)
- 5  
6 R1 T1: in english p↑lease?  
7 (0.3)
- 8 KAI: so&(h) rry  
kai: &少し腰を浮かせ、座席に深く座りなおす  
9 (0.3)
- 10 → KAI: &ah:: I er &not sleeping well  
kai: &うつむく ---&顔・視線を水平に戻す
- 11 → we&ll °yester [day°  
kai: &顔を上げ、教師の顔を見る
- 12 T1: [but wh:y you didn't?  
13 (0.5)
- 14 KAI: why (0.3) er:m

日本語への切り替えが発生した KAI の順番（行3-4）は、進行性の滞りが発生しているとともに、上げ調子のイントネーションで終わる構成（Sacks and Schegloff 1979: 18）をとっており、KAI が英語を介して応答行為を完成するうえで何らかの困難を抱えている

ことが示唆される。<sup>3</sup> この時点で、KAIは自身が抱える語彙の問題に当座的に対処すべく日本語へ切り替えることで、言語選択の適切性よりも進行性を優先した (Cheng 2013; Mori 2004)、という観察は十分に可能であろう。

しかしながら、KAIが日本語に切り替えた時点において、KAIが抱える困難がいかなるものかまでは定まっていない。KAIにとって“寝不足”(行4)を英語にする上で複数の候補があったのか、もしくは対応する英語の語彙をそもそも持ち合わせていないのか、あるいは英語を用いて応答を産出する上で何らかの躊躇があるのか。KAIにとっての課題は様々に考えられるが、KAIが英語で実行できる／できないことは、自身の発話が形式の上で適切となった後ではっきりしてくる。教師の6行目(R1)における修復開始を受け、KAIは8行目で先行する母語への切り替えが問題であることの自覚を示し (Sert and Balaman 2018: 365)、10-11行目(→)において若干の情報を付加しながら英語を介して先行発話をやり直す。この時点におけるKAIの発話は文法的に正確とはいえないものの、少なくとも教師がそれを問題として扱わなかったことで、修復連鎖から内容理解を志向した問いかけ(行12)に移行する。<sup>4</sup>

#### 4.2. 規範遵守を促す「修復」から発話の「訂正」へ

事例1・2を通じて、学習者ができる／できないことは、日本語への切り替えが生じた位置で明らかになるものではなく、英語を用いた修復実行部で認識できることを確認した。ここで、媒体言語の規範遵守を促す教師の修復開始が、いかなる理由から連鎖における第三の位置で重要となりえるのか、および、その修復が学習者の理解を精査するうえでどのような役割を持つのかを踏まえ、言語選択の適切性の問題を扱う修復連鎖(R1)が本格的な訂正に入る前段階であることを明確にしたい。

事例3では、質問-応答連鎖における第三位置で為される教師の修復開始が、学習者が用いるべき言語を指定しない構成で開始される。この授業においては、その日に扱う教科書内容である恐怖症に関する語彙を使わせるため、教師はランダムに学習者を指名して発言を求めていく。断片が開始される直前に教師(T2)がMEIを指名し、その後の1行目で質問を行う。MEIは2-3行目で活動の焦点に即して発話を行うが、一部の要素を日本語に切り替えて発話することで順番を完了する。MEIの応答は、教師の問いかけに対

<sup>3</sup> 教師による“why”の質問は、KAIの参加度が低いことに対する不平を提示している可能性もある (Bolden and Robinson 2011)。その解釈に基づけば、KAIの“er:::”は下を向くジェスチャーから言葉探しの側面を持ちながらも、教師の不平に対する応答を構築する躊躇であるともとれる。また、KAIのtry-markerは、“寝不足”という単語が教師にとって理解可能であるか、というよりも、この場におけるKAIの応答行為の適切性 (Schegloff 2007: 162) に志向したものであろう。

<sup>4</sup> 教師がKAIによる文法の誤りを指摘しなかったことには、この会話場面がoff-task (Markee 2005) であり、less-task-focused (Hellermann 2009) であったことが考えられる。たとえタスク外の活動であれ、教師は少なくとも媒体言語の規範を志向していることが示されている事例であろう。

して構造上の同調 (Raymond 2003) を示しており、教師から求められた情報を提供するには十分であろう。一方、教師は5行目で、MEIが日本語で発話した要素をもう一度発話することを求める。その後の流れから、この教師の働きかけはMEIによる日本語への切り替えを問題として扱うものであったことがわかる。しかしMEIは7行目で同じ日本語要素を再び産出してしまふ。

### 事例3

|           |    |      |  |
|-----------|----|------|--|
| 1         |    | T2:  | what are you afraid o:f.=                    |
| 2         |    | MEI: | =eh I'm afraid of                            |
| 3         |    |      | &こうしょ  |
|           |    | mei: | &右手を上下に振る ((「高さ」のジェスチャー))->                  |
| 4         |    |      | (0.2)  |
|           |    | mei: | ----->                                       |
| <u>5</u>  |    | T2:  | %>afraid of<& what?                          |
|           |    | mei: | -----&                                       |
|           |    | t2:  | %右腕を伸ばし MEI を指す ----->                       |
| <u>6</u>  |    |      | (0.3)  |
|           |    | t2:  | ----->                                       |
| <u>7</u>  |    | MEI: | こうしょ=  |
| <u>8</u>  | R1 | T2:  | =ah:% correct it                             |
|           |    | t2:  | -----%右腕を下す                                  |
| <u>9</u>  | R1 |      | to eng [lish.                                |
| <u>10</u> |    | MEI: | [ah  |
| <u>11</u> |    |      | (0.2)  |
| <u>12</u> | →  | MEI: | I'm afraid of ver- <b>very h:igh place</b> = |
| <u>13</u> | C  | T2:  | =okay you are afraid of                      |
| <u>14</u> | C  |      | <hei&gh[t>                                   |
|           |    | t2:  | &「高さ」のジェスチャー---->                            |
| <u>15</u> |    | MEI: | [height yes% yes                             |
|           |    | t2:  | -----%                                       |
| <u>16</u> |    |      | (.)  |
| <u>17</u> | R2 | T2:  | try again.                                   |
| <u>18</u> |    |      | (0.3)  |
| <u>19</u> |    | MEI: | a::im ((I'm)) afraid of height               |

ここでまず注目すべきことは、一度目の修復（行5-7）が失敗したことで、修復の達成が

遅れたことである。5行目の修復開始は、学習者の順番構成要素を再利用しながらも、先行発話にある問題源を無限定の質問詞“what”で置き換えることで、3行目の“高所”が修復可能であることを枠づける (Drew 1997: 71) ものであろう。しかし、教師が用いた無限定の質問は、確かにそれが適切性の問題を指摘している可能性もあるものの、まずはそれを聞き取りの問題を示すものとして扱うことが優先的に選択されるものである (Svennevig 2008)。MEIによる日本語の再利用(行7)は、まさに教師の修復を聞き取りの問題を提起するものとして捉えたことの帰結であろう。そこで教師は8-9行目(R1)で、ここでMEIが対処すべきことは聞き取りの問題ではなく、選択した言語の適切性の問題であることを明確にすることを試みる。そして12行目(→)でMEIによる先行発話のやり直しが行われ、そこで使用された文法や語彙に基づき教師はMEIの理解を具体的な内容面から精査することが可能となる。

次に、教師による媒体言語の規範を促す修復から、学習者発話の訂正に進む流れに目を向けたい。MEIは12行目で先行発話を英語でやり直すが、その際に教科書内容の目標語彙“height”を使わなかったことが、ここでの教師の焦点となる。教師は13-14行目(c)における先行発話への理解を示す発話に、教科書内容に即して訂正候補を埋め込む (Jefferson 1987)。この提供語彙についてのMEIの理解が確認できたことで(行15)、教師はMEIに訂正実行を促し(行17, R2)、その訂正が達成された(行19)後で、中断されていた授業活動に戻ることができている。つまり、媒体言語の規範遵守を促す修復は、言語選択の適切性の問題を提起するものとして独立しているとはいえ、後続する訂正と協働する取り組みであるといえる。

#### 4.3. 学習者の理解上の問題への対処：「やり直し」の失敗と教師の修復実行

学習者のやり直し発話に誤りが含まれていた場合は、教師はその点に限定した訂正を行うことを4.2で確認した。しかしながら、学習者のやり直しが何らかの理由から実現できないのであれば、学習者はそれをいずれかの方法で示すことになる。

ここで、学習者が選択すべき言語が制度的に示された後で、学習者が日本語要素を一部再利用してやり直しを行う現象を扱う。これらの事例にみられる二度目以降の日本語利用は、選択された言語の適切性の問題を越えて、学習者による(その時点における)知識の欠如への当座的な対処であることを教師が認識する資源であり、それが明らかになった段階で教師による修復の他者実行が選択される。

事例4は、教科書内容(書籍をダウンロードすることの正当性)に基づき、教師が学習者に意見・主張を求めるコミュニケーション活動の断片である。この事例においても、教師(T1)は学習者と協働して修復を遂行することで、学習者の理解を段階的に確認していく。1行目で教師はHISに書籍をダウンロードすることが合法かどうかについて意見を求め、4行目でHISはそれが違法であるという認識を教師に伝える。教師は6行目でそ

の理由を尋ねるが、8行目でHISの応答が日本語で提供されたことから、10行目（R1）でやり直しを求める修復を開始する。しかし、HISが16行目（→）で日本語要素を部分的に再利用する構成で修復を実行したことで、教師は18行目（R1'）において日本語の語彙そのものを問題として扱うかたちで再度の修復を試みる。それを受けたHISは20行目で同じ日本語の語彙を利用して修復を実行するが、その結果として教師は21行目（>>）で修復候補を提供することを選択する。

#### 事例4

1 T1: do you think erm  
 2 (0.4)  
 3 downloading books is legal?=  
 4 HIS: =n:o she was not right.  
 5 (0.3)  
 6 T1: okay why is that?  
 7 (0.7)  
 8 HIS: **はんざい だから**  
 9 (.)  
 10 R1 T1: yeah %sure (0.2) but n' english  
 t1: %頷く  
 11 (.)  
 12 HIS: ah okay.  
 13 (0.1) &(0.3)  
 his: &下を向く -->  
 14 → HIS: because &like erm  
 his: -----&正面を見る  
 15 (.)  
 16 → what she was doing is **はんざい**.  
 17 (.)  
 18 R1' T1: su%re but %what she did i:s?  
 t1: %大きく頷く %HISの方向に近づく -->  
 19 (0.3)%(0.4)  
 t1: -----%  
 20 HIS: **はんざい** maybe=  
 21 >> T1: =illegal.  
 22 (0.5)

|           |     |      |                          |
|-----------|-----|------|--------------------------|
| <u>23</u> | HIS |      | o&h yes illegal% yes     |
|           |     | his: | & 着席状態のまま少し前傾            |
|           |     | t1:  | % 頷き                     |
| <u>24</u> |     |      | (0.5)                    |
| <u>25</u> | R2  | T1:  | so: say it again         |
| <u>26</u> |     |      | (.)                      |
| <u>27</u> | HIS |      | er what she was doing is |
| <u>28</u> |     |      | illeg [al                |
| <u>29</u> | T1: |      | [good                    |

この事例における HIS による複数回の日本語の利用（行 8, 16, 20）を、それぞれの生起位置の違いから、広義に「言語の（日本語への）切り替え」として、いわば同一の行為のように捉えることは適切ではない。これまで確認した通り、教師による媒体言語の規範遵守を促す修復開始（行 10, R1）は、先行発話において HIS が日本語へ切り替えた理由が明確ではない状況において、あくまでも選択言語の適切性の問題を、学習者発話の正確さ以前の問題として扱うものである。この教師の働きかけに応えるべく、HIS は英語を用いて先行発話のやり直しを試みるが、その中では進行性の滞りが発生し、かつその後で日本語の再利用に続く流れが見られる（行 14-16、→）。この再度の日本語利用を、教師はもう一度 R1 のような構成で修復することは可能であったはずである。一方で、教師による再度の修復開始（行 18, R1'）は、先行発話の日本語語彙を問題源として指定する方法で為される（Koshik 2002）。そして、その後の HIS の修復実行（行 20）は“maybe”を伴いながら同じ語彙を再び利用する構成で為されており、修復を実行する上で HIS がそれ以上の方法を用いえないことを強く示唆するものとして、修復の軌道上で大きな意味を持つ。

HIS のやり直しがいつまでも達成されなければ、その間、授業活動を中断し続けることになろう。そこで教師は 21 行目 (>>) で、教科書の単元ページに載っている語彙“illegal”を提供することで、HIS に促していた修復を実行する。この教師による修復の他者実行は、活動本来の進行性をこれ以上中断することなく、しかしあくまでも学習者による修復の自己実行を実現するための最終手段といえよう。

ここで、教師の提供語彙に対する HIS の理解提示が、HIS による自己修復への軌道を決定づける資源であることを強調したい。HIS は 23 行目において自身の認識状態の変化 (Heritage 1984) を表示するとともに、“yes”を繰り返す構成を採ることで、この時点で語彙を思い出したことを伝える。つまり、HIS は提供語彙についての知識がなかったわけではなく、ここまで（その他の類義語を含めた）語彙にアクセスできなかったことが、これまで日本語が複数回用いられた理由として遡及的に主張されている。教科書単元の語

彙に関する HIS の理解が認識できたことで、教師は 25 行目 (R2) で HIS による最終的な修復実行を促す。そして HIS が 27-28 行目で自己修復を達成したことで、中断していた本来の授業活動に戻る。このように、教師が候補を提供した直後の位置は、学習者がその候補を理解しているという認識スタンス (K+) (Heritage 2012) を示すことが、学習者による自己修復の実現を促進する資源といえる。

一方で、学習者が提供語彙に対して「知らない」というスタンス (K-) を示した場合は、修復連鎖が中断され、教師による語彙の説明へ移行する。事例 5 は、コミュニケーション活動の一環として、学習者が教科書内容の語彙を用いて自らの部屋を説明する場面である。断片開始前、IDE は自身の部屋のレイアウトを否定的に評価しながら紹介したため、教師 (T3) は 1 行目で IDE にその理由を問いかける。ここでも、IDE の日本語への切り替え (行 6)、やり直しを促す教師の修復開始 (行 8-9、R1)、IDE による日本語を再利用しながらの修復実行 (行 11-16、→) の流れで修復連鎖が構成されている。<sup>5</sup>

### 事例 5

|    |    |      |                               |
|----|----|------|-------------------------------|
| 1  |    | T3:  | why you are em you don't like |
| 2  |    |      | [your room?                   |
| 3  |    | STs: | [laugh [ter                   |
| 4  |    | T3:  | [wh:::y                       |
| 5  |    |      | (0.9)                         |
| 6  |    | IDE: | めっちゃ きたないん (で) [すよ=           |
| 7  |    | STs: | [laughter                     |
| 8  | R1 | T3:  | =okay %ah:::                  |
|    |    | t3:  | %左手を伸ばし IDE を指す --->          |
| 9  | R1 |      | %say that in english          |
|    |    |      | -- %左手を下す                     |
| 10 |    |      | &(1.3)                        |
|    |    | ide: | &着席したまま前傾し、机に両肘を立てる           |
| 11 | →  | IDE: | I [er-                        |

<sup>5</sup> ただし、今回の教師は学習者の日本語要素を残したやり直し発話を提供された直後に修復候補の提供 (>>) に移っていることに注意が必要である。これについて、IDE がやり直す過程で沈黙や下を向く振る舞いを行ったことによって進行性に大きな滞りが発生したことから、IDE が当該の語彙を知らない可能性を教師が認識したからこそ、事例 4 で確認した「再利用された日本語要素に向けた修復段階」(R1') を省略したことがあり得る。実際、教師が提供語彙に“messy”を選択した理由は明らかでない。教科書単元や当クラスの録画全編を通じて当該の語彙が扱われたことはこのやり取り以外には無かった。つまり、このクラスの学習目標上、当該語彙はキーワードではなく、IDE は必ずしも“messy”を使う必要は無いはずである。

|           |    |      |                                    |
|-----------|----|------|------------------------------------|
| <u>12</u> |    | T3:  | [ <u>beca</u> :use=                |
| <u>13</u> | →  | IDE: | =because &eh::                     |
|           |    | ide: | &下を向く --->                         |
| <u>14</u> | →  | IDE: | &I don't ah my room is very er%::  |
|           |    | ide: | -- &教師に目線を合わせる                     |
|           |    | t3:  | %頷く                                |
| <u>15</u> |    |      | (0.4)                              |
| <u>16</u> | →  | IDE: | <u>きたない</u> =                      |
| <u>17</u> |    | STs: | =laughter                          |
| <u>18</u> |    |      | (0.3)                              |
| <u>19</u> | >> | T3:  | messy                              |
| <u>20</u> |    |      | (1.2)                              |
| <u>21</u> | >> | T3:  | messy                              |
| <u>22</u> |    |      | % (5.1) % (0.6)                    |
|           |    | t3:  | % "messy" を板書 --- %IDEの方を向く        |
| <u>23</u> |    |      | (0.5)                              |
| <u>24</u> |    | T3:  | d' you know <what (0.3) it means?> |
| <u>25</u> |    |      | (0.4) & (1.9) &                    |
|           |    | ide: | &首を横に振る&                           |
| <u>26</u> |    |      | % (6.2) %                          |
|           |    | t3:  | %教師が教卓上の物を散らからせる%                  |
| <u>27</u> |    |      | h%ere (0.3)                        |
|           |    | t3:  | %両手を広げて教卓の方向に向ける --->              |
| <u>28</u> |    |      | <mess%y>                           |
|           |    | t3:  | -----%両手を下す                        |
| <u>29</u> |    |      | & (4.5) &                          |
|           |    | ide: | &IDEがノートを取る&                       |
| <u>30</u> |    |      | & (0.9)                            |
|           |    |      | &顔を上げる                             |
| <u>31</u> | R2 | T3:  | okay can you make your [sentence?  |
| <u>32</u> |    | ???  | [( )                               |
| <u>33</u> |    |      | (0.2)                              |
| <u>34</u> | R2 | T3:  | wh:y you don't like your [room     |
| <u>35</u> |    | IDE: | [ah:=                              |

36 =because ah it's mess [y:

37 T3: [goo:d

教師が最初に語彙の提供を行った直後の位置（行 20）は、その語彙に関する IDE の認識提示が自己修復の可能性を判断する重要な要素となる。ここで IDE がいかなる応答も産出しなかったことから、教師は 21 行目で同じ語彙をもう一度提供すると同時に、22 行目において今度はその語彙を黒板に板書することで再度 IDE の理解を確認することを試みる。しかし、23 行目の再度の沈黙によって IDE の理解がいまだに明らかにならないことから、教師は 24 行目で明示的に IDE の知識を確かめる。そして 25 行目で、ようやく IDE が首を振る動作を介して語彙を知らない（K-）ことを示したことから、その語彙について教師による具体的な説明を要することが明らかになる。

教師は 26-30 行目で語彙の説明を行い、31-34 行目（R2）において中断していた修復連鎖を再開する。その際、教師は 1 行目と同じ構成の問いかけを用いて IDE に自己修復実行の機会を与える。その後、IDE が 35-36 行目で、提供語彙を含んだ正確な発話をもって修復を実行できたことで一連の修復連鎖が終了する。

この事例からわかることは、少なくとも教師は先行発話の“きたない”を“messy”に置き換え可能であること、そして、その語彙を具体的に説明することの必要性を相互行為上で認識したからこそ、修復を一時中断することを選択したことであろう。そして、その判断には、IDE が規範に即して先行発話をやり直す中で同じ日本語を再び用いたことに加え、教師が提供した語彙への理解を示さなかったことで、IDE の知識状態を教師が認識できたことが関わっている。

事例 4・5 では、いずれも教師による修復候補の提供が為されているが、それぞれ異なる修復連鎖の軌道をとる。規範遵守が促された後で生起する学習者による当座的な日本語利用は、その時々において自身が語彙にアクセスできないことに対処する行為であったことが伺える。しかしながら、其々の学習者が抱える具体的な困難さ、例えば提供された語彙を知っていたが一時的にアクセスできなかったのか（事例 4）、それとも提供語彙を含めたいかなる語彙への知識も欠落しているのか（事例 5）は、修復連鎖の軌道を大きく左右するものであると同時に、媒体言語の規範遵守を促す修復（in English など）から開始される一連の連鎖において段階的に明らかになるものである。つまり、このような修復連鎖は、学習者が日本語に切り替えた—媒体言語の規範から逸脱した—理由を確認しながら、言語選択の適切性の問題・学習者の理解上の問題、どちらをいつ扱うべきかを志向しながら、学習者による自己修復の実現を目指すデザインであるといえる。

## 5. 結語

本稿では、第二言語を教授する一斉授業会話にみられる学習者の母語への切り替えに対処する修復組織を分析した。学習者が為す日本語への切り替えは、選択言語の適切性を犠牲にしながらも進行性を優先することで、その時点で抱える困難に対する当座的な対処 (Cheng 2013; Mori 2004) であるといえ、そのために媒体言語である英語を使用するという規範から一時的に逸脱するものであろう (Gafaranga and Torras 2002)。その一方で、言語を切り替える行為自体が、学習者が抱える困難さを特定するものではないことを本稿では見てきた。言語の切り替えのみならず、躊躇標識や休止、言葉探し等による進行性の滞りは、活動を遂行する上での困難さを示唆する要素ではある。しかしながら、学習者がもの忘れ等により一時的に語彙へのアクセスを持たないのか、あるいは活動の遂行に必要な知識がそもそも欠落しているのか等、学習者が直面している困難さを区別することは容易ではない。教師にとって、学習者がいかなる理由で発話に日本語を選択したのかについて、学習者に媒体言語の形式的な正しさを求める授業活動の焦点を踏まえれば、学習者のその時々を理解を認識することは重要な課題となる。

本稿の分析で示したように、“in English”に類する構成の発話によって教師が開始する修正連鎖は、大きく分けて二段構造で構成されているといえる。まず言語選択の適切性の問題を優先的に解消すべく、語彙・文法の正確さや発話内容を精査する以前に、学習者による先行発話のやり直しを試みる。そのやり直しの構成を観察することで、学習者が抱える困難さ、ひいては先行発話で日本語が選択された理由を認識していく。このような一連の修復連鎖の中で、学習者が修復を実行するうえで、できる／できないことを明らかにしながら、それに即して教師が適宜補助を行うことで学習者による自己修復の実現を可能にする。

確かに、学習者が日本語を用いたことは、それがいかなる理由から為されたとしても、相互行為に織り込まれた媒体の規範に従わない行為として理解されていることが、どの事例からも観察できよう。ただし、本稿の分析は、学習者の母語選択を広義に「言語の切り替え」として記述することに異を唱えるものでもある。本稿では学習者が日本語への切り替えを複数回行う事例を確認し、学習者による初回 (応答連鎖における第二成分) の日本語への切り替えと、やり直し (修復実行部) における日本語の再利用は、相互行為上で異なる資源として扱われることを示した。Gafaranga and Torras (2002) のように、言語の切り替えを、聞き手からの修復・訂正を受けた／受けていないかによって、活動における規範からの逸脱であったのか、あるいは内容に関する理解確保を優先する切り替えであったのかを区別することはできるかもしれない。実際、本稿の事例は全て前者に分類される。しかし、それらを修復組織の観点から観察すれば、初回の日本語への切り替えと、その後の日本語の再利用には異なる相互行為上の働きがあるといえ、それぞれには異なる逸

脱性があると考えられる。これらの日本語を用いるという行為は、いずれも決して学習者の語彙や文法に関する知識を明確に表すわけではないが、学習者が相互行為の時々で実現できることの範囲を相互行為上で示唆するものであり、それらに基づく教師の判断により異なる修復連鎖の軌道が取られる。つまり、学習者による言語の切り替えは、ただ言語形式としての‘code’を混合している（Auer 1998: 16）わけではなく、相互行為の展開に即して組織立って行われる実践であることの証拠であろう。

最後に、本稿が示した教師の修復技法はあくまでも教師が持つ選択肢の一つであり、母語への切り替えへの対処が必ずしも上述の方法で行われるべきということではない。学習者による媒体言語の規範からの逸脱を修復するうえでは、文法的に未完了な構成を採用した自己修復の促し（Koshik 2002; Sert 2015）、媒体言語からの逸脱に対する教師的立場からの明示的な警告（Jakonen 2016）、母語産出に減点を課すことによる取り締まり（Amir and Musk 2013）、または最終的に教師が母語を利用した修復の促し（Üstünel and Seedhouse 2005）など、さまざまな方法が考えられよう。本稿が扱った修復の取り組みも、第二言語を扱う一斉授業活動において為される修復技法のひとつとして、教師・学習者がもつ個別の特性に関わらずに観察される一般的現象といえる。

### 断片記号

|       |               |           |                    |
|-------|---------------|-----------|--------------------|
| [ ]   | 発話重複の開始・終了箇所  | ?         | 語尾の抑揚（上がり）         |
| (.)   | 0.2 秒未満の沈黙    | ◦example◦ | 小さい音量で発話された箇所      |
| (0.X) | （上記以上の）沈黙の秒数  | EXAMPLE   | 大きい音量で発話された箇所      |
| =     | 切れ目のない続行      | れい、       | 学習者母語（日本語）で発話された箇所 |
| exa-  | 発話の中断         | ↑↓        | 直後の音の上昇・下降         |
| > <   | 速く発声された箇所     | :         | 音の伸長               |
| < >   | 遅く発声された箇所     | h         | 呼気音                |
| ( )   | 聞き取りが困難な発話箇所  | & &       | 学習者の振る舞いの開始・終了箇所   |
| (( )) | 転写者のコメント      | % %       | 教師の振る舞いの開始・終了箇所    |
| .     | 語尾の抑揚（下がり）    | ---       | 振る舞いの継続箇所          |
| ,     | 語尾の抑揚（少々の上がり） |           |                    |

### 参考文献

- Amir, A., and N. Musk. 2013. "Language Policing: Micro-Level Language Policy-in-Process in the Foreign Language Classroom." *Classroom Discourse* 4(2), 151-167.
- Auer, P. 1984. *Bilingual Conversation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Auer, P. 1995. "The Pragmatics of Code-Switching: A Sequential Approach." In Milroy, J. and P. Muysken (eds.) *One Speaker, Two Languages: Cross-Disciplinary Perspectives*

- on Code-Switching*, 115–135. Cambridge: Cambridge University Press.
- Auer, P. (ed.) 1998. *Code-Switching in Conversation: Language, Interaction and Identity*. London: Routledge.
- Benjamin, T. 2012. “When Problems Pass Us by: Using “You Mean” to Help Locate the Source of Trouble.” *Research on Language and Social Interaction* 45(1), 82–109.
- Bolden, G. B. 2011. “On the Organization of Repair in Multiperson Conversation: The Case of “Other”-Selection in Other-Initiated Repair Sequences.” *Research on Language and Social Interaction* 44(3), 237–262.
- Bolden, G. B., and J. D. Robinson. 2011. “Soliciting Accounts with *Why*-interrogatives in Conversation.” *Journal of Communication* 61(1), 94–119.
- Cheng, T. P. 2013. “Codeswitching and Participant Orientations in a Chinese as a Foreign Language Classroom.” *The Modern Language Journal* 97(4), 869–886.
- Drew, P. 1997. “‘Open’ Class Repair Initiators in Response to Sequential Sources of Troubles in Conversation.” *Journal of Pragmatics* 28(1), 69–101.
- Duff, P. A., and C. G. Polio. 1990. “How Much Foreign Language Is There in the Foreign Language Classroom?” *The Modern Language Journal* 74(2), 154–166.
- Firth, A., and J. Wagner. 1997. “On Discourse, Communication, and (Some) Fundamental Concepts in SLA Research.” *The Modern Language Journal* 81(3), 285–300.
- Gafaranga, J. 2012. “Language Alternation and Conversational Repair in Bilingual Conversation.” *International Journal of Bilingualism* 16(4), 501–527.
- Gafaranga, J., and M. C. Torras. 2002. “Interactional Otherness: Towards a Redefinition of Codeswitching.” *International Journal of Bilingualism* 6(1), 1–22.
- Greer, T. 2008. “Accomplishing Difference in Bilingual Interaction: Translation as Backwards-Oriented Medium Repair.” *Multilingua* 27(1–2), 99–127.
- Hancock, M. 1997. “Behind Classroom Code Switching: Layering and Language Choice in L2 Learner Interaction.” *TESOL Quarterly* 31(2), 217–235.
- Hellermann, J. 2009. “Practices for Dispreferred Responses Using *No* by a Learner of English.” *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 47(1), 95–126.
- Heritage, J. 1984. “A Change-of-State Token and Aspects of Its Sequential Placement.” In Atkinson, J. M., and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 299–345. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. 2012. “Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge.” *Research on Language and Social Interaction* 45(1), 1–29.
- Jakonen, T. 2016. “Managing Multiple Normativities in Classroom Interaction: Student Responses to Teacher Reproaches for Inappropriate Language Choice in a Bilingual Classroom.” *Linguistics and Education* 33, 14–27.
- Jefferson, G. 1987. “On Exposed and Embedded Correction in Conversation.” In Button, G., and J. R. E. Lee (eds.) *Talk and Social Organisation*, 86–100. Clevedon: Multilingual Matters.
- Jefferson, G. 2004. “Glossary of Transcript Symbols.” In Lerner, G. H. (ed.) *Conversation*

- Analysis: Studies from the First Generation*, 24–31. Amsterdam: John Benjamins.
- Kasper, G. 1985. “Repair in Foreign Language Teaching.” *Studies in Second Language Acquisition* 7(2), 200–215.
- Köppe, R., and Meisel, J. 1995. “Code-Switching in Bilingual First Language Acquisition.” In Milroy, J., and P. Muysken (eds.) *One Speaker, Two Languages: Cross-Disciplinary Perspectives on Code-Switching*, 276–301. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koshik, I. 2002. “Designedly Incomplete Utterances: A Pedagogical Practice for Eliciting Knowledge Displays in Error Correction Sequences.” *Research on Language and Social Interaction* 35(3), 277–309.
- Lerner, G. H. 1996. “On the “Semi-Permeable” Character of Grammatical Units in Conversation: Conditional Entry into the Turn Space of Another Speaker.” In Ochs, E., E. A. Schegloff, and S. A. Thompson (eds.) *Interaction and Grammar*, 238–276. Cambridge: Cambridge University Press.
- Macaro, E. 1997. *Target Language, Collaborative Learning and Autonomy*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Macbeth, D. 2004. “The Relevance of Repair for Classroom Correction.” *Language in Society* 33(5), 703–736.
- Markee, N. 2005. “The Organization of Off-Task Classroom Talk in Second Language Classrooms.” In Richards, K., and P. Seedhouse (eds.) *Applying Conversation Analysis*, 197–213. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Markee, N., and G. Kasper. 2004. “Classroom Talks: An Introduction.” *The Modern Language Journal* 88 (4), 491–500.
- McHoul, A. W. 1990. “The Organization of Repair in Classroom Talk.” *Language in Society* 19(3), 349–377.
- Mondada, L. 2018. “Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality.” *Research on Language and Social Interaction* 51(1), 85–106.
- Mori, J. 2004. “Negotiating Sequential Boundaries and Learning Opportunities: A Case from a Japanese Language Classroom.” *The Modern Language Journal* 88(4), 536–550.
- Myers-Scotton, C. 2006. *Multiple Voices: An Introduction to Bilingualism*. London: Blackwell.
- Raymond, G. 2003. “Grammar and Social Organization: Yes/No Interrogatives and the Structure of Responding.” *American Sociological Review* 68(6), 939–967.
- Sacks, H., and E. A. Schegloff. 1979. “Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and Their Interaction.” In Psathas, G. (ed.) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 15–21. New York: Irvington.
- Schegloff, E. A. 1979. “The Relevance of Repair to Syntax-for-Conversation.” In Givón, T. (ed.) *Discourse and Syntax*, 261–286. Leiden: Brill.
- Schegloff, E. A. 1992. “Repair After Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation.” *American Journal of Sociology* 97(5), 1295–1345.
- Schegloff, E. A. 1997. “Practices and Actions: Boundary Cases of Other-Initiated Repair.”

- Discourse Processes* 23(3), 499-545.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., G. Jefferson, and H. Sacks. 1977. "The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation." *Language* 53, 361-382.
- Seedhouse, P. 2004. *The Interactional Architecture of the Language Classroom: A Conversation Analysis Perspective*. Oxford: Blackwell.
- Sert, O. 2015. *Social Interaction and L2 Classroom Discourse*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Sert, O., and U. Balaman. 2018. "Orientations to Negotiated Language and Task Rules in Online L2 Interaction." *ReCALL* 30(3), 355-374.
- Stivers, T., and J. D. Robinson. 2006. "A Preference for Progressivity in Interaction." *Language in Society* 35(3), 367-392.
- Svennevig, J. 2008. "Trying the Easiest Solution First in Other-Initiation of Repair." *Journal of Pragmatics* 40(2), 333-348.
- Üstünel, E., and P. Seedhouse. 2005. "Why That, in That Language, Right Now? Code-Switching and Pedagogical Focus." *International Journal of Applied Linguistics* 15(3), 302-325.
- Ziegler, G., O. Sert, and N. Durus. 2012. "Student-Initiated Use of Multilingual Resources in English-Language Classroom Interaction: Next-Turn Management." *Classroom Discourse* 3(2), 187-204.

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

## 談話標識としての「なんなら」 —意味機能の語彙的要素と文脈依存性について—\*

水田 洋子  
国際基督教大学

Japanese *nan-nara* (lit. ‘some-if’) has a typical usage of softening the tone of a suggestion or an offer, as English *if you like* does. However, *nan-nara* exhibits a wider range of usages. This paper aims to provide a systematic analysis of the meaning and function of *nan-nara*. An indefinite pronoun *nan* and a conditional morpheme *nara* together create the additive and scalar meanings which take concrete content in different dimensions. The context activates relevant parts of the lexical semantic content of *nan-nara*. On this basis, the softening effect is reanalyzed and recent usages are discussed.

キーワード： なんなら、談話標識、あいまい性、複合性、文脈依存性、不定代名詞、条件節、additive meaning、scalar meaning、通時的变化

### 1. はじめに

日本語の「なんなら」(以下、ナンナラ<sup>1</sup>)の代表的な用法として、下記の例(1)～(2)におけるように、提案や申し出に控え目なニュアンスを与えることが挙げられる。

- (1) ペンがないんですか。なんならこれ使ってください。
- (2) 場所わかりますか。なんなら一緒に行きましょうか。

上記の例においては、ナンナラは「良かったら」とほぼ同じ意味に受け取れる。しかし、下記(筆者の作例)のように、ナンナラにはもっと多様な使い方がある。

- (3) [贈り物を購入した際]包装は簡単をお願いします。なんなら外箱にリボンシール

---

\* 本稿は水田(2022)を大幅に加筆修正したものである。本稿の改訂に際して、匿名の査読者の先生方から貴重なコメントをいただいた。深く感謝致します。最終稿に十分に反映されていない点や、まだ残っている問題点については、もちろんすべて筆者の責任である。

<sup>1</sup>本文中で「なんなら」という表現に言及する際にはカタカナで「ナンナラ」と書き(括弧はつけない)、例文中の「なんなら」はひらがなのまま下線を付けて記す。

をつけてくださるだけでも結構ですよ。

- (4) 駅から会場までは、バスの本数が多いので心配いりませんよ。なんなら駅前にタクシーも並んでますし。
- (5) 旅行がしたいなあ。なんならヨーロッパにでも（行きたいな）。

上記(3)では、聴者の想定を超えるであろう簡素な方法を示す際にナンナラが使われている。(4)では、バスという標準的な手段の他にタクシーという追加の選択肢を提示する際にナンナラが使われている。(5)では、願望を表す際に、話者が行先の一例としてふとヨーロッパを思いついたというニュアンスがナンナラから汲み取れる。

島田(2018)は、近年ナンナラがより柔軟に使われている傾向にいち早く着目し、新用法と従来用法との関連を考察した。ナンナラを条件節的な構造を内包する副詞と考え、「新旧の用法に共通するのは『場合によっては』『状況が許すなら』という条件表現そのままの意味」(p. 20)と述べている。

しかし「条件表現そのままの意味」については議論の余地がある。ナンナラは具体的な条件節表現のショートカットであるということなのだろうか。しかし後述するように、ナンナラは1語の副詞とみなされている。実際、話者は多くの場合、条件節構造を意識せずにナンナラをひとまとまりで使っているように思われる。ナンナラが具体的な条件節表現にほぼ言い換えられる場合でも、1語として固有の性質を持つことが考えられる。<sup>2</sup>すなわち、意味を生じるしくみや聴者への効果などの点で具体的な条件節とは異なっている可能性がある。

言語表現の談話中での意味や機能に注目した研究は、談話標識 (discourse marker, DM) あるいは語用論標識 (pragmatic marker, PM) などのラベルのもとに発展している。英語については、時や様態を表す副詞や、間投詞、句など (例えば、*now*, *anyway*, *actually*, *like*, *well*, *you know*) が DM に発達する現象が広く議論されている (Aijmer 2002; Heine 2013; Lenk 1998; Mazzon 2017; Schourup 2017)。英語の個別表現については、例えば Kim and Janhke (2010) が挙げられる。彼らは、フォーカス要素に後続する (多くの場合は発話末の) *even* を DM ととらえ、フォーカス要素に先行する「～さえ」の意味のとりたて詞 (focus particle) から通時的な意味変化を経たものと議論している。日本語については、Onodera (2002) は日本語の接続詞の「でも」と「だけど」、および終助詞の「ね」と「な」について、また Shinzato (2011) は副詞の「やはり」、「やっぱり」、「やっぱ」について、DM への発達を議論している。

<sup>2</sup> 「もし」を伴う「もしよければ (／良ければ)」と「もしよろしければ」の検索結果は90件あったが、「もしなんなら」は0件であった。このことも、ナンナラが具体的な条件節とは異なる性質を持つことを示唆している。

本稿では、ナンナラをDMととらえ、その多様な意味機能<sup>3</sup>が何に起因しどのようなしくみで生成・解釈されるのかを体系的にとらえることを目指す。次節以降の構成は以下の通りである。まず、先行研究についてももう少し詳しく紹介し、本研究におけるDMの概念を述べる(2節)。その後、ナンナラの意味機能についての予備的考察を行った後(3節)、データ分析を行い(4節)、体系化する(5節)。これらをふまえて、ナンナラの使用における「控え目」のニュアンスの生成について再考し(6節)、更に新用法の位置づけを議論する(7節)。最後に結論と理論的含意を述べる(8節)。

## 2. 先行研究

### 2.1. 日本語の構文論

日本語の構文論では、ナンナラは1語の副詞とみなされている(島田 2018; 飛田・浅田 2018)。副詞の下位分類でナンナラに関係のあるものとしては、工藤(2016)の「叙法副詞」、渡辺(1971)の「誘導副詞」、中右(1980)の「命題外副詞」が挙げられる。

工藤(2016: 12)は、願望に関する基本叙法の「勧誘・申し出 etc.」の下に「なんなら(なんでしたら)」を位置づけている。「etc.」が付いてはいるが、勧誘や申し出以外の機能(例文(5)に見る例示など)が考慮されていない。渡辺(1971: 310ff.)は、「もし」が仮定表現(「～なら/たら/れば」)を、「決して」が否定表現(「ない」)をそれぞれ予告する機能(「誘導の職能」)を持つとし、これらを誘導副詞と呼んでいる。誘導の職能とは、どのような表現とセットで使われるかという構文上の極性(polarity)と理解できる。中右(1980)は、命題内副詞と命題外副詞を区別している。前者は「命題の一部を形造するもの」(p. 161)であり、後者は「モダリティを表明する...命題とどのようなかわり具合にあるか、つまりは、命題をどのように修飾限定しているか」(p. 161)を表すものである。命題外副詞の下位分類に「発話行為の副詞」がある。中右は「発話行為の副詞は、...話者の発話時における心的態度を表明するという点で、モダリティの副詞である。が反面、これが他のモダリティの副詞から区別される明確な点は、それが命題内容そのものにかかわるといよりは、むしろ、命題内容をどのように述べるか、話者自らの発話の仕方に制限を加えるという働きをもっている」(p. 206)と述べ、例として英語の *frankly*, *strictly speaking*, *in short* などを挙げている。ナンナラはこの発話行為の副詞とみなせる。構文論において発話の概念をとりこんでいる点が注目されるが、「発言様式の限定」という機

<sup>3</sup> 意味と機能の区別は単純ではない。また、関連性理論における概念的意味(conceptual meaning)と手続き的意味(procedural meaning)の区別(Hall 2007)とも密接に関わっている。本稿では、文献(Aijmer 2002; Lenk 1998)で 'meaning and function' とひとくくりに行っているのに倣い、また意味と機能の区別が本稿の議論において重要ではないことから、「意味機能」という用語を用いる。

能を指摘するにとどまる。また、対人的な機能には言及していない。

このように、構文論においては、構文上の役割に注目した副詞の分類が行われている。これに対して本稿では、ナンナラが談話中での発話の意味や解釈に及ぼす影響を掘り下げる。そのためには、DM および発話行為の観点からの考察が必要になる。DM は、一言で言うならば、談話中における言語表現や発話間のつながりに関わる概念である。構文論における DM の対応物は、副詞や接続詞、感嘆詞などの単語から、句や節に至るまで多様である (Heine 2013)。

## 2.2. 島田 (2018)

島田 (2018) は、ナンナラについての先駆的な研究である。「現代日本語書き言葉均衡コーパス 通常版」(BCCWJ) におけるナンナラの用例を検索し、その結果に基づいて、ナンナラの用法の分類を行い、それぞれの用例数を示した。具体的な内容は以下の通りである (pp. 3-4) : 申し出 (49 例)、示唆・提案 (41 例)、依頼・注文 (3 例)、妥協点の提示 (1 例)、願望 (2 例)。すなわち、申し出と示唆・提案が典型的な用法ということである。また、ナンナラに伴う動詞句に関わる動作主の違い (話し手/聞き手/その他) にも着目した。

ナンナラの基本構造と「控え目」の意味について、島田は次のように論じている。

「『何 (あなたの意向/状況的な前提) が何 (OK/ゆるす) なら』という条件節的構造を本来は備えつつ、...条件節的構造の前半部分の省略と、後半部分の「何」への置き換えによって、ある種の和らげやほかしの働きが生じ、行為への『控えめ』な言及という効果もたらされる。」(p. 4)

また、従来用法と新用法を次のように比較している。

「新旧の用法に共通するのは『場合によっては』『状況が許すなら』という条件表現そのままの意味であり...新旧での決定的な違いは、新用法においては『聞き手への配慮』がほとんど含意されないことであろう」(p. 20)。

ナンナラの意味用法を体系的にとらえようとする試みは、本研究の方向性と共通している。しかし1節でも述べたように、「条件表現そのままの意味」という点については議論の余地がある。また、従来用法において「聞き手への配慮」が特徴的なのかという点も詳しく見たい。

また、前述のように島田は、ナンナラのもととなる条件節構造を2つの「何」を使ってとらえ、「前半部分の省略と、後半部分の『何』への置き換え」(p. 4) と述べているが、そうすると、ナンナラは文字通りには後半部分の「何 (OK/ゆるす) なら」であり、解釈の際に前半の「何が」を復元するということなのだろうか。本稿では単純に、1つの「なん」

と条件節を作る「なら」の組み合わせと考える。

### 2.3. Kim and Jahnke (2010)

Kim and Jahnke (2010) は、英語におけるフォーカス要素に後続する「発話末の」*even* (utterance-final *even*, UF-*even*) を DM ととらえ、その意味機能を議論している。UF-*even* が、フォーカス要素に先行する「～さえ」の意味のとりたて詞 (focus particle) の *even* (pre-focal *even*, PF-*even*) から発達したと考え、PF-*even* から UF-*even* への通時的な意味変化を議論している。以下に例を引用する。

- (6) *Even* John came to the party. (p. 37)
- (7) The ways in which our students communicate have changed . . . in the last five years *even*. (p. 43)
- (8) I could totally take the extras off your hands. Free of charge *even*. (p. 45)
- (9) C: can you not read it?  
A: View in Word. Or IE. B: Or wordpad works *even*. (p. 48)
- (10) I've lost my pen, my pencil *even*. (p. 50)

(6) は PF-*even* の例文である (「John さえ」の意味)。一般に、PF-*even* は、2つの慣習的含意 (conventional implicature) あるいは前提 (presupposition) を持つと分析されている。(6) の例では、「John はパーティーへ来た」という論理的含意 (logical entailment) とともに、2つの慣習的含意、すなわち「John 以外にもパーティーへ来た人がいる」 (“additive meaning”) および「John がパーティーへ来たことは注目に値する (期待されていなかった)」 (“scalar meaning”) が表される。

(7)～(10) は、UF-*even* の用法である。Kim and Jahnke は、(7)～(10) における UF-*even* が、それぞれ意外性 (“mirative”)、精緻化 (“elaborative”)、追加 (“simple additive”)、訂正 (“simple corrective”) の意味を持つと観察した。そして、これらの意味が PF-*even* の持つ additive meaning および scalar meaning から発達したと考え、*even* の通時的な意味変化のモデルを提案している。

例えば、(7) に見られる意外性の意味は PF-*even* の scalar meaning から発達したと分析している。(7) の UF-*even* を PF-*even* に置き換えただけでは容認できない (少なくとも意味が変わる) が、意外性を表す DM の *actually* を添えた (11) は (7) と同様の意味を表すと述べ、UF-*even* と PF-*even* の共通点と違いを説明している。

- (11) The ways in which our students communicate have changed ... *actually, even* in the last five years. (p. 43、イタリックは原文のまま)

(8) に見られる精緻化の意味 (前に述べた内容を更に正確にあるいは詳しく述べるこ

と)は、16世紀の *even* が持っていた “particularizer meaning” (*exactly, precisely* の意味)が復活したものと分析している。(particularizer meaning は PF-*even* の scalar meaning のもととなった。)また、精緻化の意味から更に、(9)に見られる単純追加の意味と(10)に見られる訂正の意味が発達したものと分析している。このように、UF-*even* の意味用法を *even* の通時的な意味変化の観点から体系的にとらえている。

Kim and Jahnke (2010) の議論は、ある表現に内在する意味的要素 (additive meaning と scalar meaning) から新しい意味や機能 (UF-*even* の4つの意味機能)が生じる過程を分析したものととらえることができ、ナンナラの意味機能を体系的にとらえようとする本研究の参考になる。更に、ナンナラの意味機能は UF-*even* の意味機能と共通する部分が多い。例えば、例文 (7) ~ (10) はそれぞれ「…なんならここ5年間だって」、「なんならタダでも結構ですよ」、「なんなら workpad だって大丈夫ですよ」と訳することができる。この点からも、Kim and Jahnke (2010) の議論との関連を考える意義がある。<sup>4</sup>

#### 2.4. 談話標識に関する研究

DM は、文献によって概念も用語も違いが見られ、正確に定義することは困難であると認識されている (Aijmer 2002; Fedriani and Sansó 2017; Heine 2013; Lenk 1998; Mazzon 2017; Onodera 2002; Schourup 2017; Shinzato 2011, 2017)。例えば Heine (2013) は以下のように述べている。

The term discourse marker (henceforth: DM) is used in a wide range of senses and for quite a number of different phenomena, extending from monosyllabic interjection-like particles to clausal expressions ... Also called discourse particles, pragmatic markers, discourse connectives, adverbials, connecting adverbials, ...”  
(Heine 2013: 1206)

また DM の発達過程の説明においても、文法化 (grammaticalization) と語用論化 (pragmaticalization) が関わっており、両者の概念の区別は自明ではない (Heine 2013; Nishida 2007; Onodera 2004)。

Fedriani and Sansó (2017) は、DM (discourse marker)、MP (modal particle)、PM (pragmatic marker) の概念を区別しつつ、これらが密接に関わっていることを指摘して、緩やかに区別することを提案している。Shinzato (2017: 306) は、その提案に沿う形で、DM (discourse marker)、MM (modal marker)、PM (pragmatic marker) をおおまかに定義している。それによれば、DM は文同士の結束性 (cohesion) を表すもの、MM は、

<sup>4</sup> 英語の UF-*even* についての研究をそのまま日本語のナンナラに適用することはできないが、異なる意味機能が共有する基本的な要素に注目する点が参考になると考えた。

話者が命題に対して持つ様相あるいは評価におけるスタンスあるいは話者が聴者に対して持つ対人的なスタンスを表すもの、そしてPMは社会的な次元での結束性を表すものである。

## 2.5. 本研究におけるDMの概念

ナンナラの分析に用いるDMの概念は、Shinzato (2017)におけるDM/MM/PMのセットの要素ととらえるべきか、それとももっと広くとらえるべきか。

発話行為論の先駆的研究であるAustin (1975)は、発話を(意図や結果を伴う)行為とみなし、発語行為(locutionary act)、発語内行為(illocutionary act)、発語媒介行為(perlocutionary act)の3つのレベルでとらえた。発話行為の観点で談話をとらえると(Kissine 2013)、談話にも上記3つのレベルが関わるため、それらすべてをカバーするDMの概念が必要になる。

本稿におけるDMの概念は、Heine (2013: 1211)に端的に表現されている。日本語でまとめると次の通りである: DMの主な機能は、発話を談話の状況—具体的には、話者と聴者のやりとり、話者の態度、and/or テキストの構成—に関連づけることである。また、Schiffrin (1987)の提案に従って、ある言語表現がDMとみなされるための基準を採用する。これはFedriani and Sansó (2017)やShinzato (2017)におけるDMの上位概念と位置づけられる。以下でFedriani and Sansó (2017)等における狭義のDMに言及する際にはDmと表すことにする。

Schiffrin (1987: 328)の提案するDMの基準は以下の通りである。

- (i) 構文的に文から切り離せる。
- (ii) 通常、発話の冒頭で用いられる。
- (iii) 韻律的なパターンに幅がある。
- (iv) 談話の局所的・大局的レベルの両方で、また談話のさまざまな次元で作用できなければならない。すなわち、意味を持たないか、意味があいまい(vague)であるか、あるいは再帰的であるということである。

上記の基準は、DMであるための必要十分条件ではなく、プロトタイプ属性のリストとみなせる。ナンナラは上記の(iii)以外の基準を満たす。<sup>5</sup>

<sup>5</sup> (iii)については、筆者はナンナラの韻律は平坦アクセントで最後のみ下降するパターン(「高高低低」のアクセント)のみ想定している。しかし会話中のナンナラを詳しく調べれば、発音のバリエーションと機能分化が見出される可能性もある。これについては保留とする。

### 3. 予備的考察

データ分析に先だって、語彙意味論的な視点から予備的考察を行う。すなわち、「なん」と「なら」の組み合わせからどのような意味や機能が生じ得るかについて考察する。

内容語 (content word; Murphy 2010) を含まない言語表現がどのような意味や機能を持ち得るのかについて、「もしかしたら」が参考になる。これは「もしかしたら～かもしれない」の形で使われる誘導副詞 (渡辺 1971) であり、仮定法の条件節部分「もし A たら」をもとに副詞として文法化したものと考えられる。「もしかしたら」は、具体的な内容は持たないが、条件節というものに内在する仮定の意味から、可能性に言及する副詞となったと説明できる。

ナンナラも、内容語を含まない条件節が1語の副詞になっている。島田 (2018) は「何(なん)」の内容を復元する方向でナンナラをとらえているように推測されるが、本稿では、内容が不定の「なん」が用いられていることに意義があると考え、「なん」と「なら」それぞれの意味や機能に基づいてナンナラの意味機能の見通しを立てていく。

#### 3.1. 「なん」について

まず「何(なに、なん)」について考える。「何」には疑問詞 ('what') と不定代名詞 ('some') がある。前者の場合には、下記の例におけるように、「なん」の部分のアクセントが下降調で、「な」に強勢が置かれる。

(12) あれもだめ、これもだめって、いったい何(なん)ならいいの？

これに対してナンナラにおける「なん」の部分は常に平坦アクセントである。このことから、ナンナラにおける「なん」は不定代名詞に絞られる。

Haspelmath (1997) は、不定代名詞の機能について、言語普遍的なモデル *implicational map* として提示している (p. 64, Fig.4.4)。概要は以下の通りである (番号は原文の通り)。まず、「(1) 指示対象が特定で既知 (specific, known) → (2) 指示対象が特定で未知 (specific, unknown) → (3) *irrealis* の文脈で不特定の指示対象 (*irrealis, non-specific*)」という流れがある。(3) は、「(4) 疑問／質問 (question)」と「(5) 条件文／節 (*irrealis, non-specific*)」に分かれる。それ以降についてはここでは省略する。個別言語についても *implicational map* が示されている。英語の場合は、*some, any*、および *no* の役割分担となる (ibid.: 65, Fig. 4.5)。

日本語の不定代名詞に *implicational map* が適用してみると、例えば、上記の番号に対応させて、(1) 昨日、ある人に会いました、(2) 「何か音がした」、(4) 「何か飲みますか」、などとなる。ナンナラは条件節由来であると想定すると、上記 (5) のケースになり、*irrealis* の文脈で「なん」の指示対象は不特定 (*non-specific*) ということになる。これは、

「なん」が特定の内容をぼかすという島田（2018）の分析と異なる。これについて検討する。

- (13) 自分で言うのも {なん／あれ} ですが、足の速さには自信があります。  
 (14) ここじゃ {なん／あれ} だからあっちで話そう。  
 (15) {なん／あれ} ですねえ、こう長い間マスクをしていたら、マスクなしが恥ずかしくなってきましたね。

上記（筆者の作例）では、「なん／あれ」は特定の内容をぼかしたものと考えられる。(13)では「ためられる」、(14)では「不都合だ」などである。(15)における「なん／あれ」は、後続の内容を指す place holder とみなせる。しかし、(13)～(15)で「なん」が使われている文脈は条件節ではない。

そこで、日本語の不定代名詞に implicational map を適用し、ナンナラが条件節由来であるという前提で、ナンナラにおける「なん」の指示対象は不特定であるとする。

### 3.2. 「なら」について

「なら」は、「たら」や「れば」と同様に条件節を作る。そこで条件節の意味機能について考える。例えば「明日何をしますか」という質問に対して、「体を動かすこと」と答えた場合と、「晴れなら散歩、曇りならテニス、雨なら家で筋トレ」と答えた場合を比べる。後者は前者よりも詳細な返事である。もしも曇りの場合について、「曇りで4人集まればテニス、集まらなければ1人でジョギング」となれば、話は更に複雑になる。このように、条件節を使って場合分けを行えば、話は複雑・詳細になっていく。これを条件節の「縦方向の展開」と呼ぼう。

一方、同じレベルでの場合分け構造、すなわち「Aなら～、Bなら～、Cなら～、…」を考える。これを条件節の「横方向の展開」と呼ぼう。横方向の展開では、2つ以上の場合が並列関係にあり、全体がそろって1つの情報を成す。すなわち、ある場合（例えば「Aなら～」）が含まれることは、他の場合も1つ以上存在することを含意する（任意のAに対して、「Aなら」があれば、少なくとも「Aでないなら」のケースがある）。条件節には、このように縦方向と横方向の展開がある。

### 3.3. ナンナラについて

では「なん」と「なら」の作る条件節ナンナラはどのような意味機能を持ち得るか。不定代名詞「なん」は、具体的な内容を持たずに存在だけを表すと言える。そして、まず条件節の横方向の展開を考えた場合、「ナンナラ～」は「Aなら～、Bなら～、Cなら～、…」という場合分けに含まれることを表す。これは、ナンナラに後続する内容について、1つの選択肢としての位置づけや可能性、そして他にも選択肢が存在するという意味、一

言でまとめれば additive meaning (以下、Add) を表す。

次に、縦方向の展開は条件の追加に相当する。条件が追加されるほど、条件を満たすことが厳しくなる。例えば上述の例で、「曇りならテニス」に対して「曇りで4人集まればテニス」となれば、テニスをするための条件が厳しくなる。しかし見方を変えれば、条件は付くものの、ナンナラに後続する内容に該当するケースが存在するという点でもあつた。したがって、「ナンナラ～」が条件節の縦方向の展開のどこかに存在するという点では、scalar meaning (以下、Scal) と同様の意味を表すと考えられる。具体的には、精緻化、極端なケース、意外性、可能性の開拓などを表し得ると予測できる。

### 3.4. UF-even との共通点

ここで、UF-even との共通点に注目したい。2.3 節で述べたように、Kim and Jahnke (2010) によると、PF-even の additive meaning から UF-even の単純追加の意味が、そして scalar meaning から UF-even の精緻化と意外性 (極端なケースを含む) の意味が生じた。

上記 3.3 節で述べたように、条件節の横方向の展開は additive meaning に、縦方向の展開は scalar meaning に対応すると考えると、ナンナラは UF-even の意味機能と類似の意味機能を持つ可能性がある。

### 3.5. 「も」との共通点

沼田 (1995: 19) は、取り立て詞「も」の意味として以下の3つを挙げている。

- (16) 日曜日は、銀行も (郵便局も) 休みです (も<sub>1</sub>)。
- (17) 彼は努力して、とうとうラテン語も (／さえ／まで) 理解できるようになった。(も<sub>2</sub>)
- (18) 春もたけなわになりました。(も<sub>3</sub>)。

沼田は、「も<sub>1</sub>」は「単純他者肯定」、「も<sub>2</sub>」は「意外」、「も<sub>3</sub>」は「不定他者肯定」と分析している (pp. 19-20)。これら3つの「も」が1つのものなのか別々のもの (「も」は多義語) なのかについては保留にしている。

ナンナラの Add の意味は「も<sub>1</sub>」および「も<sub>3</sub>」と密接な関係があり、Scal の意味は「も<sub>2</sub>」と密接な関係がある。実際、ナンナラの用例では「(で) も」が共起することが多い。

### 3.6. まとめ

ナンナラの意味機能はその構成要素「なん」と「なら」の持つ意味や機能に起因すると考え、そこからナンナラが具体的に持ち得る意味機能の見通しを立てた。ナンナラは具体的な条件節としての内容語を欠くが、内容が不定の「なん」が用いられていること自体に意義があると考えた。これと、条件節を作る形態素である「なら」の性質とがナンナラの

意味機能の土台となる。

## 4. データ分析

前節の予備的考察を念頭において、具体的なデータを分析していく。

### 4.1. データおよびその分析手順

データは、先行研究における例文、筆者の作例、およびコーパスデータを用いた。コーパスデータは、コーパス検索アプリケーション『中納言』を用いた「現代日本語書き言葉均衡コーパス 通常版」(BCCWJ)における「なんなら」の文字列検索の結果(104例<sup>6</sup>)を用いた。データ分析の手順は以下の通りである。

- ① 申し出や提案などナンナラが使用される局所的な文脈(以下、「文構造」と、談話中におけるナンナラの意味機能を区別して考えた。
- ② データを概観して代表的な文構造を列挙した。
- ③ 各例文について、ナンナラの現れる文構造とナンナラの談話レベルでの意味機能を分析した。

①については、例えば次の例文を考える。

(19) 事務所は午前中がすいてるわよ。なんなら今からでも行ってきたら？

上記(19)において、ナンナラが使われている第2文の文構造は「提案」である。ナンナラの意味機能については、第2文だけを見ると提案を和らげているように見えるが、第1文との関わりで見ると、「午前中」の具体的かつ(やや)想定外の例として「今からでも」を挙げていることを示している。ナンナラの意味機能の分析において、こうした談話レベルの観点に注目した。

### 4.2. 用例ごとの分析

データに現れる代表的な文構造は、以下のように分類された：

- ㊦提案、㊧申し出、㊨許可・妥協、㊩願望、㊪その他。

以下で、具体的なデータの分析を行う。例文の最後に、コロンの続けて上記の文構造

---

<sup>6</sup> 島田(2018)で報告されているナンナラの検索結果は96例であり、本稿における検索結果は104件であるが、この差はBCCWJのデータバージョンが2021年3月に改訂されているためと考えられる。

(㊦提案～㊧その他)を付す。

#### 4.2.1. 作例の分析

前出の例文(1)～(5)(番号を付け直して再掲)を分析する。

- (20) ペンがないんですか。なんならこれ使ってください。: ㊦提案／㊩申し出  
 (21) 場所わかりますか。なんなら一緒に行きましょうか。: ㊩申し出  
 (22) [贈り物を購入した際]包装は簡単をお願いします。なんなら外箱にリボンシールをつけてくださるだけでも結構ですよ。: ㊧許可・妥協  
 (23) 駅から会場までは、バスの本数が多いので心配いりませんよ。なんなら駅前にタクシーも並んでますし。: ㊧その他  
 (24) 旅行がしたいなあ。なんならヨーロッパにでも(行きたいな)。: ㊥願望

(20)は、聞き手の行為に関する発話であるため「㊦提案」ともとれるが、実質的には話者がペンを貸すという「㊩申し出」とみなせる。聞き手が自分のペンを探している状況で、それに代わる選択肢として、話者のペンを使うことを提案している。すなわち選択肢の追加である。少し異なる見方をすれば、聴者が自分のペンを探している状況で、話者のペンを借りるという新たな視点を導入しているともみなせる。いずれにせよ、聴者が困っている状況を打開する方法に言及する際にナンナラが使われている。なお選択肢の追加は、「㊦提案」および「㊩申し出」の文構造と密接な関係にある。(21)も、聞き手が1人でどこかへ向かおうとしている状況で、話者が一緒に行くという新しい選択肢／視点を提示している。

(20)、(21)ともに、既存の選択肢もふまえての発話であることを表すことから、提案や申し出に「和らげ」あるいは「控え目」のニュアンスを与える。また、「気遣い」の表現として慣用化している面もある。

(22)～(24)については1節でも述べた。(22)で、リボンシールを貼るだけというのは、「贈り物は包装するもの」という(一般的な通念かつ)聴者の想定を超える簡素な方法であり、それを示す際にナンナラが使われている。(23)では、バスが標準的な手段であるという想定のもとに、それ以外のタクシーという選択肢も追加で提示している。(24)では、願望を表す際に、話者が単なる1例としてヨーロッパを思いついたというニュアンスがナンナラから汲み取れる。(20)～(24)のいずれにおいても、ナンナラは、命題内容に直接関わる情報ではなく、後続する言語表現や発話の談話中での位置づけについての情報を表すと観察される。

- (25) 事務所は午前中がすいてるわよ。なんなら今からでも行ってきたら?: ㊦提案

上記例文(25)(5.1節で(19)として挙げたもの)には、例示と意外性、および気づき

(河野 2020) が関わっている。「今から」は、聴者が想定するよりも急なタイミングであろう。ナンナラは、「あなたの都合に合わせていつでもいいですが」という含意を持たせて、「今から」という極端な提案を和らげる効果を持っている。また、「あ、まだ午前中だから今からでも行ける」と話者がふと気づいた（しかしそれが特に良い案かどうかは検討していない）ことも表す。

#### 4.2.2. コーパスデータおよび島田 (2018) の例の分析

続いて、BCCWJ のコーパスデータおよび島田 (2018) に含まれる例文を分析する。中俣 (2021) に従い、BCCWJ のデータにはサンプル ID と開始位置を付した。

- (26) タクシーで送ってさしあげます。ああ、なんならここに泊まっていけばいいではないですか? (LBd9\_00042 35010) : ㊦提案
- (27) いいや、いる! ここにいる! なんなら証拠を見せようか! (LBq9\_00077 55330) : ㊧申し出
- (28) 六時間毎に二錠嚥みなさい。それとも、四時間毎、なんなら、いっぺんに全部でもね。(LBe9\_00051 45970) : ㊨許可・妥協
- (29) 「どうぞ、主人のぶんもお召し上がりになってください」と、母親は粹な勧め方をした。「なんなら私のも半分」と悦子も笑いながら言った。「とんでもない、僕は少食なほうです」(PB59\_00505 15090) : ㊩申し出
- (30) 夜は驚くほどにシラフでっす。なんなら、就職の面接にも行けるほどに。(OC14\_11890 440) : ㊪その他
- (31) 海へ山へと遊びに行こうよ／朝の早よから蝉たちの目覚まし鳴り響く  
ビキニ姿でスイカ割り／(なんならスイカになりたいよ!)  
(島田 2018: 11) : ㊫願望
- (32) <トランプ大統領を見ていると何かに似ている...そうだ、厚揚げだ。なんなら厚揚げの『厚』って字にも割と似てる> (島田 2018: 6) : ㊬その他
- (33) 私の場合、就活は普通にしていたため、とある別の企業さんから内定も頂いていたんですが (なんなら内定式も行った)、そこで「あ、私この会社だとすぐ辞めちゃうかも」と思ったんですよ。(島田 2018: 8) : ㊭その他

ナンナラの用法の通時的な連続性および共時的な分布を考えれば、従来用法と新用法の区別は明確でなく個人差もあるはずだが、以下では筆者の直観に従って観察する。<sup>7</sup>

<sup>7</sup> ナンナラの用例の分析においては、①新旧用法の(大まかな)区別と、②それぞれの用法についての詳細な観察、という課題がある。データの信頼性を高めるために、十分な人数の被験者による自由記述の回答を定性的・定量的に処理することが考えられるが、それ自体難しい課題を含み、本稿の範囲を超える。例えば上記①については被験者の世代を考慮した分析が必要となる。上記②は

(26)～(29)は違和感のない従来用法であり、(30)は若干の違和感がある。(31)～(33)は島田(2018)が新用法と位置づけているものである。

(26)では、聴者をタクシーで送っていかうと思っていた文脈で、聴者を自分の家に泊めるという新しい案を提示している。ナンナラはふと思いついたというニュアンスを表し、先行する「ああ」はそのタイミングを表している。また、ナンナラは提案に控え目なニュアンスも与えている。(27)は、申し出に対して控え目ではなくむしろ挑発的なニュアンスを表している。何らかの状況を打開する目的で聴者の視点に立って提案や申し出を行っている点は、(26)の「控え目」の場合と同様である。違いは次のように考えられる。(26)では、聴者に対する提案や申し出が押しつけがましくならないようにナンナラが使われている。それに対して(27)では、聴者が話者の主張に納得しない状況を打開するための申し出でナンナラが使われている。すなわち、前者の場合は、ナンナラは話者主導の提案に対して聴者の意向を考慮していることを表し、後者の場合は、ナンナラは(推測される)聴者の意向が主導で話者が申し出／提案をしていることを表す。また、前者はAddに基づく和らげの効果、後者の場合はScalに基づく「極端なケース(こんなこともできる、というニュアンス)」を表すと説明することもできる。

(28)は、「6時間ごと、4時間ごと、いっぺんに全部」というエスカレートの構造が背景にある。単に選択肢が後続することを示す「あるいは」と違い、ナンナラは極端なケースが後続することを示唆する。共起表現の「いっぺんに全部でもね」における意外性を表す「も<sub>2</sub>」(沼田1995)も同様の働きをしている。また、いっぺんに全部飲むという極端なケースにまで言及する必要があるか疑われるためhedge表現(Huang 2015)としてナンナラを使っていると考えられる。別の言い方をすれば、極端なケースに言及するための導入の目的でナンナラを使っていると考えられる。(29)は、聴者の本来の割り当てに加えて、母親が「主人のぶん」を追加で差し出した文脈で、更に「私のも」と追加している。すなわち、ナンナラはエスカレートの構造における追加を表す。同時に、Addに起因する和らげ・控え目のニュアンスも与えている。(30)は、ナンナラの直後に句点があることから、DMの位置づけが明らかである。「ほどに」と共起していることから「例えて言えば」という意味に解釈できる。話者は就活中でない場合もあり得るため、ナンナラは「行こうと思えば」、「必要なら」という条件節的な意味に帰着させることはできない。強いてナンナラを条件節的な意味と結びつけるとすれば、「就活中なら」という仮想的な状況設定を表すと言えるが、それは例えの用法と実質的に同じである。

続いて、新用法についてである。(31)については、「ついでに言えば」や、ふと頭をよぎった考えを表しているように解釈できる。ナンナラを含む文が括弧内にあることはそれ

---

用例中のナンナラの意味機能を意識的に抽出する作業となり、被験者間のばらつきが大きくなることが予想される。こうした課題を鑑み、本稿では筆者の直観に基づく方法を採用した。

を示唆している。別の解釈としては、「海へ山へと遊びに行き、ビキニ姿でスイカ割り」という文脈で、更に話者がその想像の世界に入りこんで自分がスイカになっている状況に言及し、そのくらい遊びに徹したい、「いっそのことスイカになってしまいたい」、という気持ちを表している可能性も挙げられる。例文の「／」で区切られた部分に遊びのシナリオの発展が表され、例文(28)に見られるエスカレートの構造との類似性が見られる。「なんならスイカになりたいよ!」と感嘆符で終わっていることから、一種のクライマックスも感じとれる。ナンナラを使うことによって解釈の幅を持たせている可能性もある。(31)では願望を表す「～たい」と共起しており、筆者の直観では(28)と違って少し違和感を覚える。島田(2018)の検索結果でも、願望の文脈での用例は2例のみであった。

(32)～(33)は文構造が叙述である点が特徴的である。(32)は、厚揚げという物から「厚揚げ」の「厚」という字(特に、部首の雁垂れ)に視点を切り替えている。トランプ大統領を見る別の視点を示しているのである。また、「割と」と共起して、「ちょっと～感じがする」というニュアンスも感じとれる。これは、複数の見方が存在してそれらを切り替えていることを表し、Addに帰着できる。また、厚揚げという見方から更に踏み込んで「厚」という字に注目したことは、見方の精緻化にあたり、エスカレートの意味を表す(28)と類似している。(33)は、筆者の直観では最も違和感があるが、関連情報を述べる際の「ちなみに」、「ついでに言えば」の意味に解釈される。ナンナラの文が括弧内にあることもそれを示唆している。またこれは、発話の態度を表すとともに、ナンナラに後続する情報の位置づけを表す。

このように、若干の違和感のある(30)や新用法の(31)～(33)についても従来用法と同様のしぐみが見いだせる。しかし違いとしては、新用法やそれに準じるケースでは、提案や申し出などの場合と異なりナンナラの発話がそこで完結して、聴者の行動に影響を与えることが想定されていない点が挙げられる。例えば提案の場合なら、聴者はそれを(採用するか否かは別として)参考にして行動する。しかし、(30)～(33)においては、ナンナラの発話は聴者に所定の情報を与えるものの、聴者の行動に影響を与えない。すなわち、従来用法と(30)～(33)の違いは、話者が明確な発語媒介行為を意図しているか否かであると考えられる。

## 5. 体系化

3節での予備的考察をふまえて、4節でのデータ分析で観察されたナンナラの意味機能を体系的にとらえていく。

### 5.1. データ分析からの示唆

データ分析から判明したことと示唆されることは以下の通りである。

- (a) 各用例におけるナンナラの意味機能は、単一ではなく複合的であった。このことから、ナンナラは具体的な条件節には置き換えられないことが示唆される。
- (b) 1つの例の中で、Dm/MM/PM (2.6節を参照) のレベルの意味機能が共存しているケースが多く見られた。すなわち、ナンナラのDm/MM/PMとしての多層性が示された。例えば(26)におけるナンナラは、聴者をタクシーで送っていくという案から聴者を自分の家に泊めるという案に切り替えることを示す点でDmであり、後者の案がその場でふと思いついたものであることを示す点でMMであり、また提案に控え目なニュアンスを与える点でもMMである。
- (c) 従来用法にも、「控え目」や「聞き手への配慮」とは直接関係ない用法が見られた。例えば(28)では、「6時間ごと、4時間ごと、いっぺんに全部」というエスカレートの構造の中での極端なケース(「いっぺんに全部」)に言及する際にナンナラが使われている。
- (d) しかし、前述(4.2.2節)のように、(28)でナンナラが「いっぺんに全部」というケースに言及するための導入の役割を果たしていると考えれば、広義の「聞き手への配慮」ととらえることもできる。したがって、島田(2018)が従来用法の特徴と位置付ける「聞き手への配慮」については、より適切な表現を用いて議論を深める必要がある。
- (e) ナンナラの多様な意味機能は、不定代名詞および条件節の意味機能の特徴に基づく観点から整理できる。いろいろな次元でこれらの意味機能が実現される(具体的には5.2節で述べる)。
- (f) 語彙意味論的には、ナンナラの意味機能はvague (Murphy 2010)であり幅広いポテンシャルを持つ。そして、文脈的要因に依存して、複合性を持ちつつある程度具体化される。
- (g) ナンナラが聴者に与える効果としては、例えば、何か課題に直面している状況で話者がナンナラで発話を始めると、聴者は何か提案が後続することを予測する。また、(28)に見るように、話の展開の唐突さを避ける、前置き効果(導入効果)もある。
- (h) 従来用法においては、ナンナラの発話が聴者の思考や行動に影響を与えることを意図している点が特徴的である。新用法や多少の違和感のある用法である(30)~(33)では、それが認められないことが特徴的である。この点については7節で更に議論する。

## 5.2. ナンナラの意味機能の整理と語彙意味論的構造

まず、不定代名詞の特徴(以下、Indf)に関わる意味として、「存在・可能性のみを表す」ことが挙げられる。これは 任意性やアドホック性の意味につながる。データ分析で

観察されたナンナラの意味機能は、この Indf と条件節の横方向および縦方向の意味の組み合わせ、すなわち Add および Scal として、以下のように整理できる（網羅的ではない）。

### 1. Add に関わるもの

- 提示する情報の位置づけ：
  - 例示、単に1つの選択肢にすぎないこと、補足的な関連情報
- 話者の認識に関して：ふと浮かんだ案、意外性、なんとなく感じること
- 話者と聴者の認識に関して：視点の切り替え、新しい可能性の提示
- 後続する発話行為について：
  - 談話中での関連性や必要性についての hedge 表現として（導入効果、「ちなみに」）。話者の躊躇や留保、聴者との距離感
- 対人的効果：和らげのニュアンス

### 2. Scal に関わるもの

- 提示する情報の位置づけ：精緻化（可能性の開拓、レベルのエスカレート、詳細情報、別の言い方での説明）
- 話者と聴者の認識に関して：標準的なレベルあるいは話者や聴者の想定を超えることに言及
- 後続する発話行為について：文脈内にある課題に対して状況打開に関わる発話をすることを示す。
- 対人的効果：「こんなこともできる」というニュアンスを表す（聴者に対する挑発的な態度を表したり脅しに近い効果を持つ場合を含む）。

上記に見るように、Add や Scal が、いろいろな次元（後続情報の位置づけ、話者や聴者の認識、対人的なスタンスなど）で展開される。上記項目 1 と 2 は排他的ではなく接点を持つ（特に、「可能性の開拓」は項目 1 と 2 に共有されている）。一般に条件節「X なら A」は、新たな場合 X を挙げて、その場合に特定して話を掘り下げることにあたる。ナンナラの意味機能はその 2 つの側面と不定代名詞の性質の組み合わせである。

したがってナンナラは、語彙意味論的には、Add および Scal に起因した意味機能がいくつかの次元で展開する vague な総体と考えられる。<sup>8</sup> そして、文脈的要因に基づいて所定部分が柔軟かつ複合的に活性化されると考えられる。

<sup>8</sup> ナンナラの意味機能は、不定代名詞と条件節の一般的性質の組み合わせとしてとらえられ、「なん」と「なら」の字義通りの意味の組み合わせではない。また、ナンナラの意味機能は取り消し不可で、ナンナラという言葉表現固有のものと考えられる。そのため、ナンナラの意味機能は vague な慣習的含意とみなせる可能性があるが、更につめて議論する余地がある。

### 5.3. ナンナラの使用を支える文脈的構造

具体的な条件節とナンナラには使用条件における違いが見られる。発話行為のレベルで使われる具体的な条件節をナンナラと比べる。

- (34) じゃあ行ってくるわね。{おなかがすいたら／??なんなら}冷蔵庫にサンドイッチがあるからね。

上記の第2文は条件文であるが、前件（条件節）「おなかがすいたら」は、後件の命題「冷蔵庫にサンドイッチがある」が成り立つための条件を表してはいない。冷蔵庫にサンドイッチがあるというのは、聞き手の状況によらないからである。「おなかがすいたら」が対応するのは、「冷蔵庫にサンドイッチがある」という命題ではなく、その発話行為における発語内行為（情報提示や許可・提案）である。聴者が空腹にならないければ「冷蔵庫にサンドイッチがある」という情報は必要はないと考え、「おなかがすいたら」は後件の「冷蔵庫にサンドイッチがあるからね」という発話行為の準備的な役割を果たしていると考えられる。すなわち、この条件節は、後件の発話を聴者にとって関連性のあるものとするための状況設定を行っているともみなせる。

さて、「おなかがすいたら」をナンナラに置き換えると違和感を生じる（筆者の直観による）。これは、ナンナラが具体的な条件節の置き換えではないことを示唆している。

これに対して、以下の例文ではナンナラでも自然である。

- (35) おやつにこのクッキーを食べてね。{足りなければ（、他のものが良ければ、etc.）／なんなら}冷蔵庫にサンドイッチもあるからね。

例文(34)との違いは、前段階として「このクッキーを食べてね」があることである。その文脈で、ナンナラは、「クッキーで足りなければ」、「他のものが良ければ」などの条件を包括して表す。この例では、「クッキーを食べる（あるいは食べない）」の次の段階として「サンドイッチを食べる」に言及されているという構造がある。「サンドイッチも」の使用もこれに関与している。談話中でのトピックを更に発展させる際にナンナラが使えることは、Scalに帰着できる。(34)の場合は背景にScalに帰着できる段階的な構造がないためナンナラが使えないと分析できる。

更に考えてみる。(34)において「じゃあ行ってくるわね」の後に「楽しい午後を過ごしてね」があると、ナンナラが許容できる。また、ナンナラがないと不自然になる。ここでは、ナンナラが「楽しい午後を過ごしてね」と「冷蔵庫にサンドイッチがあるから食べてもいいですよ」をつなぐ働きをしている。すなわち、サンドイッチを食べることと楽しい午後を過ごすこととの間に関連性が見出される。もとの(34)のように前後の発話に関連が見出すのが困難な場合にはナンナラが使用困難となるが、ナンナラによって関連性が作り出される範囲内ではナンナラが使用可能となる。これも、状況打開や話の発展に関連し

た Scal に帰着できる。

## 6. 「控え目」のニュアンスの再考

前節までの議論をふまえて、従来用法において代表的とされる「控え目」の用法について再考する。

### 6.1. ポライトネスの観点から

ナンナラは、主に Add に起因して、単に1つの選択肢としての位置づけを表し、また発話に何らかの距離感（間接性）を与え、hedge 表現として機能する。特に、提案や申し出を相手に押し付けないネガティブポライトネス (Brown and Levinson 1987)<sup>9</sup> を生じる。これは、取り立て詞の「も」(沼田 1995) や英語の *sort of* (Aijmer 2002) の場合と同様である。

(36) 診察結果を先生から先方に報告していただくことになっておりますが、なんなら私が自分で報告しても結構ですよ。

上記 (36) においてナンナラを「お忙しければ」、「ご面倒なら」と言い換えた場合と比べると、ナンナラの方が一種のさりげなさ（でしゃばらない雰囲気）を伴う。具体的な内容を非明示にしたナンナラは、既存の選択肢（先生から先方に報告）を残しつつ別の提案を行う意味合いを与えるだけである。ナンナラは、単に簡易表現として存在するのではなく、具体的な内容を非明示にしてあること自体に存在意義を持つことが示唆される。<sup>10</sup>

(37) ちょうど今アップルパイが焼けたんです。{よかったら/??なんなら}召し上がりませんか。

例文 (37) における「よかったら」は、「お口に合うかどうかわかりませんが」のような謙虚な意味に解釈され、ポライトネスを上げる。これをナンナラに置き換えると、筆者の直観ではポライトネスが下がる。なぜだろうか。「よかったら」は提案を相手に押し付けないというネガティブポライトネスの観点から「控え目」を表すが、ナンナラは、発語内

<sup>9</sup> ポライトネスについての理論は Brown and Levinson (1987) に限られないが、ポライトネス理論そのものの詳細は本稿の範囲を超える。ここで言及しているネガティブポライトネスは、広義のものである。すなわち、社会的に目上の人に対するものに限らず、例えば親しい友人に対して「明日映画に行かない？」と疑問文を用いる場合のように、相手の意志を尊重する場合なども含める。提案や申し出におけるナンナラは、その意味でのネガティブポライトネスに関わっている。

<sup>10</sup> 単なる「なら」は談話中で相手の発話内容を受けて用いる「それなら」の「それ」が省略されたものであり、ナンナラとは異なる。

行為を和らげる効果、すなわち相手にさしあげる行為（話者の気持ち）自体を控え目に表してしまうためと分析される。

次に、クレームをつけてくる顧客に対して、店員が以下のように言ったとしよう。

- (38) ですから、さきほどからご説明している通りです。なんならお客様のクレームを公表させていただいても結構ですけど？

この例では明らかに、聞き手が望まないことを提案しており、脅しに近い効果を持つ。これは2通りの説明ができる。1つめは、Scalに起因して、聴者が想定していない領域に踏み込む意味合いが生じることである。これが、「あなたが想定していないことを、こちらはできるんですよ」という意味合いとなる。もう1つは、アイロニー的な使い方としての説明である。聴者が望むはずのないことに対して、「よかったら」に相当する気遣いの表現を使うことにより、アイロニー効果をもたらす。これは、相手が恩恵を受けることを示す「させていただく」やほかし効果のある発話末の「けど」という共起表現、および疑問文の使用にもあてはまる。「～しますよ！」といった直接的な強い表現と対照的に、上記のナンナラを伴う発話では、相手の嫌がることをちらつかせることにより独特な効果を生じる。更に、上記例文ではナンナラの発話が、「クレームを公表されたくなければそれ以上言うな」という間接発語内行為も行っている。

## 6.2. 提案や申し出におけるナンナラ

提案・申し出の文脈における「控え目」のニュアンスについて、前出の例文（番号を改めて再掲）と追加の作例により再考する。

- (39) 道わかりますか。なんなら一緒に行きましょうか。  
 (40) いいや、いる！ここにいる！なんなら証拠を見せようか！（LBq9\_00077 55330）  
 : ①  
 (41) 私の料理に文句ばかり付けて。なんならあなたが作ってくれてもいいのよ。

上記(40)～(41)において、ナンナラは提案とともに使われているが、(39)のような控え目なニュアンスは感じられず、むしろ攻撃的なニュアンスが感じとれる。(40)は(27)の再掲である。「ここにいる！」という話者の主張が聴者にすんなりと信じてもらえない状況で、「証拠を見せる」という次のステップを提案している。(41)では、話者が料理を作るものと決めている相手に対して、「自分で作る」という新しい（想定外の）視点を示している。(39)も、聴者が1人で行くという前提を取り下げて話者が一緒に行くという新しい視点を示している点では(40)～(41)と同じである。ニュアンスの違いはどこから来るのか。

まず(40)～(41)だけを見ると、ナンナラは聴者の意向への配慮を表しているように

も見える。しかし(40)では、「聴者の意向への配慮」は聴者が話者の主張を信じない現状を指摘・強調することとなる。(41)では、聴者の方への視点の切り替え(料理をする人の候補に挙げる)自体が聴者にとっては嬉しくないことである。このため、これらの文脈では、攻撃的あるいは嫌なことをちらつかせるような効果を生じる。前出の(38)についても同様である。つまり、ナンナラが(39)におけるような典型的な「控え目」あるいは和らげの効果を持つことには、文脈的要因が関わっている。

更に、このような攻撃的なニュアンスでの使い方が慣用化している可能性もある。Mazzon (2017: 290) は英語の DM の通時的な変化を分析し、いくつかの DM において、ポライトネスの機能が逆の(対人的な摩擦を増大させる)方向に発展する現象(“deontic reversal”)を指摘している。<sup>11</sup>

以上の考察から、「控え目」の意味は提案や申し出に伴う場合が多いが、文脈的要因が関わり、提案や申し出の文構造で必然的に生じるものではないことがわかった。

## 7. 新用法の位置づけ

### 7.1. 島田 (2018) の分析

島田 (2018) は、新用法についても具体的な条件節への言い換えによって考察を進めている。基本的な言い換え表現として以下の(ア)～(ウ)を挙げている。

- (ア) なお言えば(ついでに言うと)、あえて言うなら(言わせてもらえば)
- (イ) ややもすれば、ともすると
- (ウ) 下手すると、放っておくと、油断すると (島田 2018: 16)

島田は、(ア)は言表態度に関わる用法、(イ)(ウ)は言表事態に関わる用法と区別している。更に、ナンナラの多様な意味機能について、次のようにとらえている。

この(ア)～(ウ)は相互排他的に…「用例の分類先」としての項目ではなく、新用法「なんなら」の意味を構築する意義素のような成分として扱われるものである。個々の用例からその意味成分を取り出すことによって、新用法同士の間、あるいは新旧の用法の間に相互の関連性を見出そうとする試みであるため、意義素は各用例においてしばしば重層的にタグ付けされる。(p. 17)

そして、「これら(注. (ア)～(ウ))の要素によって総合的に構築される文脈的含意を

<sup>11</sup> したがって、ポライトネスについては、ナンナラの意味機能はポライトネスを上げるか下げるか両方の可能性があり、underspecified(未確定)である。underspecificationの概念の形態論や(語彙)意味論への応用についてはBunt(2007)に議論がある。

『なんなら』は一言で端的に表すと言ってよい」(p. 18) と述べている。

## 7.2. 本稿の分析

本稿では、新旧用法に共通して、「なん」の不定代名詞としての性質と条件節を作る「なら」の2つの側面の組み合わせから生じる Add と Scal の意味、および文脈的要因とで、ナンナラの多様な意味機能が生じると分析した。5.1 節で述べたように、ナンナラは語彙意味論的には vague で、文脈的要因と合わせて複合性を保ちながら具体化されると考えた。後者の点は、上記の島田の「『なんなら』は一言で端的に表す」という指摘と通じる。

新用法も、発話レベルに関わる DM としての意味機能を持ち、Add と Scal との関連で説明できる点は従来用法と同じである。違いは何だろうか。

データ分析 (4 節) とその体系化 (5 節) で示したように、従来用法のナンナラは、聴者あるいは話者が何らかの課題・問題に直面している文脈で、状況を改善したり物事を一歩進めたりするきっかけを与える際に使われる。あるいは、物事を新しい方向へ進める際の導入の役割を果たす。いずれも、聴者あるいは話者の思考や行動への橋渡しの役割をする。提案や申し出はこのスキーマにあてはまる。

それに対して、近年の新用法はナンナラが叙述の文で使われることが多い。話者の認識形態や後続情報の位置づけなどを表し、聴者の思考や行動に対する直接的な働きかけは特に見出されない。これが従来用法との違いとみなせる。

ここで他の DM の通時的変化と比較する。Mazzon (2017: 301) は、英語の DM について以下のような通時的発達過程のモデルを提案している (改行の場所および語頭の大字/小文字の区別は原文のまま)。

Textual > Subjective > epistemic > deontic  
> Intersubjective > polite > (ironic) > impolite  
hedging > (ironic) > adversarial

上記の考察 (ナンナラの発話が聴者の思考や行動に影響を与えるか否か) に基づけば、従来用法ではナンナラが他のレベルと複合的に間主観的 (intersubjective) なレベルで用いられると言える。これに対して、新用法では単に話者の認識におけるアドホック性や後続情報の補足的な位置づけや言い換え表現としての位置づけなどを表すため、epistemic (様相的)、主観的 (subjective)、あるいはテキスト的 (textual) なレベルで用いられ、間主観的 (intersubjective) なレベルは関わっていない。島田の指摘する新用法のタイプ (ア) ~ (ウ) (上記 7.1 節で言及) にも間主観性が関わっていない。ナンナラにおける intersubjective から epistemic、subjective、textual への変化は、Mazzon (2007) の提案するモデルと逆向きの通時的変化である。従来用法は共存しているためナンナラ自体は依然として intersubjectivity レベルの DM であるが、新用法に注目すれば intersubjectivity 以

前の段階のDMとしてふるまっているとみなせ、一種の back formation ととらえられる。英語と日本語を単純には比べられないが、このことは興味深い。

上記の考察により、島田(2018)が従来用法の特徴であり新用法にはない性質として指摘する「聞き手への配慮」は、間主観性(intersubjectivity)と言い換えるのが妥当であると考えられる。

## 8. 結論と理論的含意

ナンナラのDMとしての意味機能を、理論的・実証的な観点から議論した。

ナンナラを不定代名詞「なん」と条件節を作る「なら」の組み合わせと考へ、それぞれの意味的な性質から導かれる Add と Scal と対応させて、ナンナラの多様な意味機能を説明した。ナンナラは具体的な条件節のショートカットではなく、具体的な内容を非明示にしてある点に存在意義がある。

従来用法において代表的な「控え目」の意味は、他にも選択肢があるという含意から来る和らげの意味と、当該の発語内行為を和らげる効果に帰着できる。しかし文脈的要素が関わるため、提案や申し出においてナンナラが使われた際に必然的に生じるものではないことを示した。

近年の新用法は、ナンナラが願望や叙述の文で使われることが多い。従来用法と異なり、ナンナラの意味機能はその発話内で完結し、聴者の行動に反映される要素がない点特徴的である。英語のDMの一般的な通時的变化のモデルと比べると、新用法ではナンナラが intersubjectivity 以前の段階のDMとしてふるまっており、一種の back formation ととらえられる。

本稿は、多様な意味機能が何に起因しどのように生成されるのかを語彙意味論的な観点と語用論的観点から分析した。したがって、語用論と語彙意味論との接点あるいは融合に関わる研究である。また、確立された特定の語用論の理論的枠組みの応用事例ではなく、課題発掘型の研究と位置づけられる。

純粋に語用論的な研究としては、関連性理論の枠組みでの分析が考えられる。同じ問題を全く別のアプローチで分析し、それらを比較融合すれば、1つのアプローチでは得られない新しい知見が得られることが期待される。

## 参考文献

- Austin, J. L. 1975. *How to Do Things with Words* (2nd edition). Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a Corpus*. (Studies in Corpus

- Linguistics* 10). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bunt, H. 2007. “Semantic Underspecification: Which Technique for What Purpose?” In Bunt, H., and R. Muskens (eds.) *Computing Meaning Volume 3 (Studies in Linguistics and Philosophy 83)*, 55–85. Dordrecht: Springer.
- Fedriani, C. and A. Sansó. 2017. “Introduction (Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles: What Do We Know and Where Do We Go from Here?)” In Fedriani, C. and A. Sansó(eds.) *Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles: New Perspectives*, 1–33. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Hall, A. 2007. “Do Discourse Connectives Encode Concepts or Procedures?” *Lingua* 117, 149–174.
- Haspelmath, M. 1997. *Indefinite Pronouns (Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory)*. Oxford: Oxford University Press.
- Heine, B. 2013. “On Discourse Markers: Grammaticalization, Pragmaticalization, or Something Else?” *Linguistics* 51 (6), 1205–1247.
- Huang, Y. 2015. *Pragmatics* (2nd edition). Oxford: Oxford University Press.
- 河野武. 2020. 「情動的関連性の気づき・気づかせの標識としての Oh と Ah」、『人間生活文化研究』30、60–80.
- Kim, M-J and N. Jahnke. 2010. “The Meaning of Utterance-Final *Even*”. *Journal of English Linguistics*. 39(1), 36–64.
- Kissine, M. 2013. *From Utterances to Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 工藤浩. 2016. 『副詞と文』東京：ひつじ書房.
- Lenk, U. 1998. *Making Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in Spoken English*. Tübingen: Gunter Narr.
- Mazzon, G. 2017. “Path of Development of English DMs:(Inter) subjectification, Deontic Reversal and Other Stories.” In Fedriani, C. and A. Sansó(eds.) *Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles: New Perspectives*, 289–304. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 水田洋子. 2022. 「談話標識としての『なんなら』: 多様な意味用法への文法化現象」、『日本語用論学会第 24 回大会発表論文集』、147–154.
- Murphy, L. 2010. *Lexical Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中俣尚己. 2021. 『「中納言」を活用したコーパス日本語研究入門』東京：ひつじ書房.
- 中右実. 1980. 「文副詞の比較」、『日英語比較講座第 2 巻 文法』、157–219、東京：大修館書店.
- Nishida, K. 2007. “Pragmaticalization and the History of Japanese Discourse Markers (N. Onodera, Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis).” Review Article, *English Linguistics* 24, 184–211.
- 沼田善子. 1995. 「現代日本語の『も』 —とりたて詞とその周辺—」、『「も」の言語学』、13–76、東京：ひつじ書房.
- Onodera, N. 2002. *Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse*

- Analysis (Pragmatics & Beyond New Series)*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Schourup, L. C. 2017. *Common Discourse Particles in English Conversation*. London and New York: Routledge.
- 島田泰子. 2018. 「副詞『なんなら』の新用法：なんなら論文一本書けるくらい違う」、『二松学舎大学論集』61、1-23.
- Shinzato, R. 2011. “From a Manner Adverb to a Discourse Particle: The Case of *Yahari*, *Yappari* and *Yappa*.” *Journal of Japanese Linguistics* 27, 17-44.
- Shinzato, R. 2017. “Grammaticalization of PM/DM/MM in Japanese.” In Fedriani, C. and A. Sansó (eds.) *Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles: New Perspectives*, 305-333. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 飛田良文・浅田秀子. 2018. 『現代副詞用法辞典』東京：東京堂出版.
- 渡辺実. 1971. 『国語構文論』東京：塙書房.

#### コーパス

- [1] 国立国語研究所言語開発資源センター コーパス検索アプリケーション『中納言』を用いた『現代日本語書き言葉均衡コーパス 通常版』(BCCWJ) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (中納言 2.6.0 データバージョン 2021.03)

〈書評論文・書評〉 [書評]

Miyuki Nagatsuji, *The Pragmatics of Clausal Conjunction*  
(*Hituzi Linguistics in English No. 33*),

Tokyo : Hituzi Syobo, 2021, xii + 160p., ISBN 978-4-8234-1069-7\*

西 田 光 一  
山口県立大学

## 1. はじめに

本書は著者が 2018 年に奈良女子大学から博士（文学）を授与された学位論文を改訂したもので、全 7 章から成る。参照文献を見れば分かるとおり、著者のそれまでの研究歴とほぼ重なる 10 年来の蓄積を一書にまとめてあり、現時点における日本語の節と節の等位接続に関する到達点とも言える研究である。全章、英文で書かれており、理論的には Ariel (2012) の英語の and の等位接続の解釈の 2 分法に基づいているが、主たる事例は日本語の接続形式にある。また、タイトルのとおり、本書の主題は節間の等位接続の語用論的研究であって、意味論的、または文法的研究とは違うという主張が込められていると思われる。

もちろん、節間の等位接続は日本語学においても先行研究が多く積み重ねられており、著者も幅広く取り入れている。これは日本の大学での「英語学」のモデルでもある。英語圏、特に英米の理論言語学の学説（ここでは Grice の会話の推意や関連性理論など）を学んだ研究者が自説を展開するときには日本語の例を中心とすることが多い。書評子はこの流れを批判するものではない。ただし、ここには暗黙の了解があり、英語の例を見ているだけでは気づかないことが日本語を見ると見えてくる。もっと言えば、ある理論的立場に対し、英語より日本語の方が多くの証拠を提出できるというものである。これは形態論や統語論では言語形式の裏打ちとして、そのとおりに受け止められて良いかもしれないが、語用論でも同じかという疑問が生じる。特定の形式と意味の対応は文法の問題であって、語

---

\* 本研究は科研費 18K00542、18H00680 および令和 4 年度山口県立大学学術推進共同体（シニア）研究費の助成を受けたものである。原稿の段階で有益なコメントを与えていただいた匿名の査読者に感謝したい。本論中、maxim の訳語としての「格率」、Generalized Conversational Implicatures の訳語としての「一般化された会話の推意」は田中・五十嵐 (2007) から、また contextualization cues の訳語としての「コンテキスト化の合図」は井上 (2015) からお借りしてある。

用論の問題ではないからである。実際、本研究のどこが語用論的かという点は後で詳しく議論するが、まずは関連性理論で言う手続きの意味に依拠した説明を試みている点が語用論的であると言って良い。

本書の主題に入ろう。Grice (1975) が論じているように、and の意味は語用論では原点というべき問題である。以下の例文は井上 (2015: 161) から引用してある。

- (1) a. The capital of Japan is Tokyo and the capital of France is Paris.  
 b. The capital of France is Paris and the capital of Japan is Tokyo.
- (2) a. Alfred went to the store and bought some whisky.  
 b. Alfred bought some whisky and went to the store.

周知のことを復習すると、(1) の2文では a. と順序を入れ替えた b. は同じ意味で理解されるが、(2) で順序を入れ替えた2文では、アルフレッドの行動の順序も入れ替わり、a. と b. は同義ではない。そのため、(1) の and とは違い、(2) の and には順序や結果を表す ‘and then’ の意味があると考え、and の意味が肥大化してしまう。Grice は and の意味を論理積 ( $A \wedge B$  の  $\wedge$ ) として一義的なものに簡素化し、順序や結果といった節間の意味は推論として会話の格率、特に Maxim of Manner から導くことを提案し、これが現代の語用論の発端ともなった。

この議論は英語の例をそのまま見ている分には妥当に思えるが、言語普遍的ではなく、英語（およびヨーロッパ系諸言語）に and のような一見、無色透明の接続詞があるから可能な議論である。事実、(1) と (2) を日本語に訳すと、微妙な違いが生じる。

- (1') a. 日本の首都は東京 {であり/?であって}、フランスの首都はパリである。  
 b. フランスの首都はパリ {であり/?であって}、日本の首都は東京である。
- (2') a. アルフレッドは店に {行って/行き}、ウイスキーを買った。  
 b. アルフレッドはウイスキーを {買って/買い}、店に行った。

(1') では2つの節を連用形で接続できても、テ形は不自然になる。一方、(2') では連用形とテ形の両方が可能である。このような形式的な区別を見ると、(2) の and を ‘and then’ と読み込むことに何らかの根拠があるようにも思えてくる。

Ariel (2012) は (1) や (2) のような文接続の and の一義的な扱いを批判し、and には独立的解釈と関係的解釈という2種類の解釈方法が区別されると論じている。簡単にまとめると、独立的解釈は第1節と第2節がそれぞれ独立した意味を表すもので、関係的解釈は第1節と第2節が結びついて1つの意味をなすものである。上記の例で言うと、(1) のように順序を入れ替えても意味が同じものが独立的解釈で、(2) のように順序を入れ替えると意味が通じなくなるか、別の意味になるものが関係的解釈である。この区別は日本語の形式的区分と一致し、著者の議論のベースでもある。

## 2. 本書の主張

本書の構成を簡略に紹介する。第1章は序論で、全体の流れを示してある。第2章は英語の *and* の文接続の先行研究を再検討し、文接続の *and* の解釈を2分割する Ariel (2012) が有望であると議論される。第3章は日本語の文接続の概要を述べるとともに、関連性理論の要点をまとめ、日本語の接続形式と手続き的意味の関係を議論している。続いて各論に入り、第4章はテ接続、第5章はタリ接続とシ接続を分析し、第6章で日英比較の文接続のモデルをまとめている(下記の(4))。これら3章が著者独自の議論になっている。第7章は本書を振り返る内容の結論である。

注目すべき著者の達成点は、英語の事例を見るかぎり、文接続の *and* については一義的な扱いがスマートに思えるところでも、日本語の観点からは Ariel が言うような分割的アプローチが支持されることを実証した点にある。

著者は、日本語の接続形式は、Ariel の独立的解釈には「～シ、～」と「～タリ、～タリ」が対応し、関係的解釈には「～テ、～」が対応すると議論する(各形式で「～」には節が入るものとする)。著者の議論の特徴は、このように文の形式を決めたうえで、各接続形式の機能を論じる点にある。

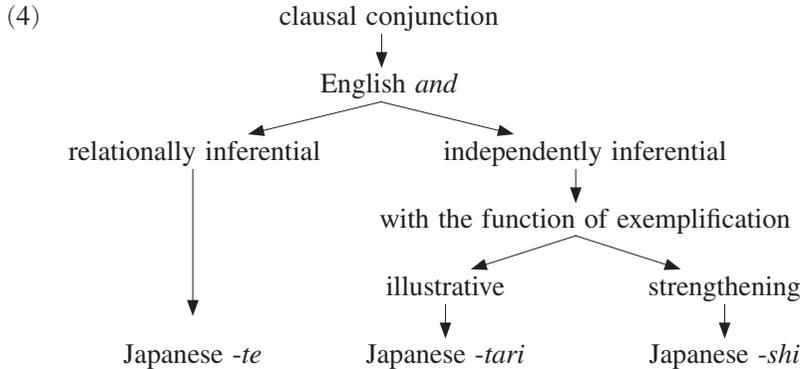
著者は上記の日本語の各接続形式を *structure* と呼ぶ一方、英語の *and* で等位接続された重文 (*compound sentences*) は、単に *and-conjunctions* または *and-utterances* と呼び、*structure* で区分されるものとはしない。本書の3.2節で論じられているとおり、英語の *and* で接続された2文は文法的に等位だが、日本語のテ接続、タリ接続、シ接続はそれぞれに形態統語論な特色があり、時制がどの節に依存するかに関して違いがある。例えば、テ接続では前半の節は後半の節の時制に依存するが、シ接続にはそのような依存関係はない。さらに3者は文内の分布でも違いがある。そのうえで3者を1セットで論じる理由は3者が英語の *and* の等位接続に機能的に等しいからである。

日本語の文接続に関わる3形式を *structure* として表すところは用語の問題のようでいて、本書の大きな特色である。

- (3) a. 同じテ形、タリ形、シ形の用法でも、上記の *structure* に合わないものは扱っていない。そのため、テ形単独の言いさし文や、Nakanishi (2013) が論じるようなテが動詞と動詞を組み合わせる用法は扱わない。
- b. 各 *structure* は特有の手続き意味を表し、例えば *-te structure* では「2つの節を1つの推論単位(一続きの内容)として解せよ」の手続きが指令される。
- c. 日本語は節間の関係から導かれるべき推論が文接続の言語形式に反映される点で構造依存的である。これが *structure* という用語を使う理由と思われる。

このようにテ、タリ、シの用法を形式的に限定した結果、本書の議論は抑制的で説明力が高まる一方、テ、タリ、シの全体像が見えてこないところも残る。

著者の主張をまとめた図示 (p. 138) を引用する。



英語の *and* による節の等位接続は、解釈上、関係的と独立的に分かれるが、日本語では両者は形式的に分かれ、前者はテ接続に、後者はタリ接続とシ接続に対応する。さらに後者では、タリ接続は談話の展開を例示 (*illustrative*) し、シ接続は談話上の想定を補強 (*strengthening*) するというように形式と機能の分化が進んでいる。

### 3. 個別の論点

本書の概略を見たところで、記述面で2点、理論面で2点、批評を加えておきたい。

第一に、著者の言語事実の記述が十分かという問題がある。著者はテ接続に関する代表的な先行研究として Hasegawa (1996) を取り上げ、Hasegawa の説明には当てはまらないが、本書の説明ではうまく扱えるテ接続の例があるとす。次の例は本書 (p. 70) のもので、最初のテ節を前置的に読むところが特徴である。なお、以下、本書の例文は原文のローマ字表記を漢字かな表記に改め、番号もここに揃えた。

(5) 拙宅にもプールがあって、南仏事情に疎かったから、プール付きと言われて飛びついた。

(5) は、著者が論じるように (p. 71)、節の並べ方が時間の流れに一致しない点が興味深い。つまり、南仏事情に疎かった人が飛びついて家を買った結果、その家にプールが付いていたことになる。この観察はとても興味深く、確かにテ接続では第1節が原因となって第2節が続くという Hasegawa の説明には合わない。

著者 (p. 75) は同じくテ接続を扱う三原 (2011) を検討し、(5) では、テ節は談話の展開上、後続の内容の導入部として機能するので、自分の説明に収まると論じている。だ

が、(5)のように第1節が第2節の結果として解せるテ接続の用法がどうすれば成立するか掘り下げる必要がある。

次は意図的に時間順を前後させた作例だが、思考実験の材料にしたい。

- (6) a. ?9回裏に逆転のチャンスが来て、1回裏に3番がフライでアウトになった。
- b. 9回裏に逆転のチャンスが来て、1回裏に3番がフライでアウトになっていて、監督は3番に代打を送った。

(6a)は、第1節と第2節が時間逆行的で、不自然な話し方になる。一方、(6b)のように会話の流れを長くし、第1テ節よりさらに後の展開を入れると、第1節が第2節の前置きとして解せるようだ。(5)は一部だけ切り取ってあるので分からないが、その後の展開もあるものと思われる。これ以上の詳論は控えるが、(5)は、本書が依拠する現代日本の小説から収集した他の例とはレジスターが違い、テ接続の全体像の把握には2つの節を見るだけでは足りず、会話分析的な観点も必要なことを示唆している。

また、著者は、関係的なテ接続は2つの節が1つの推論単位をなすので、第1節だけにすると一貫性が失われると論じている。そのため、(7a)のテ接続の前半だけで終えた(7b)は不自然に聞こえる (sound odd) という (p. 85)。??は本書の判断である。

- (7) a. 東京都では石原都知事が無法なカラスに頭にきて、カラスを撃退するためのプロジェクトチームを発足させました。
- b. ??東京都では石原都知事が無法なカラスに頭にきました。

ただ、この議論は補足が要るだろう。匿名の査読者から示唆されたように、(7b)が不自然な理由は、石原都知事という有名人がトピックなので、これだけでは同知事についてのニュースにならないという事情によると思われる。もっとも、(7b)の文に文法上、欠けたところはなく、(7a)の内容を表すのにテ接続が必須というわけでもない。拙い言い方だが、(8)のように2文を並べただけでも、第1文が原因で第2文の結果に至ったことが推論できる。(8)のような並べ方は、例えば石原都知事に関するニュースの冒頭に特徴的である。

- (8) 東京都では石原都知事が無法なカラスに頭にきました。カラスを撃退するためのプロジェクトチームを発足させました。

この例が示すように、2つの節から1つの推論単位を導く機能はテ接続に固有なものではなく、むしろ談話の一貫性の反映である。

著者はKehler (2002) に言及していないが、節間の内容で何が一貫するかという問題に取り組んでも良い。Kehlerは全ての2文間の関係は類似 (Resemblance)、原因と結果 (Cause-Effect)、時空の隣接 (Contiguity in time and space) の3種類に集約されるとし

ている。接続関係の細分化とともに、再編と階層的な体系化も必要である。

シ接続に関して短く触れておくと、著者は (9) のような例を基に、シ節は後続の節に前提 (premise) を与えると論じている (p. 119)。

(9) 私は都会育ちだったし、長い戦争のために泳ぎを覚えるチャンスもなかった。

このようにシ節は後続のモと係り結びで呼応するが、本書ではモが議論されていない。文の形式を限定するのであれば、モまで含めた形式の指定が要るのではないか。ただし、このように structure を決めていくと、議論が推論重視の語用論というよりは、予め指定された形式から導かれる解釈として文法の問題になっていくだろう。

第二に、テ接続、タリ接続、シ接続という3者で網羅的かという記述面の問題もある。例えば、終助詞の「わ」では「泣くわ喚くわ」といった定型表現に加え、次のような節と節の等位接続も可能である。

(10) 昨日の登山は大変だった。蛇が出るわ、雨が降るわ、スマホは壊れるわ。

このようなワ節の連鎖は状況のリストという点で例示のタリ接続に似ており、独立的解釈を担うと思われる。ただ、「蛇が出るわ」という1節では使えず、少なくとも2節を続ける点では関係的解釈を担うとも見られる。この *-wa structure* と言うべき節の並べ方は、テ接続とは形態統語論では違っても、節を対等に並べる機能では共通しており、これを (4) の分類にどのように入れるかは今後の課題と思われる。

次に理論面で1つ考えたいことがある。テ、タリ、シの各 structure の手続き意味は、常に当該 structure から表されるものか、またはデフォルトで伝えられるが、文脈次第で別の意味に変えられるものかという問題である。「兄は料理人になって、弟は歌手になった」のような対比または並列の用法では内容は2分されたままのため、テ接続は1つの推論単位を表すとは言いにくく、*-te structure* の手続き的意味はキャンセル可能な会話の推意である。著者の考えとは違うだろうが、本書で言う structure の手続き意味は、個別の文脈に因らず、特定の言語形式の一般的な (デフォルトの) 用法を規定する点で Levinson (2000) が言う一般化された会話の推意 (Generalized Conversational Implicatures (GCIs)) に該当するとも言える。著者 (pp. 17-23) は英語の *and* の等位接続に関し GCIs による説明を批判しているが、形式と機能の対応が細分化した日本語ではどうなるか再考する価値がある。

理論面ではもう1点、形式重視の本研究の今後の方向に関し、見玉 (2010: 143) の次の一節を引用しておきたい。

(11) 「接続」という確立した文法用語があるわけではない。「接続」を意味・統語上の「つながり」と考えれば、複数の命題をつなぐことが接続と解釈される。もしそ

うだとすれば、接続標識なしに文と文（または節と節、命題と命題）をつなぐ形式が接続の基本構造であり、接続の前提となるはずである。、、、接続の全体像に接近するためには、接続標識をもつ文内の構造だけでなく、接続標識をもたないで文をつらねる構造を分析することが不可欠であろう。

児玉の意見を敷衍すると、文接続では形式の対応がない表現に正面から取り組む研究が出てくることを期待したい。例えば、「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」といった対句は、接続標識はないものの、一種の關係的解釈を促す表現方法と思われる。形式を手掛かりにすると、どうしても議論が文法寄りになるが、表現の形式によらず、表現の内容から導かれる推論の法則性を議論する方が語用論的である。

#### 4. 今後の展望

最初に記したとおり、本書は著者の学位論文を基にしており、いわば研究者としてのデビュー作とも言え、著者は今後、この成果を発展させていくことが期待される。そこで本書では未解決、未着手の問題に、最後に言及しておきたい。

英語の *and* の等位接続が日本語ではいくつか別の接続形式に分化するという問題設定から著者は出発しているが、著者は専ら日本語の方に進み、英語の研究としては、やや不足感が残る。You drink another can of beer and I'm leaving. のように前半が条件節的に解される英語の *and* の文接続など、本書で触れられるべくして触れられていない事例もある (Culicover and Jackendoff 2005; Francis 2005)。

Ariel の研究は特定の理論で全ての事例を説明しようとはせずに、言語事実から一般化を導く点が特徴である。本書は、そのアプローチが英語より細分化した日本語の文接続の形式によって支持されることを示し、Ariel の主張の妥当性を確認したことにもなる。ただし、著者は Ariel の *and* の2分割解釈は Blakemore and Carston (2005) の *and* の一義的な扱いと両立可能で、Ariel が *and* の語用論的解釈を論じているのに対し、Blakemore and Carston は *and* の意味論を論じているとして両者の調停を提案している。だが、英語の *and* の多様な用法に関し、何が1語に束ねているかには答えていない (p. 145)。これから論じるように、*and* の意味を明らかにすることは *and* を備えた言語の思考法を明らかにすることになる可能性もある。

一般的な観点から言うと、日本語では細かく言い分けるところを英語では一括して表す事例が節間の等位接続以外にあるかという問題がある。文接続の *and* に似て、*or* や *as* も極めて概括的な関係を表しており、このような単語が日本語にあるかという疑問がわく。英語の *and*, *or*, *as* といった単語が表す意味は日本語では助詞や動詞などの活用語尾で表しているという見方も可能かもしれない。言語間の対照語用論には、個別言語の形態論や

統語論を入れる必要があり、一方の言語の語用論的問題が他方の統語論の問題というように対処法の違いが出てきて当然であろう。テ形の諸用法を統語論構造に反映させる近年の試みでは三原 (2015) が参考になる。

日本語のように文接続の形式が細かく分化して各形式の機能が決まっている言語は、聞き手には親切でも話し手の都合ではかえって面倒であり、英語のように2文を *and* で接続しておいて、2文間の関係は聞き手の推論に任せる方が語用論重視で文法は単純で済む。Grice 的に言えば、2文間の関係に関して「必要十分な情報量のあることを言え」という格率を日本語では文法のレベルでも順守するが、英語では、そこまで順守しない。言語間で文法と語用論の範囲が違うとなると、対照言語学から見た語用論は、どうあるべきかというさらに大きな問題に帰着する。やや粗い議論になるものの、言語学の他の分野と比べ、語用論では言語間の対照が、どのように可能か考えたい。

まず語彙は、対照言語学で各言語の特徴を明らかにすることがストレートに可能な分野である。Chomsky (1965: 142) が「語彙は当該言語の不規則性 (irregularities) の総体である」と指摘するとおり (cf. Bloomfield 1933: 274-275)、個々の表現は全て語彙に入るため、語彙の対照では日本語の「兄」と「弟」が英語では同じ *brother* であり、「稲、米、飯」がいずれも *rice* であるといった言語間の違いが明瞭である。

語彙と同じく、*English phonology*、*English morphology*、*English grammar* といった分野も英語に固有の特徴を発音、語形成、文の構造から説明することが目的である。

しかし、*English pragmatics* という修飾関係に、どこか違和感を覚えるとすれば、語用論が英語という個別言語の特徴を明らかにすることに特に関心はなく、もっと広く、何語にも妥当するような言語コミュニケーションの特徴の方に関心があるからである。実際、ことばを使う上で「関係があることを言え」や「必要十分な情報量のあることを言え」といったガイドラインは何語においても守られるべきであり、一見、そういったガイドラインに反した発言には何かウラがあると推測できるのも何語でも同じと考えられる。また、*English pragmatics* として理解されている内容も、英米の語用論研究で取り上げられてきた前提や発話行為等に関わる表現を対象としており、そのような表現を他の言語に翻訳することも十分に可能である (Cummins 2019)。

一方、英語では前提の議論は冠詞の *a(n)* と *the* の違いに言及せざるをえず、*the* に類する単語は、どの言語にもあるわけではない。この面だけ見ると英語での前提の表し方は、英語の限定詞の文法の問題に思えるが、実はそうではない。*a(n)* と *the* の違いは確かに前提に関係するが、前提の全てのケースをカバーするものではないからである。

他にも、過去形と現在完了形、*come* と *go* の使い分けなどは、文脈に因るところが多く、語用論的説明が可能であると同時に、英語の語彙と文法に特有なものでもある。この部類に本書が扱う文接続の *and* も入る。このように英語の語彙と文法の特徴でありつつ文脈依存が高い表現の研究が *English pragmatics* に値するとも言える。

本書の最大の理論的功績は、言語ごとに語用論の内容が違うかという問題提起にある。英語を素材に作られた語用論の理論と日本語（または別の任意の言語）を素材に作られた語用論の理論が細部まで同じかという問題は真剣に研究するに値する。

この問題には2通りの回答があると思われる。1つには、英語の発想、日本語の発想のように、各言語に特有の考え方があるという立場である。これは多くの場合、文法や表現方法に関して問題になる。例えば、A ten-minute walk takes you to the museum. といった無生物主語の他動詞文は英語らしいというわけである（西村 1998: 136-161）。それが語用論にも適用され、各言語で、英語らしい推論の方法や日本語らしい推論の方法があるという立場になる。井出・藤井・高梨（2016）、井出・藤井（2020）、井出・藤井・岡・大塚・櫻井（2022）のシリーズのように、近年の場の理論は、そのような方向とも見受けられる。いきおい、このアプローチは言語文化論的な色彩も帯びてくる。

この立場では、文法にしても文化論にしても、ことばは推論を忠実に反映すると考え、ことばの中に意味を多く読み込む方向になる。本書もこの方向に沿って、例えば「～タリ、～タリ」の言語形式には例示という推論制約的な意味が入っているという考えに立つ。この方向を推し進めると、先に記した語彙の記述と同じく、当該言語における表現形式と語用論的機能の対応を大小漏らさず全てリストしていき、巨大な表現辞典を作れば、この表現形式の用法は、この辞典に記載のとおりであるとして網羅できるかもしれない。ただし、これは語用論的な解決策ではない。

2つ目の立場は、ことばは推論を部分的にしか反映しないというものである。これがテヤタリの用法で、文法ではストレートに説明されない用法が残る理由でもある。ある表現において、語彙と文法から表せる意味は推論から伝えられる意味より狭いということでもある。下記は両者の比率を図示したものである。

(12)

| 言語表現の意味     |          |
|-------------|----------|
| 語彙と文法（半分未満） | 推論（半分以上） |

語彙や文法から導かれる意味もある。ただし、文接続に関して英語は and の1語で済ませたり、接続詞等のマークがなくても2文間の関係が解釈される理由は、上記のような意味の比率があるからである。また、-te structure の解釈が文脈で揺れることから分かるように、日本語でも文接続の意味決定には文法より推論の役割の方が大きい。言い換えると、2文間の関係は基本的に推論で分かることを、個別言語の事情により冗長的に形式で表すことになる。特定の語彙や文法に頼らずに2文間の関係が推論で伝達されるという事実は、先に言及した Kehler が論じるように、人間の思考全般の制約として2文間の関係が類似、原因と結果、隣接の3種に限られることの反映とも言える。

## 5. おわりに：Sapir-Whorf 仮説の再検討

英語より日本語の方が表現の区切り方が細かいことがある（井上 2015: 47）。これは名詞や動詞に限らず、本書が論じる節間の等位接続のように文法的な側面にも妥当する。英語を見ると語用論の問題に思えることでも、日本語では文法や形態論の問題に行きつく可能性もある。メタファーを使えば、言語表現に意味を送り届けるサービス業があるとしよう。英語の *and* の文接続では、そのサービス業は語用論的推論が独占する一方で、日本語では対応する表現が分化しており、文法や形態論も当該業界に参入している。各言語で文法と語用論の市場シェア率が違うわけである。

ある言語では表現形式に定められているとおりに推論が導かれるとなると、いわゆる Sapir-Whorf 仮説に従い、当該言語を使う人々は言語によって自らの思考が規定されることになる（Whorf 1956）。一方、特定の言語に依存しつつも表現形式から自由なところで推論の余地があるとなると、Sapir-Whorf 仮説から自由になる見込みが得られるが、反対に何を根拠に推論を伝達し、共有しているかという別の問題が生じる。その際に Gumperz (1982) が言うコンテクスト化の合図（contextualization cues）も当該言語の巨大な表現辞典では語彙と同じく記載可能であるとなると、慣習化した韻律や話の展開なども、文接続のテ、タリ、シなどより細かいレベルの形式分化に含まれてきて、上記の言語表現の意味の比率も見直さなくてはならないだろう。

本書の帰結が立ち向かう先の Sapir-Whorf 仮説は、対照語用論にとって現代的な課題である。言語間の表現方法の差異は語用論的説明にとって不都合な現実であり、これに対処しようとして新たな説明が考案され続ける研究推進の源でもある。まさにその 1 つの文接続に関心のある方にだけでなく、言語間での語用論と文法のシェアの違いという大きな問題に取り組む研究者に、ぜひ本書の一読と検討を勧めたい。

## 参考文献

- Ariel, M. 2012. "Relational and Independent and Conjunctions." *Lingua* 122, 1692-1715.
- Blakemore, D. and R. Carston. 2005. "The Pragmatics of Sentential Coordination with And." *Lingua* 115, 569-589.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge MA: MIT Press.
- Culicover, P. and R. Jackendoff. 2005. *Simpler Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Cummins, C. 2019. *Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press
- Francis, E. J. 2005. "Syntactic Mimicry as Evidence for Prototypes in Grammar." In Mufwene, S. S., E. J. Francis and R. S. Wheeler (eds.) *Polymorphous Linguistics: Jim McCawley's Legacy*, 161-181. Cambridge MA: MIT Press.

- Grice, H. P. 1975. Logic and Conversation. In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, Vol. 3, Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hasegawa, Y. 1996. "The (Nonvacuous) Semantics of TE-linkage in Japanese." *Journal of Pragmatics* 25, 763-790.
- 井出祥子・藤井洋子・高梨博子. (監修・編) 2016. 『シリーズ 文化と言語使用 1 コミュニケーションのダイナミズム：自然発話データから』東京：ひつじ書房.
- 井出祥子・藤井洋子. (監修・編) 2020. 『シリーズ 文化と言語使用 2 場とことばの諸相』東京：ひつじ書房.
- 井出祥子・藤井洋子・岡智之・大塚正之・櫻井千佳子. (監修・編) 2022. 『シリーズ 文化と言語使用 3 場と言語・コミュニケーション』東京：ひつじ書房.
- 井上逸兵. 2015. 『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』東京：慶應義塾大学出版会.
- Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: The Center for the Study of Language and Information Publications.
- 児玉徳美. 2010. 『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』東京：開拓社.
- Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, Cambridge MA: MIT Press. (田中廣明・五十嵐海理. (訳) 2007. 『意味の推定：新グライス学派の語用論』東京：研究社.)
- 三原健一. 2011. 「テ形節の意味類型」、『日本語・日本文化研究』21、1-12. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 三原健一. 2015. 『日本語の活用現象』東京：ひつじ書房.
- Nakatani, K. 2013. *Predicate Concatenation: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*. Tokyo: Kuro시오.
- 西村義樹. 1998. 「行為者と使役構文」、中右実 (編) 『構文と事象構造』. 105-214、東京：研究社.
- Whorf, B. L. 1956. *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge MA: MIT Press.

〈書評論文・書評〉[書評]

近藤泰弘・澤田淳(編)『敬語の文法と語用論』

東京：開拓社，2022，ix + 434p.，ISBN 978-4-7589-2360-6

森山卓郎

早稲田大学

1. はじめに

本書は敬語論に関する近年にない大きな論文集である。本書の大きな特徴は、敬語の文法的体系の研究と語用論的展開の研究、歴史的アプローチと現代語のアプローチ、共通語への観点と変種(地方語や文体的変種)への観点、日本語と外国語との対照的検討など、これまで必ずしも十分に関連づけられてはこなかった様々なアプローチが一書の中に展開されていることである。敬語研究における新たな研究のプラットフォーム構築への息吹を感じる。

まず、論文タイトルとその著者を掲げておく。

第I部 敬語の文法

近藤泰弘：敬語から見た日本語の種類 —ダイクシスからの考察—

菊地康人：敬語の指針についての覚え書きと、もう一つの敬語分類案

滝浦真人：なぜいま敬語は「5分類」になったのか

—日本人の敬語意識に起こっていること—

小田勝：古典敬語の特質と関係規定語の問題

第II部 敬語の語用論 —敬語運用の歴史と地域差—

澤田淳：日本語敬語の運用に関する語用論的研究

—相対敬語の類型化をもとに—

森山由紀子：10世紀末『落窪物語』における下位への対面素材敬語

—発話場面の文脈との関わりから—

森勇太：近世後期洒落本の「受益型」行為指示表現

—地域差と現代語との差異—

日高水穂：昔話談話にみる待遇表現の地域差

### 第III部 敬語とポライトネス 一人対人配慮と言語対照

金水敏：ポライトネスとキャラクター

テキメン・アイシェヌール：ポライトネスと膠着語

—日本語とトルコ語をめぐって—

井上優：行為要求表現の形式と意味 —日本語と中国語の場合—

論集の新しさはこうした構成にも現れている。研究対象（領域）から言えば、例えば、「現代語敬語論」（近藤、菊地、滝浦論文）、「敬語史」（澤田、小田、森山、森論文）、「テキストと敬語」（日高論文、金水論文）、「対照研究」（テキメン、井上論文）のようにするといった考え方もあり得よう（近世の江戸語と上方語を取り上げる森論文と日高論文とを「方言研究」としてまとめることもできる）。その点、本書の『敬語の文法と語用論』というタイトルが示すように、新たな観点から三部に構成されていることに新しさを感じる。

## 2. 「第I部 敬語の文法」

第一部は敬語の文法という、体系面に着目した論考が集められている。敬語の文法については、敬語の五分類が、ある意味でオーソライズされ、その次の段階に来ているということもあって、用語や概念の新たな整理と再検討がなされている点が興味深い。

まず、近藤泰弘氏「敬語から見た日本語の種類—ダイクシスからの考察—」は、敬語システムを空間ダイクシスと似た社会的ダイクシスとして再解釈し、「現場での直示として利用できる」「対話型」の日本語（社会的ダイクシスがある）と、文脈での照応というように用いる「客観型」の日本語（敬語はほとんど使わないか話題の中で上位者を指定する）とに分類することを提案する。

若干難解な部分もあるのだが、これからの展開が注目される場所である。書き言葉と話し言葉の連続性、書き言葉における多様な対者性について今後も考えてみたいと思った。本書の澤田論文（後述）のように敬語運用における対者意識のあり方には複雑な問題もある（上下親疎のほかウチソト関係など）。ダイクシス体系としての見方から敬語の体系と運用がどう考えられていくのか、今後の議論の展開は興味深い。

続く、菊地康人氏「敬語の指針についての覚え書きと、もう一つの敬語分類案」（以下菊地論文）は、文化審議会国語分科会の『敬語の指針』作成の経験を踏まえたもので、五分類を正面から取り上げるものである。研究史的背景も含めた「覚書」のほか「日の目を見なかった私案」も示されている。

前半「覚書」の中では、研究史的なことも述べられている。特に「謙讓語II」について、多くの先行研究がそれに「(概ね) あたるものの違いを認めていたことについては留意しておいてよい」(p. 23) とある。確かに諸研究で多少の言及があったことは重要である

う。ただし、敬語形式としての特性を分析した上で「丁寧語（謙譲語Ⅱ）」を切り分けることとは距離があり、宮地（1968）の議論の重要性は感じる。

同じく謙譲語Ⅰの高める対象をめぐって、「向かう先」「さし向け」という概念が提唱されている。行為の「さし向けられる先」という概念が受け身文の被害性に関わるといった指摘や「行ってもらう」と比べて「教えてもらう」のように「さし向け度」が高ければ受益者の働きかけなしに使えるといった指摘などは興味深い。「さし向け（度）」についての形式的な位置づけがさらに知りたいところである。「お教え頂く」と「お教えになって頂く」の違いといったきめ細やかな観察なども注目される。

後半の「もう一つの敬語分類案」とは「山田先生はいまは名誉学長でございます」が敬意を欠く（尊敬語を使わない点だが）といった現象にも着目し、敬度の高さなど従来の丁寧語（謙譲語Ⅱ）との類似度に目を向けるものである。ここから日本語教育でもわかりやすい新たな「丁寧語」案が示されている。「日の目を見なかった」とあるが、これはある意味で残念で、確かに一考の余地がある議論である。評者も、丁寧語の位置づけに大きな違いはあるが、表1のような体系を提案している（森山2013）参照。さらに普通体にも二種類ある）。表の※の部分的部分的ながら埋めるものとして、「丁寧語＋ます」などの形が位置づけられるのである。

表1

| 形式     | 非動詞文    | 命令文以外の動詞文 | 命令文の動詞文      |
|--------|---------|-----------|--------------|
| 丁寧表現   | ：です     | ます        | 下さい（なさい）     |
| 上級丁寧表現 | ：でございます | ※         | 下さいませ（なさいませ） |

ただし、命令形態の敬語体系での位置づけは、菊地論文も含めてほとんどなされていないのが現状であり、「下さい」などは、答申でも「丁寧語」には入れられていない。また、「でございます」の主語に関連して、確かに「いらっしゃる」という尊敬語発動の方が優先されるという現象があるが、例えば「私どものホテルでは、いらっしゃったお客様はすべてVIPでございます」のように言える。その点で「\*お客様がいたしますか？」などと言えないという丁寧語での主語の下位待遇という特性とはしくみとしての違いが大きい（「お客様は～のでございます」などノダ文末などでの出現もある）。このあたりはさらに考え続ける必要があるが、ともあれ、これまでの敬語研究のいわば標準的な分類であった五分類についてはさらなる見直しが必要であり、その議論の一つとして、菊地論文の「私案」も重要なヒントの一つになる。

敬語五分類に関する議論であるが、滝浦真人氏「なぜいま敬語は「5分類」になったのか—日本人の敬語意識に起こっていること—」（以下、滝浦論文）は、丁寧語と美化語は「他者指向性」が弱く「自己提示的な」敬語へのシフトが観察され、それが敬語分類の五分

類に関連するという、また違った視点のものである。国語研ウェブコーパスで「お客様にご利用いただく」が「6800弱」であるのに対し「お客様がご利用いただく」のような形も「1500弱」あることなどから、「謙讓語性」の担保である敬意対象の二格が衰退しつつあり、「他者指向の敬語から自己のへりくだりを表す自己提示的な「丁重語」としての性格を強めている」(p. 84) という指摘もある。<sup>1</sup> 形態的な混乱には多様な要因があり、それが深いレベルでの敬語の意識の変化とどの程度関連づけられるのかについてはさらなる議論が必要かもしれないが、「いただく」の用法の変化は確かに興味深い。美化語において「他者指向性」が弱いのは当然として、丁重語もそう言えるのか、敬意対象の二格衰退がそこに論理としてどうつながるのか、など、さらに考えていきたい部分もあるが、五分類に対する、前述の菊地論文とは違った観点の議論として位置づけられる。なお、菊地論文では丁重語への関心はかなり以前からあったとされている点で違いもある。この点もさらに考えたいところである。敬語分類など研究上の見方と言語変化の実態は本来別物であるが、それを連動させて考えることの可否も含めて、今後の議論が期待される。

上記が現代語を取り上げるのに対して、小田勝氏「古典敬語の特質と関係規定語の問題」(以下、小田論文)は、中古敬語の体系をまとめ直す包括的な議論である。議論の中では現代語にも触れられている。小田論文は、古典語の敬語体系について、

#### A 素材敬語

##### I 素材尊敬語 (1) 主語尊敬語 (2) 補語尊敬語

##### II 素材間関係規定語 (1) 主語上位語 (2) 補語上位語

##### III 下方待遇語 (1) なし (2) 補語下方待遇語

#### B 素材対者間関係規定語 (1) 主語下位語 (2) なし

#### C 対者敬語 (丁重語/丁寧語)

のようにまとめる (p. 107)。用語面でも「謙讓語」でなく「補語尊敬語」とするなど、明晰であり、非常に重要な提案と言える。下二段の「給ふ」も、対者敬語でなく「素材対者間関係規定語」として位置づけられる。こうした明解な理論的整理の意義は大きく、今後の古典語の敬語論や古典語の教育を考える上で必ず参照すべき議論といえる。さらに、現代語では、謙讓語が「主語<補語」である必要がある点で、補語尊敬語が素材間関係規定語の補語上位語に変化したといえるといった指摘も重要で、古典語の敬語論のみならず現代語の敬語論を考える上でも深い意義がある。

評者自身の課題に引きつけて言えば、敬語論の扱いの中で「素材間関係規定語」の位置

<sup>1</sup> 「どなたにもご利用いただける」についての興味深い議論もある(「でも」については副助詞として扱う余地もあり、「どなたにも」「どなたでも」の比較があるが、「どなたにでも」も考えておく必要がある)。

づけや下方待遇語などはさらに考え続けていきたいところである。例えば「召す」の場合その主語は補語よりも上位である必要があるなど、確かに素材間の関係規定は重要である。しかし、例えば「仕ふ」などを考えた場合、動詞の動きの語彙的な意味として上下関係が規定されており、確かに広義の待遇関連語として位置づけられることは納得できるものの、敬語の議論の中でどう位置づけるべきかには迷うところがある。例えば、現代語において、「師事する」は補語が敬意を受けるべき「師」であるという関係があるが、敬語の議論には入れられないようにも思う。<sup>2</sup>

なお、現代語の下方待遇語は、非義務的なものである点で注意は必要だが、待遇関係としてはさらに考えてみたいところである。小田論文では現代語で主語の下方待遇はないとされているが、例えば「やがる」「けつかる」などの生産的な形式や「くたばる」などは現代語の素材的な下位待遇語としての扱いが必要かもしれない（森山 2021）。「くれてやる」は「補語下方待遇語」として言及されているが、これは妥当であろう。さらに、例えば「与える」において補語を人格扱いする場合には下位待遇性があるのだが、これなどは、素材間の関係規定にも関わる点がある。小田論文を手がかりにしつつ、古典語のみならず、現代語の待遇表現の全体像も解明していくことができそうであり、今後の展開が期待される。

以上、ポスト五分類としての敬語体系論の新たな議論が現在必要になっていると思われる。その点で、それぞれの観点から切り込むこれら4論文の意義は深い。

### 3. 「第Ⅱ部 敬語の語用論 —敬語運用の歴史と地域差—」

第二部は歴史と地域差を取り上げるものだが、敬語の運用という語用論的側面に着目した部分でもある。どういう場合に（どう）敬語が使われるかという問題が変化や変種といった側面からそれぞれに興味深く検討されている。

まず澤田淳氏「日本語敬語の運用に関する語用論的研究 —相対敬語の類型化をもとに—」（以下、澤田論文）は、絶対敬語という概念を改めて見直し、相対敬語の類型化を行う大部の議論である。澤田論文には敬語史論的な知見が豊かに含まれるほか、韓国語との対照もある。敬語の文法的体系の研究と語用論的な用法の展開の研究、歴史的アプローチと現代語のアプローチとの新たな観点での融合としても高く評価される。

澤田論文は、時枝誠記、金田一京助、三上章の論敬語運用論を検討し、「相対敬語」の内実が違うこと、絶対敬語とされてきたものがやはり相対敬語と見るべきであることなどを指摘する。そして、次のような整理がされている。

---

<sup>2</sup> この語は早稲田大学大学院のゼミの場での院生の久賀朝氏によるものである。

表2

|              | 中古 | 中世後期 | 現代 |
|--------------|----|------|----|
| A型(上下型) 相対敬語 | ○  | ○    | ○  |
| B型(内外型) 相対敬語 |    | ○    | ○  |
| C型(親疎型) 相対敬語 |    | ○    |    |

(p. 148)

上下型相対敬語(A型)は、話題の人物が聞き手よりも下位者の場合、自分より上位であっても高めないA1型(韓国語での圧尊法に相当)と、話題の人物が聞き手よりも上位者の場合、自分より下位であっても高めるA2型(韓国語での加尊法に相当)とにさらに分かれる。

この順で相対敬語の運用の幅を広げてきたこと、現代共通語においては上下型(A型)の運用が弱まる方向に進んでいること、韓国語では、内外型(B型)が見られないが上下型(A型)が弱まる方向に進んでいること、親疎型(C型)(の萌芽)が見られること、など、興味深い指摘が様々な領域にわたってなされている。

従来、「絶対敬語か相対敬語か」という枠組みで議論され、ある意味で混乱のあった概念が、「どのタイプの相対敬語か」というように明解に整理されたことの意義と、それを敬語史論的に位置づけ、さらに韓国語との対照として位置づけたことの意義は大きい。様々なアプローチの有機的な融合による新たな研究のますますの展開が期待される。

これに関連して、敬語の相対的な運用ということにとどまらず、中古の敬語における「下位者に対しても使われる対面素材敬語」が持つポジティブポライトネス的な運用を指摘するのが、森山由紀子氏「10世紀末『落窪物語』における下位への対面素材敬語—発話場面の文脈との関わりから」(以下森山論文)である。森山論文は『落窪物語』を対象とするが、この物語には一定の登場人物がいて、会話が豊かに含まれていることによる。従来の研究では「使用例」の方は着目されてきているが、人物関係を厳密に規定した上で、「不使用」の例も分析し、かつ、その文脈を検証するということは十分ではなかった。しかし、敬語運用の原理を明らかにするには、同一条件下での、使用例のみならず不使用例をも詳細に分析した会話の全数調査を行うことが必要となる。膨大な用例分析は読者としても骨が折れるが、地道に文脈を精査していくというプロセスは確かに必要であろう。

ここで注目されているのは、「下位への敬語」という現象である。下位に対して用いられる素材敬語は、「I型：恒常的に素材敬語を用いるが、叱責場面等攻撃の場面では不使用」と「II型：基本的に素材敬語不使用だが、相手の遂行を当然視しない依頼・勧誘・説得の命令形で使用する」とに整理できることを指摘する。敬語がある種のタブー的なものと関連して「敬って遠ざける」というものだという従来の一般的な見方があるとするならば、ここで指摘されているのは、そうではなく、むしろポジティブポライトネス的な運用が存在したという別の原理の存在の発見である可能性がある。対人関係の種類だけでなく、叱

責の場合はどうかなど語用論的な発話態度が敬語の発動に関わるという現象を指摘する点でも今後の議論が期待される。

今後考えていくべき課題としては、ここから敬語史の流れ全体をどう捉えていくかということがある。あわせて、『落窪物語』にしても対者敬語の場合はどうかといった点での議論も待たれる。時代的に少し下がるが『源氏物語』などではどうかといったことなどもさらに知りたいところである。なお、『落窪物語』の伝本は比較的新しいものしかないのだが、こうした明確な使い分けが見つけられるとすれば、その資料としての有効性を示すことにもなるのかもしれない。

森勇太氏「近世後期洒落本の「受益型」行為指示表現 一地域差と現代語との差異一」（以下、森論文）は近世後期の受益型行為指示の詳細な分析である。行為指示表現における受益表現のあり方は、内容に関わる本当の意味の受益性だけでなく相手への行為指示という発話行為が内在させる話し手受益性が待遇的価値にも対応する。

全体として話し手利益のときに受益表現が最も多いこと、江戸時代前半より後半の方で受益表現の出現が多いことのほか、上方は近世後期に受益型の使用が一定数あるが、非敬語、「お～」の表現の方で受益率が高く、親しい人物への行為指示でも受益表現が浸透していること、これに対して、江戸では、敬語グループの方が受益率が高く、丁寧な表現としての受益型の定着があると見られること、など興味深い指摘がなされている。また、近世後期では発話場で即時完結する行為指示については、話し手利益でも受益型が用いられず、直接型が多いこと、話し手に向かう方向性がある場合に必ず受益型が要求されることもなく、現代語とは違っていることも注目される。

「話し手利益」「聞き手利益」「公のため」「第三者」といった発話機能の違いや、接待場面と職場場面といった場面の違いにも注意した分析が、江戸の前半と後半、大坂の前半と後半、京都、というように時代・地域に応じて詳細になされている点は重要である。同じ上方でも、受益表現の使用が京都での女性における非敬語グループに多く、大坂とは違うことも興味深い。男女差として男性のほうが地域にかかわらず受益率が高いことも注目される。

このように、森論文は、発話機能の違いや場面、そして、地方差や男女差なども取り入れた敬語史研究として大変意義深いものであるし、さらに、方言はもちろん、ベネファクティブの研究としても高く評価される。現代語における命令文の丁寧形態と受益表現の関係としては、評者の前掲の表1に挙げたように、「くれる」という受益表現が形態的に緊密に結びついていることが注目される。特に上級丁寧表現としては、受益形式なしの表現は「お帰りなさいませ」といった挨拶など極めて限られたものしかない。行為指示における受益性は形態的な位置づけにも関連しているのであり、その歴史的背景は極めて興味深い課題である。

ちなみに評者は京都生まれであるが、明治生まれの祖母が家族内では行為指示であまり

補助動詞的に「くれ」を使わなかったことを思い出した（「おくない（＝おくれなさい）」という本動詞はある）。テ形に受益的な意味がすでにあるからであろう。きつくない言い方の「～してんか」など疑問にもつながる終助詞的表現の付加という用法もあった。なお丁寧な場合には「おくれやす（おくりやす）」（「お～やす」が命令依頼の意味を持つ）を使っていたが（大阪の老年層が使うような「しなはれ」という形式はなかった）、聞き手利益の場合なども「おすわりやしとくりやす（＝おすわりやしておくれやす）」のように言っていたと記憶する（森山1994）。時代も位相も違うが、丁寧な行為指示の形式として受益的表現の固定化という問題は非常に興味深く、様々に触発されるところがある。

一方、日高水穂氏「昔話談話にみる待遇表現の地域差」（以下日高論文）は、昔話談話の地の文を中心に、「方言ももたろう」による全国の調査と、「読みがたりむかし話」による岩手、鳥取、大阪の要地方言の分析から、昔話談話に現れる待遇表現の地域差を分析するもので、方言差に着目するものである。昔話テキストの分析による方言へのアプローチは比較的最近になって見られるようになった試みでもある。

「待遇表現の専用形式が未分化な方言においては、無標形式が待遇的に中立な表現として機能し、表現の選択に語り手の判断は入り込みにくいと、語り口調が定型化しやすく、個人差が生じにくい」（p. 304）というように待遇表現の専用形式の未分化性と語りの定型性に着目している。確かに、「待遇表現の専用形式を多様に分化させた方言とそうではない方言の大きな違いは、無標形式の待遇的意味の違いにある」という指摘は頷ける。また、素材待遇語に待遇表示の機能が弱まり「三人称指標機能」が前面化していくといった機能と語りの関係も重要なポイントと言える。

前半は「方言ももたろう」を取り上げた分析で、叙述型について、関西圏が「過去形＋ノダ相当形式（タイプC）」で定型性が低く（敬語使用もある）、関西圏周辺部と首都圏と首都圏周辺部が「過去形＋ノダ相当形式＋伝聞形式（タイプB）」で定型性は低く、東北・日本海文化圏がそれに「過去形＋伝聞形式（タイプA）」を加えたものとなっていて、定型性が相対的に高い（特に東北）というように整理されている。

さらに後半では「読みがたりむかし話」を資料にして、様々な昔話が取り上げられ、典型的昔話が多く敬語使用が不活発な岩手では待遇表現の選択による文末形式の多様性が生じず定型的な語り口調が保たれやすいこと、一方、典型的昔話が少なく敬語や下位待遇形式の使用が活発な大阪では待遇表現の選択による文末形式の多様性が生じ、非定型的で個性的な語り口調になりやすいこと、その中間的な鳥取では語り口調の定型性がやや低いこと、などが指摘されている。

実は「方言ももたろう」の資料を聞いた時、評者は出身地の京都での「オジーサントオバーサングイヤハッタンエ」といった語り口に、個人差の大きさに通じる違和感を覚えたのだ。が、確かに大阪でも同じタイプの文末で「スンデハッテン」となっていること、さらにむしろそうした定型性のなさ自体が待遇表現の体系に関わって議論できること

に改めて納得した。

素材待遇語において待遇表示の機能が弱まり、ある種の人称関係の指標として機能していくことは森論文での受益表現の運用にも関わることであるし、前述小田論文に関連して触れた下位待遇の問題にも関わる（関西方言の「～ヨル」など）。もっとも、待遇表示の機能は弱まっているとは言えゼロではないという側面もあろう。社会調査などのデータによるさらなる議論の展開も期待される。

そもそも敬語体系とその運用は車の両輪の問題である。また、その中で、敬語形式の機能の広がりにも着目していく必要がある。歴史的背景や地理的変種も重要な観点である。こうした点でこれら4論文にもやはり大きな意義があると言える。

### 3. 第III部 敬語とポライトネス —対人配慮と言語対照—

第三部はさらなる応用的な研究として位置づけられるであろう。まず、金水敏氏「ポライトネスとキャラクター」（以下、金水論文）は、キャラクターとしての「格」に関連する人物像の性格付けを、新たにポライトネス理論を援用することで語用論的に位置づけるものである。「格」とは、定延（2011）などの「キャラ語」の「品」「格」「性」「年」という尺度の一つで、丁寧な言い方しかしない「格低」に対して「東にだな、向かえばだな」のような言い方をするような例えば「悪の首領」の「格高」、というようにいくつかの値で位置づけられる。役割語（金水2003）は「キャラクターの話し方のうちでも、社会的なグループの話し方に紐付けられる類型的なキャラクターの話し方のパターン」（p. 342）である。

この「格」の概念をめぐって、さらに明確にどのような言語形式と連動するのかを改めて考えるのであるが、ポライトネス（Brown and Levinson 1987）の原理を応用して、宮崎駿監督によるアニメ作品の登場人物を分析し、[格高]キャラが原則的に丁寧語を使用しないこと、大衆酒場のウェイトレスや子供といった登場人物も丁寧語を話さないといった丁寧語との相関を指摘している。また、同じ「格高」でも、善玉（『風の谷のナウシカ』の剣士ユパなど）に対して悪玉（『カリオストロの城』のカリオストロ伯爵など）が相手のフェイスを侵害する発話が大変多いといった言語行為とキャラクターの相関も指摘されている。アニメの人物像のステレオタイプが言語的に位置づけられることは重要な指摘で、ポライトネス研究の新たな展開として位置づけられる。例えば『サザエさん』の今のタラちゃんの丁寧語の特性、バカボンのパパの非丁寧語「～のだ」による非大人らしさなど、他のアニメ作品でのあり方にも応用できそうである。

日本語以外の言語との対照的研究も興味深い。テキメン・アイシェヌール「ポライトネスと膠着語—日本語とトルコ語をめぐって」（以下、テキメン論文）は、トルコ語の文法や言語慣習についての簡単な解説もあって、読みやすくなっている。様々な表現が興味深いのだが、とりわけ注目されるのは、二人称複数代名詞を使うことで間接的になり丁寧に

なること、名詞や動詞につく複数の人称接辞“lar”も丁寧さを表すこと（敬称の接辞と共に）である。複数性と敬意の問題（アイヌ語など別の言語にも観察されるようである）は、「そちら」などの方向性表現で指示を直接的にしないという日本語の現象に通じるところがあるという指摘も興味深い。膠着語らしく、一人称接辞をつける例、家族呼称を使う例や、意志を表す一人称複数の形が依頼の形で使われることなども指摘されている。

「与える」などの動詞では、尊敬語や謙譲語にあたる関連語彙があることも重要だし、“ol”という「なる、いる」に当たる動詞が「主観の共有」によって丁寧を表すという点も、日本語の「コーヒーになります」と似ていて興味深い。時制も関わっていて、超時制を使うことで時間的スケールを拡大し、「イマ・ココ」の感覚をなくすことで丁寧になるということなども紹介されている。

さらに知りたいと思うこととして、トルコ語の標準的な文法論で待遇表現がどう扱われているかということがある。また、「イマ、ココ」性について、超時制の使用が「イマ・ココ」の感覚をなくすことで丁寧になるという原理と、“bulun-”の補助動詞的用法が状態を表し、「イマ・ココ」的になり、状態を聞き手と共有しているような効果から丁寧さが感じられるという指摘との関係なども、若干方向が違う点でさらに考え続けたい。こうした対照研究は次の井上論文も含め、敬語研究の今後の広がりの可能性を考えさせてくれる。

井上優氏「行為要求表現の形式と意味—日本語と中国語の場合」（井上論文）は、日中対照の非常に興味深い議論である。日本語と中国語での依頼、勧め、勧誘などを取り上げ、日本語において、疑問文や許容文が「行為要求モードになっている」ことを表出するだけの「非遂行型の行為要求表現」があるが、一方、中国語では、疑問文、許容文は行為要求は表さず、行為要求表現において「非遂行型」がない、ということ述べる。「それぞれの言語での意味的な直截さ・ひかえめさを同じ尺度の中で位置づけた場合にどうなるか」という観点から考えるということが必要であり、日本語では「意味的にひかえめな表現がよく用いられる」というわけではないという指摘は重要である。日本語では、「聞き手に対して現実に行為要求の言語行為を遂行するか否か」により形式が使い分けられ、中国語では、「話し手が行為要求の言語行為を遂行する気持ちになっているか否か」により形式が使い分けられるといった指摘（p. 424）、そして、日本語において非遂行型の行為要求表現が依頼表現の一部を形成しているという切り口は、非常に重要であろう。<sup>3</sup>

ただし、中国語でも、非遂行型の表現がどの程度使えるかということは人間関係や地域ごとの文化にも対応する点があるのかもしれない。例えば、中国語母語話者に聞いたところでは、妻が「雨が降ってきたよ、駅まで向かえに行こうか」とメールしたのに対して、

<sup>3</sup> 非遂行型の行為指示は発話行為の動詞と関連づけて考えても、「してくれないかと頼んだ」のように位置づけられる（森山1988の第4部第1章の「報告動詞分析」参照）。

夫が「那・你来接我一下吧」というのは確かに普通だが、親子間など家族間の関係によっては、本論文で言わないとされている「(那) 你能来接我一下吗」とか「(那) 你来接我一下, 好吗?」なども言えそうだという。語用論的な用法の広がりや形式としての固定化の間にはある意味での連続性もある。場面や人間関係の微細な違いの関わりもあろう。こうした点も含めて、形式の体系をどう考えるかは非常に重要で興味深い問題である。ともあれ、非遂行型の行為要求表現という提案は今後の研究にとって非常に重要な意味を持っているように思われる。

これら3編の論考は、敬語に関する研究のさらなる広がりを考えさせるものである。アニメ文化の問題も外国語との対照研究も、大きく見れば日本語教育と深いつながりがある。そして、さらに踏み込めば日本語教育と敬語という点では、菊地論文で言及されたような敬語体系のわかりやすい整理ということにもつながる。

#### 4. おわりに

以上、それぞれの論文について見てきた。最近、ポライトネス論との関わりなどの展開はあるものの、史的観点も含めた敬語論そのものの議論は必ずしも十分だったわけではない。ポスト五分類の敬語体系論も待たれていたところではないだろうか。その点で、本書のように、敬語の文法と語用論について、その最新の成果が、様々な分野・方法論にわたって示されていることの意義は大きい。敬語形式の体系の問題とその運用の問題とは、質的な違いもあるが、相互に深く関連しているものであり、その両方への注目は極めて重要である。

本書の多くの論文において、用語や概念の整理、文脈に応じた用法の新たな分析という問題が改めて焦点化されている点も示唆的である。五分類をはじめ、相対敬語、素材間関係規定のあり方、敬語の発動の場面や対人関係のあり方、受益関係、非遂行型行為指示など、本論集での議論は、広義の敬語研究（待遇表現研究）の新たな展開の息吹を感じさせる。また、昔話テキストやアニメのキャラクターなど、敬語研究の新たな展開の可能性も注目していきたいところである。

先に述べたごとく、敬語体系の文法的研究と敬語運用における語用論的検討とは、車の両輪である。体系的な整理なしに運用の分析はできないし、その逆も言える。また、敬語論であれポライトネス論であれ、現代語だけを見ていては見えてこない側面がある。敬語研究のそもそもの出発点として古典語敬語の議論の重要性も改めて強調する必要がある。

その意味では、研究対象の面としての広がりももちろん重要である。「日本語」にもいろいろな地域の変種があり、様々な場面での用法が検討されなければならない。アニメなどの広義の文体論的な検討も興味深いところである。応用的な側面や対照研究に関する展

開も重要である。待遇関係は人間関係に直結する点で、常に広い視点から考えていくことが必要であるが、今後の研究の広がりを考える上で本書は様々なヒントになる。

最後に、本書の特徴として、多くの論文において、かなり詳しく解説や分析結果のデータが示されている点にも言及しておきたい。一般に、雑誌に投稿する場合、紙幅の制限があり、関連する情報や具体的なデータを十分に示すことは難しいことが多い。しかし、まとまったデータなしには議論は成り立たない。その点、この論文集の 434 ページに及ぶというボリュームには意味があると言える。

敬語にとどまらず、待遇表現の研究は、今新たな展開の時期を迎えている。その中において本書は研究上裨益するところの非常に大きい論文集である。敬語論研究の今後の展開の大きな可能性も読み取れる。最後に、評者の浅学のゆえの、理解不足、誤り、取り上げるべき重要点の見落としなどがあることを恐れる。ご寛恕・ご批評をお願いする次第である。

## 参考文献

- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 定延利之. 2011. 『日本語社会のぞきキャラくり：顔つき・カラダつき・ことばつき』東京：三省堂.
- 森山卓郎. 1988. 『日本語動詞述語文の研究』東京：明治書院.
- 森山卓郎. 1994. 「京都市方言における丁寧融合型尊敬形式『お～やす』」、『阪大日本語研究』、8、93-110.
- 森山卓郎. 2013. 「丁寧語について」、『国語と国文学』、90(7)、1-20.
- 森山卓郎. 2021. 「下位待遇表現の体系—いわゆるマイナス待遇・卑語・軽卑・卑罵などの表現をめぐって」、『早稲田大学日本語学会設立 60 周年記念論文集第 2 冊』、29-311. 東京：ひつじ書房.

[Review Articles and Book Reviews] [Book Review]

Nicolas Ruytenbeek, *Indirect Speech Acts*  
(Key Topics in Semantics and Pragmatics)

Cambridge: Cambridge University Press, 2021, xii+226p. ISBN978-1-1084-8317-9\*

Osamu Sawada  
Kobe University

## 1. Introduction

The phenomenon of the indirect speech act has been actively studied in linguistics and philosophy since the pioneering seminal works of Sadock (1974), Searle (1975), and Morgan (1978). In addition, significant research has been conducted in the fields of psychology, engineering, and more recently, AI regarding the comprehension, processing, and computational modeling of indirect speech acts. Roughly speaking, an indirect speech act is a speech act in which the sentence type (which is concerned with syntax (grammar)) and the illocutionary force (which is concerned with pragmatics (use)) are associated in an irregular manner. Most languages have three basic sentence types: (i) declarative, (ii) interrogative, and (iii) imperative. These sentence types are typically associated with three basic illocutionary forces: asserting, asking, and ordering.

| (1)                       | <i>Sentence type</i> (syntax) | <i>Speech act</i> (pragmatics) |
|---------------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| a. You wrote a paper.     | declarative _____             | assertion                      |
| b. Did you write a paper? | interrogative _____           | question                       |
| c. Write a paper!         | imperative _____              | order (request)                |

If there is no direct relationship between sentence type and illocutionary force, an utterance is an indirect speech act. For example, utterance (2) is an indirect speech act because it is usually interpreted as a request rather than a pure yes-no question (concerning the ability to pass salt):

| (2)                       | <i>Sentence type</i> (syntax) | <i>Speech act</i> (pragmatics) |
|---------------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| Can you pass me the salt? | interrogative                 | question<br>request            |

---

\* I am grateful to Harumi Sawada and the anonymous reviewer for their valuable comments and discussions. Parts of this paper were also discussed in a seminar at Kobe University, and I thank the participants for the fruitful discussions. This paper is based on work supported by JSPS KAKENHI (grant numbers JP21H00523, JP22K00554).

In *Indirect Speech Acts*, Ruytenbeek investigates the interpretive mechanism of indirect speech acts with a special focus on indirect requests. He describes the theoretical complexity of indirect speech acts, explains how people manage to interpret them correctly, and offers a reason why speakers resort to them.

This book is unique in that not only it discusses important theoretical studies on indirect speech act to date, but it also takes up psychological experimental studies related to process/comprehension, social aspects such as gender and politeness, and AI perspectives, and it discusses what the indirect speech act is from multiple perspectives. I consider this book particularly useful for exploring the frontiers of research on indirect speech acts.

## 2. Overview of the book

This book consists of six chapters. In Chapter 1 (Classic speech act theoretic approaches), Ruytenbeek summarizes the “traditional” analyses/approaches of indirect speech acts in detail, including Austin’s (1962) idea of speech acts; Katz and Postal’s (1964) generative semantic transformational analysis; Sadock’s (1974) ambiguity approach of indirect speech acts, which utilizes Ross’s (1970) performative analysis; Searle’s (1975) analysis of indirect speech acts, which is based on Grice’s (1975) cooperative principle; and Bach and Harnish’s (1979) locutionary-compatibility condition. He also summarizes Recanati’s (2004) ideas of primary/secondary speech acts, and Brown and Levinson’s (1987) politeness theory. Toward the end of the chapter, the author discusses the conventionality of indirect speech acts in terms of conventionality of means and the degree of standardization.

In Chapter 2 (The semantics of sentence-types), Ruytenbeek overviews the semantics of imperatives, interrogatives, and deontic modal declaratives and considers the relationship between sentence types and indirect speech acts. Chapter 3 (Cognitive and relevance-based approaches) discusses cognitive-linguistic and relevance-theoretic approaches to indirect speech acts and captures indirectness as a graded notion.

In Chapter 4 (The comprehension of indirect speech acts), based on the results of corpus and experimental studies of indirect speech acts (that relate to memory, response times, and eye-tracking), Ruytenbeek claims that three linguistic parameters influence the processing of ISA (i.e., indirect speech act) constructions: the categorical criterion of conventionality of means (see Section 3 below), the graded criteria of standardization, and illocutionary force salience.

Chapter 5 (Indirectness, politeness, and the social context) investigates major reasons why indirect communication exists: face-threat avoidance, the economy of means for speakers—multiple meanings can be conveyed using a single utterance—and the possible deniability of the intended meaning vis-à-vis the addressed or a third party.

Finally, Chapter 6 (Computational and artificial intelligence approaches) focuses on computational models of indirect speech act interpretation, with special reference to hu-

man-robot interactions. This chapter shows that various computational approaches to the computational models of indirect speech acts exist and illustrates how computational models of indirect speech act disambiguation have been improved and applied to human-like robots in daily interactions.

In what follows, this review will discuss the contents of this book, with a particular focus on the conventionality of indirect speech acts, the illocutionary force salience of indirect speech acts (and its relationship with speech act adverbs), and variations of indirect speech acts.

### 3. Issues of conventionality of indirect speech acts

Various ideas have been proposed regarding the semantic interpretation mechanism of indirect speech acts, but the most actively debated and discussed issue is conventionality. Searle (1975) assumes that an indirect speech act is computed along the general lines of Grice's cooperative principle and that indirect speech acts have two illocutionary forces, one literal or direct and the other non-literal or indirect, and claims that indirect speech acts are derived by step-by-step inference. For example, to conclude that the utterance "Can you pass the salt?" is a request, Searle proposes the following inference steps:

- (3) Step 1: Y has asked me a question as to whether I have the ability to pass the salt (fact about the conversation).
- Step 2: I assume that he is cooperating in the conversation and that therefore his utterance has some aim or point (principles of conversational cooperation).
- Step 3: The conversational setting is not such as to indicate a theoretical interest in my salt-passing ability (factual background information).
- Step 4: Furthermore, he probably already knows that the answer to the question is yes (factual background information).
- Step 5: Therefore, his utterance is probably not just a question. It probably has some ulterior illocutionary point (inference from Steps 1, 2, 3, and 4). What can it be?
- Step 6: A preparatory condition for any directive illocutionary act is the ability of H to perform the act predicated in the propositional content condition (theory of speech acts).
- Step 7: Therefore, X has asked me a question the affirmative answer to which would entail that the preparatory condition for requesting me to pass the salt is satisfied (inference from Steps 1 and 6).
- Step 8: We are now at dinner and people normally use salt at dinner; they pass it back and forth, try to get others to pass it back and forth, etc. (background information).

Step 9: He has therefore alluded to the satisfaction of a preparatory condition for a request whose obedience conditions it is quite likely he wants me to bring about (inference from Steps 7 and 8).

Step 10: Therefore, in the absence of any other plausible illocutionary point, he is probably requesting me to pass him the salt (inference from Steps 5 and 9).

(Searle 1975: 73–74)

However, Searle (1975: 75) acknowledges a difference in naturalness between the types of syntactic forms for indirect request. “Can you ...?” sounds more natural as a request than “Are you able to ...?”, as in (4):

- (4) a. Can you pass me the salt?  
b. Are you able to pass me the salt?

If the request meaning in (4a) is purely inferential, then the request meaning should also emerge from the utterance in (4b) by virtue of the cooperative principle because it has essentially the same semantic content. In practice, however, this is not the case. Searle (1975: 76) considers this a matter of “conventions of usage” that are not meaning conventions. In the case of (4), “Can you ...?” tends to be used as an indirect request by convention.

In contrast, Sadock (1974) considers that the request meaning by “Can you...?” is idiomatic in nature and not inferential. In the interpretation of an indirect request, no question is perceived. This approach considers that (4a) is ambiguous between a question interpretation and a request interpretation, and the latter is not derived by the combination of question interpretation and a co-operative principle.

Morgan (1978) proposes a hybrid approach between inferential and non-inferential. According to him, in cases like (4a), while relevant conversational implicature is in principle calculable, it is not calculated in practice. He then develops the notion of “short-circuited” implicature.

In this book, the author discusses the conventionality of indirect speech acts in detail in terms of two kinds of conventionality: the conventionality of means and degrees of standardization.

As for the conventionality of means, it relates to Searle’s (1975) notion of conventionality associated with indirect speech acts (see above), and Clark (1979) defines conventions of means as “conventions about which sentences can be used for which indirect speech acts” (p. 433). The idea behind the notion of the “conventionality of means” is that “the linguistic content of a particular construction makes it appropriate for the performance of a SA [speech act] in a particular context” (p. 118). It should be noted, however, that Ruytenbeek’s idea of the conventionality of means differs slightly from that of Searle and Clark. Ruytenbeek says that “for Searle and Clark, conventionality (of means) was conceived of as a binary criterion in the sense that an ISA [indirect

speech act] either is conventional or non-conventional for the performance of some SA [speech act].” In contrast, Ruytenbeek considers that “this criterion of conventionality of means is categorical: the possible values for this criterion correspond to the different strategies used in the performance of indirect directives” (p. 34). For example, he provides the following classification of conventions of means for the performance of directives:

| Convention of means  | Examples  |
|--|---|
| Question or refer to A’s ability/possibility                               | <i>Can you close the window?</i><br><i>You could close the window.</i><br><i>It is possible to close the window?</i>                                |
| Question A’s willingness   | <i>Would you mind closing the window?</i>   |
| State one’s performance of a directive speech act (performative utterance) | <i>I suggest/request that you close the window.</i><br><i>I order/command you to close the window.</i><br><i>May I ask you to close the window?</i> |
| Refer to the action  | <i>Close the window.</i>  |

Table 1: Ruytenbeek’s classification of conventions of means for the performance of directives (with examples) (excerpts from the table on p. 34))

As for the degrees of standardization, Ruytenbeek considers that they are diachronic, that is, “a high degree of standardization is the result of a diachronic process which has led to the sentence or expression having a preferred indirect illocutionary force” (p. 120).

Ruytenbeek claims that these two factors have a considerable influence on comprehension (i.e., whether indirect meanings of utterances are primary or secondary) and cognitive processing. For example, as an experimental study on the conventionality of means, Ruytenbeek refers to Gibbs’s (1981) experimental research, which shows that indirect requests that are not contextually appropriate are remembered better because more complex inferences are required to understand them. Furthermore, for experimental studies on standardization, he refers to Holtgraves (1994), who compares standardized and non-standardized indirect requests:

- (5) a. Could you close the window?  
b. It’s cold here. (Implicature: I request that you close the window.)

According to Holtgraves (1994), indirect interpretation is more easily accessible in standardized indirect requests, such as (5a), than in non-standardized indirect requests, such as (5b). This seems reasonable, considering that an indirect speech act like (5b) is often considered a pure conversational implicature.

I consider the conventionality of means and degrees of standardization analogous, but the difference lies in how the notion of convention is construed. The former examines the concept of “conventionality” in terms of appropriateness, while the latter is

concerned with preference in comparison with other expressions as a result of the diachronic process. However, it does not seem clear that speakers and listeners are aware of the difference between these two types of conventions. What this difference means is theoretically worthy of further consideration.

It is interesting to note that the issue of conventionality is also important in the study of computational models of indirect speech acts and human-robot interactions. In Chapter 6, the author presents various approaches to computational modeling, such as the plan-based approach, which is an inferential approach similar to Gricean reasoning, but also a specific interpretation rule approach, which associates a different interpretation rule with each different construction, and a hybrid approach halfway between the plan-based model and the specific interpretation rule approach, which is reminiscent of Morgan's (1978) short-circuited implicature. The conventionality of the indirect speech act will continue to be a critical issue in engineering and AIs.

#### 4. Illocutionary force salience and the variety of speech act adverbs

Next, we consider the relationship between adverbs and indirect speech acts. Ruytenbeek considers that the degree of illocutionary force salience is another linguistic factor expected to influence the processing and primariness/secondariness of indirect speech acts. For example, as Sadock (1974) and others have discussed, the adverb *please* has a directive force that functions to disambiguate pragmatically ambiguous utterances. As expressed in the following examples, *please* can co-occur not only with directives but also with interrogatives and declaratives; however, when *please* is attached, the request reading becomes salient.<sup>1</sup>

- (6) a. Please remove your car (it's in the staff parking party). (BYU-BNC)  
 b. Could you please remove the image of my home from your site? (Internet)  
 c. Hi, I would like you please to remove the facility for advertisers to enter 'Contract/Permanent' in this field. (Internet)

(Ruytenbeek 2021: 127)

This effect of disambiguation by the adverb of speech act seems to be present in the Japanese speech act use of *chotto*, literally 'a bit' (e.g., Matsumoto 1985; Sawada 2010, 2018) as well. In example (7), the request interpretation becomes salient by using *chotto*:

<sup>1</sup> Note that *please* cannot co-occur with an interrogative sentence. For example, it can naturally appear in "Could you ...?" preverbally but cannot co-occur with "Are you able to ...?" as in:

(i) ??Are you able to *please* call back later? (Ross 1975: 238)

This shows that these two interrogative sentences differ in terms of the conventionality of indirect speech acts (see Sadock 1974; Searle 1975; Ross 1975 for a detailed discussion).

- (7) Chotto pen ari-masu-ka?  
 a.bit pen be-POLITE-Q  
 ‘Chotto, do you have a pen?’

Unlike *please*, however, *chotto* itself has no “please” meaning and can be used in non-directive contexts. For example, in the following example, *chotto* can be thought of simply as serving the function of softening the degree of the speaker’s refusal:<sup>2</sup>

- (8) (Question: Do you have time?)  
 Chotto ima isogashii-desu.  
 a.bit now busy-PRED.POLITE  
 ‘I am a bit busy now.’

Various adverbs in addition to *please* and *chotto* are related to speech acts, such as *frankly/hakkiri it-te* ‘frankly’ and *honestly/shoojiki* ‘honestly’. For example, my impression is that the Japanese speech act adverb *shoojiki* ‘honestly’ is assertive and is usually used to assert content with negative information to the listener or to oneself. Thus, *shoojiki* ‘honestly’ can appear in a simple declarative sentence as in (9), but it cannot appear in interrogatives as in (10):

- (9) Context: A and B are watching a baseball game at the stadium. B asks: Do you think the game is interesting?  
 Shoojiki tsumaranai-desu. (Direct speech act: Assertion)  
 honestly boring-PRED.POLITE  
 ‘Honestly, it is boring.’
- (10)??Shoojiki ima nan-ji-desu-ka?  
 honestly now what-time-PRED.POLITE-Q  
 ‘Honestly, what time is it?’

However, interestingly, it is possible to use *shoojiki* ‘honestly’ in interrogatives if it is a rhetorical question:

- (11) Shoojiki dare-ga kore-o kau-daroo-ka.  
 honestly who-NOM this-ACC buy-will-Q  
 ‘Honestly, who will buy this?’ Implicature: No one will buy it.  
 Indirect speech act interpretation => Honestly, no one will buy it.

This is also true of the English *honestly*, as can be seen in the corresponding English data. A rhetorical question has the illocutionary force of an assertion of polarity opposite to what is apparently asked (Han 2002). It is possible to consider that *shoojiki* and

<sup>2</sup> *Chotto* also has a descriptive (at-issue) meaning of “a bit”; thus, this sentence can be ambiguous between a force-minimizing use and an ordinary degree modifier use (see Sawada 2010, 2019 for the detailed discussions in terms of semantics/pragmatics interface.)



However, when the question form is used in an expressive speech act, as in (13b), it does not raise the politeness level; rather, it is an impolite utterance. The important point of (13b) is that it is not uttered as an alternative to a more direct utterance. There is no sense of far-fetched meaning in (13b), and in some sense, it is not “indirect.” Although this book focuses primarily on indirect requests, I feel that the nature of indirect speech acts can be further deepened by considering these “direct” indirect speech acts.

## 6. Conclusion

Due to space limitations, I could not introduce and examine all the contents of this book, which summarizes in detail the theoretical ideas and approaches in the semantics and pragmatics of indirect speech acts, while also detailing research in the fields of experimental linguistics, sociolinguistics, computational linguistics, psychology, and AI studies. This book will help readers to understand how the phenomenon of speech acts is an interdisciplinary research topic. Although the book focuses on indirect speech acts (especially indirect requests), it is also a good introduction to the study of speech acts.

The study of speech acts is an old and new subject, and even today, discussions on the semantics/pragmatics of speech acts are ongoing (e.g., Farkas and Bruce 2010; Kubo 2014; Krifka 2015). In addition, speech acts have been actively studied in the field of syntax (e.g., Wiltschko 2021; Miyagawa 2022). These approaches share the core idea of the performative hypothesis of generative semantics and ideas from the generative semantic era are being reevaluated. The study of (indirect) speech acts is certain to develop further in the future, incorporating findings from various fields of research.

## References

- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
- Bach, K. and R. M. Harnish. 1979. *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H. 1979. “Responding to Indirect Speech Acts.” *Cognitive Psychology* 11, 430–477.
- Farkas, D. F. and K. B. Bruce. 2010. “On Reacting to Assertions and Polar Questions.” *Journal of Semantics* 27, 81–118.
- Gibbs, R. W. 1981. “Memory for Requests in Conversation.” *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 20 (6), 630–640.
- Grice, H. P. 1975. “Logic and Conversation.” In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 43–58. New York: Academic Press.
- Han, C. 2002. “Interpreting Interrogatives as Rhetorical Questions.” *Lingua* 112 (3), 201–229.
- Holtgraves, T. R. 1994. “Communication in Context: Effects of the Speaker Status on the Comprehension of Indirect Requests.” *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory*

- and Cognition* 20 (5), 1205–1218.
- Kato, S. 2015. “Hatsuwatekina Kouryoku to Hatuwanaitekina Kouryoku: Nihongo no Gimonkeishiki o Chuushinni” [Locutionary Effect and Illocutionary Effect: With Special Reference to Japanese Interrogative Sentences]. In Kato, S. (ed.) *Nihongo Goyooron Fooramu [Japanese Pragmatics Forum]*, 27–56. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Katz, J. and P. Postal. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Krifka, M. 2015. “Bias in Commitment Space Semantics: Declarative Questions, Negated Questions, and Question Tags.” *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 25, 328–345.
- Kubo, S. 2014. *Gengo Kooi to Choosei Riron [Speech Act and Regulation Theory]*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Matsumoto, Y. 1985. “A Sort of Speech Act Qualification in Japanese: *Chotto*.” *Journal of Asian Culture* IX, 143–159.
- Miyagawa, S. 2022. *Syntax in the Treetops*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Morgan, J. L. 1978. “Two Types of Convention in Indirect Speech Acts.” In Cole, P. (ed.) *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, 261–280. New York: Academic Press.
- Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, J. R. 1970. “On Declarative Sentences.” In Jacobs, R. and P. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 222–272. Waltham, MA: Ginn and Company.
- Ross, J. R. 1975. “Where to Do Things with Words.” In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 233–256. New York: Academic Press.
- Sadock, J. M. 1974. *Toward a Theory of Linguistic Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Sawada, O. 2010. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers*. Ph.D. Dissertation, University of Chicago.
- Sawada, O. 2018. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Sawada, O. 2023. “Varieties of Wh-Exclamatives: A View from the Negative Wh-Expressives in Japanese.” The 97th Annual Meeting of the Linguistic Society of America, January 8<sup>th</sup>, 2023, Denver/online.
- Searle, J. R. 1975. “Indirect Speech Acts.” In Cole, P. and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics vol 3: Speech Acts*, 59–82. New York: Academic Press.
- Searle, J. R. 1979. *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wiltschko, M. 2021. *The Grammar of Interactional Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

〈書評論文・書評〉[書評]

平田未季(著)『共同注意場面による日本語指示詞の研究  
(ひつじ研究叢書(言語編)第168巻)』

東京: ひつじ書房, 2020, viii + 234p., ISBN 978-4-8234-1014-7

堤 良 一  
岡山大学

## 1. はじめに

本書は、平田未季氏の博士論文「注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析」(2015年度、北海道大学)の前後に公刊された論考を加え加筆修正したものである。各章タイトルを、概略とともに記す。

第1章「指示詞とは何か」: 本書の研究対象である指示詞について、先行研究をもとに定義づける。さらに本書のキー概念である「共同注意」について論じられている。そして、本書が取り組む課題が示される。

第2章「本書の分析の枠組み」: 近年の指示詞研究が注意概念と会話の推意理論を用いていることを示し、残された問題点について指摘する。

第3章「注意概念を用いた「中距離指示」のソ系の再分析」: これまで「中距離指示」とされてきたソ系指示詞を、「聞き手の注意の存在」を示す形式であると提案している。

第4章「ソ系の外部照応用法と内部照応用法の統一的分析」: 外部照応用法のみならず内部照応用法にも第3章の分析が応用可能であることを示す。

第5章「無標のコ系と有標のア系」: 会話の推意理論を用いて、コ系の「近」の意味が指示詞にコード化されたものではなく、尺度推意により生じるとする。

第6章「注意概念と会話の推意理論を用いた日本語指示詞の体系化への展望」: 3章から5章までの議論を受けて指示詞の体系化を行う。歴史的な事実にも触れている。

第7章「共同注意場面の構造と指示詞選択のダイナミクス」: ココ、コノ、コウ、コレなどの形式が、どのように注意の調整に用いられるかを論じている。第8章は「おわりに」で、まとめと今後の課題である。

本書が日本語指示詞研究にとって重大な意味を持つものであることは間違いない。なぜならば、本書で採用されている枠組みは、国内の日本語指示詞研究では見られなかったものであり、一種の衝撃をもって受け止められていると言ってよいからである。

本書のこれまでの日本語指示詞研究との大きな違いは、次のようにまとめられる。

- (1) a. 自然会話をデータとして用いている。
- b. 説明装置として注意概念／会話の推意理論を用いている。
- c. 指示詞の意味から「距離」の概念を排除している。

a について、本書は従来の内省や実験を基にした研究ではなく、自然会話をを用いている。それにより指示詞がどのような状況でどのように使用されるかを描き出そうとしている。今後の指示詞研究に導入されるべき視点である。b と c については本稿で詳しく検討する。

本書は以上のように、これまでの日本語指示詞の研究で蓄積されてきたデータを、まったく新しい観点から捉え直した意欲的な一冊である。このような書物の場合、そのパラダイムシフトの試みがどれほど成功しているかが議論の対象となる。本稿もそのような観点から、本書の大きな理論的枠組みである2点—注意概念と会話の推意理論—について検討していく。具体的には3章と5章を詳しく見ていく。

## 2. ソ系について (第3章)

第3章では、現場指示用法における、中距離指示のソと言われてきたものについて、注意概念を用いて、ソが「聞き手の注意の存在」を示す形式として分析できると主張する(p. 63)。「聞き手の注意の存在」は次のように定義されている。

- (2) 指示詞を含む発話の発話時に、話し手が意図する対象に聞き手が視覚的注意を向けている、もしくは発話時以前に聞き手が視覚的注意を向けており、かつ、その対象の特定が聞き手にとって容易であると話し手が解釈できる状況。(p. 61)

これまでの指示詞研究において、聞き手の領域を指示するソと、中距離を指すソの2種が広く認められてきた。一方、金水・田窪(1990, 1992)は、「中距離」という用法を認めず、両者は聞き手を介した間接的な指示であるとした。平田はこの点に賛意を表しつつも、中距離指示を「聞き手領域」という概念に還元することはできないとする。その根拠として堤(2012)が、聞き手領域のソではアへの言い換えが不可能で、中距離指示ではアへの言い換えが可能であると主張することを挙げる。

- (3) (聞き手が持っているものを指して){それ/\*あれ}何?
- (4) a. (タクシーの中で)運転手さん、{そこ/あそこ}の角で降りしてください。
- b. ねえねえ、今、{そこ/あそこ}のスーパーで大安売りをやっているよ。

(堤 2012: 155)

平田は (4) のように、ソとアが言い換えられる場合について、実際の会話場面のデータに基づき、会話参加者が、対象に視覚的注意を向けていることが話者にとって確認できれば、ソが用いられるとした。

(5) ゼブラ柄のビル

(A と B が展望台の窓の前の隣り合ったいすに座り、正面に広がる景色を見ている。A は共通の友人が住んでいるビルの場所を B に教えようとする)

01 A: あそこ見て 斜めに森あるでしょ

┆左手で指さし

02 B: (A の指さしに合わせて顔を動かす)

03 A: そこの裏 白黒のゼブラ柄のビル ゼブラ柄の

┆指さしを継続

04 B: え どれどれ? あの鉄塔が近いやつ?

┆右手で指さし

05 A: (B の方を見た後、正面に顔を戻し) それぞれ

┆左手で指さし

白と黒 黒じゃないな グレーの B のまっすぐ前

06 B: あー あれかなあ

07 A: (B の方を見て) そうそう (顔を正面に戻し)

ねずみ色のやつ それが C ちゃん住んでるんだよね。 (p. 49)

この例では、同じ指示対象に AB ともに注目していることが確認できる度にソが用いられ、そうではない場合にアが用いられていることに注目しよう。ここでは平田が言うように、「聞き手の注意の存在」がある場合にはソが用いられている。

このことは、評者自身が経験した次のような例でも確認することができる。評者の家の近所にケーキ屋がある。店内は、図 1<sup>1</sup> のようにショーケースが正面にあり、右隣にレジ、その奥が厨房になっており、客から中が見えるようになっている。その日、ショーケースにケーキは少なく、そこから商品を選んだ。会計の際、レジを打つ店長の肩越しに、準備中のケーキが何種類か並べられているのが見えた。評者は一番手前のケーキを指さしながら、次のような発話を行った。

(6) 評者: 店長、あれはなんですか?

店長: どれですか? (レジを打つ手を止め、背後にある厨房を肩越しに見る)

評者: あれです。あの一番手前の。

<sup>1</sup> 図は Warittha Koseyaumporn 氏による。

店長：これですか？（店長が、評者の意図するケーキを指さす）

評者：それです。



【図1 ケーキ屋の厨房】

ここでも、評者は、同じ位置にあるケーキをアレ、ソレの両方で指している。聞き手（店長）が対象に注意を向けたことで話し手（評者）の指示詞が変わっている。

上記から平田は、中距離指示のソは「聞き手の注意の存在」を前提にして使用されるとした。日本語指示詞研究にとって新たな視点であり評価される。

しかし「聞き手の注意の存在」が、ソの本質的な意味であるとするにはさらに慎重な議論が必要である。というのは、「聞き手の注意の存在」によって、「聞き手領域」が伸びたと考えることもできるからである。平田の指摘どおり、指される領域は、発話者や周りの環境などによって伸縮する。だとすると、聞き手の領域が、「聞き手の注意の存在」によって伸びたものが、中距離指示であるとも考えることもできる。つまり、「聞き手領域」を指示する用法の方がソにとってより基本的なものであるとも考えられる。これは、金水・田窪（1990, 1992）の考え方に通じる。

平田はこれと反対の立場をとる。すなわち、「聞き手の注意の存在」が基本的で、「聞き手領域」の指示は派生的に生じたとするのである（第6章）。歴史的なデータの検証は紙幅の関係で稿を改めて論じたいが、共時的に見た場合でも、「聞き手領域」の指示を基本と見る方が、説明が少なく済むと思われる。例を見よう。

次のように、聞き手の注意が指示対象にない場合でも、聞き手の身体に接触している、あるいは聞き手に極めて近い場所にあるものの場合、ソが用いられる。これは、「聞き手領域」を指示するために「聞き手の注意の存在」は必要ないことを表している。

(7) 聞き手：僕のめがね知らない？

話し手：（聞き手のおでこにめがねがあるのを見ながら）それじゃない？

一方、「中距離指示」には「聞き手の注意の存在」が必須である。この事実を平田の立場から説明すると、ソの使用には「聞き手の注意の存在」が必要な場合（中距離指示）と、そうでない場合（聞き手領域指示）があることになる。従来と捉え方は変わるが、ソに2種類の用法を認める点では同じである。評者には、中距離指示用法を、「聞き手の注意の存在があることによって、聞き手領域が伸びてきた領域」を指す用法として、「聞き手領域指示」の一種であると考えた方が両者を統一的に説明できると思われる。

ただその場合でも、堤（2012）の、「聞き手領域」にはアが現れないという点は説明が必要である。これは、日本語では聞き手の領域を認めよという要請が強く働くということ

の反映ではないか (堤 2012、8 章、澤田 2016 も参照されたい)。よほどのことがない限り、「聞き手領域」を積極的に認めなければならないのだろうと思う。

### 3. コ系について (第 5 章)

第 5 章では、Levinson の尺度推意と Enfield (2003) による、ラオ語の *nii4*, *nan4* の議論を援用しながら、日本語のコ系指示詞には、最小の意味のみがコード化されており、より特定の意味を持つア系の存在によって、コ系の「近」という意味が推意によって生じるとする議論を展開している。以下、先行研究を批判している部分と、平田氏の自説の部分に分けて見ていこう。

#### 3.1. 先行研究の批判について

Hoji et al. (2003)、田窪 (2008) では、コ系とア系の意味は遠近の対立であると考えられ、コ、アはそれぞれ次のような意味を持つと論じられた。

(8) コ系とア系の意味記述

コ系 [+proximal]

ア系 [-proximal]

話者は、対象を様々な要因により「近」と判断したり「遠」と判断したりする。前者であればコが、後者であればアが用いられるとするわけである。

ここで平田が問題にするのは、次の例のように、物理的に遠くにある対象を、話者の心理的な操作によって「近」であるとしてコで指すことはできるが、(12)-(14) のように、その逆、つまり、物理的に近くにある対象に心理的な操作を加えて、それを「遠」としてアで指すことができないという点である。

(9) (殿様が家臣に話している。殿様は 10 メートル先に男の人を立たせて)

{あの/この} 男はこんどわしがアメリカから連れてきたアメリカ人じゃ。

(10) (10 メートル先の犬を指して)

a. {あの/\*この} 犬はハスキーですか。

b. {あの/?この} 犬はハスキーですよ。

(11) a. (ポツンと立っている 20 メートル先の木を指して)

{あの/この} 木は樫の木です。

b. (いろいろな木に囲まれている 20 メートル先の木を指して)

{あの/?この} 太い木は樫の木です。

(Hoji et al. 2003: 108, 田窪 2008: 329-330)

- (12) (部長が日本に招待した男の人が部下のすぐ横に立っている。部下が部長に対し、その男の人を指して)  
部長、{この／\*あの}方はアメリカ人なんですね。
- (13) (自分のすぐ横に立っている男の人を指して)  
{この／\*あの}方は、どちらから来られたんですか。
- (14) (自分のすぐ横にいる大勢の人の中の1人を指し)  
{この／\*あの}方が部長が招待されたスミスさんですか。 (p. 97)

平田は、これらに非対称性を見出している。すなわち、「アで言える場合はコで言い換えられるが、コで言える場合はアで言い換えられない」。

このことは田窪 (2008: 200) では次のような制約として説明されている。

(15) 近称制約

基本的に遠くにある対象を心理的な操作により近くに捉えなおすことはいつでも可能である。これに対し、近くにあるものを遠くに捉えなおすことはかなり難しい。

(9) は、聞き手の存在を無視することで得られる。一方、(10) は対象に対する知識の有無で説明されているが、評者には ab どちらもコノは使いにくい。日本語母語話者 37 名に両者を 5 段階評価してもらった平均値は、(10)a が 1.86 ( $SD=1.19$ ) (10)b が 1.78 ( $SD=0.93$ ) となる。ウィルコクソンの符号順位検定の結果、両者に有意な差はない ( $.10 < p$ )。しかも、bの方がaよりも平均値が低くなっている。この結果は、日本語では 10メートル先の対象をコで指すことが不自然であること、知識の有無(多寡)によって不自然さは改善しないことを示している。(11)は檜の木という、指示対象の大きさが影響し、卓立性とは直接関係がない可能性もある。以上から、心理的な近接性が、遠であるものを近にするという議論自体が疑わしいものとなる。

また、平田の批判が成り立つためには、コ系指示詞は心的に近い対象を指し、ア系指示詞は心理的に遠い対象を指すことが前提となるが、このことは自明ではない。堤 (2018)、岡崎 (2018)、藤本 (2018) などは、主に文脈照応用法における調査をもとに、心理的な対立はソとアの間で見られ、ソが心理的に遠い対象を、アが心理的に近い対象を指すと結論づけている。実際に、(12) (13) (14) の例を、ソノで指すことは可能であり、なおかつコノで指すよりも、冷たい印象、あるいは興味、関心がないといったニュアンスが強く表れる。紙幅の都合上 (12)' でのみ確認しておこう。

- (12)' 部長、その方はアメリカ人なんですね。私は英語できないから、一緒に仕事するのは遠慮しておきますね。

それでも、田窪 (2002) が「近称制約」と呼んだ制約、すなわちコとアの非対称性は説明されなければならない。そこで平田は、Enfield (2003) の議論を援用し、コには指示詞として「指す」という意味のみがコード化されており (DEM)、アに「ここではない」という意味が、DEMに加えてコード化されていると考える。コの使用により、アの持つ意味の反対の意味、「話者の近く」が推論されると考えたのである。

しかしこれは、話し手の周りが絶対的に「近」でしかないことの反映ではないかと思う。Enfield (2003: 85) は、Bühler を引用して、次のように言っている。

- (16) deictic expressions have a context-free dimension, namely the idea of a stable ‘deictic centre’ or ‘origo’, which anchors simple notions ‘I’, ‘here’, and ‘now’. ..., these are not semantically decomposable. 「直示表現は、文脈に左右されない次元を持っている。すなわち安定した「直示中心」とか「オリゴ」と呼ばれるもので、「私、ここ、いま」という単純な概念を固定化する。……これらは、意味的にこれ以上分解することができない。

(Enfield 2003: 85、訳、下線部評者)

コとアの非対称性は、(16) の記述から直接導かれる。だとすれば、それが最も経済性の観点から見ても理にかなった説明であるように思う。

なお、平田はこの制約 (= 「近称制約」) が普遍的ではないとして、英語では手に持っているものを *that* で指すことができるという Fillmore (1982) の例を挙げている。この問題については澤田 (2013) が、英語で、話し手が手に持っている、あるいは手に触れているものを *that* で指す場合を詳しく論じているので参照されたいが、評者が澤田の例文 1 つひとつを母語話者 (ニュージーランド出身) に聞いたところ、かなり特殊な状況を設定しなければ、英語であっても *that* では指せず、デフォルトでは *this* を使うという。例えば、*that* を使用する際に、話者が指示対象を一切見ずに話すなど、あたかも対象の所有権を放棄して、聞き手の領域にあるようにするなどの操作が必要であるという。<sup>2</sup> 評者がこれまでに行った調査によると、手に持っている対象をその言語の遠称にあたる指示詞を用いて指すことができる言語は、今のところ確認できない (マレー語、クメール語、タイ語、ベトナム語、モンゴル語、ミャンマー語、韓国語。Levinson (2018) ではオランダ語

<sup>2</sup> 査読者から、1名の母語話者の調査のみからこのように論じるのは拙速ではないかと指摘をいただいた。そのとおりであると思うが、手に持っている物を *that* で指すことが難しいという話者が存在する事実は、今後のさらなる議論のためにも必要な情報であるとして報告しておく。この用法については澤田 (2013) が豊富な例を挙げ詳細に議論しているが、それぞれの例に対して、目線はどうであるか、*that* を用いればどのようなニュアンスが生じるか、検討する余地があると思う。本稿の文脈においては、英語で *that* が、話し手の手に触れている物に対して言えるという事実が、即「近称制約」を言語個別的な現象として批判的に行うことはないという点を強調しておく。

では指示できるとあるが、慎重に検討する必要があるだろう。後述する)。

以上のことから、コとアの非対称性をもとに、コとアに尺度推意を設定する議論は、興味深いものの、より活発かつ慎重な議論に基づく検証が必要であろう。

### 3.2. 自説の主張について

平田はコ系指示詞について、Enfield (2003) の議論を援用して、コには DEM のみがコード化されており、DISTAL がコード化されるアとの対比により ‘HERE’ であると推論されるとする。まず Enfield (2003) のラオ語に関する議論を見よう。

ラオ語には nii4 と nan4 という指示詞がある。話し手と聞き手が相互にやりとりしたり、物理的な空間の区切れがあったりすると、抽象的な ‘here-space’ が生じる。‘here-space’ は刻一刻と変化する。nan4 は、DEM に加えて ‘not-here’ がコード化されている。したがって、‘here-space’ の外の領域を指す。nii4 の ‘here’ という意味は、nan4 を使用しないことによる推意であると Enfield (2003) は主張する。

ラオ語では、指示対象がかなり離れていても、対話参加者がそこかしこに分散して存在しており、話し手が全員に向けて話すというような場合には、近称である nii4 が使用される。このような場合には ‘here-space’ を作る境界が存在しなくなるために、‘not-here’ の領域がなくなり、nan4 が用いられる余地がないためであるという。

平田は、Enfield (2003) の議論が日本語にも応用可能であるとする。このことを示すために「自発的な使用 (spontaneous usage)」の場を用いて分析している。コが使用される場合として、i) 話し手の here-space に含まれる対象、ii) 明確な here-space がない場合、iii) 話し手の here-space に含まれない対象を指す場合 の3つに分けて論じているが、iii) を設けてしまうと、コが here-space 内の対象を指すという前提が崩れることにならないのだろうか。コが here-space の外の対象も指せるならば、アとの違いは何かという理論内の問題が生じるように思う。

次に、ii) について見よう。これは上記ラオ語の、対話参加者が分散して存在している場合である。平田は、観光ガイドが複数の参加者 (ガイドの周囲にバラバラに立っている) に向けて拡散的に話す場合には、このようなコが用いられるとした。この場合には、ガイドはたとえ本人が指示対象から離れていてもコ系を用いることができることを示した。

(17) G: (歩みを止め、聴衆の方に向き直り)

はいこちらの方まっすぐ来たらドンとぶつかりますね

ひとつの町内しか見えません

(後方の聴衆が着 (ママ) いてきているか確認する)

G: でこの 鉄柱

| 右方の鉄柱に顔を向け手を上げて鉄柱を指しちらっと聴衆を見る  
 …… (中略) ……

?: ああー

G: これはー

B: 普通どおりに読むの?

G: はい (B を見て) これは素直に読んでください (以下略) (p. 110)

しかし、この観察をもって、ラオ語と同様の分析を日本語に施すことができるだろうか。G は最初に「でここの」と言い、数メートル先の電柱を指している。この段階で、here-space が分散している聞き手を取り囲む形で形成されると考えることはできないだろうか。その中の対象は、以降コで指されてもよいことになる。つまり、この例のみをもって、here-space が作られていないと言うことはできないように思われる。本章の議論には、このように、別の分析が可能なデータが散見される。それは here-space という抽象的な概念を用いるために生じるものである。コが生じたのは here-space がこのように形成されているからだと議論しているのか、here-space がこのように形作られていると判断するのはなぜかという、コが用いられているからだと議論しているのか判然としないのである。この意味で、多くのデータが循環論的に議論されているように思われる。

さらに、Enfield (2003: 104-105) の例では、人々がかなり離れてお互いに会話を行っている (聞き手は話者の左側 20m に数人、指示対象である川の向こう側 25m 以上離れている水牛を引く聞き手が一人)。(10) についての調査のように、日本語でこれほど離れた場合に、コ系指示詞を用いることは難しい。このことから、ラオ語の議論を直ちに日本語の指示詞の説明に応用することはできないと思われる。

### 3.3. 空間的な意味がコード化されないのは本当にコであろうか?

Levinson (2018: 24) は、3 項対立するような指示詞体系をもつ言語では、従来考えられている「近、中、遠」という対立があるのではなく、「近」と「遠」をコード化した指示詞と、距離についての指定がない無標、あるいはニュートラルな指示詞が存在すると指摘している。この考えに従うならば、もっともコーディングが少ないのは中称とされてきたソではないかと考えたくなる (澤田 2019 も同様に指摘している)。評者が過去に行った実験調査においても、ほぼ全ての話者によってコ・アで指される領域はあるが、そうでない領域、すなわち判断が揺れる領域においてはすべてソが観察されるのである。図 2 は堤 (2015) からの引用である。H が話し手、K が聞き手の位置を表し、それぞれの机にあるものをコソアのどれで指すかを 40 人の日本語母語話者に聞いた結果である。57 ではほぼ全員がコと答え、61 ではほぼ全員がアと答えているが、それでもソが現れている。これは、Levinson (2018: 26) のニュートラルな指示詞の分布に似ているとも言えまいか。

【図 2 母語話者による指示詞コ・ソ・アの分布 (堤 2015: 99)】

|           |      |
|-----------|------|
| <b>61</b> |      |
| 6         | 4.47 |
| 0         |      |
| 3         |      |
| 37        |      |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>41</b> |      |
| 6.32      | 2.82 |
| 0         |      |
| 5         |      |
| 35        |      |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>31</b> |      |
| 6.7       | 2.23 |
| 0         |      |
| 3         |      |
| 37        |      |

|           |   |
|-----------|---|
| <b>21</b> |   |
| 7.21      | 2 |
| 0         |   |
| 12        |   |
| 28        |   |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>11</b> |      |
| 7.81      | 2.23 |
| 0         |      |
| 12        |      |
| 28        |      |

|        |        |
|--------|--------|
| 整理番号   |        |
| Hからの距離 | Kからの距離 |
| コ      |        |
| ソ      |        |
| ア      |        |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>42</b> |      |
| 5.38      | 2.23 |
| 0         |      |
| 5         |      |
| 35        |      |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>32</b> |      |
| 5.83      | 1.14 |
| 0         |      |
| 24        |      |
| 16        |      |

|           |   |
|-----------|---|
| <b>22</b> |   |
| 6.4       | 1 |
| 0         |   |
| 28        |   |
| 12        |   |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>12</b> |      |
| 7.07      | 1.14 |
| 0         |      |
| 29        |      |
| 11        |      |

|           |   |
|-----------|---|
| <b>43</b> |   |
| 4.47      | 2 |
| 0         |   |
| 16        |   |
| 24        |   |

|           |   |
|-----------|---|
| <b>33</b> |   |
| 5         | 1 |
| 1         |   |
| 35        |   |
| 4         |   |

|   |  |
|---|--|
| K |  |
|---|--|

|           |   |
|-----------|---|
| <b>13</b> |   |
| 6.4       | 1 |
| 0         |   |
| 32        |   |
| 8         |   |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>44</b> |      |
| 3.6       | 2.23 |
| 0         |      |
| 29        |      |
| 9         |      |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>34</b> |      |
| 4.24      | 1.14 |
| 0         |      |
| 32        |      |
| 8         |      |

|           |   |
|-----------|---|
| <b>24</b> |   |
| 5         | 1 |
| 0         |   |
| 33        |   |
| 7         |   |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>14</b> |      |
| 5.83      | 1.14 |
| 0         |      |
| 33        |      |
| 7         |      |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>45</b> |      |
| 2.82      | 2.82 |
| 5         |      |
| 26        |      |
| 8         |      |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>35</b> |      |
| 3.6       | 2.23 |
| 0         |      |
| 29        |      |
| 11        |      |

|           |   |
|-----------|---|
| <b>25</b> |   |
| 4.47      | 2 |
| 0         |   |
| 29        |   |
| 11        |   |

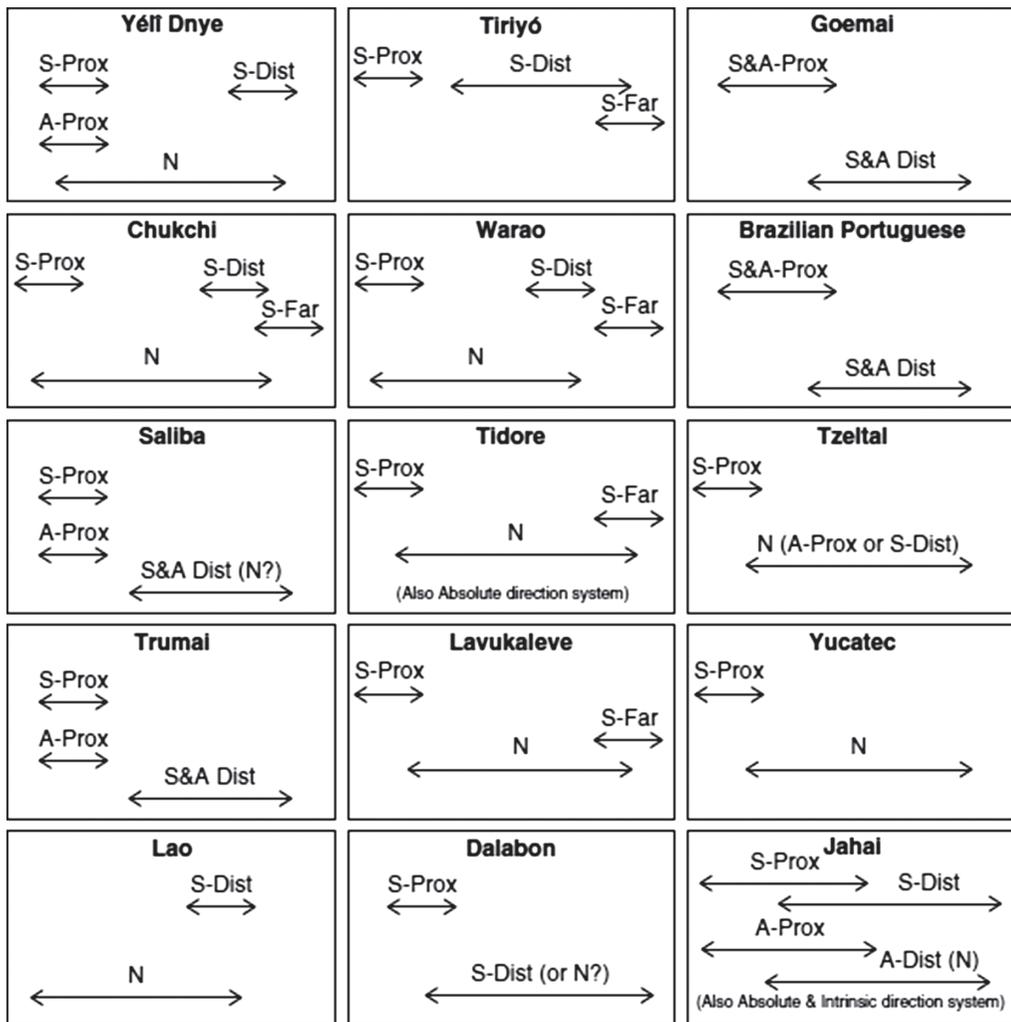
|           |     |
|-----------|-----|
| <b>46</b> |     |
| 2.23      | 3.6 |
| 11        |     |
| 24        |     |
| 5         |     |

|           |      |
|-----------|------|
| <b>36</b> |      |
| 1.16      | 3.16 |
| 9         |      |
| 16        |      |
| 15        |      |

|   |  |
|---|--|
| H |  |
|---|--|

|           |   |
|-----------|---|
| <b>57</b> |   |
| 1         | 5 |
| 39        |   |
| 1         |   |
| 0         |   |

【図3 15 言語の指示詞の対立のスケッチ Nがニュートラル】 (Levinson 2018: 26 より引用)



もしソ系指示詞をニュートラルであると捉えるならば、聞き手領域指示についても改めて検討しなければならないだろう。その可能性は十分ある。日本語には、聞き手とは無関係に現れるソ系指示詞が存在することが分かっている (堤・岡崎 2022)。「基準指示」と言われるものがそれであるが、「そうだ! 京都行こう」などの「思い出しのソ」、「そんなにおいしくない」などの否定対極表現に表れるソなど、全てのソ系指示詞の用法を統一的に捉える理論の構築は、本書の主張の是非の議論とともに間違いなく活発化してくるだろう。

#### 4. おわりに

以上、本稿では、平田 (2020) のいくつかの章に焦点を絞って、その功績と、評者が考える問題点を指摘する形で論を進めてきた。本書のように、ある形式の理論に大きなパラダイムシフトを求めるような論考には、大きな問題点が指摘され、それをきっかけに議論が進み結果としてその形式の理解が深まることになるものである。その意味で、本書の学術的価値は計り知れない。評者の指摘した問題点の妥当性もふまえつつ、本書を通して読み、指示詞の研究の奥深さに触れていただきたいと願っている。

#### 参考文献

- Enfield, N. J. 2003. "Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis." *Language* 79, 82-117.
- Fillmore, C. J. 1982. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In Jarvella, R. J. and W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, 31-59. Chichester: John Wiley.
- 藤本真理子. 2018. 「中古のカ (ア) 系列とソ系列の観念指示用法—古典語における知識の切り替わりから—」、岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太 (編) 『バリエーションの中の日本語史』、103-118、東京：くろしお出版。
- 金水敏・田窪行則. 1990. 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」、『認知科学の発展』3、85-116、日本認知科学会 (金水敏・田窪行則 (編) (1992) 『指示詞』ひつじ書房所収、123-149)。
- 金水敏・田窪行則 (1992) 「日本語指示詞研究から／へ」、金水敏・田窪行則 (編) 『指示詞』、151-192、東京：ひつじ書房。
- Hoji, H., S. Kinsui, Y. Takubo and A. Ueyama. 2003. "The Demonstratives in Modern Japanese," In Li, A-H. A. and A. Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form, and Interaction: Perspective from East Asian Languages*, 97-128. London and New York: Routledge.
- Levinson, S. C. 2018. "Demonstratives: Patterns in Diversity," In Levinson, S.C., S. Cutfield, M. J. Dunn, N. J. Enfield and S. Meira (eds.) *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective (Language Culture and Cognition)*, 1-42, Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡崎友子. 2018. 「現代語・中古語の観念用法『アノ』『カノ』」、岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太 (編) 『バリエーションの中の日本語史』、119-138。東京：くろしお出版。
- 澤田淳. 2013. 「視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への指標詞シフトの現象を中心に—」、『語用論研究』15、1-23。
- 澤田淳. 2016. 「指示と照応の語用論」、加藤重広・滝浦真人 (編) 『語用論研究法ガイドブック』、49-76、東京：ひつじ書房。
- 澤田淳. 2019. 「書評論文 指示詞研究の新展開—空間指示詞の類型論— (Stephen C. Levin-

son et al. (eds.) *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective.*）、『語用論研究』21、161-186.

田窪行則. 2002. 「談話における名詞の使用」、仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語の文法4 複文と談話』、193-216、東京：岩波書店.

田窪行則. 2008. 「日本語指示詞の意味論と統語論—研究史的概説」、『語学教育フォーラム』16、311-337、大東文化大学語学教育研究所.

堤良一. 2012. 『現代日本語指示詞の総合的研究』東京：ココ出版.

堤良一. 2015. 「中国語母語話者の日本語使用における指示詞の直示用法—台湾での調査から—」、『2015年度台湾日本語教育研究国際シンポジウム論文集』、91-102、台湾日本語教育学会.

堤良一. 2018. 「直接経験が必要ない記憶指示のアノ」、岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）『バリエーションの中の日本語史』、139-156、東京：くろしお出版.

堤良一・岡崎友子. 2022. 「心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について」、『言語研究』161、91-117.

## 編集委員会より

S/P24号をお届けいたします。今号は、前号と比べてかなりのボリュームとなりました。本号への投稿論文は12本（うち、研究ノートが1本）でした。編集委員一同、外部査読者の方々の査読報告書を元に、議論に議論を重ね、4本を一般投稿論文（研究論文）として採用いたしました。すでに投稿いただいた皆さんには査読報告書で詳しいコメントを送付しておりますが、また次年度への再投稿を促したものもあり、それらも含めて、ますます多くの投稿が望まれるところです。そこで、本号では、第24回大会（2021年度）特別講演論文、招待論文2本、一般投稿論文4本、さらに書評4本をもって、S/P24としてお届けする次第です。どの論考も、大変読み応えがあり、優れた論考ですので、間違えなく議論、忌憚のないご意見を期待しております。

すでにNewsletterでお知らせしましたように、S/Pは本号をもって、開拓社からの紙ベースでの刊行は最後となります。次年度の号からは、完全オンライン化に舵を切ることとなりました。詳細は、学会サイトその他でお知らせすることになりますので、次号以降の投稿を考えておられる方はそちらをご覧ください。

開拓社には長年にわたり、大変お世話になりました。歴代の会長、編集委員長を代表いたしまして、現会長共々、心よりお礼を申し上げます。開拓社からの刊行は、第10号（2008年度）からでした。それまでは、いわゆるコピー印刷でしたが、学会誌の体裁と質の向上のため、当時の会長と編集委員長（編集委員会）で決定されました。ちょうど、学会設立より10年が経過したところで、前年（2007年）の10周年記念大会では初めて海外から特別講演に著名な方々をお呼びし、その翌年、開拓社からの英文号として特別講演の論文を寄稿していただくこととなりました。まさに、我が国での語用論の新しい方向を模索したスタートとなりました。そして、その数年後、刊行から2年経過した号は本学会のサイトにもアップするようになりました。開拓社には、書式を整えるという編集から、（本来、学会事務局が担当の）発送までの業務を引き受けていただくことになり、本学会の発展に大きく貢献していただいたことは言うまでもありません。特に、多大なご尽力をいただいた開拓社編集主幹の川田賢氏には改めて感謝を申し上げたいと思います。

さて、編集委員長として3度S/Pの刊行に携わってきました。ここで、開拓社からの刊行の最後にあたり、一般論文の投稿の皆さんへ向けて、これまで様々な応募論文を読ませていただく中で気がついた点を、5つの「～してはいませんか」というフレーズを借りてお伝えしたいと思います。

- (1) 「孤立してはいませんか?」: 論文を書く作業は孤独なものです。しかし、最終的に人に受け入れられねばなりません。ですのでその前に、人につけてみましょう。孤立して、壁にぶつかっていると思っていても、どこか横からでも、

すっと入れたりして思いかけず打開できることがあります。それには、人との対話が必要です。

- (2) 「自分だけが分かっているはいませんか?」: 人が分かっていないということが、自分に分かっていない、という経験はありませんか? 自分が本当に分かることばで、あるいは、ここまでしか分からないことばでもいいので、簡潔な説明を心がけてください。
- (3) 「長くなってはいませんか?」: 一度書いたものを時間を置いて、もう一度読んでみてください。自分でも恥ずかしくなるくらいなら、かえって正解です。不要な肉をそぎ落とすことができます。
- (4) 「焦ってはいませんか?」: 焦るとまず体が硬くなります。硬くなればなるほど前に進めません。諦めてもいいので、ここまででいいというリミットを作りましょう。
- (5) 「勉強しすぎてはいませんか?」: いくら必要だからと言って、書く前に読んでいるものは、所詮人の考えです。人のものを取り込みすぎると、いずれ行き詰まります。その前に、白紙に戻してみてもいいでしょうか。

つまらないことを書くものだと思われたかもしれませんが、もしそうでしたら、すでに、これらの論文執筆上のマイナスな状態には「～なっていません」と否定することができます。

さて、これまでも、多くの方々が、S/Pの作成に関わってこられました（今後も多くの方が関わられます）。以下は、これまでご尽力された学会関係者のうち、歴代会長、編集委員長、事務局長のお名前です（敬称略）。

歴代会長：小泉保、澤田治美、山梨正明、林宅男、加藤重広、滝浦真人（現会長）

歴代編集委員長：兎玉徳美、高原脩、澤田治美、山梨正明、林宅男、山口治彦、加藤重広、滝浦真人、田中廣明（現編集委員長）

歴代事務局長：澤田治美、林宅男、東森勲、田中廣明、山本英一、小山哲春、北野浩章、秦かおり（現事務局長）

今後は、これらの方々の足跡、発想を遙かに超える学会誌が求められます。オンライン化すると、これまで以上に情報が早く伝わり、読者もさらに多くなります。逆に埋もれてしまうかもしれません。埋没しないためには、学会誌の質の向上を目指し、語用論という学問のゲームチェンジャーとなるくらいの、新しい、豊かな発想が必要となります。皆様の、なお一層のご協力をお願いする次第です。

今号では以下の方々を含む査読者が査読の任に当たりました。査読委員の皆さまには、心より御礼申し上げます。

## 〈S/P24 査読委員〉

(編集委員以外で掲載の許諾のあった方。敬称略。姓の五十音順)

井上優、岩田一成、遠藤智子、大塚生子、岡田悠佑、岡本能理子、片岡邦好、  
加藤重広、久保進、須賀あゆみ、鷺見幸美、武黒麻紀子、鄭恵先、中安美奈子、  
東泉裕子、船橋瑞貴、古牧久典、彭国躍、山岡政紀、山口征孝、横森大輔

また、大変盛会であった第 25 回大会 (2022 年度) の研究発表については、以下の方々が審査に加わっていただきました。厚く御礼申し上げます。

## 〈第 25 回年次大会審査委員〉

(理事・評議員・運営委員以外で掲載の許諾があった方。敬称略。姓の五十音順)

井門亮、植野貴志子、小野正樹、菊地浩平、高梨博子、名嶋義直、仁科浩美、  
牧原功、森山卓郎、森山由紀子

なお、従来、巻末に記載しておりました、日本語用論学会規約、語用論研究投稿規定・スタイルシート (日英) は、紙面削減のため割愛させていただきました。それぞれ、改訂をしておりますので、学会サイトの方をご覧ください。

(文責：編集委員長・田中廣明)

## S/P 査読方針について

編集委員会では、今後目指していく学会誌のあり方を議論し、新たな基本方針を定めました。その内容を会員の皆さまに広く知っていただき、より投稿したくなる学会誌となるよう努めていきます。

### ● 新基本方針

新たな基本方針は以下の2点を柱としています。

- ・ 目指す方向：“支える・育てる”学会誌 S/P へ
- ・ 査読方針：“ダメ出しの査読”から“提案の査読”へ

### ● 背景

学会誌は大会と並んで学会の“顔”であり、賑やかで活力の感じられる場でありたいと願っています。また、学会誌に論文を掲載できることが会員の主要な権利であるとの原点に立ち返って、会員であることのインセンティブであり続けたいと考えています。

S/P21より、評価体系を一部手直しし、「修正後採用」と「修正後再投稿（→翌年回し）」の中間に、「修正後再審査（→再査読後当該号に採用の可能性）」のグレードを設けました。以前よりも手間と時間はかかるものの、1回の投稿に対して2回のアドバイスによる改善を図ることができる利点があり、掲載率の向上につながるものと考えています。そうした会員支援の方向性をさらに強化しようと考えました。

### ● 趣旨

学会としての“支援的・教育的”な機能をより前面に出したいと考えています。従来、投稿者が大学院生の場合には指導教員による十分な指導と呼びかけてきましたが、教員の得意／不得意分野もあり、学会としてもできる支援の手は差し伸べたいと思います。また、大学院を離れた若手研究者の場合、指導教員がいなくなって孤立化することも少なくありません。学会がコンサルテーション機能の一部を担うという考え方に一歩踏み出そうということでもあります。

査読者は真剣に投稿論文を読んでもくれます。しかし、時として、真剣さが真剣勝負の域にまで高まってしまう場合もあったことは否定できません。編集委員会としては、投稿者との勝負ではなく、投稿論文の可能性の中心を見るような読みをしていただきたいとの要望を、査読者にお伝えすることにしました。投稿者の主張が一貫性をもって成立するかどうかの判定を主眼とし、不足があれば改善を提案するような査読をお願いしたい、との希望もあわせてお伝えします。とくに、投稿者がまだ学生であるなど経験が浅いような場合には、文献参照なども含め不十分な点が散見されることもあります。不足はもちろん最終的に解消されるべきですが、不足があれば教示することとし、それをもって直ちに不可とはしないことを方針とします。

査読は一方的な判定であるよりも、投稿者と査読者のコミュニケーション・プロセスであってほしいと考えます。“提案の査読”はその半面ですが、査読を受ける側もコミュニケーションの当事者であるとの観点に立ち、査読意見に対する投稿者からの応答も重視したいと考えています。

新方針のもと、編集委員会は、会員皆さまのより積極的なご投稿をお待ちしています。

語用論研究 第24号

---

**Studies in Pragmatics** No. 24 2022

Pragmatics Society of Japan <http://www.pragmatics.gr.jp>

President: Masato Takiura

Editor-in-Chief: Hiroaki Tanaka

---

編集人 日本語用論学会 編集委員会  
(代表者) 田中廣明

発行人 日本語用論学会 会長 滝浦真人

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

秦かおり 研究室内

---

2023年3月20日 第1版第1刷発行

---

発行所 株式会社 開拓社  
KAITAKUSHA

〒112-0013 東京都文京区音羽1-22-16

電話 (03) 5395-7101 (代表)

振替 00160-8-39587

<http://www.kaitakusha.co.jp>

---